暗黒神話大系シリーズ
★クトゥルー１～９
クトゥルー10
クトゥルー11

怪奇幻想小説シリーズ
★ウィアード１～４
ウィアード５

ＳＦシリーズ
★乱れ殺法　ＳＦ控
★赤い霧のローレライ
★トマス・モアの大冒険

カバーイラスト・山田章博

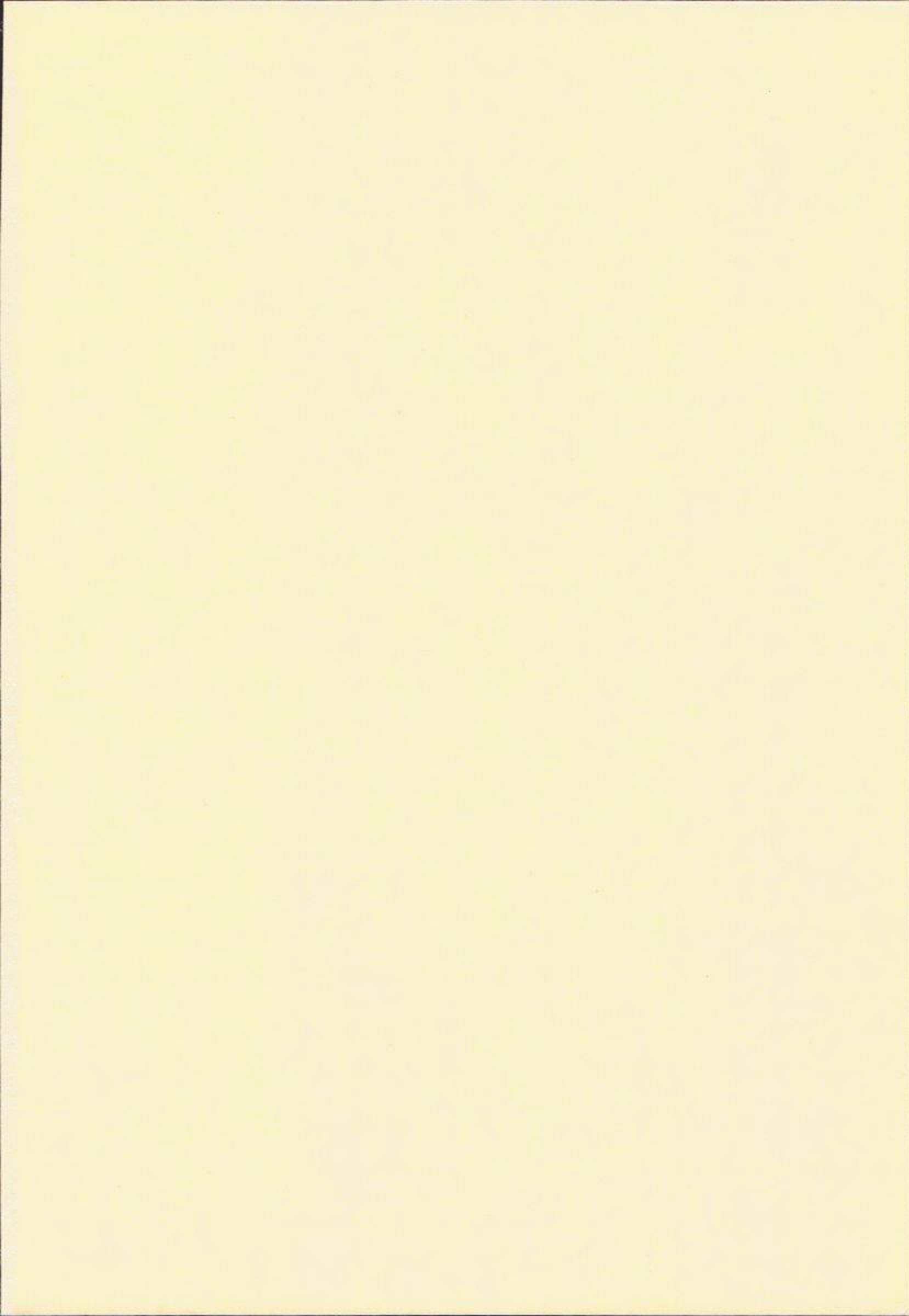
暗黒神話大系シリーズ　クトゥルー　9
大瀧啓裕 編
青心社
640

暗黒神話大系シリーズ

クトゥルー9

H・P・ラヴクラフト他

大瀧啓裕 編

青心社

暗黒神話大系シリーズ

クトゥルー 9

H・P・ラヴクラフト他

大瀧啓裕編

青心社

The Cthulhu Mythos Vol. 9
Edited by
Keisuke Ohtaki

Something in Wood
by August Derleth
The Room in the Castle
by J. Ramsey Campbell
The Space Eaters
by Frank Belknap Long
Witche's Hollow
by Lovecraft & Derleth
The Secret of Sebek
by Robert Bloch
Hydra
by Henry Kuttner
The Whisperer in Darkness
by H. P. Lovecraft

目次

クトゥルー9

謎の浅浮彫り

オーガスト・ダーレス
岩村光博訳

人間の頭脳に限界があって、事実や出来事のすべてを、しかるべき全体像からとらえられないことが多いのは、幸運なことなのである。わたしはよくそんなふうに思うが、『ボストン・ダイアル』紙の音楽と美術の批評家、ジェイスン・ウェクターの失踪にまつわる奇妙な状況については、なおさらそう思わざるをえない。この事件は一年まえに起こり、ウェクターの毒舌に落胆した画家が恨みをはらそうとして殺したとか、ウェクターが何らかの事情でこっそりと身を隠しただけだとか、さまざまなことがいわれている。

後者の説は世間一般で思われている以上に真相にせまっているのだろうが、これをうけいれるには事情をはっきりさせなければならず、ウェクターの失踪が自発的なものであったかどうかを明らかにする必要がある。しかし想像力豊かな者なら納得できる解釈が一つあって、事件にまつわる特定の状況からは、これ以外の結論は導きだせない。こうした状況にはわたしも少なからぬ役割を演じているが、ウェクターが実際に姿を消すまで、わたしでさえそのことがわかっていなかった。

こうした出来事は願望のあらわれとしてはじまったとしかいいようがない。ケンブリッジの

大通りからかなりはなれたキングズ・レインの古い家に、ウェクターはひとりきりで住み、原始的な美術品を蒐集して、とりわけ木や石の作品を好んでいた。ウェクターのコレクションには、キリスト教鞭打ち行者の奇怪な宗教彫刻や、マヤ族の浅浮彫り、クラーク・アシュトン・スミスのつくった異界的な彫刻、南洋の島じまの神神の木彫や呪物などがあって、ウェクターはもっとかわったものを手に入れたがっていたが、わたしにはスミスの作品ほど異様なものがあるとは思えなかった。しかしスミスの彫刻は木彫ではなく、ウェクターはコレクションのバランスをとるために、木製のものをほしがっていた。確かにスミスの彫刻の素晴しくも奇怪なイメージに匹敵する木彫といえば、ウェクターのコレクションのなかには、ポナペの仮面がわずかにあるだけだった。

ジェイスン・ウェクターの友人がひとりならず、木彫りの作品を探していたのだろうが、ほかならぬこのわたしが、休暇で訪れたポートランドの人目につかない骨董屋で、ウェクターがほしがりそうな木彫を見つけだすことになったのだった——まさしく異様な作品で、絶妙な細工がほどこされ、水中にある巨石建造物の廃墟から八腕目の生物があらわれるさまをあらわした、一種の浅浮彫りだった。四ドルの売値はきわめて妥当なものだったし、まったく解釈しようがないという事実によって、ウェクターの目には大いに価値を高めそうだった。

八腕目の生物と記したが、蛸ではない。いったい何であるかはわからないが、外見からして胴は蛸とちがってはるかに長く、触手が——スミスの彫刻作品『旧神』と同じく——鼻のある

べきところについているかのように、顔と胴の横や中心からものびていた。顔からのびている二本の付属器官は明らかに捉脚であって、何かをつかもうとしているか、あるいはつかんでいるかのように、外に開いている形で彫りこまれていた。この二本の付属器官のすぐ上に、深く落ちくぼんだ目があって、これがいかにも不気味なものなので、このうえもなく不吉な邪悪さが感じとれる。底部には未知の言語でつぎのように記されていた。

ふんぐるい　むぐるうなふ　くとぅるう　るるいえ　うがふなぐる　ふたぐん

使用されている木は、ほとんど黒に近い黒褐色で、これまでに見たこともない数多くの螺旋からなる地肌をしており、それがどんな種類の木であるかは、木としては異常に重いという以外に何もわからなかった。ジェイスン・ウェクターのために手に入れてやろうと思っていたものより大きかったが、きっと気に入るはずだと思った。

ちらかった机についている鈍そうな小男に、どこでつくられたものだと聞いてみた。小男の店主は眼鏡を額にあげ、大西洋から出たのだけは確かですがねといった。「おおかたどこかの船が落っことしたんでしょうよ」あてずっぽうを口にした。一、二週間まえに、浜にうちあげられたものをあさる老人が、ほかのものと一緒にもちこんだのだという。何をあらわしたものかとたずねたが、店主はこの質問にも首をふった。つまりジェイスン・ウェクターはこれにま

つわるどんな話でもでっちあげられるわけだ。

ウェクターに見せると、スミスの石の彫刻に驚くほど似ていることを知って、大喜びした。そしてウェクターはこうした美術品の権威として、骨董屋の店主が四ドルでたたき売った理由を明らかにする、別の要素を指摘してくれた——特定の彫り跡から、この浅浮彫りが、現代というよりも、われわれの知る文明社会よりもはるかに古い時代の道具で彫られたことがわかるというのだ。わたしにはウェクターのような好みはないので、こうした細目にはさしたる興味もなかったが、ウェクターがこの八腕目の浅浮彫りをスミスの作品とならべたことで、どうにも気になるさまざまな疑問が生まれ、不可解な嫌悪の念がこみあげてきた。ウェクターが推測したように、この浅浮彫りが大昔につくられ、これまでに知られていないたぐいのものであるなら、どうして現代のクラーク・アシュトン・スミスの彫刻によく似ているのか。みずからの奇怪な小説や詩を基につくられたスミスの彫刻が、遙か昔に遠くはなれたところにいた者のつくりだした浅浮彫りに似ているのは、偶然以上のことではないのか。

しかしわたしはこうした疑問を口にはしなかった。ウェクターに問いかけていれば、それ以後の出来事の進展はちがったものになっていたかもしれない。しかしわたしはウェクターが大喜びしてくれたことを、わたしの鑑識眼に対する賞讃とうけとめた。浅浮彫りは最上の木彫作品とともにマントルに飾られ、わたしは満足してひきあげ、そしてこの浅浮彫りのことを忘れはててしまったのだ。

二週間後にまたジェイスン・ウェクターと会った。オスカル・ボグドガの彫刻の個展が開かれると、ウェクターはわずか二ヵ月まえにボグドガを高く評価したというのに、残酷なまでの批判をおこない、この批評に目を向けることがなかったなら、わたしもボストンにもどってすぐ、ウェクターに会いにいったりはしなかっただろう。事実、ウェクターの批評は、数多くの友人を心配させるたぐいのものだった。彫刻に対するウェクターの新しいとりくみかたを示していたが、ウェクターの批評を愛読していた者には驚き以外の何ものでもなかった。わたしたちの共通の友人である精神科医は、短いながらも注目すべきウェクターの批評に、奇妙な言及がいくつもあるのが気がかりだといった。

わたしは驚いて批評を読み、ウェクターが普段の流儀からはっきりと逸脱しているのを知った。ボグドガの作品に「炎……緊張感……霊性を装うもの」が欠落しているという批判は、いつもとかわるところはないが、ボグドガが「アハピやアフムノイダの宗教作品に通じていない」とか、「ポナペ派」をあれこれ模倣するだけにとどまっているといった断言は、不適切であるとともに、ウェクターらしからぬものだった。ボグドガは中部ヨーロッパの彫刻家で、その重厚な作品は、メシュトロヴィチの作品よりもエプスタインの作品に通じるものがあって、ウェクターを大喜びさせて判断力に影響をおよぼしはじめているらしき、原始的な彫刻とは縁もゆかりもないものなのだ。ウェクターの批評のいたるところで、誰も聞いたことがない芸術家や、どことも知れぬ土地、教養ある読者にさえ馴染（なじみ）のない文化について、さまざまな言及がなされ

ていた。
しかしボグドガの彫刻に対するウェクターのとりくみかたは、かならずしも予想外のものではなかった。というのも、ウェクターはこの二日まえに、派手で身勝手なフラデリッツキイの指揮によって初演された、フランツ・ホーベルの新しい交響曲の批評を書いており、「フルートによる天球の音楽」であるとか、「木管楽器の調べはドゥルイドよりも遙かに古く、人類が楽器をつくりだすまえにエーテルを満たしていた」といった言及が、随処に認められるからだ。ウェクターはさらに、同じ日に演奏されたハリスの第三交響曲を、以前は露骨に嫌っていたというのに、「人類の祖先がよく耳にしていたあの原始的な音楽、旧支配者の音楽に回帰していることが、フラデリッツキイの指揮によってもなお、まざまざと感じられる」と絶賛して、「フラデリッツキイは自分では音楽をつくりだすことはできないので、どれほど作曲家を侮辱することになろうと、指揮棒でもってエゴを満足させなければならないのだろう」と酷評しているのだ。
このまったく不可解な二つの批評を読んで、わたしはあわててウェクターの家に駆けつけた。ウェクターは考えぶかげな顔をして机についており、机には問題の批評と、かなりな分量の手紙――明らかに抗議の手紙――があった。
「やあ、ピンクニイ」ウェクターがいった。「きみもわたしの妙な批評を読んでやってきたようだな」

「そういうわけでもないんだがね」わたしは言葉をにごした。「批評というものは個人的見解に基づくものだから、誠実な態度をとるかぎり、どんなことでも自由に書けばいいのさ。しかしアハピやアフムノイダというのは、どういう人物なんだ」
「わたしも知りたいよ」
ウェクターは真剣な顔をしているので、嘘ではないようだった。
「しかしきっと存在したはずなんだ」ウェクターがつづけた。「旧支配者が太古の伝説に地位を占めているようにね」
「知りもしないのに、どうして批評でとりあげたりしたんだ」わたしはたずねた。
「うまくは説明できないんだがね、ピンクニイ」ウェクターが眉をひそめながらいった。「話してみようか」
そうしてウェクターは、わたしがポートランドで見つけた八腕目の浅浮彫りを手に入れて以来、身辺に起こっていることについて、どうにも支離滅裂な話をはじめた。夜に眠るとかならず夢を見て、その夢には浅浮彫りの異様な生物が、めだった場所にあらわれるか、夢を見ているウェクターの意識にとりついてはなれないのだという。地下の都市や海底の都市を見たり、カロリン諸島やペルーに行ったり、伝説の巣食うアーカムで睨めつけるような駒形切妻屋根の下を歩いたり、不思議な船に乗って大洋の彼方の土地を訪れたりした。浅浮彫りは生物を極端に小さくあらわしたものにすぎず、この生物は巨大な原形質状の存在であって、百千もの姿に

変身することができる。生物の名前はクトゥルーで、生物の支配地はルルイエといい、大西洋の海底にある悍(おぞま)しい都市らしい。クトゥルーは旧支配者の一員であって、旧支配者とは他の次元や星、深海や虚空から到来して、かつて支配していた地球を奪還しようとしているのだ。クトゥルーには無定形の矮人(わいじん)がつきそっているようで、これら人間以下の矮人たちは、クトゥルーのまえを進みながら、異様な笛を吹いて、人間の知らない音楽をかなでる。どうやら浅浮彫りは、きわめて古い時代、人類が誕生しながらもまだ記録するすべを知らなかった時代に、カロリン諸島の人間が彫りあげたもので、地球に帰還しようとする生物の棲(す)む異界との「接触点」であるらしい。

正直いって、わたしは不安を感じながら耳をすましていたが、不意にウェクターが話を中断して立ちあがり、マントルに近づいて八腕目の浅浮彫りをもってきた。

「じっくりと見てくれ、ピンクニイ。どこか以前とちがうところはないかな」

わたしは仔細に調べ、何もかわったところはないといった。

「顔からのびている触手が、以前よりも長くなったように思わないか」

わたしは首をふった。しかし否定しても確信はなかった。暗示には強い影響力があるものだ。長くなっているのではないかといわれれば、そのような気がしないでもない。はっきりしたことは、あのときもわからなかったし、いまもなおわからない。しかしウェクターはそう信じているようだった。わたしは浅浮彫りをあらためて調べたとき、スミスの彫刻とこの奇妙な浅浮

彫りの類似性にはじめて気づいたときのように、どうにも説明のつかない嫌悪をおぼえた。
「それなら、触手の先端があがって、まえに出てきたように思わないか」ウェクターがいった。
「どうともいえないね」
「そうか」ウェクターが浅浮彫りを手にして机をはなれ、またマントルに飾った。
机にもどってから、ウェクターがいった。「常軌を逸していると思われるだろうがね、ピンクニイ、わたしは浅浮彫りをこの書斎に飾ってからというもの、わたしたちの知っているものとは異なっているという以外に説明しようのない次元、わたしたちが夢に見るような次元を、たえず意識しつづけているんだよ。たとえば、わたしにはこの二つの批評を書いた記憶がないんだが、それでも批評はわたしが執筆したものなんだ。原稿もあるし、校正刷りもあるし、新聞に掲載されているからな。自分のものではないといえるわけもないが、この二つの批評に記されていることは、わたしがこれまでに述べてきた意見と矛盾している。それでも妙に印象的な論理があることは否定しきれないよ。この二つの批評――そしてそれらにかかわる抗議の手紙――を読んでから、少し調べてみたんだ。わたしが以前に述べた意見に反して、ボグドガの彫刻は確かにカロリン諸島の宗教芸術と関係があるし、ハリスの第三交響曲には原始的な心に不安をかきたてるものがある。だから、ボグドガの彫刻とハリスの第三交響曲が発表されるや、教養のある感受性の強い人びとが憤慨したのは、内なる自己がすぐに認める原始的なものを拒否しようとする、本能的な反応じゃないだろうか」

ウェクターが肩をすくめた。「しかしそんなことはどうでもいい。事実をいえば、きみがポートランドで見つけだした浅浮彫りから、わたしはどうにも不可解な心騒がされる影響をうけているんだ。あんなものを手に入れてよかったんだろうかと思うことがあるほどさ」

「どんな影響なんだ、ジェイスン」

ウェクターがひきつった笑みをうかべた。「わたしがどう感じているかを話すことにしようか。わたしがはじめて浅浮彫りを意識したのは、きみが帰ってすぐのことだった。あの夜はここでパーティがあったが、真夜中には客たちもすっかりひきあげて、わたしはタイプライターで執筆していた。つまらない仕事をかたづけなければならなくて――フラデリッツキイの弟子がおこなったピアノの演奏会の批評だが――締切りに追われていたんだ。しかし批評を書きながらも浅浮彫りのことをずっと意識していた。二つの面で意識していたんだ。一つの面では、きみからの贈物としてもらった、さほど大きくはない、明らかに三次元のものとして意識した。別の面では、拡大というべきか、異なった次元への侵入というべきか、この部屋にいるわたしとマントルにある浅浮彫りとの関係が、種子とカボチャの関係のように思えたんだよ。簡単にいってのければ、仕事をしあげたとき、浅浮彫りが信じられない大きさになったような幻覚をおぼえただけのことさ。浅浮彫りの八腕目が巨大な姿でそびえたち、そのまえでは自分が蟻も同然だと知って、わたしは愕然としたよ。これは一瞬のことで、すぐにそいつは退いていった。存在するのをやめたんじゃなく、退いていったことに注意してくれ。そいつは小さくなって、

この新しい次元から、浅浮彫りという本来の状態へとひきさがっていくかのように、退いていったんだ——しかしわたしの目のまえでは浅浮彫りとして存在しているが、わたしの心の目のまえではそうじゃない。これがつづいているんだよ。きみの顔つきからして、わたしの正気を疑っているんだろうが、これは幻覚なんかじゃないぞ」
わたしはあわてて、そんなふうに思っているものかといって、ウェクターを安心させてやった。ウェクターのいったことが事実であろうとなかろうと、妙な批評という具体的な事実に基づく状況証拠は、ウェクターが正直に話していることを示していた。したがって、ウェクターにとっては、口にした話は事実とかわりはないのだ。何らかの意味と動機があるにちがいなかった。
「きみの話が本当のことだとすると」わたしは用心深くいった。「何らかの理由があるはずだ。きみは過労なのかもしれないし、きみの潜在意識のはたらきによるものかもしれないぞ」
「まったく、きみという男は」ウェクターが大声でいって笑った。
「そうじゃないなら、何らかの動機があるはずだ——外部からのね」
ウェクターの笑みが消えた。目が細くなった。「信じてくれるのか、ピンクニイ」
「鵜呑(うの)みにしているわけじゃないがね」
「よかった。ともかくわたしは三度目の体験をしてから考えたんだ。二回の体験なら、幻覚とうけとめることもできるが、三回も体験すればそんなことはできない。眼球が緊張する結果と

して体験する幻覚は、これほど鮮明なものではないし、ありもしない鼠や点なんかを見るだけのことだからな。だから、この生物がこれを崇拝の対象とする教団に属するものだとすれば――この生物の崇拝は現代にもひそかに広まっているんだ――解釈は一つしかないようだ。最初にいったことにもどるが、浅浮彫りは、別の次元と接触するための焦点なんだよ。そうだとすれば、あの生物は明らかにわたしを捕えようとしている」
「どうやって」わたしはそっけなくたずねた。
「わたしは数学者でも科学者でもないよ。音楽と美術の批評家にすぎない。この結論はわたしの知識を超越したものなんだ」
幻覚がつづいているようだった。それればかりか、ウェクターが眠っているときも存在して、ウェクターは眠っているあいだ、浅浮彫りの生物にしたがって、苦もなく別の次元に入りこんでいるのだという。幻覚が持続したり、ますます程度を高めていったりするのは、医学の症例では稀なものではないが、ジェイスン・ウェクターが経験しているようなものは、いつのまにかウェクターの思考パターンにまで影響をおよぼしているので、明らかにただの幻覚ではなかった。その夜わたしは長いあいだ考えこみ、旧神や旧支配者といった神話の実体やその信奉者について、ウェクターが話したことをすべて思い返し、ウェクターが好奇心にかられて調べたことで心騒がされる結果をもたらしている、太古の文化に思いをはせた。
それ以来、『ボストン・ダイアル』に掲載されるジェイスン・ウェクターのコラムを、わた

しは不安な思いで見まもった。

ふたたびウェクターに会うまでの十日間に発表された批評のせいで、ボストンやその近郊の知識人がさかんにジェイスン・ウェクターの話をするようになった。驚くべきことに、そうした話は非難がましいものではなかったが、予想されるとおりの二つの見解があった。つまり、以前にウェクターを支持していた者たちは、いまや憤慨してウェクターを軽蔑し、以前にウェクターを冷笑していた者たちがウェクターを支持するようになったのだ。しかし演奏会や展覧会についてのウェクターの判断力は、わたしの目にはひねくれたものに見えたにせよ、あいかわらずさえわたり、以前の毒舌や苦言はなおも健在で、鋭敏な鑑賞力は少しもそこなわれていないようだったが、ただ以前とは劇的に異なる立場から、音楽や美術をとらえているのだった。ウェクターの見解は驚くべきものであり、しばしば法外なものでさえあった。

高齢の豊満なプリマドンナのマダム・ブアサ＝デコイエルは、「ブルジョアの好む堂堂たる記念碑であり、不幸にしてまだその下に葬られていない」と酷評された。

ニューヨークの花形クロイドン・ド・ヌーヴァレは、「せいぜい愉快な詐欺師にすぎず、そのシュールな瀆神(とくしん)行為は、顕微鏡で見てもわからぬほどの美術知識をもつ店主によって、五番街の窓に飾られているが、この色彩感覚たるや、フェルメールの足もとにもおよばず、アハピにくらべるべくもない」とされている。

狂気の画家ヴェイラインの絵については、おおげさに絶賛した。

ここに明らかなのは、絵筆をもつことができ、色をよく知る画家ならば、そのキャンヴァスをながめる白痴の大半よりも、まわりにあるものを多く見ることができるということである。ここには、地球の次元に拘束されることなく、人間の慣習や情感に束縛されることのない、本物の知覚がある。その魅力は原始的なものに発しながらも、それを超越する独自の世界にあって、宇宙の重なりあう襞に存在し、「狂気」とみなされる特定の人びとの特性である超感覚を備えた者だけに見える、過去や現在の出来事が背景にあらわれている。

フラデリッツキイが気に入りのロシアの作曲家、ブランタノヴィチの交響曲を指揮したことについては、辛辣(しんらつ)きわまりない酷評をしたために、フラデリッツキイは告訴するといきまいたほどだった。

ブランタノヴィチの音楽は、あの怖るべき文化の表現であって、オーウェルの言葉をかりれば、「さらに平等」である上層部の者をのぞき、すべての者が政治的にはまったく平等であることをあらわしている。こんなものは演奏する必要などないのであって、世界じゅうでただひとり、指揮するたびに腕を落としていく傑出した指揮者、フラデリッツキイがいなければ、こんな曲が演奏されるわけもなかっただろう。

誰もがジェイスン・ウェクターの噂をするようになったのも、当然のことだろう。ウェクターは激しく責めたてられ、『ボストン・ダイアル』は投書を掲載することもできなかった。ウェクターは賞讃され、非難され、罵倒（ばとう）され、それまでいつも招待されていた社交界から追放されたが、とにかく噂の的だった。共産主義者だといわれたり、こちこちの反動家だと呼ばれたりしても、ウェクターにとっては何のちがいもなく、その姿が見かけられるのは出席せざるをえない演奏会だけであって、誰にも話しかけたりはしなかった。しかしもう一つ別の場所で見かけられることがあった。ワイドナー図書館にあらわれることがあって、アーカムのミスカトニック大学付属図書館の稀覯書（きこうしょ）閲覧室でも、二度にわたって見かけられたという。

こんなありさまがつづくなか、失踪する二日まえの八月十二日の夜、ジェイスン・ウェクターが一時的な精神錯乱としかいいようのない状態で、わたしのアパートにやってきた。顔つきは荒あらしく、しゃべりかたはそれ以上だった。真夜中に近いころあいだったが、その夜は暖かかった。コンサートがあって、ウェクターは途中まで聞いていたが、そのあと自宅に帰り、ようやくワイドナー図書館からかりだせた書物を読んでいたという。そしてタクシーでわたしのアパートに駆けつけ、眠ろうとしているわたしの部屋にとびこんできたのだった。

「ピンクニイ、いてくれてよかった。電話したんだが、通じなくてね」

「いま帰ったばかりなんだ。おちつけよ、ジェイスン。テーブルにスコッチとソーダがあるか

ら、自分でやってくれ」
　ウェクターはグラスにソーダよりもウィスキーを多くそそいだ。震えているのは手だけではなく、熱にうかされたような目つきをしていた。わたしはウェクターに近づいて、額に手をあてようとしたが、ウェクターがいらだたしくわたしの手をはらいのけた。
「ちがうぞ、わたしは病気なんかじゃない。話をしたことをおぼえているか――あの浅浮彫りについて」
「ああ、はっきりおぼえているよ」
「あれは本当なんだ、ピンクニイ。嘘じゃない。きみに話さなければならないことがある――一九二八年に政府が占拠して悪魔の暗礁沖で爆発があったとき、インスマスで起こったことや、一九一一年にロンドンのライムハウス地区で起こったこと、つい最近アーカムでシュリュズベリイ教授が失踪したことについて、わたしは知っているんだ。このマサチューセッツに秘密の崇拝所がいくつもあることはもちろん、世界じゅうに存在することをつきとめたんだよ」
「それは夢なのか現実なのか」わたしは鋭くたずねた。
「まぎれもない現実だ。そうじゃなければいいんだがな。しかしわたしは夢も見ている。その夢ときたら。ピンクニイ、この世界で目をさまして、あんな異界が存在するのを知ると、恍惚のあまり発狂しそうだ。あの雲をつくような建物。異界の空にそびえる巨像。そして大いなるクトゥルーがいる。何と素晴しくも美しいことか。何と怖ろしく邪悪なことか。まったく避け

がたいことなんだ」
　わたしはウェクターの肩をつかんで、激しく揺さぶった。
　ウェクターが大きく息を吸い、腰をおろして、つかのま目をつぶった。そしていった。「わたしを信じてくれないんだな、ピンクニイ」
「話を聞いてるじゃないか。信じる、信じないの問題じゃないぞ」
「きみにしてもらいたいことがある」
「何だ」
「わたしの身に何かあれば、あの浅浮彫りを運びだして、重りをつけて海に沈めてくれ。できれば、インスマス沖がいい」
「おい、ジェイスン、誰かにおどされてるのか」
「そんなことはない。約束してくれるか」
「もちろんだとも」
「何を見聞きしようともだぞ」
「きみの頼みだからな」
「ありがとう。あれは返さなければならないんだ。もとあったところへ」
「しかし、ジェイスン、話してくれよ——この一週間というもの、きみの批評は痛烈すぎるぞ——誰かが頭にきて、仕返しをしようとしてるんじゃないのか」

「莫迦なことはいわないでくれ、ピンクニイ。そういうことじゃない。きみは信じてくれないだろうがな。あの浅浮彫りだ――あれがますますこの次元に入りこんできている。わからないのか、ピンクニイ。あれが物質化しているんだ。二日まえの夜にはじめて起こった――わたしはあの触手を感じとったんだ」

わたしは何もいわずに、ウェクターが話をつづけるのを待った。

「目をさますと、じとじとした冷たい触手が退いていくのが感じとれた。この体で感じとったんだ――わたしは何も身につけずに寝るからな。びっくりしてとびおきて、灯をつけたよ――目のまえにいた。見て感じることのできる現実のものが、ずるずる退きながら縮んでいって、溶けるように薄くなっていった――そして消えてしまった。もとの次元にもどったんだ。それだけじゃなく、この一週間というもの、その次元から聞こえてくるんだよ――フルートの音色だとか、異様な口笛のような音とかが」

わたしはそのとき、友人が発狂したことを確信した。「浅浮彫りにそんな影響をうけているんなら、たたきつぶせばいいじゃないか」わたしはそういった。

ウェクターが首をふった。「そんなことはできない。異界と接触する手段は、あの浅浮彫りだけだからな。異界はすっかり闇につつまれているわけじゃない。悪はどこにでも存在するのさ」

「そんなふうに思って、こわくはないのか、ジェイスン」

ウェクターが体をまえにのりだし、ぎらつく目でわたしを見つめた。「こわいよ」小さな声でいった。「こわくてたまらない――しかし魅せられてもいるんだ。わからないか。わたしは異界の音楽を耳にしているんだよ。異界の景色も見ている――それにくらべれば、この世界のものはすべてが色あせて見える。ああ、とてもこわいが、恐怖に震えあがっていたんでは、わたしたちは出会えない」

「わたしたちだって。きみと誰のことだ」

このときウェクターは顔をあげ、どこか遠くを見つめるような目つきをした。「耳をすましてみろ」ウェクターが小さな声でいった。「聞こえるか、ピンクニイ。あの音楽だ。何と素晴しい音楽だろう。大いなるクトゥルーだ」そしてウェクターは立ちあがり、苦行者めいた顔をほとんど至福に輝かせて、わたしのアパートからとびだしていった。

「クトゥルーだ」ウェクターが囁き声でいった。

それがジェイスン・ウェクターの見おさめだった。

いや、そうだろうか。

その二日後か、あるいは翌日の夜のあいだに、ジェイスン・ウェクターは姿を消した。わたしのアパートをとびだしてから、ウェクターは誰とも言葉をかわさなかったとはいえ、その姿を見かけた者は何人かいるが、ウェクターの姿が見かけられたのは、翌日の夜が最後だった。夜遅く帰宅した隣人が、書斎の窓ごしにウェクターを目にしたのだ。ウェクターはタイプライ

ターをまえにしていたが、原稿は発見されず、『ボストン・ダイアル』には何も送られてこなかった。

何か不幸な事故があった場合の指示書には、「海神――ポナペ製」とされる浅浮彫りの「所有者」がわたしだと明記されていた――この浅浮彫りの生物が何であるかを明かしたくなかったかのようだった。わたしは警察の許可を得て、浅浮彫りを手に入れると、ウェクターに約束したことを実行する準備をしたが、そのまえに警察に協力して、ウェクターの衣服が何一つなくなっていないので、裸でベッドから出て姿を消したらしいと結論をくだした。

浅浮彫りをウェクターの家でうけとったとき、くわしく調べるようなことはせず、ブリーフケースに入れてアパートにもち帰った。翌日インスマスの近くに車で行き、適当な重りをつけて海に沈める準備はすませてあった。

だから、最後の瞬間まで、胸のむかつくような変化が起こっていることを、まったく知らずにいた。それがどのようにして起こったかを、わたしはまるで知らないのだ。しかし問題の浅浮彫りを仔細に調べる機会が少なくとも二度あった事実は否定しようがない。一度はジェイスン・ウェクターに妙な変化があるといわれたときのことだが、わたしには何の変化も見てとれなかった。そしてわたしが最後に目にしたのは、大きく揺れるボートに乗っているときのことであり、誰かが遙か遠くから、ジェイスン・ウェクターを思わせる声で、わたしの名前を呼ぶのが聞こえていたから、そのときは興奮のあまり感覚が狂っていたのかもしれない。

かりたボートでインスマスの沖に出て、すでに重りをつけてある浅浮彫りをブリーフケースからとりだしたとき、わたしの名前を呼んでいるような声が遠くから聞こえることに気づき、信じられない思いがしたのだった。その声は、海上というよりは、海面下から聞こえてくるようだった。そんな声が聞こえたものだから、わたしは一瞬ためらって、ほんのつかのまとはいえ、ゆったりうねる大西洋に投げこむまえに、手にしたものに目を向けた。一瞬のこととはいえ、わたしはまざまざと見てしまった。浅浮彫りを顔のまえにかかげていたため、未知の古代の彫刻家が彫りこんだ触手を見のがすわけもなかったし、これまで何もつかんでいなかった触手の一本に、細部まで完璧な、小さな裸の男がつかまれているのも見のがすわけがなかった。その男の苦行者めいた顔は見まちがえようもなく、浅浮彫りの生物と同じ比率で存在するその男が、ジェイスン・ウェクターの声でわたしの名前を呼んでいるのだから、かつてウェクターが「種子とカボチャの関係」といったことが、ボートのなかで怖ろしくも実感できた。そして浅浮彫りを海に投げたときでさえ、小さな男の口はわたしの名前を呼んでいるようで、海に沈んでいくときには、ジェイスン・ウェクターに似た声が遥か遠くから、わたしの名前を呼んだあと、あえぎと苦悶の叫びを発し、そして悪魔の暗礁沖の底知れぬ海底へと没していったのだった。

城の部屋

J・ラムジー・キャンベル
岩村光博訳

人間各自の心のなかには旧世界の名残りのようなものが潜み、それが太古から生きながらえているものにわれわれをひきよせるのだろう。わたしにもそうした名残りがあるにちがいなく、あの日わたしが伝説にうたわれる古い丘の廃墟まで行ったことには、まっとうな理由も穏当な理由もありえないし、その廃墟で秘密の地下室を見つけだしたことはもちろん、発見した恐怖の扉を開けてしまったことには、もっともらしい常識的な理由などつけられるわけもない。

ブリチェスター郊外の丘は一般に忌避(きひ)されているが、その理由をほのめかす伝説をはじめて知ったのは、大英図書館を訪れたときのことだった。大英図書館に蔵される特定の書物――悪魔伝承の書物ではなく、セヴァン谷の郷土史をあつかったはなはだ珍しい大冊で、十八世紀の牧師が回顧風に生なましく書きあげたもの――を目にするために行ったのだ。バークリイ近くのキャムサイドに住む友人が、今度『キャムサイド・オブザーヴァー』に記事を書くため、必要な史料を見つけてやらなければならなかった。友人は病気でしばらくロンドンに出られないので、その日わたしが友人の家に泊まるとき、見つけだした史料を提供することになっていた。大英図書館に着いたときには、目当ての書物を手早く調べ、しかるべき文章を書き写し、まっ

すぐ車で目的地に行くことだけを考えていた。
　堂堂とした天井が印象的な閲覧室に入ると、必要な書物はいま貸出中だが、しばらく待っていればすぐに返却されるはずだと、司書にいわれた。時間をつぶすために歴史書を読むほどの興味もなく、わたしは司書に、ほとんど入手不可能な『ネクロノミコン』を見せてもらえないだろうかといった。そして一時間以上も丹念に目を通した。ごく普通の平穏な見かけの背後に横たわっているものについて、『ネクロノミコン』でほのめかされているさまざまなことは、容易に脳裡からふりすてることはできず、正直いって、世界じゅうの忌避される場所や秘密の場所に潜伏すると著者のいう、異界的な生物について読むにつけ、いつしかそうした生物を現実としてうけいれるようになっていた。そうした怖るべき生物――ふくれあがったクトゥルー、名状しがたいシュブ＝ニグラス、巨大両棲類ダゴン――にまつわる暗澹たる神話をひたすら読みついでいたため、黄変した書物をかかえこんだ司書に読書を中断されるようなことがなければ、絶対的な信仰の大渦のなかに呑みこまれてしまっていただろう。
　わたしは司書に『ネクロノミコン』を返却し、はなはだしい恐怖が心に生まれていたことで、怖るべき書物が厳重に保管されるのを見とどけた。そして要求した歴史書に目を向け、友人が興味をもっている箇所を書き写しはじめた。当然のことだが、関連するものを見つけだすには、さして有益でもない文章の大部分を読まなければならず、最初に読んだ書物をどことなく彷彿とさせるものを見いだしたのは、さして価値があるとも思えない箇所を読み流しているときの

ことだった。最初は異界の生物にまつわる信仰について読みふけったことで、害のない風変りな地方の伝説を不穏かつ異常なものとうけとめてしまったのではないかと思ったが、やがてこれがまさしく尋常ならざる伝説であることがわかった。

バークリイの神父はこう記している。

されどサタンは神のもとに生きる人びとに恐怖をあたえ、問題を起こすと考えられる。かつて聞いたことだが、ノートン氏が森の近くに住んでいたとき、怖ろしい唸りや声に悩まされ、ある夜は太鼓のひびきがすさまじかったため、それから一ヵ月というもの、農地には帰れなかったという。しかし読者を悩まさぬよう、それから二ヵ月とみたぬまえに農夫から聞かされた話を書きとめておく。

ある夜、バークリイ郊外の街道を歩いていると、農夫のクーパーが左側の野原からあらわれたが、汚れきったなりをしており、怖ろしいものを目にしたことで震えあがっていた。哀れなトム・クーパーは持病が起こると常軌を逸するが、最初はそのように見えたものの、教会に連れていくと、神の存在がクーパーの心を癒したもうた。クーパーは善良なるキリスト教徒の道から逸脱させるため、悪魔がデーモンをつかわしたにちがいないと思っており、自分が目にした冒瀆的な光景をお話ししましょうかといった。

クーパーが誓って申すには、家畜に被害をあたえる狐を追って、この厄介ものの始末を

つけようと思っていたところ、狐にふりまわされて農夫のキングとクックの土地近くまで行ったあげく、狐を見失ってしまい、川に近づいて家路についたという。いつも家に帰るときに利用するキャムブルック川を渡りかけ、中央で橋が崩れているのを知って仰天した。コーン・レイン近くのフォードに向かっていると、丘の上に尋常ならざるものを見た。光を放って輝いているようで、色は一つにとどまらず、子供の玩具の万華鏡のようだった。クーパーはぞっとしたが、丘に近づいてのぼり、そのもののすぐ近くまで行った。透明な鉱物でできており、いまだかつて見たことのない形をしていた。どういう見かけであったかを話してくれというと、クーパーは妙な目でわたしを見て、あまりにも邪悪な魔物だったから、キリスト教徒たるものの口にはできませぬと申した。わたしがそのようなデーモンに対抗する十分な知識をもっていると告げると、クーパーはそいつがキュクロープスのように目が一つしかなく、蟹（かに）のごとき鋏（はさみ）をもっていたと申した。アフリカで見られるという象のごとき鼻を備え、その顔からは海の魔物のごとく、蛇に似たものが髭さながらにはえていたとも申した。

　クーパーは天使の声にひかえろと命じられたにもかかわらず、邪悪な魔物の鋏にふれずにはいられなかったため、そのときサタンに魂を奪われたにちがいないことは救世主さまもご存じだと申している。するうち巨大なものが月をよぎり、クーパーは見あげまいとしたが、怖ろしい影が地面に投げかけられるのを見た。それを目にしたとき、神が幸いを忘

れたかのごとく思いなされたと、クーパーが申しているので、わたしがその影のありさまを耳にすれば天に守ってはもらえぬだろうとクーパーが申したとはいえ、あながち神を瀆しているわけではないだろう。そしてクーパーは丘から逃げだし、キャムブルック川を泳いだのだった。そのあいだ、何らかのものが途中まで追ってきたらしく、背後に大きな鋏がたてる音が聞こえていたという。しかし何か邪悪な物音がするときにはいつもおこなうように、神への祈りを何度も口にしているうち、その音は聞こえなくなった。そうしてバークリイ街道を歩いているわたしと、ばったり出会ったのである。

わたしはクーパーに、おかみさんが心配しているから家に帰り、悪魔がまたよからぬことをたくらむやもしれぬので、主への祈りをささげるようにと諭してやった。その夜わたしは、サタンのこうした怖るべき行為がわたしの教区より消えさって、地獄が哀れなクーパーを奪うことがないよう、ひたすらに祈りをささげた。

ページの最終行まで読んだので、わたしはすぐにつぎのページに目を向けた。しかしこの書物には乱丁か落丁があって、つぎの一節はまったく別のことが記されていた。ページのナンバーに目を向け、ちょうど二ページ欠落していることがわかったので、丘の魔物についてそれ以上の情報は得られなかった。これを埋める手立てはないので――ともかくわたしは別のことを調べるために大英図書館にやってきたので――本来の調査を進めるしかなかった。しかし二、三

ページめくったとき、ページがふぞろいになっていることに気づき、さらにめくると欠落していたページがあらわれた。わたしは妙に気分をうきたたせ、中断した読書を再開した。

しかし農夫クーパーの話はこれでおわったわけではない。二ヵ月後、農夫のノートンがこまりはてた顔であらわれ、森の轟きが以前よりも大きくなったと申した。扉を閉ざしてサタンのはたらきの徴に注意せよと告げる以外、慰めようもなかった。つぎにクーパーの女房がやってきて、亭主の具合が急に悪くなり、耳にするのも怖ろしい金切り声をあげてとびはね、森に向かって走っていったと申した。轟きがひどくなっている森に人をやるのは気が進まなかったが、森にわけいって悪魔の徴を見つけ、農夫クーパーを探しだすべく、農夫たちを集めた。農夫たちは森に行ってくれたが、すぐにもどってきてわたしを起こし、哀れなクーパーを連れ帰れなかったわけと、クーパーが悪魔にさらわれたにちがいないと思う所以について、きわめて面妖かつ怖ろしい話を語った。

森がもっとも深いところで、木木のただなかから轟きが聞こえるようになり、これが何の先ぶれであるかがわかっているので、おそるおそる轟きの聞こえるほうに近づいてみた。太鼓が轟いているところまで行くと、農夫クーパーが巨大な黒い太鼓のまえに坐り、催眠の術にかけられたのかのごとく目つきをして、アフリカの原住民さながらに荒あらしく太鼓を打ち鳴らしていた。農夫キングがクーパーに話しかけたが、クーパーの背後を見て、

何が見えるかをほかの者たちに知らせた。探索にでかけた者たちが誓っていうには、クーパーの背後にバークリイの蟇(ひきがえる)よりも悍(おぞま)しく、このうえもなく冒瀆的な姿をした、巨大な魔物がいたのである。蜘蛛(くも)や蟹(かに)や夢にあらわれる物の怪(け)に似ているというので、丘にあらわれたものはこの魔物であったに相違ない。森のなかでデーモンを目にして、農夫キングは逃げだし、ほかの者たちもそれにならった。さほど遠くまで行かないうちに、農夫クーパーのものと知れるすさまじい苦悶の声が聞こえ、何やらん巨大な獣の唸りごとき音声(おんじょう)も聞こえたが、太鼓の音はやんでいた。数分後、巨大な蝙蝠(こうもり)のたてる音にも似た翼のはためきが聞こえ、遠くのほうへと去っていった。農夫キングらはどうにかキャムサイド・レインまでたどりつき、すぐに村にもどって、哀れなクーパーの最期を語ったのである。

これは二年まえのことだが、デーモンがなおも生きて、森のなかをさまよい、不注意な者を待ちかまえていることに、疑問の余地はない。村にまでやってくるのかもしれず、農夫クーパーを探しにいった者たちは、あれ以来魔物の夢を見るようになり、先頃死んだ男などは、何らかのものが窓からのぞきこみ、魂をひきよせると申したほどだ。それが何であるかはわからない。サタンが地獄よりつかわすデーモンであろうが、この地方の郷土史を読みふけっているダニエル・ジェナー氏がいうには、カエサルのブリテン侵略に先立つ遙かな昔からこの地に石造りの扉があり、その背後にローマ人が見いだしたものにちがいないとのことである。ともかく、サタンを祓(はら)う祈りをとなえようと甲斐はなく、善なるキ

リスト教社会を悩ますデーモンとは異なるものにちがいない。信者が森に近づかずにいれば、いずれ死にたえるやもしれぬ。さりながら面妖な噂によれば、数年まえにセヴァン・フォード近くに居をかまえしギルバート・モーリイ卿が、黒魔術によりて悪魔を支配できると語ったらしく、卿は冒瀆の術によりて森の魔物をあやつれるのではないかと取り沙汰されている。

森に潜むという伝説の魔物にまつわる話はここでおわっているが、この魔物に関する伝説はこれだけではないように思えた。最後にふれられているのが、十八世紀の魔術師が魔物を支配しようとした企てだが、これはモーリイの実験が何らかの結果をもたらしたことを伝えているようで、一時間くらいならさらにくわしく調べる時間がさけそうだった。もちろん『ネクロノミコン』を読んだことで、想像上の魔物を信じるようになったわけではなく、キャムサイドにいる友人を訪れたときに恰好の話題になるし、もしも建物の廃墟でものこっているなら——そしてそういう人物が実在したのなら——ギルバート・モーリイ卿の居城を訪れることもできるかもしれないと思ったのだ。

この伝説はきっと他の書物でも言及されているはずだと思い、わたしは調べてみることにして、司書に関連文献を選んでもらった。司書が選びだしてくれた書物には、ウィルシャーの『ヴァークリイ谷』、ヒルの『セヴァン谷の伝説と慣習』、サングスターの『モンマスシャー、

グロスタシャー、バークリイの妖術覚書き』があった。わたしは当初の調査を忘れはて、そうした書物に目を通しはじめたが、ある種の文章や挿絵にはぞくっと身を震わせた。
　ウィルシャーの著書はすぐにおはらいばこにした。女の幽霊や大地に根をはやした修道僧は別として、超自然的なものにかかわっている伝説は、バークリイの魔女とバークリイの蟇（ひきがえる）の伝説だけだった。バークリイの蟇の伝説は、土牢に入れられ人間の死体を食っていたという凄絶（せいぜつ）な魔物をあつかう、何とも忌わしいものだったが、わたしの調査に役立つとは思えなかった。しかしヒルとサングスターの著書からは得るものがあった。ときに丸一ページを占めて、セヴァン地方を旅する者の見た奇怪なもののことが、さまざまに記されていたのだ。しかしそのあたりに存在するとされる魔物が、わたしの探し求めているものであるとは思えなかった。するうち、サングスターの著書で、まさしく目当ての伝説があつかわれているのを見つけだした。さきほど読んだ出来事をほぼ正確に繰返したあと、話はつぎのようにつづいていた。

　この魔物がいったい何であるか、そもそもどこからやってきたのか、これ以前に関連する伝説がどうしてないのかといった疑問には、読者各自が答えなければならない。それらしき答はいくつかある。この魔物はおそらくバイアティスであって、人類よりも古くから存在するこの生物は、かつて神として崇められていた。伝説によれば、ローマ人のブリテン侵攻に先立つ遙かな昔のものとされる建物において、ローマの兵士が石造りの扉の背後

にいたバイアティスを解き放ったという。農夫クーパーが目にするまで、バイアティスの伝説が存在しない理由については——実際にはさまざまな伝説がありながらも、それとわからぬ形のものであるため、後世の伝説と結びつけて考えられることがなかったのである。怖るべきバークリイの墓は明らかにバイアティスと同一であって、バイアティスは単眼でありながらも、ときに口先が縮むと、おおよそ墓のように見えるのだ。いかにしてバークリイの土牢に閉じこめられ、ついには逃れだしたのかは、伝説では語られていない。催眠の力を有しているので、誰かを催眠術にかけて扉を開かせたのかもしれないが、この力は餌食を無力にするためにのみ用いられるらしい。

バイアティスは農夫クーパーとの出会いがあった後、セヴァンフォードはずれの長らく無人であったノルマン人の城に住みついた、ギルバート・モーリイ卿なる人物によって森から招喚された。くだんのモーリイは近在の者たちに久しく忌避されていた。理由は定かでないが、モーリイはサタンと契約をかわしたと噂されており、ある塔の窓に蝙蝠が群がるありさまや、しばしば谷にたれこめる霧のなかにあらわれる奇怪なものを、近在の者たちは怖れていた。

ともかく、モーリイは森で邪悪な眠りにつく魔物を目覚めさせ、バークリイ街道をはずれた居城の地下室に幽閉したが、その城はいまや跡形もない。モーリイはバイアティスを捕えているあいだ、その宇宙的活力を得て、クトゥルー、グラアキ、ダアロス、シュブ＝

ニグラスの放つ思念をうけとりつづけた。
モーリイは旅人を居城へとおびきよせ、地下室近くまで連れていき、そのなかに閉じこめたのである。犠牲者があらわれないときには、魔物を放って食事をさせた。夜遅く家路につく者が、怖ろしい有翼生物のあとにつづいてモーリイが空を飛んでいる姿を見て、心底震えあがったことも一、二度あった。ほどなくモーリイは魔物を城の秘密の地下室に閉じこめざるをえなくなったが、伝説によれば、魔物が食事の量に比例して、地下室にはおさまりきれぬほど巨大化したためであるらしい。魔物は昼にはここにとどまり、暗くなると、モーリイが秘密の扉を開けて解き放った。夜明けまえにもどってくると、モーリイももどって、ふたたび魔物を閉じこめる。扉が閉ざされているあいだ、扉に何らかの印があることで、魔物は自由に動けない。ある日、モーリイが魔物を閉じこめたあと、そのまま姿を消して二度ともどらなかった（扉が閉ざされたのは確かで、城を調べた者はどこにも秘密の扉を見つけられなかった）。城は住む者もないままに朽ち果てていったが、秘密の扉は何一つそこなわれてはいないようだ。伝説によれば、バイアティスがなおも秘密の部屋に潜み、秘密の扉を開ける者がいれば、いつでも目をさまして逃げだすという。
サングスターの著書にはこのように記されていた。わたしはひとまず調査を中断して、厳重に保管されるさまざまな書物に、もしかしてバイアティスをあつかったものがあるのではない

かと思い、司書に調べてもらった。司書が見つけだしてくれたのは、プリンの『妖蛆の秘密』で、つぎのような記述があった。

蛇を髭のごとくはやす忘却の神バイアティスは、旧支配者とともに異星より訪れ、深きものどもが地球にもたらしたバイアティスの偶像に敬意を表することで招喚される。生ける者が偶像にふれることによっても招喚される。バイアティスの眼差しは心に闇をもたらし、バイアティスの目を見る者は、なすすべもなくバイアティスの魔手にかかるという。こうした者たちを喰らい、その生命力の一部を得ることで、バイアティスは巨大化する。

わたしはルドウィク・プリンの著書で凶まがしい文章を読み、それ以外にバイアティスのことは見つからないだろうと確信して、すぐに書物を閉じて司書に返却した。偶然に見いだした怖ろしい謎にふれたものはこれが最後だったので、関連した書物はすべて返却した。そのとき時計を見ると、思っていたよりも多くの時間を費やしたことがわかった。バークリイの牧師が著わした書物にもどり、友人が求めていた箇所を書き写してから、大英図書館をあとにした。

正午ごろだったので、日がくれないうちにできるだけ目的地に近づいておきたく、大英図書館からキャムサイドに直行することにした。ノートをグローブボックスに入れると、エンジンをかけて車を走らせた。わたしの進む方向は反対車線よりも車は少なかったが、ロンドンの郊

外に出ても、しばらくはそのことに気づかなかった。そのあとは、流れすぎていく景色に思いを向けることもなければ、日没がせまっていることもとりたてて気にとめず、食事をとるために立ち寄った食堂をはなれたとき、はじめて闇がたれこめているのを知った。そのあと目にしたものといえば、前方を照らすヘッドライトの黄色い光だけで、まがりかどでは生垣がぼうっとうかびあがった。しかしバークリイに近づくにつれ、かつてこのあたりでおこなわれた邪悪なことを、つい考えこむようになってしまった。バークリイの町に入ると、この町にまつわる怖ろしい話を思いだした——土牢で飼われていた悍（おぞま）しい蟇（ひきがえる）のばけものの話や、柩（ひつぎ）に巻かれていた鎖が不可解にもとれたあと、死体が柩からあらわれたというバークリイの魔女の話が脳裡によみがえった。もちろんこうした話は迷信に根ざした空想にすぎず、昼まえに読んだ書物にまことしやかに記されていたにせよ、不安をかきたてられるわけではなかったが、ヘッドライトが照らしだすなか、灯一つない家屋が黒ぐろとした姿を見せたり、じっとり湿った壁があらわれたりするのは、あまりいい気持ちのするものではなかった。

　友人の家に近づくと、キャムサイドとブリチェスターのあいだで車のヘッドライトがきれてしまったために、友人が玄関口にあらわれて、懐中電灯で誘導してくれた。友人はわたしを家に招き入れ、ヘッドライトもなしにここまで来るのはたいへんだったろうといったが、わたしにはうなづくことしかできなかった。夜もふけていた——思っていたよりも遅くなったが、大英図書館で予定にはなかった調べものをしたので、それも当然だった。わたしは軽い食事をし

ながら友人とあれこれ話したあと、今日一日の疲れをとるために部屋へひきあげた。
翌朝、大英図書館でメモをとったノートを車からとりだしたとき、モーリイ城の廃墟を訪れてみなければならないなと思った。友人は家のなかを歩けるようになっていたとはいえ、まだ家をはなれられるほど回復してはいないし、その日の午後は記事の執筆にとりかかるつもりだというので、城を見つけにいく機会はありそうだった。ノートを手渡し、何げない感じで、食事をすませたらこのあたりをぶらついてみるつもりだといって、どこか興味をそそるようなところはないだろうかとたずねてみた。
「バークリイまで車で行って、そのあたりを歩いてみればいい」友人が助言してくれた。「過去の遺物がいくつかあるよ——もっとも、霧が深いから、ぼくだったら長居はしないがね。今晩ひどい霧がでそうだ。そういう霧のなかを車で走りたくはないよ」
「そういえば」わたしはためらいがちにいった。「魔術師の使い魔が閉じこめられていたという城があったそうじゃないか。その廃墟でも探してみようかな。場所を知らないか。モーリイ、ギルバート・モーリイ卿の居城だったそうだ——悪魔なんかと手を結んでいたとかいう人物だよ」
友人がいささかショックをうけたような顔をして、妙に不安そうにわたしを見た。「おいおい、パリー」そういった。「ぼくはそのモーリイという男のことを聞いたことはあるがね——一七〇〇年代にこのあたりで、生まれたばかりの赤ん坊が何人も消えてしまったことにまつわ

る怖ろしい話を聞いているが、その男のことを話す気にはなれないね。きみもしばらくここに住んで、このあたりに住む者が特定の夜に、悪魔が歩くからだといって戸締まりを厳重にして、窓の下の地面に印を描くのを見ればいい。誰もが家に閉じこもるそんな夜には、何かが飛びまわる音がするんだが、何も見えないんだぞ。きみもそんな体験をすれば、そんなものをつきとめようなんて気にはなれなくなるさ。この家の世話をしてくれる家政婦がそういったことを信じこんで、いつもこの家に印をつくってくれているよ――だからこの家は安全なんだろう。しかしそんな印に守られていようと、妖術に汚されたところを見つけだすつもりはないね」

「わかったよ、スコット」わたしはなじるように笑ったが、ここに住むようになってからの友人の変化が気になった。「この村の人たちのつかう印が善や悪の効果をもたらすだなんて、きみは信じちゃいないんだろう。ともかく、きみが何も教えてくれないのなら、村人の誰かに聞いてみるまでさ――村人はきみのような不安なんかもってないだろうからな」

スコットは不満そうだった。「きみも知っているように、以前のぼくはいまのきみのような懐疑家だった」スコットがいった。「とんでもないことがあって、ぼくが変化してしまったことがわからないのか。頼むから信じてくれ――あんなものを調べにいかないでくれ」

「同じことをいうが」楽しい午後になるはずのものが口論になってしまい、わたしはいらだたしくいった。「村人の誰かにたずねればすむことだからな」

「わかった、わかった」スコットが憤然として口をはさんだ。「セヴァンフォードのはずれに、

モーリイが何らかの魔物を飼っていたという城がある。モーリイは魔物を閉じこめたまま城をはなれ、二度ともどってはこなかったようだ——招喚した霊にでも運ばれていったんだろう。魔物はなおも城にいて、どこかの莫迦がよけいなことをして、魔物を解き放つのを待っているそうだ」

最後の言葉が何を意味しているかは歴然としており、わたしはたずねた。「セヴァンフォードから城へはどう行けばいいんだ」

「おい、パリー、もう十分だろう」スコットが眉をひそめていった。「城の伝説がわかったんだから、それでいいじゃないか」

「城が存在することはわかったがね」わたしは指摘した。「地下室が存在するかどうかはわからない。スコット、セヴァンフォードの村人なら知っているんじゃないか……」

「きみが悪魔に身を売りたいんなら」スコットがいった。「城はセヴァンフォードの川を渡った小さな丘の上にあるよ——コトン・ロウからそう遠くない。しかしパリー、どうしてそんなところへ行きたがるんだ。きみはこんな伝説を信じていないのかもしれないが、村人たちは城に近づこうとしないし、ぼくだってそうだよ。魔物は信じられない力をもっているといわれているんだ——魔物の目を見たら最後、おしまいだよ。ぼくは伝説を鵜呑みにしているわけじゃないが、城には何かがとり憑いているはずだと思うね」

スコットが信じこんでいるのは明白だった。わたしはそのことで、城を訪れて徹底した調査

をおこなう決意をますますかたくした。口論がおわってからは、会話がいささかはりつめたものになり、昼食ができるまで、わたしたちはそれぞれ読書にふけっていた。わたしは食事をおえると、すぐに懐中電灯を部屋からとってきて、調査の準備を整え、セヴァンフォードに向かって車を走らせた。

Ａ三八号線とバークリイ道路を少し進んだころ、車を城の近くに停めるには、セヴァンフォードを通りぬけて、おおまわりをしなければならないことがわかった。セヴァンフォードの村を通っているとき、教会入口の上に石の彫刻があって、星の形をした大きなものをかかげる天使のまえで、墓じみたガーゴイルが縮みあがっているのが見てとれた。興味がひかれ、わたしは車を停めると、黒ずんだ柱が両側に立つ苔むした小道を歩き、牧師に会いにいった。牧師はよその土地の者が教会にあらわれたのを見てうれしそうな顔をしたが、わたしが用件を口にすると用心深くなった。

「教えていただきたいんですが」わたしはいった。「入口の上にかわった浮彫りがありますね――天使と墓のような魔物をあらわしたものが。あれは何を意味しているんですか」

牧師はやや不安そうな顔をした。「もちろん善が悪に打ち勝つことをあらわしております」

「しかしそれなら天使はどうして星をもっているんですか。十字架のほうがふさわしいと思いますが」

牧師がうなづいた。「それにはわたしも悩んでおりましてな」牧師が正直にいった。「このあ

たりの迷信にかかわっているようですから。何でも、もともとこの教会のものだったわけではなく、かつての教区牧師のおひとりがもってこられたそうですが、どこで見つけだされたのかは、お明かしにはならなかったようです。星は万聖節前夜に村人たちがつかうものと同じものでして、天使は本当は天使ではなく、どこか別世界の生物だそうです。蟇につきましては――まだ解放されるのを待ちかまえている、いわゆるバークリイの蟇をあらわしているというのですからな。わたしは気に入らないんですが、村人も頑固でして、あれを処分しようものなら、教会には足を向けけんといっておどすのですよ。何ともこまったものです」

わたしはどことなく不安な思いになって教会をはなれた。浮彫りが教会のものではないことが、どうにも気になった。伝説が思っていた以上に広まっていることを意味しているからだ。しかしもちろん浮彫りは建物の一部だから、伝説がゆがめられて、かつては別個のものだった生物をあらわすようになったにすぎないのだろう。わたしは車を走らせたとき、ふりかえって浮彫りを見ることもしなければ、教会をはなれて浮彫りを見あげている牧師に目を向けることもしなかった。

ミル・レインをはずれてコトン・ロウを進んだ。かどをまがると城が目に入り、左手の背後に無人の小屋がならんでいた。城は丘の頂きにあって、三方の壁がまだのこっていたが、屋根が崩れ落ちて久しかった。塔が一つだけ、青白い空を背景に焼けただれた指のようにそそり立ち、わたしはつい、遙かな昔に蝙蝠が群がっていたのはこの塔だろうかと思った。そして車を

停めるとキーを抜き、車からおりて丘をのぼりはじめた。

地面の草は濡れていて、霧がたれこめはじめ、地平線はぼんやりとしていた。地面が濡れていることでのぼりにくかったが、数ヤード進むと、石段が城まで通じていたので、それをのぼっていった。石段は緑がかった苔に覆われ、苔がまばらなところにはかすかな印が見てとれるようだったが、ぼんやりしているのではっきりした形はわからず、どこかまともではないような気がするばかりだった。誰がこの印をつけたのかは想像もつかず、城のまわりには人のいる気配がまったくないし、動くものといえば、わたしが城に入ったことに驚いて廃墟から飛びたつ、ずんぐり太った鳥だけだった。

城にはほとんど何ものこっていなかった。床の大部分は崩れ落ちた屋根の残骸に覆われ、その下に秘密の部屋があることを示すものがあるとしても、見つけようがなかった。そのときひらめくものがあり、わたしは塔のなかに通じる階段をのぼり、螺旋階段の一番下を調べてみた。塔にいることで、また別の考えがひらめいた——伝説が魔物の牢を地下にしているのは嘘なのかもしれない。しかし塔の上の部屋は簡単に扉が開き、小さな寒ざむとした部屋があらわれただけだった。その部屋全体を見まわしたとき、窓の下にベッドのかわりに柩があるのを見て、不快な胸騒ぎがした。いささか身を震わせながら、柩に近づいてなかをのぞきこんでみた——柩には土が敷きつめられている以外、ほかには何もないのを知って、ほっとした溜息をついたように思う。とんでもない場所にあるにせよ、異様なたぐいの埋葬所にちがいなかった。しか

しこの城のどこかの塔に蝙蝠が群がっていたことを思いだすと、まだはっきりとはわからないながらも、何らかの繋がりがあるように思えた。

　塔の部屋をやや足早にはなれると、階段をおりて城の四方を調べてみた。瓦礫(がれき)以外には何もなかったが、平石に妙な印が刻まれているのを見つけた。秘密の部屋の扉が崩れ落ちた屋根の残骸の下にないものなら、そもそも秘密の部屋などなかったのだろう。わたしはそんなふうに思い、十分ほどのあいだ、屋根の残骸をとりのぞきつづけたが、その結果といえば、爪が割れて土ぼこりにまみれただけのことで、扉が残骸の下にあるとしても見つけようのないことがわかった。ともかくスコットの家にもどり、悪意ある生物につかまりはしなかったといってやることはできる。城に秘密の部屋が存在する証拠はないと指摘することもできる。

　城から石段をくだりはじめたとき、霧がますますたれこめてぼんやりしたものになっている、ゆったりうねる緑の草原に目を向けた。突然、足をつまずかせて倒れこんでしまった。ここの石段のすべてにあるような突起部に足をひっかけてしまったのだ。上の段に手をかけて身を起こし……ぽっかり開いた窖(あなぐら)にあやうく落ちるところだった。わたしは落とし戸の縁でよろめいた。わたしのいる段が扉で、わたしの蹴った石の突起部が錠だったのだ。石の梯子(はしご)が眼下の闇へとのびて、見えない部屋の床へと通じていた。

　わたしは懐中電灯をとりだして点灯した。部屋には何の装飾もなく、梯子の下にだけ小さな黒い金属塊があった。部屋はほぼ真四角をしていて、縦横おおよそ二十フィート、壁はくすん

だ灰色の石で造られ、いたるところに穴が開き、そこから青白い羊歯がはえていた。部屋のなかに動物の気配はまったくなく、何らかの動物が住んでいた形跡もなかった——もっとも爬虫類の体臭と腐敗臭がまざったような、一風かわった臭いがつかのま立ちのぼって、喉がつまりそうになった。

部屋全体に興味をひくようなものは何もなく、床の中央に小さな黒い金属塊があるだけだった。梯子にのっても大丈夫なことがわかると、わたしは梯子をくだって金属塊に近づいた。穴だらけのそばの地面に膝をつき、黒い金属を調べてみた。ナイフでひっかくと、妙な菫色の光沢があらわれ、黒く塗られていることがわかった。上面には象形文字が彫りこまれ、『ネクロノミコン』を読んだことで、一つの文字はデーモンから身を守るためのものだとわかった。金属塊をひっくりかえすと、その底面には、このあたりでよく見かける星の形のシンボルが刻みこまれていた。この立方体の金属は、魔物が出没したとされる城に実際に訪れたことを示す、申し分のない証拠になりそうだった。わたしは金属塊をとりあげ、驚くほど重いことを知り——同じ大きさの鉛よりも重かった——片手でもちあげてみた。

そうしたことで、忌わしいものを解き放ってしまい、わたしは梯子をかけのぼると、半狂乱になって丘をくだり、車にとびこんだ。キーを逆に差しこんであわてふためき、ふりかえってみると、霧のたれこめる空を背景に、深淵から悍しいものがその器官をのばしていた。ようやくキーを差しこみ、ギアがきしるほどの荒あらしさで、目にした悪夢から走り逃げた。神経を

すりへらす速度で景色が流れさるなか、ヘッドライトの投じる影が疾走するデーモンのように見えていたが、やがてスコットの家の私道に入り、ガレージのドアに衝突する寸前で車を停めた。
わたしが荒あらしくもどってきたことで、玄関のドアがすぐに開いた。スコットが玄関ホールから差す矩形(くけい)の光のなかにあらわれた。そのころには、窖(あなぐら)で慄然たるものを見たことと、半狂乱のドライヴをつづけたことで、ほとんど気を失いかけていたため、足がよろめき、スコットにささえてもらって玄関ホールに入った。居間に腰をおろし、ブランディをたっぷり飲んでようやく、その日の午後にあったことを話しはじめた。城の恐怖をまだ話していないうちに、スコットは不安そうな顔をして、体をのりだしていたが、塔の部屋に柩があったことを話すと、おびえたあえぎをもらした。地下の部屋でわたしに襲いかかった魔物についてくわしく教えると、スコットの目には恐怖がみなぎった。
「しかしそんな怖ろしいことが」スコットがあえぎながらいった。「つまり……伝説によれば、バイアティスは餌食を喰うたびに大きくなっていって……最後にモーリイを喰ったにちがいないが……きみのいったことが本当なら……」
「わたしはこの目ではっきりと見たんだぞ」わたしはいった。「明日まで待つしかないな。夜が明けたら、何らかの爆薬を手に入れて、あいつを滅ぼしてやる」
「パリー、まさか本気で城にまた行くつもりじゃないんだろう」スコットが信じられないといっ

た感じでいった。「きみははっきり見たんだから、あんなところにまた行かなくても、証拠を十分に握っているじゃないか」

「きみはわたしが見た恐怖にまつわる話を耳にしているだけだ」わたしは指摘した。「わたしは自分の目で見たんだから、すぐにも滅ぼさないかぎり、いつ墓じみた生物が牢からとびだすかと思って、不安にさいなまれることになる。今度は楽しむためじゃなく、はっきりした目的をもって行くんだ。あいつはまだ逃れることができない——しかしあのままにしていたら、また犠牲者をおびきよせるようになって、力をとりもどすはずだ。わたしがしようとしていることでは、あいつの目を見る必要はない。このあたりにいる者は誰も近づかないし、城の近くの小屋さえ無人になっていることはわかっているが、わたしのような者が伝説を知って、調べにくるかもしれないんだぞ。そのときは扉が開け放たれることになる」

翌朝、わたしは何マイルも走りまわって、爆薬を手に入れられないことを知った。最後に灯油を数罐(すうかん)買いこんで、異界の魔物を滅ぼせることを願った。荷物をとりにスコットの家に行った。地元の警察でとり調べをうけるようなことはまっぴらなので、城での仕事をやりおえたらロンドンにひきあげるつもりだった。スコットの家の家政婦がわたしに近づいてきて、奇妙な星の形の石を押しつけ、灯油をつかっているあいだバイアティスの力から守ってくれるものだといった。わたしは家政婦に礼をいい、スコットの家をひきあげて、車にもどった。ふりかえると、スコットと家政婦が居間の窓から心配そうに見つめていた。

車を走らせていると、後部席に置いた灯油の罐が嫌になるほどうるさい音をたて、城での行動について最善の策をたてようとするわたしの神経にさわった。今度は反対方向から城に近づいたが、これはスタンフォードの村を通りたくなかったからだ。一つには、できるだけ早く城に着いて、わたしの心に爪跡をのこした忌むべきものを滅ぼしたかったし、教会の入口の上にある墓じみた浮彫りのそばを通りたくもなかった。このほうが距離も短く、わたしはすぐに灯油の罐を道ばたにおろしはじめた。
　ぽっかり開いた窖まで灯油を運ぶのは、かなりな重労働で、時間もかかった。わたしはライターを梯子の端に置き、灯油の罐の栓をはずした。一段下に灯油の罐をならべ、スコットのガレージで見つけた合板を灯油の罐にひたした。そしてライターで合板に火をつけ、すぐさま灯油の罐を窖に蹴落とし、燃えあがる合板を投げこんだ。
　ぎりぎりまにあったのだと思う。栓をはずした罐を蹴落としたとき、巨大な黒ぐろとしたものが窖からそびえたち、灯油と燃えあがる合板があたると、塩をかけられたナメクジのように縮んだからだ。そして窖の下から、身の毛のよだつ低い唸りにまざって、長く尾をひく歯擦音が起こり、それが狂ったように高まって、胸のむかつくようなごぼごぼいう音になりかわった。窖の底で炎の苦しみに悶えているものを見おろす勇気とてなかったが、窖の上に噴きだしたものも十分に怖ろしかった。窖から細い緑がかったガスが渦を巻いて噴きだし、それが集まって高さ五十フィートはある濃密な雲になったのだ。おそらくそのガスに麻酔のような効果があっ

て、想像力が刺激されたにすぎないのだろうが、緑色の雲が上昇しながら凝縮して、巨大な蟇じみた形をとり、巨大な蝙蝠の翼でもって西のほうに飛んでいったような気がした。

それが城とそのあたりの異様な景色の見おさめだった。わたしはふりかえりもせずに石段をくだり、きらめくセヴァン川から遠くはなれるまで、前方から目をそらすこともしなかった。ロンドンの市内に入ってようやく、魔物のことを考えたが、城の部屋で金属塊をもちあげたときに目にしたもののことは、いまですら考えこまずにはいられない。

わたしが床から金属塊をもちあげたとき、足もとが奇妙にざわめきはじめたのだ。見おろすと、床と一方の壁が接する箇所から石があがりだして、石の梯子にとびついたとたん、床が完全になくなってしまい、さらに広い地下室があらわれた。わたしは石の梯子をなかほどまでのぼり、おそるおそる眼下の闇をのぞきこんだ。闇のなかからは物音一つ聞こえず、何の動きもなかった。そして梯子をしっかりとつかもうとしたとき、手にした金属塊を落としてしまい、何か湿ったものにあたったような音がして、何かが起こったのだった。

何かがずるずるすべっているような音がしはじめ、ゴム状のものが吸っているような音もした。恐怖に襲われ呆然（ぼうぜん）として見まもっていると、黒ぐろとしたものが小さな部屋の壁をこすり、大きさを増しながらのぼってきた。何よりも巨大な蛇に似ていたが、目もなければ口も鼻もなかった。この巨大な忌むべきものがとてもバイアティスとは思えず、わたしは混乱してしまった。これは異世界の生物の避難所なのか、それともモーリイが禁断の戸口から他のデーモンを

呼び寄せていたのか。
そのときわたしは理解して、恐怖にみなぎる悲鳴をあげ、邪悪きわまる地下室からとびだした。牢獄の壁にぶつかりながらずるずるのぼってくる音が聞こえていたが、わたしにはそいつが牢獄から逃げだせるはずもないことがわかっていた。わたしは一度だけふりかえった。凶まがしい真っ黒な器官が窖の縁でのたうち、一瞬まえまで感じとっていた獲物を探し求めていた。そしてわたしは狂ったような笑い声をあげた。何も見つからないことがわかるまで、そいつがむなしくのたうちまわることがわかったからだ。「地下室にはおさまりきれぬほど巨大化した」サングスターはそう記している——しかし人間を喰ってどれほどの大きさになったのかは記していない。
わたしに向かってのびてきた蛇のようなもの、人間の胴ほどの太さがあって信じられないほど長いものは、忌むべきバイアティスの顔にはえた、触手の一本にすぎなかったのだ。

喰らうものども

フランク・ベルナップ・ロング
東谷真知子訳

十字架は他者の作用を伝える媒介にあらず。至純なる心を守り、サバトの上空にあらわれること多く、暗黒の魔物どもを混乱させ退散させるものなり。

ジョン・ディー訳『ネクロノミコン』

I

文目(あやめ)もわかぬ霧となって、恐怖がパートリッジヴィルに訪れた。

その日の午後は、海から押し寄せる濃霧が、農場のまわりで渦を巻きつづけ、わたしたちのいる部屋はじめっとしていた。霧がドアの下からうねりながらのぼり、長い湿った指でまさぐるものだから、髪がぐっしょり濡れる始末だった。四角い窓ガラスはすっかり曇ってしまい、大気はどんよりして湿っぽく、信じられないほど寒かった。

わたしは陰鬱な顔をして友人を見つめた。友人は窓に背を向け、執筆にはげんでいた。背の高いやせた男で、異様なほど肩幅があって、やや猫背ぎみだった。横顔が印象的だ。ことのほか額が広く、鼻が長くて、顎が少しつきだしている――力強く繊細な顔からは、懐疑家の途方もない知性によって、生まれついての奔放な想像力がおさえられていることがうかがえる。

友人は短編小説の作家だった。時代の好みを歯牙にもかけず、自分を喜ばせるために書き、そうしてできあがった小説は尋常ならざるものだった。友人の小説を読めば、ポオはもとより、ホーソーンやアンブローズ・ビアースやヴィレ・ド・リラダンも喜んだことだろう。異常な人間、異常な動物、異常な植物の空怖ろしい考察だった。わが友人は遙かな想像の土地や恐怖の土地について記し、そうして生なましく描写される色や音や匂いは、この世では決して視覚や聴覚や嗅覚でとらえられないいものばかりだった。友人は破廉恥な創造物を、卑しむべき不埒な背景に投影するのだ。創造されたものどもは、丈高い荒寥たる森や巍峨たる山脈を忌わしくも忍び歩き、古さびた住居の階段や、朽ち果てて黒ずんだ波止場の杭のあいだを、凶まがしくもずるずるすべりながら進む。

短編小説の一篇、『蛆の館』では、ミッドウェスタン大学の学生が巨大な赤黒い建物に逃げこみ、学生が床に坐りこんで声をはりあげ、「ああ、わが愛しき人は、百合の園のいかなる百合よりも美しきかな」と叫ぶのを、建物にいる者すべてが称賛するというものだった。別の短編小説『冒瀆者たち』は、『パートリッジヴィル・ガゼット』紙に掲載されるや、地元の読者

から怒りもあらわな手紙が三百十通送られてきた。
わたしが見つめていると、友人が急に書く手をとめて、首をふった。「だめだ」そういった。「新しい言葉をつくりださなければ。感情や直観では理解できるというのに。どうにか一つの文章で表現できればいいんだがな——肉体のない霊が異様にも忍び寄るありさまを」
「そいつは新しい恐怖なのか」わたしはたずねた。
友人が首をふった。「わたしにとっては新しいものじゃない。何年もまえから知っているし、感じとってもいるんだからな——きみの単純な頭では想像することさえできない恐怖さ」
「それはどうも」わたしはいった。
「人間の頭は、どのみち単純なものなんだよ」友人が説明した。「悪気でいったんじゃない。謎めいたものや悍しいものの背後や頭上には、影のように恐怖が潜んでいるんだ。人間のちっぽけな脳なんて——外宇宙からやってきて、人間を吸いとってしまう、忌わしくも忍び寄るものどもについて、いったい何を知っているのかね。わたしはこんなふうに思うことがあるよ。つまり、そうしたものどもが人間の頭のなかにとどまって、脳はそいつらを感じながらも、そいつらが触手をのばして、脳をかきまわしたり吸いとったりすると、人間は悲鳴をあげながら発狂するんじゃないだろうか、とね。それなら、脳は何の役に立つんだ」
「しかしそんなことを本気で信じているわけじゃないだろう」わたしは大きな声でいった。
「もちろんだとも」友人が首をふって笑った。「きみもよく知っているように、わたしは徹底

した懐疑家だから、何も信じられないのさ。詩人が宇宙をどんなふうにうけとめているかをざっと述べたまでだよ。恐怖小説を書いて、とるにたらない哀れな読者に恐怖を本当に伝えたいなら、何でも――どんなことでも――信じる必要がある。つまり、恐怖というものは、あらゆるものを超越して、どんなものよりも怖ろしく、そしてありえざるものでなければならないからな。外宇宙からやってきて、人間に触手をのばし、人間を吸いとってしまえるものがいることを、作家たる者、信じなければならない」

「しかしその外宇宙からやってくるものについてだが――そいつの形や大きさや色がわからないなら、どうやって描写するんだね」

「描写するようなことなんてできっこない。それこそ、わたしがやりとげようとして、失敗したことなんだからな。たぶんいつかは……いやいや、とうてい無理だろうね。しかしきみのような芸術家なら、それとなく助言するなり、示唆することができるんじゃないかね……」

「何のことかな」わたしはいささか面食らった。

「まったくこの世のものならぬ恐怖はないものだろうか。この地球上には匹敵するものがないと思えるような恐怖は」

わたしは当惑したままだった。友人が疲れたように笑みをうかべ、自分の考えを説明しはじめた。「神秘や恐怖をあつかった最高の古典にさえ、凡庸なところがあるからな」そういった。「ラドクリフ夫人は隠された地下納骨所や血みどろの幽霊を出すし、マチューリンは寓意的な

ファウストじみた悪漢を主人公にして、地獄の口から業火を吐きださせ、エドガー・ポオは血のこびりついた死体や黒猫、告げ口心臓、体が分解してしまうヴァルデマールをもちだし、ホーソーンは（まるで人間の罪が、われわれの脳をするものにとって何らかの意味があるかのように）、単なる人間の罪から生じる問題や恐怖に嬉嬉としてこだわっている。現代の巨匠にしても同じことだ。アルジャーナン・ブラックウッドはわれわれを崇高な神神の宴に招待したり、ウィージャ盤をまえに手垢のついたカードをもてあそぶ兎口の老婆を紹介したり、まぬけな透視家の出すエクトプラズムを莫迦ばかしくも描いたりしているし、ブラム・ストーカーは吸血鬼や狼男、ありふれた神話、中世の民話の切れっぱしをもちだしている。ウェルズのあつかうものといえば、科学の薬味をきかせたデーモンや海底の半魚人や月の女だ。そのほかにも雑誌に幽霊小説をせっせと書いている白痴はおびただしくいる——そんな連中が恐怖の文学にどんな貢献をしているんだ。

「われわれは血と肉からできあがっているわけだろう。腐敗崩壊して、蛆が群がる血と肉を見せられれば、胸が悪くなったりぞっとしたりするのは当然じゃないか。死体にまつわる小説がわれわれをぞくぞくさせ、恐怖や不安や嫌悪の念をかきたてるのは、あたりまえのことだ。どんな莫迦でもわれわれのこうした感情をかきたてることができる——ポオがレディ・アッシャーや、どろどろに溶けたヴァルデマールでやったことは、たいしたことじゃないんだ。ポオは誰にでも理解できる単純素朴な感情にうったえただけであって、ポオの読者がそれに反応するの

も当然のことにすぎない。

「われわれは野蛮人の子孫じゃないか。かつては巨木の立ちならぶ危険な森に住んで、われわれを八つ裂きにする野獣のなすがままになっていたんじゃなかったのか。われわれが小説を読んで、自分たちの過去の暗い影にでくわしたとき、震えあがったり縮みあがったりするのも当然さ。ハルピュイアやヴァンパイアや狼男は──われわれの祖先を苦しめた大きな鳥や蝙蝠や獰猛な犬を、巨大化したり歪めたりしたものじゃないか。そういうものでもって恐怖をかきたてるのは簡単だ。地獄の焔で人を震えあがらせるのが簡単なのは、焔が熱くて肉を燃えあがらせるからにすぎない──焔を知らない者や恐がらない者はいないからな。人を殺す強風、ものを焼きつくす焔、怖ろしい影、そういったものに恐怖をおぼえるのは、それらの実体が、祖先からうけつぐ記憶の暗い回廊に凶まがしくも潜んでいるからだよ──そうした感情にうったえる陳腐かつ露骨なもので、読者をこわがらせようとする作家にはうんざりだ」

友人の目にはまぎれもない憤りがあった。

「そうしたものを越える恐怖があるとしたらどうだろう。どこか別の宇宙の邪悪なものが、この宇宙に侵入することに決めたとしたら。われわれには彼らが見えないとしたら。われわれには感じられないとしたら。彼らが地球上では知られていない色をしているか、色のない姿であらわれるとしたら。

「地球上では知られていない姿をしているとしたら。四次元、五次元、六次元の生物だとした

ら。いやいや、百次元の生物だとしたら。次元などとは無縁に存在するものだとしたら。われわれに何ができるというんだ。

「彼らはわれわれにとって存在しないも同然なんだ。われわれに苦痛をあたえることで、存在するようになるのさ。その苦痛が、熱いとか冷たいとかいった、われわれの知っているものじゃなく、新しい苦痛だとしたらどうだろう。神経とは別のものにふれるとしたら――いままでになかった怖ろしいやりかたで、われわれの脳に達するとしたら。名状しがたい未知の異様なやりかたで、われわれに感じられるものだとしたら。われわれに何ができるというんだね。手が縛られているようなものさ。見ることも感じることもできないものには、どうすることもできはしない。千次元の生物に対抗できるわけもない。空間を食いやぶってやってくるのかもしれないぞ」

友人はたちまち興奮するようになった。

「それこそわたしが書こうとしているものなんだ。定まった形のない、忍び寄るものが、人間の脳を吸いとるありさまを、ぜひとも小説にしたかったんだ。人間としての価値もない白痴の読者に、別の宇宙、宇宙の彼方からやってくるものを、感じさせたり、目のあたりにさせてやりたかったんだ。ほのめかしたり暗示したりするのは――どんな莫迦でもできるような――簡単なことだが、わたしは実際に描写したかったんだ。色にあらざる色を、形ならざる形を、まざまざと描きたいんだよ。

「おそらく数学者なら暗示するだけにとどまらず、もう少し別のことができるだろう。ひらめきを得た数学者がやっきになって計算に没頭するときには、未知の曲線や角度をぼんやりと目にするかもしれない。何といっても、四次元を発見したのは数学者なんだからな。数学者はよく四次元を垣間見たり、近づいたり、理解したりしているが、目に見える形ではあらわせずにいる。わたしの知っている数学者がきっぱりというには、微分学の極致を考えこんで気も狂わんばかりになっているとき、一度だけ六次元を目にしたことがあるそうだ。

「不幸にして、わたしは数学者じゃない。小説を書く哀れな莫迦にすぎないから、外宇宙のものなどつかみようもないんだ」

誰かがドアをうるさくたたいていた。わたしは部屋を横切って、掛け金をはずした。「どなたですか」わたしはたずねた。「どうかしましたか」

「邪魔をしてすまないんだが、フランク」聞き慣れた声だった。「誰かに話を聞いてもらいたくてね」

一番近くに住む隣人のやせた青白い顔を見て、わたしは脇へ寄った。「さあ、遠慮せずに。たぶんハワードと幽霊談義をしていたんだが、話に出てきたのがあまりいいやつじゃなくてね。たぶんきみが話をしてくれれば、そいつをおっぱらえるんじゃないかな」

ハワードの恐怖を幽霊といったのは、平平凡凡たる隣人にショックをあたえたくなかったたか

らだ。隣人のヘンリー・ウェルズは途轍もない大男で、部屋に入ってきたときには、夜の一部をもちこんできたように思えた。
ヘンリーがソファーにぐったりと腰をおろし、おびえた目でわたしたちを探るように見た。ハワードは読んでいた小説を置いて、眉をひそめながら、はずした眼鏡をふいた。田舎者の訪問に堪えられなかったのだろう。一分ほどして、三人がほぼ同時に口を開いた。
「ひどい夜だ」
「やりきれないね」
「たまらないよ」
ヘンリー・ウェルズが顔をしかめた。「今晩」そういった。「その……おかしなことがあったんだ。ホーテンスに乗ってマリガンの森を進んでたら……」
「ホーテンスだって」ハワードが口をはさんだ。
「ヘンリーの馬だよ」いらだたしい思いで、わたしはいった。「ブリュースターから帰ってきたんだろう」
「ああ、ブリュースターからだ」ヘンリーがいった。「森のなかを進みながら、ホーテンスの耳に霧が入ったり出たりするのを見て、湾の霧笛がむせびなくのを聞いてると、頭が濡れたんだ。雨だと思ったよ。荷物が濡れなきゃいいがなって。
「ふりかえって、バターと小麦粉に覆いをかけてるのを確かめたとき、スポンジみたいに柔ら

かいものが荷車の下からあがってきて、顔にあたったんだ。すぐにつかみとったよ。
「ゼリーをつかんでるみたいだった。握りしめると、手首まで濡れちまった。そんなに暗くなかったのに、何にも見えないんだ。霧のなかは妙な感じだったな——夜が明るくなったようでね。あたりがどことなく明るくなったみたいだった。よくわからないが、霧じゃなかったのかもしれん。木がくっきりと見えるようだった。はっきり見えたんだ。それでつかみとったものを見たんだが、そいつがどんなふうだったと思う。なまの肝臓の切れ端みたいだったよ。仔牛の脳にも似てたな。そういえば、仔牛の脳のほうに似てる。細い溝があったけど、肝臓にはそんなものはないだろう。肝臓はガラスみたいになめらかだからな。
「おっかなかったよ。木の上に誰かがいると思ったんだ。そいつが浮浪者か狂人か莫迦か知らないが、木の上で肝臓を食ってるってね。おれの荷車が通る音にびっくりして、肝臓を落としたんだろう。食べかけのをな。そうにちがいない。ブリュースターをあとにしたときには、荷車に肝臓なんてなかったんだから。
「それで見あげてみたんだ。あんたも知ってるように、マリガンの森の木はどれもやたらと高いんだ。晴れた日でも、馬車道からじゃ、梢の見えない木があるくらいさ。ひどくねじくれた妙な恰好の木もあるしな。
「おかしな話だが、おれはマリガンの森の木を爺いだと思ってるんだ。ひょろ長い爺いだってな。ひょろ長くて、ねじまがって、たちの悪い爺いさ。悪さをしたがってるように思えるね。

あんなにびっしりはえて、ねじまがってるのは、どこかまともじゃないからだ。
「それでおれは見あげてみたんだよ。
「最初は高い木のほかには何も見えなくてさ、霧のせいで、どの木も白く輝いてるし、木の上には白い濃霧があって、空の星も見えなかった。そのとき長くて白いものが、一本の木の幹をすごい勢いでおりてきたんだ。
「あんまり速くおりてきたもんだから、はっきりとは見えなかった。やけに細かったから、たいして見るものはなかったがね。けど、腕に似てたよ。長くて生白い、がりがりにやせた腕みたいだった。しかしもちろん腕なんかじゃない。木のようにひょろ長い腕なんかあるものか。細い線みたいなものだったから、どうして腕に似てると思ったのかはわからんがね――ワイヤーや紐(ひも)みたいなものだったんだから。本当に見たかどうかもよくわからないんだ。気のせいだったのかもしれんよ。糸ぐらいの太さがあったかどうかもよくわからない。けど、手がついてたんだ。いや、そうだったのかな。思いだそうとすると、目がまわりそうになるんだ。とにかく、動きが速すぎて、よくは見えなかった。
「しかしそいつは何か落としたものを探してるみたいだった。ほんのしばらく、道の上で手が開いてるようだったんだが、木からはなれて荷車のほうにやってきたんだ。ばかでかい白い手が指を動かして歩いてるみたいだった。腕はずっとするほど長くて、上のほうにのびてて、霧どころか星にとどいてるんじゃないかと思うほどだった。

「おれは悲鳴をあげて、ホーテンスを手綱でしばいてやったんだが、そんなことをするまでもなかったよ。肝臓だか仔牛の脳みそだか知らないが、おれがつかんだものを道に投げすてるまえに、一目散に走りだしやがった。あんまり速く走るもんだから、荷車が倒れそうになるくらいだったんだが、おれは手綱をひこうともしなかったよ。あの長くて生白い手に喉を絞められるくらいなら、肋（あばら）を折って道ばたの溝に倒れこんでるほうがましだからな。

「もう少しで森を抜けられるところまで来て、一息つこうとしかけたとき、また頭のなかが冷たくなったんだ。ほかにどういえばいいんだろう。脳みそが頭のなかで氷みたように冷たくなったんだ。震えあがっちまったよ。

「おれの頭がぼんやりしてただなんて思わないでくれよ。まわりで起こってることは全部わかってたんだが、脳みそが冷たくなって、それが苦しくて悲鳴をあげたんだ。氷のかけらを二、三分くらい掌（てのひら）にのせたことはあるかい。やけどしたみたいな感じがするだろう。氷は炎よりも皮膚に悪いからな。おれの脳みそは何時間も氷の上にのっかってるみたいな感じだったよ。頭のなかに熔鉱炉でもあるようなもんだが、そいつは冷たい熔鉱炉なんだ。すごい冷気を吹きだすやつさ。

「痛みが長つづきしなくてよかった。十分くらいでおさまって、家に帰ったときには、そんなことがあったのに、どこも悪くないみたいだった。鏡を見るまで、そう思ってたよ。そうして鏡を見たら、頭に穴が開いてたんだ」

ヘンリー・ウェルズがかがみこんで、右のこめかみにふりかかる髪をはらいあげた。「これが傷さ」そういった。「どうにかできるかい」側頭部にある小さな丸い穴を指でたたいた。「銃で撃たれたみたいだろ」くわしく話した。「けど、血は出なかったし、ずっと奥まで見えるんだよ。頭のまんなかまでとどいているんじゃないかな。生きてるのが不思議なくらいだ」

ハワードが立ちあがり、燃えあがるような目でヘンリー・ウェルズを見つめた。

「どうしてそんな嘘をつくんだ」ハワードがどなりつけた。「どうしてそんな莫迦げた話をする。長い手だと。ふざけるにもほどがあるぞ。酔ってるんだろう。酔っぱらっていながら、わたしが死物狂いでやろうとしていることを、見事にやりとげてくれるとはな。おまえが森のなかで経験したという恐怖を、莫迦な読者に感じさせ、一瞬でも味わわせてやることができれば、わたしは永遠に名をのこせるんだ――ポオやホーソーンをしのぐ作家になれる。それをおまえ――このとんまな道化、嘘つきの田舎者は……」

わたしは我慢できずに立ちあがった。

「ヘンリーは嘘をついてるんじゃない」わたしはいった。「熱にうかされてるんだ。誰かに頭を撃たれたんだろう。この傷を見てみろ。どうして怪我人にそんなひどいことをいうんだ」

ハワードの怒りがおさまり、目の炎も消えた。「すまない」ハワードがいった。「きみにはわからないだろうが、わたしはあの窮極の恐怖をつかみたくてたまらないというのに、それをこの人がいともたやすくやってのけたんだ。ああいう話をするんだと最初にいってくれていたら、

メモをとっていたよ。しかしもちろんこの人は自分が芸術家だということをわかってはいない。この人がやってのけたのは、偶然の傑作で、二度とできないはずだ。とりみだしてしまって申しわけない——あやまります。医者を呼んできましょうか。ひどい傷ですよ」

隣人は首をふった。「医者はいらない」そういった。「もう診てもらったんだ。頭のなかに弾はなかった——銃弾で開いた穴じゃないんだ。医者が首をひねってたから、笑ってやったよ。医者はどうも虫が好かない。おれを嘘つきだと思う莫迦な連中はまっぴらだよ。長くて生白い手が木をすべりおりてくるのをはっきりと見たといってるのに、それを信じてくれない連中も、まっぴらごめんだね」

しかしハワードは、隣人のヘンリーが憤慨しているのを気にもせず、傷を調べていた。「丸くて鋭いものが頭にあたったんだろう」そういった。「妙なことに、肉は破れていない。ナイフや弾丸なら、肉がそげて、ぎざぎざになっているもんだが」

わたしはうなづき、傷をのぞきこもうとしたが、そのときヘンリーが甲高い悲鳴をあげて、頭をかかえこんだ。「痛い」喉をつまらせていった。「ぶりかえしやがった——ひどい冷たさだ」

ハワードがじっと見つめた。「そんな莫迦げた話を信じるものか」吐きすてるようにいった。

しかしヘンリー・ウェルズは頭をかかえこんだまま、苦悶のあまり部屋をのたうちまわった。「我慢できない」金切り声でいった。「脳みそが凍えちまう。普通の冷たさじゃない。そんなもんであるもんか。ああ、誰にもわかるもんか。かみつかれてるみたいだ。焼けるみたいだ。ひ

きさかれてるみたいだ。酸をぶっかけられたみたいだよ」
わたしはヘンリーの肩に手をかけて、おちつかせようとしたが、ヘンリーはわたしを押しやってドアに向かった。
「ここから出なきゃ」ヘンリーがわめきたてた。「こいつは広い場所をほしがってんだ。おれの頭にはおさまりきらない。こいつは夜を——広い夜を——ほしがってんだ。夜を味わいたがってんだ」ヘンリーがドアを押し開けて、霧のなかに消えていった。ハワードが上着の袖で額をぬぐい、ぐったり椅子に腰をおろした。
「狂ってる」ハワードがいった。「躁鬱病のひどい症例だな。まちがいないよ。さっきの話は意識してつくりだしたものじゃない。狂人の頭がつくりだした、いっときの悪夢なのさ」
「そうだな」わたしはいった。「しかし頭の穴のことはどうなんだ」
「ああ、あれか」ハワードはそういって、肩をすくめた。「たぶんもとからあったんだよ——生まれつきのものなんだろう」
「莫迦なことを」わたしはいった。「ヘンリーの頭にはあんな穴なんかなかったよ。わたしは撃たれたんだと思うね。何らかの処置をとるべきだ。治療をしなきゃならない。ドクター・スミスに電話してやろう」
「そんなことをしても骨折りぞんになるだけだ」ハワードがいった。「あの穴は撃たれたものじゃない。きみに忠告しておくが、あの男のことは明日まで忘れるんだね。あの男の狂気は一

時的なもので、そのうちおさまるかもしれない。そうなったら、よけいなことをしたといって、文句をいわれるぞ。狂人の世話をやくもんじゃない。明日もまだ狂っていて、またここへ来て騒ぎを起こすようなら、その筋に知らせればいいんだ。まえにも妙な振舞いをしたことはあるのか」

「ないよ」わたしはいった。「いつもまともだったんだ。まあ、きみの忠告にしたがって、待つことにしよう。しかし頭の穴のことがどうも腑におちないな」

「わたしにはあの男の話のほうが興味深いね」ハワードがいった。「忘れないうちに、書いておくよ。もちろん、あの男のように恐怖を真にせまったものにはできないだろうが、奇怪さや妖しい魅力のいくばくかはつかめるだろう」

ハワードが万年筆のキャップをとって、汚れ一つない紙を異様な言葉——慄然たる文章——で埋めはじめた。すぐにもその紙は不浄なものになるのだ。邪悪な光で輝き、セント・エルモの火が揺らめき、奇怪な影があたりを暗くするはずだった。ハワードの頭から、異様かつ凄絶な考えが絶えざる流れとなって、なめらかな白い紙に書きとめられていく。

わたしはぞくっと身を震わせ、ドアを閉めた。

数分間、部屋のなかには、万年筆が紙の上をすべる音以外、何の物音もしなかった。数分間、沈黙がつづいた——と、そのとき、金切り声が起こった。絶叫しているかのようだった。

閉ざしたドアごしに、むせびなく霧笛やマリガン湾の潮騒（しおさい）をついて聞こえた。霧につつまれた寂しい家で話しあっていたとき、わたしたちをおびえさせ意気消沈させた百千もの夜の音をしのいで、その悲鳴は聞こえてきた。あまりにもはっきり聞こえるものだから、家のすぐ外で起こっているのではないかと思ったほどだ。何度も──長くつづく金切り声の悲鳴を──耳にしてようやく、遠くから聞こえてくることがわかった。かなり遠く、おそらくマリガンの森のようにはなれたところから聞こえてくるようだった。

「魂が責めさいなまれている」ハワードがいった。「哀れな呪われた魂が、忍び寄る混沌にとらえられたんだ」

ハワードがおぼつかなげに立ちあがった。目が輝き、荒い息づかいをしていた。

わたしはハワードの肩をつかんで揺さぶった。「そんなふうに自分の小説のなかに入りこむものじゃないぞ」わたしは声をはりあげていった。「誰かが災難にあったのさ。何があったのかはわからないが、船が浅瀬に乗りあげでもしたんだろう。レインコートを着て、見てくるよ。わたしたちが助けてやれるかもしれない」

「わたしたちが助けてやれるかもしれない、か」ハワードがゆっくりといった。「犠牲者はひとりではすまないんだぞ。宇宙をよぎる長い旅で、やつらがどれほど飢えて渇いているかを考えてもみろ。やつらが犠牲者ひとりで満足するわけがないだろう」

そのとき突然、ハワードに変化が起こった。目の光が消え、声の震えもおさまった。そして

ぞくっと身を震わせた。

「すまない」ハワードがいった。「さっきここへ来た田舎者みたいに、わたしが狂ってると思っているんだろう。しかし小説を書くとき、わたしは主人公になりきってしまうんだ。このうえもなく凶まがしいことを書いていたら、あんな悲鳴が聞こえたものだから……まるであの悲鳴は……」

「わかるよ」わたしは口をはさんだ。「しかしそんなことを話してるようなひまはない。こまっている人がいるんだ」わたしはドアのほうを指差した。「窮地におちいっているんだよ。何かと闘っているんだ――何なのかは知らないがね。助けてやらなきゃ」

「もちろんだとも」ハワードがいって、わたしにつづいてキッチンに入った。

わたしは何もいわずにレインコートをつかんでハワードに手渡した。大きなゴム製の帽子も渡した。

「早く着てくれ」わたしはいった。「すぐに助けてやらなきゃならないんだから」

わたしはラックからレインコートをつかみとると、きつい袖に腕をつっこんだ。そしてすぐにわたしたちは霧のなかを歩いていた。

霧は生きているもののようだった。長い指がのびてきて、たえまなく顔を打つのだった。わたしたちのまわりで渦を巻き、わたしたちの頭の上から、大きな灰色がかった螺旋（らせん）を描いてのぼっていく。わたしたちのまえから退き、そして突然、押し寄せてきて、わたしたちをつつみ

こむ。
前方にぼんやりと、わずかばかりの農家の灯が見えた。背後では海が轟き、霧笛が絶えずむせびないていた。ハワードはレインコートの襟を耳が隠れるように立てていたが、長い鼻から霧が水になってしたたっていた。ハワードの目には決意があり、顎がひきしまっていた。

しばらくのあいだ、わたしたちは無言で歩きつづけ、マリガンの森に近づいたとき、ようやくハワードが口を開いた。
「必要なら」ハワードがいった。「森のなかに入ろう」
わたしはうなづいた。「入っていけないわけはないからな」そういった。「そんなに大きな森じゃないし」
「すぐに出られるんだろう」
「ああ、あっというまさ。おい、聞こえたか」
悲鳴がぞっとするほど大きくなっていた。
「苦しんでいるぞ」ハワードがいった。「ひどく苦しんでいる。あれは……あの狂った友人じゃないのか」
ハワードが口にした質問は、わたしが自問していたことだった。
「そうだろうな」わたしはいった。「しかし狂っているとしても、何とかしてやらなきゃ。近

所の人を何人か連れてくればよかったな」

「どうしてそうしなかったんだ」ハワードが大きな声でいった。「あの男をあつかうには、十人くらいでやらなければならないかもしれないんだぞ」ハワードは前方にそびえる巨木を見つめており、わたしはハワードがヘンリー・ウェルズ以外のことを考えていると思った。

「あれがマリガンの森だ」わたしはいった。そして心臓が喉からとびださないよう、大きく息を吸って気持ちをおちつかせた。「大きな森じゃない」莫迦のようにつけくわえた。

「ああ……」いいようもない苦痛にさいなまれている男の絶叫が、霧のなかから聞こえた。「脳みそが食われちまう。ああ」

その慄然たる恐怖の一瞬、わたしは森のなかの男と同じように狂ってしまったのかもしれない。わたしはハワードの腕をつかんだ。

「帰ろう」わたしは叫んだ。「すぐに帰ろう。こんなところへ来るだなんて、莫迦なことをしたもんだ。ここには狂気と苦痛と死があるだけなんだ」

「そうかもしれない」ハワードがいった。「しかし行ってやらなければ」

ハワードの顔は水滴のしたたる帽子の下で蒼白になっており、目は細い青の裂け目と化していた。ハワードの勇気をまざまざと示されて、ばつの悪い思いがした。

「そうだな」わたしは陰鬱にいった。「行こう」

わたしたちはゆっくりと木木のなかを進んだ。まわりには巨木がそびえたち、濃霧が木木の

姿をゆがめたり溶けこませたりするので、まるで木木がわたしたちと一緒に歩いているように見えた。ねじくれた枝から霧がリボンのようにたれさがっていた。リボンといったが、霧の蛇というほうがふさわしい——毒のある舌と睨めつける邪悪な目を備え、身をくねらせる蛇だ。渦を巻く霧のうねりを通して、鱗じみた樹皮に覆われた木木の瘤だらけの幹が見えたが、幹という幹が邪悪な老人のねじれた体を思わせた。木木の悪意からわたしたちを守ってくれるものといえば、わたしのもつ懐中電灯の細い光だけだった。

巨大な土手のような霧のなかを進んでいくにつれ、刻一刻と悲鳴が大きくなってきた。狂乱した悲鳴が高まって、泣き叫ぶ甲高い声になりかわるなか、言葉がきれぎれに聞きとれるようになった。「冷たい、冷たい、冷たい……おれの脳みそが食われてるんだ。冷たい。ああ……」

ハワードがわたしの腕をつかんだ。「さあ、見つけだそう」そういった。「いまさらひきかえすことはできないぞ」

ようやく見つけだしたとき、ヘンリー・ウェルズは横たわっていた。両手を頭にあて、体を二つ折りにして、膝を胸にふれるくらいひきよせていた。黙りこくっていた。ハワードとわたしはかがみこんで揺さぶったが、無言のままだった。

「死んでいるのか」わたしは喉をつまらせながらヒステリックにいった。背を向けて逃げだしたい心境だった。まわりには木木がおびやかすようにそびえていた。

「どうかな」ハワードがいった。「わからないよ。死んでいることを願うがね」

ハワードが膝をついて、哀れな男のシャツのなかに手をすべりこませた。一瞬、ハワードの顔が仮面のようになった。そしてすぐに立ちあがり、首をふった。

「生きているよ」ハワードがいった。「できるだけ早く乾いたものに着替えさせなきゃならない」

わたしはハワードに手をかした。二人してヘンリー・ウェルズをかかえあげ、木木のなかを歩いていった。よろめいて倒れこみそうになったことが二度あり、蔓にひっかけてレインコートやズボンが破れた。棘のある蔓は小さな悪意ある手で、巨木の邪悪な指示をうけ、わたしたちをつかんで引き裂くのだった。導きの星一つなく、しだいに暗くなっていく懐中電灯以外に光もないまま、わたしたちはマリガンの森からどうにか抜けだした。

森をはなれたとき、低い唸りが起こりはじめた。最初は小さくてほとんど聞こえず、地中深くで巨大なエンジンが唸っているようだった。しかしヘンリー・ウェルズをかかえあげてよろめきながら進んでいるうち、低い唸りがしだいに高まり、無視しきれないまでになった。

「何かな」ハワードがそうつぶやいた。霧を通して見ると、ハワードの顔は青ざめていた。

「何だろう」わたしは小さな声でいった。「ぞっとするな。いままで聞いたことがないよ。もう少し速く歩けないか」

それまでは馴染のある恐怖を克服していたが、背後で起こる低い唸りは、いまだかつて耳に

したためしのないものだった。わたしはたまらない恐怖に襲われて、金切り声でいった。「速く歩いてくれ、ハワード。頼むから、早く行こう」
わたしがそういったとき、ヘンリー・ウェルズが身もだえして、ひびわれた唇から狂乱した言葉がほとばしりでた。「森のなかを歩きながら見あげてたんだ。梢は見えなかった。そうして急に下を見たら、あいつが肩におりてきた。脚がいっぱいあった――長くて蠢く脚だ。おれの頭のなかに入りこみやがった。森から抜けだしたかったのに、できなかった。森のなかでひとりきりでいたら、あいつが背中にくっついて、頭のなかに入りこみやがったんだ。逃げようとしたら、木が枝をのばしてきて、おれをつまづかせやがった。あいつは穴を開けたから入りこめたんだ。あいつはおれの脳みそをほしがってやがる。今日、穴を開けて、頭のなかに入りこんで、ずっと吸いとってやがるんだ。氷みたいに冷たくて、でかい蠅みたいな音をたてやがる。けど、蠅なんかじゃない。手でもない。手だといったのはまちがいだ。目に見えるものじゃないからな。頭に穴を開けて入りこまなかったら、何もわからなかったし、感じもしなかっただろうよ。ほとんど見えそうで、感じられそうな気がするときには、あいつが入りこもうとしてやがるんだ」
「歩けるか、ヘンリー。歩けるか」
ハワードがヘンリーの足をおろし、荒い息づかいをしながら、レインコートを脱ぎはじめた。
「どうにか歩けそうだ」ヘンリー・ウェルズが涙声でいった。「けど、歩いたってしかたがな

い。おれはもうあいつにつかまえられてるんだからな。おれをここにのこして、あんたたちは行ってくれ」
「逃げだすんだ」わたしは叫んだ。
「運にまかせてやるしかない」ハワードが大声でいった。「ついてくるんだ。つかまったら、脳を焼きつくされてしまうぞ。走るんだ。さあ」
ハワードが霧のなかにとびこんでいった。ヘンリーが身をふりほどき、しわがれた悲鳴をあげながらハワードのあとにつづいた。わたしは死よりも怖ろしい恐怖を味わった。唸りがすさまじい大きさになって耳にとどろいていたが、一瞬わたしは身動き一つできなかった。霧の壁を見つめながら、繰り言をつぶやくばかりだった。
「フランクがやられちまうぞ」ヘンリーの声がした。
「ひきかえそう」今度はハワードが叫んだ。「死ぬか、もっとひどい目にあうかもしれんが、フランクをのこしてはいけない」
「行ってくれ」わたしは叫んだ。「つかまったりするものか。きみたちは逃げてくれ」
二人を犠牲にさせるわけにはいかず、わたしはやみくもに前進した。すぐにハワードに出会い、ハワードの腕をつかんだ。
「あれは何なんだ」わたしは叫んだ。「どんな怖ろしいものなんだ」
いまや唸りがまわりじゅうから聞こえるようになっていたが、それ以上大きくはならなかっ

た。
「すぐに逃げださないと、つかまってしまうぞ」ハワードが半狂乱になって叫んだ。「やつらはすべての障壁を破った。あの唸りが警告なんだ。わたしたちは敏感だから感じとった——警告されていながら、このままぐずぐずして、唸りがこれ以上大きくなったらおしまいだ。マリガンの森の近くにいるとき、やつらの力は強くて、はっきり感じられるんだ。やつらはいま試している——やりかたを探っているんだ。いずれやりかたがわかったら、広がりだすぞ。農場に帰りつきさえすれば……」
「農場に帰るぞ」わたしは自分を鼓舞するためにそう叫び、霧のなかをもがくようにして進んだ。
「帰れなければ、神にすがるしかない」ハワードがうめくようにいった。
ハワードはレインコートを脱ぎすてていたので、濡れたシャツがやせた体にはりついていた。大股で闇のなかをひたすら歩いていた。ずっと先のほうから、ヘンリー・ウェルズの狂乱した悲鳴が聞こえた。絶えまなく霧笛がむせびなき、まわりでは、霧が渦を巻きながらうねっていた。
そして唸りがおさまることはなかった。闇のなかで農場へ通じる道を見つけることなど不可能に思えた。しかしどうにか農場に帰りつき、喜びの声をあげながら部屋にころがりこんだ。
「ドアを閉めてくれ」ハワードが叫んだ。

わたしはドアを閉ざした。
「ここなら安全だろう」ハワードがいった。「やつらはまだ農場まで来ていないからな」
「ヘンリーはどうなったんだろう」わたしはあえぎながらいったが、そのとき濡れた足跡がキッチンへとつづいているのを目にした。
ハワードも目にしていた。ハワードの目に安堵がうかんだ。
「無事でよかった」ハワードがつぶやいた。「心配していたんだから」
するうち、ハワードの顔色が曇った。キッチンは暗くて物音一つしなかった。
ハワードが無言で部屋を横切り、その向こうの闇のなかに入った。わたしは椅子に坐りこみ、目をぬぐい、ぐっしょり濡れてたれさがった髪をかきあげた。しばらくじっと坐りこみ、大きく胸をはずませていると、ドアがきしんだので、どきっとした。しかしハワードの言葉を思いだした。「ここなら安全だろう。やつらはまだ農場まで来ていないからな」ハワードはそういったのだ。
どういうわけか、わたしはハワードをすっかり信頼していた。ハワードは新しい未知の恐怖にさらされたことを理解して、何らかのやりかたでもって、その恐怖の限界も把握しているのだった。
しかし正直いって、キッチンから悲鳴が聞こえたときには、友人に対する信頼がいささか揺らいでしまった。人間の喉から発せられるとは思えないような唸りと、どなりつけているハワー

ドの声が聞こえた。「はなせといっただろう。完全に狂ってるのか。おまえを助けてやったというのに。やめろ。わたしの足から手をはなすんだ。やめてくれ」

ハワードがよろめきながら部屋に入ってくると、わたしはとびあがって抱きかかえた。ハワードは頭から足まで血まみれで、顔が蒼白になっていた。

「完全に狂ってる」ハワードがうめきながらいった。「四つん這いになって、犬みたいに走りまわってるんだ。わたしにとびかかってきて、もう少しで殺されるところだった。はらいのけたが、ひどくかみつかれてしまった。顔を殴ってやったよ――気を失って倒れこんでる。殺してしまったのかもしれないな。あれは人間じゃなく獣だ――正当防衛だよ」

ハワードをソファーに横たわらせ、そばに膝をつくと、ハワードがしかりつけた。

「わたしのことはいい」ハワードがいった。「すぐにロープをとってきて、あいつを縛りあげるんだ。意識をとりもどしたら、襲いかかってくるぞ」

そのあとは悪夢さながらだった。ぼんやりとおぼえているのは、ロープをもってキッチンに入り、哀れなヘンリーを椅子に縛りつけたあと、ハワードを風呂に入れて傷の手当てをしてやり、暖炉に火をつけたことだ。医者に電話をかけたこともおぼえている。しかし記憶が混乱しているし、長身のおちつきはらった医者があらわれるまでのことは、何一つはっきりとはおぼえていない。医者の存在とやさしい同情の眼差しが、鎮静剤のように心を安らげてくれた。

医者がハワードを診察して、うなづくと、傷はたいしたものではないといった。ヘンリー・ウェルズを診察したあとは、うなづきはしなかった。ヘンリーが重病であることをゆっくりと説明した。「脳炎です」医者がいった。「すぐに手術をする必要がありますね。率直にいって、まず助からないでしょう」
「頭の傷のことなんですが」わたしはいった。「銃で撃たれたんでしょうか」
医者が眉をひそめた。「それがよくわからないんですよ」医者がいった。「もちろん銃で撃たれた傷でしょうが、それなら一部がふさがっているはずですからね。脳にまで達しています。何もご存じないとおっしゃいましたね。わたしはその言葉を信じますが、しかるべき筋に報告すべきではありませんか。殺人未遂の罪をおかした者がいるのですから。もっとも」医者が息をついだ。「この傷が自分でつけたものでなければの話ですがね。こんな傷をおって、何時間も歩きまわっていただなんて、とても信じられませんよ。傷には包帯が巻かれていたんでしょう。血がこびりついていませんから」
医者が部屋をゆっくりと歩きまわった。「ここで手術しなければなりません——それもすぐに。成功する可能性はほとんどありませんがね。幸い手術道具をもってきています。このテーブルの上をかたづけましょう——手術のあいだ、ランプをもっていてもらえませんか」
わたしはうなづいた。「わかりました」
「それではさっそくとりかかりましょう」

医者があわただしく準備をしているあいだ、わたしは警察に知らせるべきかどうか思い迷った。

「この傷は自分でつけたものとしか考えられませんね」わたしはいった。「ヘンリーはこのところ振舞いが妙だったんです。さしつかえなければ……」

「何ですかな」

「手術がおわるまで、この件については警察に知らせないでおきましょう。ヘンリーが助かった場合、警察に尋問されるようなことになれば気の毒ですよ」

医者がうなづいた。「わかりました」そういった。「まず手術をして、そのあと考えましょう」

ハワードがソファーでふくみ笑いをした。「警察ね」皮肉をこめていった。「マリガンの森にいるやつらを相手に、警察が何の役に立つのかな」

ハワードの軽口には、心騒がされる冷笑と不吉なひびきがあった。わたしたちが霧のなかで知った恐怖は、冷静な医者のドクター・スミスをまえにして、莫迦ばかしく思えたし、わたしは思いだしたくもなかった。

医者が顔を向けて、わたしの耳もとに囁いた。「あなたのお友達は少し熱がありますから、熱にうかされているんでしょう。水をグラスに入れてもってきてくだされば、鎮静剤をさしあげますが」

わたしはすぐにグラスをとりにいき、わたしたちはまもなくハワードを熟睡させた。

「では」医者がランプを手渡しながらいった。「これをしっかりもって、わたしのいうとおりに照らしてください」

意識を失ったヘンリー・ウェルズの白い体がテーブルに横たわった。わたしは目のまえに横たわるもののことを考えるにつけ、身震いがした。

医者が容赦なく切開しているあいだ、わたしは哀れな友人の生ける脳を見つめることになるのだ。医者が切り開いて調べているあいだ、わたしはじっと見まもって、いいようもないものを目撃することになるのかもしれない。

医者が熟練した速やかな手さばきで、患者に麻酔をかけた。わたしは罪を犯しているような怖ろしい感じに圧倒された。ヘンリー・ウェルズが手術のことを知らされていたら、断固としてうけいれず、死んだほうがましだといったことだろう。人間の脳を切開するのは怖ろしいことなのだ。しかし医者の行為は何ら非難されるべきものではないし、医者としての職業倫理が手術を要求したのだった。

「さあ、はじめましょうか」ドクター・スミスがいった。「ランプを少しさげてください。注意して」

わたしは医者の有能な手にあるメスが速やかに動くのを見た。つかのま見つめ、そして顔をそむけた。つかのま目にしたものに胸をむかつかせ、気を失いかけたのだった。幻覚だったのかもしれないが、半狂乱になって壁を見つめているとき、医者も失神しそうになっているよう

な気がした。医者は無言だったが、怖ろしくも名状しがたいものを見つけだしたにちがいない。「ランプをさげて」医者がいった。その声はかすれていて、喉の奥深くから発せられたもののようだった。

わたしは医者の声に震えあがり、ひどい罪悪感をおぼえた。顔をそむけたまま、ランプをほんの少しだけおろした。医者に文句をいわれ、ののしられるだろうと思っていたが、医者はテーブルに横たわるものと同様に黙りこくっていた。しかし頭蓋骨が切り開かれる音が聞こえるので、医者の手が休まず動いていることがわかった。有能な手がヘンリー・ウェルズの脳を速やかにあらわにしていく音がはっきり聞こえていた。

わたしは急に自分の手が震えていることに気づいた。ランプを置きたかった。これ以上もっていられそうになかった。

「まだですか」わたしはやりきれずに、あえぎながらいった。

「ランプをしっかりもつんですよ」医者が声をはりあげて命じた。「またランプを動かしたら……いや、縫合(ほうごう)しないでおきましょう。わたしはこの部屋から出ていって、脳が腐るにまかせますよ。縛り首にされたっていい。わたしは悪魔の医者じゃないんですから」

どうすればいいのかもわからなかった。ほとんどランプをもっていられず、医者の言葉に震えあがっていた。たまらなくなって、医者に懇願した。「できることはすべてやってください」わたしはヒステリックにいった。「ヘンリーは助かるかもしれないんですよ。やさしい善良な

男だったんです……以前は」
　しばらく沈黙がつづき、わたしは医者が耳をかさないのではないかと思った。メスとスポンジを投げだして、部屋から霧のなかへ駆けだしていくのではないかと思った。また切開する音がして、医者が手術をつづけるつもりになったことがわかった。

　真夜中をすぎてから、ようやく医者がランプを置いてもいいといった。わたしは安堵の溜息をついてふりかえり、二度と忘れることのできない顔を見た。わずか四十五分のうちに、医者は十歳くらい老けこんでいた。目の下には紫色のくぼみができ、唇がゆがんでひきつっていた。広い額には以前になかった皺がきざまれ、口を開いたときには、声がしゃがれた弱よわしいものになっていた。
「だめでしたよ」医者がいった。「一時間ともたないでしょう。脳にはふれませんでした。何もできなかったのです。頭のなかを見て――じっくり見たあと――縫合しただけです」
「何をごらんになったんですか」わたしは声をひそめていった。
　いいようもない恐怖が医者の目にうかんだ。「わたしは……わたしが見たのは……」声がとぎれ、体が震えた。「わたしが見たのは……とんでもないことをしてしまった。わたしが見たものは、人間が見るべきものじゃなかった。わたしは獣の徴をおびてしまった。汚されてしまった。わたしは汚れている。こんな家にはいられない。すぐにひきあげなければ」

医者が泣きくずれ、顔を両手で覆った。肩を震わせて泣きつづけた。
「穢らわしい」医者がうめいた。「人間が忘れはてていた悍しい太古の秘密だ——何という怖ろしさだ。姿のない悪、形のない悪だ」
医者が急に顔をあげ、ひどく興奮した様子であたりを見まわした。
「やつらが来て、ヘンリーを要求するぞ」医者が金切り声でいった。「やつらはヘンリーに徴をつけているから、ヘンリーを求めてやってくる。あなたはここにいてはいけない。この家は破壊されるに決まっているんだから」
医者が帽子と鞄をつかんでドアに向かうのを、わたしはなすすべもなく見まもった。医者が血の気のうせた震える手で掛け金をはずすと、渦を巻く霧を背景に、医者のやせた体が黒ぐろとしたものになった。
「警告したことを忘れないように」医者が叫んだ。そして霧のなかに姿を消した。
ハワードが身を起こして、目をこすっていた。
「ひどいやりかただな」ハワードがつぶやいた。「わざと薬を飲ませるとは。水だとばかり思っていたのに……」
「どんな気分だ」わたしはハワードの肩をつかみ、激しく揺さぶりながらたずねた。「歩けると思うか」
「薬をもっておきながら、歩けるかと聞くのか。フランク、きみのでたらめなやりかたは芸術

家はだしだな。いったいどうなっているんだ」
　わたしはテーブルに横たわる沈黙の男を指差した。「マリガンの森のほうが安全だ」わたしはいった。「ヘンリーはあいつらのものなんだから」
　ハワードが立ちあがり、わたしの腕を揺さぶった。
「何だと」ハワードが叫んだ。「どうしてわかるんだ」
「医者がヘンリーの脳を見た」わたしは説明した。「とても口にはできないようなものも見たらしい。しかしやつらがヘンリーを求めてやってくるといった。ぼくは医者の言葉を信じる」
「すぐにここをはなれよう」ハワードが叫んだ。「医者のいうとおりだ。わたしたちはこのうえもない危険にさらされている。マリガンの森か——いや、森にもどる必要はないぞ。きみのボートがあるじゃないか」
「そうだ、ボートがある」かすかな希望の光が生まれ、わたしは叫びかえした。
「霧があるのがやっかいだがな」ハワードが陰鬱にいった。「しかしこの恐怖よりは海で死ぬほうがましだ」
　家からドックまでそう遠くはなく、一分とかからないうちに、ハワードはボートの舳先に腰をおろし、わたしはエンジンをかけようとしていた。霧笛がなおもむせびないていたが、あたりには灯一つ見えなかった。二フィート先が見えないありさまだったのだ。亡霊のような白い

霧が闇のなかにぼんやり見えたが、その向こうには、光もなく恐怖がみなぎる、果てしない闇が広がっていた。
　ハワードがしゃべっていた。「向こうには死があるような気がしてならないな」
「ここはもっと危険だよ」わたしはエンジンをかけながらいった。「岩は避けられるはずだ。ほとんど風がないし、港のことはよくわかっているから」
「それにもちろん霧笛が導いてくれる」ハワードがいった。「外洋に出たほうがいいだろう」
　わたしはうなづいた。
「このボートでは嵐になったらおしまいだ」わたしはいった。「しかし港にいるつもりはない。海に出たら、たぶんどこかの船にひろってもらえるさ。やつらの手の届くところにいるのは莫迦もいいところだからな」
「それでどこまで逃げればいいんだ」ハワードがうめきながらいった。「宇宙をよぎってきたやつらにとって、地球上の距離がどうだというんだ。やつらは地球を荒廃させてしまうぞ。人類全体を滅ぼしてしまうんだぞ」
「そんなことはあとで話そう」ようやくエンジンがかかり、わたしは叫んだ。「いまはできるだけやつらから遠ざかろう。やつらはまだよくわかっていないはずだ。やつらに限界があるうちは、逃げられるかもしれない」
　わたしたちはゆっくりと海峡に入っていった。ボートにあたる水の音が、不思議と気持ちを

おちつかせてくれた。わたしが勧めて、ハワードが舵をとり、ゆっくりとボートを進めていた。「まっすぐ進んでくれよ」わたしは叫んだ。「ナロウズ海峡に入るまで、危険はないんだから」
数分間、わたしがエンジンにかがみこんでいるかたわら、ハワードが無言で舵をとっていた。やがて突然、わたしにふりかえって、興奮した仕草をした。
「霧が晴れてきたようだぞ」ハワードがいった。
わたしは前方の闇を見すかした。確かに蒸し暑さがやわらいで、絶えまなくのぼっていた霧の渦が薄れていた。「そのままボートを進めてくれ」わたしは叫んだ。「ついてるな。霧が晴れたら、ナロウズ海峡が見えるぞ。マリガン灯台を探してくれ」
灯台の光を目にしたときの喜びは、とても言葉ではあらわせない。海上にのびる明るい黄色の光が、ナロウズ海峡の両側にそびえる岩をくっきりと照らしていた。
「わたしが舵をとろう」わたしはそういって、すぐにまえへ行った。「ここを進むのはやっかいなんだが、無事に抜けてみせるよ」
興奮して気分をうきたたせていたことで、わたしたちは背後にのこしてきた恐怖をほとんど忘れはてていた。わたしは自信たっぷりな笑みをうかべて舵をとり、暗い海でボートを進ませた。たちまち岩がせまってきて、両側にそびえたつまでになった。
「もう少しだ」わたしは叫んだ。
しかしハワードの返事はなかった。喉をつまらせたあえぎが聞こえた。

「どうしたんだ」わたしはそうたずねながらふりかえり、ハワードがおびえてうずくまっているのを見た。ハワードはわたしに背を向けていたが、どこを見つめているかは直観的にわかった。

わたしたちがあとにした暗い岸辺が、燃える夕日のように輝いていた。マリガンの森が燃えているのだった。高い巨木の上に大きな炎が燃えあがり、分厚いカーテンのような黒煙がゆっくりと東にうねり、港にわずかにのこっていた光をかき消した。

しかしわたしが恐怖の悲鳴をあげたのは、炎のせいではなかった。木木の上にそびえるもの、ゆっくりと動いて空をよぎってくる、巨大な無定形のもののせいだった。

わたしはやっきになって、何も見えないのだと自分にいい聞かせようとした。炎の投げかける影にすぎないのだ、と。わたしは笑いさえしたし、安心させるようにハワードの肩をたたいたことをおぼえている。

「森が完全に燃えあがってしまうぞ」わたしは叫んだ。「やつらが逃げられるわけもない。やつらもこれでおしまいだ」

しかしハワードが恐怖にかられて叫んだとき、木木の上にそびえるぼんやりした無定形のものが、影ではないことがわかった。

「はっきり見えるようになったら、わたしたちはおしまいだぞ」ハワードが金切り声でいった。

「あれが形をとらないままでいることを祈ろう」

「何も見えるものか」わたしはうめくようにいった。「木の上には闇があるだけだ」

「あれには姿がない」ハワードが早口でいった。「見てはいけないんだ——見るなよ。わたしたちの脳があれに姿をあたえるんだ。あいつは人間の脳に入りこんで姿をまとう。脳に入られたらおしまいだ」

「森が燃えているんだ」わたしは叫んだ。「木の上には何もない。木の上には闇があるだけだ」

しかしわたしが嫌悪の念をつのらせ、信じられない思いで見つめているあいだも、しだいにはっきりしたものになっていった。燃えあがる木木の上に悍しくもとどまっていた。そしてわたしはそいつに翼があることに気づいた。

「蝙蝠みたいだ」わたしはうめいた。「黄色い翼をした大きな蝙蝠が、炎の上を舞っているんだよ」

「ああ、蝙蝠さ」ハワードがすすり泣きながらいった。「黒くて大きくてほとんど形がないが、それでも蝙蝠だ」

「ちがうぞ」わたしは金切り声でいった。「蝙蝠じゃない。何も見えるものか。ぼんやりした形のものが森の上で動いているが、あれは蝙蝠なんかじゃない」

ハワードが顔を両手で覆い、恐怖にうちのめされて泣いた。「脳が冷たくなるんだ」うめきながらいった。「やつらに入りこまれて、脳を吸いとられるんだ」

「そんなことをさせるものか」わたしは叫んだ。「そのまえに死んでやる。海にとびこんでな。おぼれ死ぬほうがましだ」
　わたしたちはこのうえもなく悍しい恐怖の餌食となって、闇のなかで身を震わせた。マリガンの森の上空にいるものがしだいにはっきりしてきて、わたしたちが助かるとは思えなかった。するうち突然、助かるかもしれない方法が一つあることを思いだした。
「世界よりも古いものなんだ」わたしは思った。「どんな宗教よりも古い。文明の夜明けのまえ、人間は膝をついて崇拝していた。あらゆる神話にあらわれている。原初のシンボルだ。おそらく遙かな過去、何千万年もまえに、つかわれていたものなんだ——侵略者を追いはらうために。それをつかってみよう。至高の神秘でもって、あいつと闘ってやる」
　突如としてわたしは妙なほど気持ちがおちついた。すぐにも行動しなければならず、脅威にさらされているのがわたしたちの生命だけではないとわかっていたが、震えたりはしなかった。わたしはおちつきはらってエンジンの下に手を入れ、綿のぼろきれをとりだした。
「ハワード」わたしはいった。「マッチをすってくれ。こうするしかないんだ。さあ、早く火をつけてくれ」
　永遠とも思えるあいだ、ハワードが問いかけるように見つめていた。そして夜の闇にハワードの笑い声がひびきわたった。
「マッチか」ハワードが甲高い声でいった。「マッチでわたしたちのちっぽけな脳を暖めるわ

けか。ああ、確かにマッチが必要だ」
「わたしを信じてくれ」わたしはうったえるようにいった。「頼むよ――こうするしかないんだ。早くマッチをすってくれ」
「どういうことなんだ」ハワードが冷静になったが、声はヒステリックに震えていた。
「わたしたちが助かるかもしれない方法を思いついたんだ」わたしはいった。「頼むから、このぼろきれに火をつけてくれ」
　ハワードがゆっくりうなづいた。わたしは何もいわなかったが、ハワードはわたしがしようとしていることを察したようだった。ハワードの洞察力が不気味に思えることがよくある。ハワードがぎごちなくマッチをとりだし、火をつけた。
「勇気を出せよ」ハワードがいった。「こわがっていないことを見せつけてやれ。大胆に印をつくってやれ」
　ぼろきれに火がついたとき、木木の上空にいるものが鮮明に見えた。
「あそこには何もないんだ」わたしは叫んだ。「何も見えないんだ。わたしたちは守られている。負けるものか」
　わたしは火のついたぼろきれをかかげ、素早く左の肩から右の肩へとまっすぐ動かした。つぎに額のまえにかかげ、膝まで一気におろした。
　すぐにハワードがぼろきれをつかみとり、同じ印をつくった。腕をのばしてぼろきれを動か

し、十字の印を二つ、自分の体と闇に対してつくったのだった。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな」ハワードがつぶやいた。

一瞬、わたしは目をつぶったが、それでも木木の上にあるものが見えた。やがてゆっくりと、そいつは蝙蝠に似たところがなくなって、形がぼんやりしはじめ、巨大な混沌としたものになった――目を開けると、消えうせていた。燃えあがる森と巨木の投げかける影が見えるだけだった。

恐怖は去ったが、わたしは動かなかった。石像のように立ちつくし、黒い海面を見つめた。やがて何かがわたしの頭のなかで爆発したようだった。目がくらみ、手摺(てすり)のほうによろめいた。海に落ちそうになったところを、ハワードが肩をつかんでくれた。「助かったぞ」ハワードが叫んだ。「勝ったんだ」

「よかった」わたしはいった。しかし疲れはてていることで、よろこぶこともできなかった。膝の力がぬけてしまい、わたしはまえに倒れこんだ。地上の光景や音が、慈悲深い闇にのみこまれた。

Ⅱ

わたしが部屋に入ったとき、ハワードは執筆をしていた。
「小説のはかどり具合はどうだね」わたしはたずねた。
ハワードはしばらくわたしの質問を無視した。やがてゆっくりとふりかえり、わたしの顔を見た。口が開いたが、声は出なかった。わたしはハワードがひどく老けこんでいるのに気づいた。めっきりやせて（体重は百十ポンドもないだろう）、目のまわりにびっしりと小皺があった。
「うまくいかないね」ハワードがようやくいった。「満足できないんだ。まだつかみきれないものがある。マリガンの森の恐怖についていては、すべてをつかみきっていないんだ」
わたしは腰をおろして、煙草に火をつけた。
「あの恐怖を説明してくれないか」わたしはいった。「きみが話してくれるのを三週間も待っているんだぞ。ぼくに隠していることがあるはずだ。森のなかでヘンリー・ウェルズの頭に落ちてきた、濡れたスポンジ状のものは何だったんだ。霧のなかを逃げたとき、どうして唸りが聞こえたんだ。森の上に見えたものは何を意味するんだ。いったいまたどうして、わたしたちが怖れていたように恐怖が広がることはなかったんだ。何があいつを食いとめたんだ。ハワード、ヘンリーの脳には何が起こったと思うんだ。ヘンリーの体は家と一緒に燃えたのか、それともやつらに奪われたのか。マリガンの森で見つかったもう一つの死体——頭に穴の開いた黒こげのやせた死体——は、どう説明づけられるんだ」（火事の二日後に、マリガンの森で人骨

が発見された。焼けた皮膚の断片がいくつか骨にこびりつき、頭蓋冠がなくなっていた)

かなりしてから、ハワードがまたしゃべった。顔をうつむけ、ノートをもてあそびながら、全身をひどく震わせていた。やがて顔をあげた。目がぎらつき、唇には血の気がなかった。

「ああ」ハワードがいった。「あの恐怖について話すことにしようか。先週は話したくなかったんだ。口にはできないほど悍しいことのように思えたからな。しかしあれを小説にまとめあげ、慄然たる名状しがたいものを読者に感じさせたり思いうかべさせたりしないかぎり、わたしの心は二度と安らぐことはないだろう。そうはいっても、わたしが理解していることに一抹の疑問があっても、小説を書くことはできない。話すことが役に立つかもしれないな。

「ヘンリー・ウェルズの頭に落ちてきた、濡れたものは何だったのかと、きみはたずねたな。人間の脳だと思うよ——人間の頭に開けられた穴からひきだされた、人間の脳の本質だ。脳は気づかれないくらいわずかずつひきだされて、やつらが復元したんだろう。何らかの目的で、やつらは人間の脳をつかうんだ——脳から学びとるためじゃないかな。あるいはもてあそんだだけなのかもしれない。マリガンの森で発見された、頭蓋冠がとられていた人骨は、森のなかで道に迷った哀れな最初の犠牲者さ。わたしは木木が手助けしたんじゃないかと思っている。やつらが木木に不思議な生命をあたえたんだ。ともかく、哀れな犠牲者は脳を失った。やつらが脳を奪い、もてあそんで、たまたま落としたのさ。それがヘンリー・ウェルズの頭に落ちた。ウェルズは、長くて細い生白い腕が落としたものを探していたようだったといっていたな。も

ちろんウェルズはそんな腕を実際に見たわけじゃなく、形も色もない恐怖が既にウェルズの脳に入りこんで、人間の思考をまとっていたんだ。

「わたしたちが耳にした唸りと、燃えあがる森の上に見たと思うものについては――あれこそが、みずからをわたしたちに感じさせ、障壁を破り、人間の脳に入りこんで人間の思考をまとおうとしていた、あの怖ろしい生物だよ。わたしたちはもう少しでつかまるところだった。ウェルズが生白い腕を見たように、わたしたちもはっきりと目にしていたら、やられていただろう」

ハワードが窓辺に歩み寄った。カーテンをひいて、船のひしめく港や、月を背景にそびえる摩天楼をながめた。マンハッタン南部のスカイラインを見つめていた。ハワードの眼下にはブルックリン・ハイツの崖が黒ぐろとした姿を見せていた。

「どうしてやつらは征服しなかったんだ」ハワードが叫んだ。「ニューヨークを地上から消しさることもできたのに――信じられない富と権力も、やつらのまえに膝を屈していただろうに。巨大なビルが海に倒壊して、何百万もの脳がやつらの欲望――この世のものならぬ怖るべき欲望――をみたしていただろうに」

わたしはぞくっと身を震わせた。「しかしどうしてあの恐怖は広がらなかったんだ」

ハワードが肩をすくめた。「わからないね。もしかしたら、人間の脳がとるにたらない莫迦げたものだということを知ったのかもしれない。人間はやつらにとっておもしろいものではなくなったんだろう。人間に飽きたのかもしれない。しかし十字の印がやつらを滅ぼしたとも考

えられる――やつらを宇宙に追い返したのかもしれない。やつらはまえにも来たことがあるんじゃないかな。何百万年もまえにやってきて、あの印に追いはらわれたことがあるんだろう。わたしたちがあの印をつかうことを忘れていないのを知って、震えあがって逃げだしたのかもしれない。確かにこの三週間、やつらはあらわれていないからな。もういなくなったんだよ」
「すると、わたしが世界を救ったわけだ」わたしは得意満面になって叫んだ。
「たぶんな」ハワードの目は不満そうだった。「そんなふうにいいたくなる気持ちはわかるがね」ハワードがいった。「満悦するようなことじゃないぞ」
「それでヘンリー・ウェルズのことはどうなんだ」わたしはたずねた。
「遺体は見つかっていない。やつらがとりにきたんだろう」
「きみは本当に……この邪悪きわまりないものを、小説にしたてるつもりなのか。やめてくれよ。何もかもが前代未聞のことだから、わたしはいまだに信じられないんだ。信じろといわれても無理だよ。夢だったんじゃないのか。わたしたちは本当にパートリッジヴィルにいたのか。古びた家に腰をおろして、霧が渦を巻いているなかで、いいようもないものについて話しあっていたのか。あの不浄な森を歩いたのか。木は本当に生きていて、ヘンリー・ウェルズは狼のように四つん這いになって走りまわったのか」
　ハワードが無言で腰をおろし、袖をまくりあげた。そして細い腕をさしだした。
「この傷跡が無視できるのか」ハワードがいった。「わたしを襲った獣――ヘンリー・ウェル

ズという男だった獣――につけられた傷の跡だ。これを夢だというのか。夢だということを納得させてくれるなら、いますぐこの腕を肘からすっぱり切りおとしてやるよ」
　わたしは窓辺に行って、マンハッタンの素晴しい夜景を長いあいだ見つめつづけた。「目のまえに堅固なものがある。これを破壊できるものがいるのを想像するなんて、莫迦げている。わたしたちがパートリッジヴィルで想像したように、やつらが怖ろしいものだと思うのは、莫迦もいいところだ。ハワードを説得して、小説を書かないようにさせなきゃならない。二人して忘れなければならないんだから」
　わたしはハワードの坐っているところへもどり、肩に手をかけた。
「あれを小説にするのはあきらめてくれないか」わたしはやさしくいい聞かせようとした。
「何だと」ハワードが目をぎらつかせて立ちあがった。「もう少しでつかみとれそうだというのに、それを投げだしてしまえというのか。わたしはこれまでになかった最高の恐怖小説を書くんだ。読者を恐怖のあまり縮みあがらせ、すすり泣かせてやる。わたしはポオをしのぎ、すべての巨匠（きょしょう）をしのぐことになるんだ」
「そうして呪われるのか」わたしは腹だたしくいった。「狂気に通じる道だが、きみと話をしても無駄だな。何というエゴイズムだ」
　わたしは踵（きびす）を返し、足早に部屋から出た。階段をおりているとき、恐怖のあまり莫迦なことをいったような気がしたが、そうしておりているときでさえ、わたしを押しつぶす大きな岩が

ころがり落ちてくるかのように、おそるおそる肩ごしにふりかえっている始末だった。「ハワードも忘れるべきなんだ」わたしはそう思った。「心のなかから消しさるべきだ。あんなものを小説にしたら、狂ってしまうにちがいない」

わたしは三日後に、またハワードに会いにいった。

「どうぞ」わたしがノックすると、ハワードが妙にしゃがれた声でいった。

部屋に入ると、ハワードはガウンにスリッパという恰好だった。ひどく興奮しているのがすぐにわかった。目がぎらつき、興奮もあらわにわたしを迎えた。

「やったぞ、フランク」ハワードが叫んだ。「形のない形、人間がかつて見たことのない燃えあがる醜悪なもの、人間の脳を吸いとる肉体のない忍び寄る不浄なものを、ついに再現したんだ」

あえぎをもらすひまもなく、ハワードが分厚い草稿を手渡した。

「読んでくれ、フランク」ハワードが命じた。「早く腰をおろして読んでくれ」

わたしは窓辺に行って、寝椅子に腰をおろした。そうして坐るわたしは、手にした草稿以外のすべてを忘れはてていた。正直いって、あさましい好奇心に圧倒されていたのだ。ハワードの力量を疑ったことはない。ハワードは言葉でもって奇蹟を織りあげていた。その小説には未知なるものの息吹きが常に吹き渡り、地球から遠く去っていったものどもがハワードによって

招喚されていた。しかしわたしたちが知った恐怖をほのめかすことさえできるだろうか——ヘンリー・ウェルズの脳を奪った忍び寄る不浄なものについて暗示することができるだろうか。

　わたしは小説を読み通した。ゆっくりと読み、厭わしさのあまりそばにあるクッションを握りしめた。読みおえると、ハワードが草稿をつかみとった。わたしが破りすてたがっていると思ったようだった。

「どう思うね」ハワードが興奮してたずねた。

「いいようもないほど穢らわしい」わたしは声をはりあげていった。「たまらないほど不浄だ」

「しかしあの恐怖を説得力豊かに描いていることは、きみも認めるだろう」

　わたしはうなづき、帽子に手をのばした。「ああ、説得力豊かに描いてくれたから、ここにいて、きみと話をする気にもなれないね。朝まで歩きまわることにするよ。疲れきって、何も考えられず、何も思いだせなくなるまで、歩きまわるつもりだ」

「これは不滅の傑作なんだぞ」ハワードが叫んだが、わたしは何もいわずに階段をおりていった。

Ⅲ

真夜中をすぎたころ、電話のベルが鳴った。わたしは読んでいた本を置いて、受話器を手にとった。
「もしもし、どなたですか」わたしはたずねた。
「フランク、ハワードだよ」妙にうわずった声だった。「すぐに来てくれないか。やつらがもどってきたんだ。フランク、あの印が役に立たない。十字の印をつくったが、唸りが大きくなっていくばかりで、ぼんやりした形が……」ハワードの声が不吉にもとぎれた。
わたしは受話器に叫びたてた。「しっかりしろ。こわがっていることを気づかれないようにするんだ。何度も印をつくるんだ。すぐに行く」
ハワードの声がまた聞こえ、今度はかすれていた。「形がはっきりしてきた。どうしようもない。フランク、わたしにはもう十字をきる力もないんだ。わたしには十字に守ってもらう資格もない。わたしの心は堕落している。悪魔の司祭になってしまったんだからな。あんな小説を書いたばかりに——あんなものを書くべきじゃなかった」
「怖れていないことを見せてやれ」わたしは叫んだ。
「やってみるよ。そうする。ああ、形が……」
わたしはそれ以上聞いてはいなかった。半狂乱になって帽子と上着をつかみ、階段を駆けおりて、通りにとびだした。縁石まで行くと、目がくらみそうになった。倒れこまないよう街燈にすがりつき、走っているタクシーに激しく手をふった。幸いにして、運転手がわたしを目に

した。タクシーが停まると、よろめきながら車道に出て、タクシーに乗りこんだ。「早く行ってくれ」わたしは叫んだ。「ブルックリン・ハイツの十番だ」
「わかりました。今晩は冷えますな」
「そうさ」わたしは叫んだ。「やつらに入りこまれたら、本当に冷たくなるんだぞ。やつらは……」
運転手が驚きの目でわたしを見つめた。「はいはい」そういった。「すぐにまいりますよ。ブルックリン・ハイツでしたね」
「そうだ」わたしはうめき、シートにぐったりともたれかかった。
タクシーがスピードをあげて走っているあいだ、わたしを待ちかまえている恐怖については考えないようにした。やっきになって希望をもとうとした。「考えられるのは、ハワードが一時的に狂ったということだ」わたしはそう思った。「何百万もの人間のなかから、ハワードが見つけだされるわけもない。やつらが意図してハワードを見つけだすはずがない。こんなにたくさんの人間のなかからハワードを選ぶことは不可能だ。とるにたらない男なんだから。やつらが意図的に人間をとらえるようなことはない――しかしやつらはハワードを探していた。ハワードは何といっていたんだったたか。悪魔の司祭になったといっていた。もしもハワードがやつらの地球上での司祭になっているんだとしたら。あの忌わしくも穢らわしい小説によって、ハワードがやつらの司祭になりはてたのだとしたら」

こんな考えはわたしにとって悪夢にほかならず、頭からふりはらおうとした。「抵抗する勇気をふるいおこせるはずだ。怖れていないことを示せるはずだ」わたしはそう思った。

「着きましたよ。おうちまで肩をかしましょうか」

タクシーが停まった。墓になるかもしれないところに入ろうとしていることを知って、わたしはうめいた。歩道におりると、小銭をすべて運転手にくれてやった。運転手が目を丸くして見つめた。

「これじゃ多すぎますよ」運転手がいった。「こんなにもらったんじゃ……」

しかしわたしは手をふって、目のまえの住居の入口階段を駆けのぼった。鍵をさしこんだとき、運転手のつぶやきが聞こえた。「こんな酔っぱらいは見たこともねえや。十ブロック乗っけただけで四ドルもよこして、礼もいわせてくれねえんだからな……」

一階の廊下に灯はついていなかった。わたしは階段のまえに立って叫んだ。「来たぞ、ハワード。おりてこられるか」

返事はなかった。十秒ほど待ったが、二階からは物音一つ聞こえなかった。

「いますぐ行く」わたしはやみくもに叫び、階段をのぼりはじめた。体じゅうが震えた。「ハワードはつかまってしまったんだ」そう思った。「来るのが遅すぎた。来ないほうがよかったかもしれない……あれは何だ」

わたしは信じられないほど震えあがった。二階の部屋で、誰かが苦悶の声をあげて懇願して

いたのだ。あれがハワードの声なのだろうか。はっきりしない言葉がわずかに耳に入った。
「忍び寄る……ああ。忍び寄る……ああ。ああ、頼むから……。冷たくて、はっきり見える。忍び寄る……ああ。神よ」
　踊り場にのぼり、懇願する声がかすれた金切り声になったとき、わたしは膝をつき、自分の体と、そばの壁と、そして前方に十字をきった。マリガンの森でわたしたちを救ってくれた原初の印をつくったのだが、今回は炎もないまま、服にひっかかる震える指で粗雑におこない、しかも勇気や希望もなく、もはや助からないことを確信して、暗い気持ちで十字をきったのだった。
　そしてわたしはすぐに立ちあがり、階段をのぼった。早く捕えられ、星の下での苦しみがつかのまのものであることを祈った。
　ハワードの部屋のドアが少し開いていた。わたしは途方もない努力をして、手をのばし、ノブをつかんだ。ゆっくりとドアを押し開けた。
　一瞬、床に横たわって微動だにしないハワードの体が見えるだけだった。ハワードはあおむけになっていた。膝を折りまげ、両の掌を外に向けて顔にあて、名状しがたいものが見えないようにしているかのようだった。
　わたしは部屋に入ったとき、わざと視線をさげて、視野をせばめていた。床と、部屋の下の

ほうが見えるだけだった。視線をあげたくはなかった。部屋にいるものを怖れるあまり、自分を守るために目をふせていた。

視線をあげたくはなかったが、部屋のなかには、抵抗しきれない怖ろしくも邪悪な力がはたらいていた。目をあげれば、恐怖に滅ぼされるのはわかっていたが、わたしに選択の自由はなかった。

悲痛にさいなまれながら、わたしはゆっくりと視線をあげ、部屋の向こうを見た。すぐに走りだし、前方にそびえるものに身をゆだねたほうがよかったのだろう。そうしていれば、やつらが一瞬のうちにわたしを食らいつくしていたというのに、いまやわたしには人生など何の意味もない。生きているかぎり、わたしと世界のさまざまな喜びのあいだに、あの穢らわしい不浄なものの姿がわりこんでくるのだから。

床から天井まで届くばけものがそびえ、よだれのように何本もの光線をはなっていた。光はねばねばする名状しがたいものだった——液体状の光が、厭わしい悪臭はなつナメクジの粘液のようにしたたっていたのだ。そしてその光に貫かれ、ハワードの小説の草稿が舞っていた。

部屋の中央で草稿が乱舞するなか、忌わしい光が燃えあがり、したたりながら哀れなハワードの脳に入りこんでいった。光がハワードの頭に流れこみ、上方では光の源が満悦したように、ゆっくりと前後にうごめいていた。わたしは何度も悲鳴をあげ、両手で顔を覆ったが、なおも不浄な光の源は前後にうごめいていた。そして穢らわしい光が絶えまなくハワードの脳に流れ

こんでいるのだった。
するうち、光の源の口からこのうえもなく悍しい音が発された……わたしは階下の闇のなかで十字を三度きったことを忘れていた。あらゆる侵略者を無力にする至高の怖るべき神秘の印のことを忘れていた。しかしよだれのような黄色い光を見くだすように、十字の印が部屋のなかにあらわれ、畏怖すべき完全さでもって至純の姿をとったとき、わたしは救われたことを知った。
わたしは膝をついてすすり泣いた。悪臭はなつ光が小さくなり、光の源が目のまえでしなびていった。
そして壁から、天井から、床から、炎が舞い、ものみなを浄める白い炎が、すべてを焼いて滅ぼした。
しかしわたしの友人は死んでしまった。

魔女の谷

ラヴクラフト ＆ ダーレス
東谷真知子訳

第七地区小学校はアーカムの西に広がる荒地のはずれに建っていた。楓が一、二本あるほかは、もっぱらオークと楡からなるささやかな木立ちのなかにあって、そのまえの道路は、一方がアーカムに通じ、もう一方は目路のかぎりまでまっすぐにのび、西の地平線にいつも黒ぐろとした姿を見せる、未開の森林地帯へといたっている。わたしが新しい教師として、一九二〇年の九月初旬に赴任したとき、はじめて目にする校舎に心暖まる魅力があるように思えたが、べつに目立った特徴があったわけではなく、あらゆる点でニューイングランドのどこにでもある何千もの地方小学校とそっくり同じで、こじんまりした地味な校舎が白く塗られているものだから、木立ちのただなかで輝いて見えた。

当時ですら古びた建物だったから、あれからつかわれなくなったか、とりこわされているだろう。小学校のあった地区は、いまでは統合されているが、あのころは必要なものをすべてきりつめ、いささかしみったれたやりかたで、小学校を維持していたものだ。わたしが着任したときには、マガフィの『精選読本』の前世紀に出版された版が、なおも教科書として使用されていた。わたしがうけもった生徒は二十七人だった。アレン家、ウェイトリイ家、パーキンズ

家、ダンロック家、アボット家、タルボット家の子供たち、そしてアンドルー・ポターがいた。
どういうわけでアンドルー・ポターに特別な注意を向けるようになったのかは、いまとなっては思いだせない。アンドルーは歳のわりにはおおがらで、肌が浅黒く、一度見たら忘れられないような眼差しをして、まっ黒な髪がくしゃくしゃに乱れていた。わたしをじっと見つめる眼差しには、どこか普通ではないところがあって、最初はわたしを挑撥するような感じだったが、いつしかわたしは妙に不安をおぼえるようになった。五年生だったが、授業をうけもってしばらくすると、簡単に七年生や八年生に進級できる力がありながら、そのための努力をおろそかにしていることがわかった。クラスメイトにはさして関心もなく、我慢しているだけのようで、クラスメイトのほうは尊敬していたが、それは愛情からではなく、恐怖だと思われる感情に発しているのだった。この不思議な少年がわたしに対しても、クラスメイトに対するのと同じたぐいの態度をとっていることが、やがてわたしにもわかるようになった。
おそらく避けがたいことだったのだろうが、アンドルーに挑むように見つめられるものだから、一クラスしかない学校で教えるという事情の許すかぎり、できるだけこっそりとこの生徒に目をひからせるようになった。その結果、どことなく不安にさせられる事実に気がついた。ときおりアンドルー・ポターが、わたしの感覚ではつかみきれない何らかの刺激に反応して、誰かに呼びかけられたかのような振舞いを見せ、背すじをのばし、神経をはりつめた顔つきで、わたしには聞こえない音に耳をかたむけているように思えることがあり、その様子はまるで、

動物が人間の耳には聞こえない高い音に耳をすましているようだった。
　このころにはわたしは好奇心をかきたてられていた。そして最初の機会を利用して、アンドルー・ポターのことをたずねた。八年生の生徒の一人、ウィルバー・ダンロックが、ときどき放課後ものこって、教室をざっと掃除するのを手伝ってくれることがあった。
「ウィルバー」ある日の午後遅く、わたしはウィルバーに呼びかけた。「きみたちはアンドルー・ポターとほとんど口もきかないようだね。どうしてかな」
　ウィルバーがやや疑わしげにわたしを見つめ、少し考えこんでから肩をすくめて答えた。
「あいつはぼくらとちがうんです」
「どうちがうんだね」
　ウィルバーが首をふった。「ぼくらが遊んでるとき、仲間に入れてやっても入れてやらなくても、あいつは気にしません。遊びたがらないんです」
　ウィルバーはしゃべりたくないようだったが、何度も繰返してたずねたことで、いくつかのことが聞きだせた。それによると、丘陵地帯を抜ける本道から分岐して、いまではつかわれなくなった脇道に沿う、西の丘陵の奥深くに、ポター家は住んでいるという。ポター家の農場は、このあたりで「魔女の谷」と呼ばれる小さな谷間にあるが、ウィルバーは「ひどいところ」だといった。家族は——アンドルーと姉と両親の——四人きりだった。ポター家は他の人びととまじわらず、一番近くに住むダンロック家とさえつきあわなかった。ダンロック家は小学校か

ら半マイルたらずのところに住んでいて、そこから魔女の谷までは四マイルほどあり、両家の農場を森がさえぎっていた。
ウィルバー・ダンロックはそれだけしか話せなかった――それ以上は話すつもりがなかったのかもしれない。
一週間ほどして、わたしはアンドルー・ポターに、放課後教室にのこってくれないかといった。アンドルーはべつに文句もいわず、わたしの要求を当然のこととうけとめているようだった。ほかの生徒たちがいなくなると、わたしの机に近づいて、かすかな笑みを口もとにうかべ、黒い目を輝かせて見つめ、わたしが話しはじめるのを待った。
「きみの成績を検討してみたんだがね、アンドルー」わたしはいった。「もう少しがんばれば、六年生に進級できそうだよ――いや、七年生にだって進級できる。がんばってみないか」
アンドルーは肩をすくめた。
「卒業したら、どうするつもりなんだ」
また肩をすくめた。
「アーカムのハイスクールに行くのかね」
アンドルーがわたしを見つめたが、その目は急に鋭くなったようで、無気力な様子が完全になくなっていた。「ウィリアムズ先生、おれが小学校に通ってるのは、そうしなきゃならない法律があるからですよ」そう答えた。「ハイスクールに行かなきゃならない法律はありません」

「しかし行きたいんじゃないのか」わたしはたたみかけた。
「おれがどう思おうが関係ないんです。親が決めることですから」
「それなら、きみのご両親と話しあってみようか」わたしはすぐにそう決めた。「さあ、家までおくっていってあげよう」
　一瞬、驚きにも似たものが顔にうかんだが、たちまち消えてしまい、アンドルーにあってはおなじみの、用心深さだけをあらわす顔つきになった。アンドルーは肩をすくめ、わたしがいつも携えている鞄（かばん）に教科書や書類を入れるあいだ、その場に立って待っていた。そしてわたしと一緒におとなしく車まで歩いたが、車に乗ったときにわたしに向けた顔には、わたしを見くだしているような笑みがあった。
　森を走り抜けるあいだ、わたしたちはひとこともしゃべらなかった。それはそれで、丘陵に入りこんですぐに感じられた雰囲気にふさわしく、木木は道路をふさがんばかりに立ちならんでいるし、十月の午後も遅いころあいであるとともに、木木が密生していることもあって、深く入りこむにつれ、あたりは暗くなっていくばかりだった。さほど木木のない坂をのぼりきるつど、そのあとは原生林のなかに入りこむことになり、ようやくアンドルーが無言で指差した脇道――車一台通るのが精一杯の脇道――へと車を進めたが、両側に古木が鬱蒼（うっそう）と立ちならび、どの木も妙にねじれていた。この脇道はほとんどつかわれていないらしく、両側から藪（やぶ）がのびているので、慎重に運転しなければならなかった。わたしは植物学を研究しているというのに、

ユキノシタの妙な変種を一度見かけたように思った以外、目にする植物のどれ一つとして識別できなかった。そして何のまえぶれもなく、だしぬけに、ポター家の前庭に車を乗りいれた。
太陽が森の背後に沈み、家は暮色につつまれていた。家の向こうには段段畑があって、それぞれトウモロコシの刈り束の山や、刈り株、そしてカボチャがあった。家そのものはずいぶん低く、中二階に駒形切妻屋根が備わり、窓は鎧戸が閉めきられて、近づきがたいところがあり、母屋に付属する納屋なども陰気で薄気味悪く、つかわれたことがないかのようだった。農場全体が荒涼としていて、わずかに数羽の鶏が家の裏で地面をつついているだけだった。
車で通ってきた脇道がここでとぎれていなければ、ポター家に着いたことすらわからなかっただろう。わたしがどう思っているかをうかがおうとするかのように、アンドルーがちらっとわたしに目を向けた。そして車から軽やかにおりて、すたすたと歩いていった。
アンドルーが家のなかに入った。アンドルーの声が聞こえた。
「先生が来たよ。ウィリアムズ先生が」
返事はなかった。
そしてわたしはいきなり部屋に入りこんだ。古めかしい灯油ランプに照らされているだけだった。その部屋にアンドルーの家族がいた。父親は背の高い猫背の男で、髪には白いものがまじっており、五十代になっているはずもないが、肉体的にというよりも精神的に老けこんで、五十に達しているように見えた。母親は不快なまでに太った女だった。姉はほっそりとして背が高

く、アンドルーと同じように、油断なく何かを待ちかまえているような雰囲気があった。
アンドルーがわたしのことを簡単に紹介すると、ポター家の家族四人はそれぞれ坐るか立ちつづけるかして、わたしが話すのを待ったが、四人の態度には、さっさと話して出ていけといわんばかりの不快なものがあった。
「アンドルーのことでお話にまいりました」わたしはいった。「アンドルーは成績も優秀ですから、もう少しがんばれば、飛び級ができるはずです」
わたしの言葉は歓迎されなかった。
「八年生に進級しても、十分やっていけますよ」わたしはそういって、言葉をきった。
「八年になったりしちゃあ」父親がいった。「学校へ行かずにすむ歳になるまえに、ハイスクールに行かなきゃならなくなるじゃねえか。それが法律ってもんだ。そう聞いとるぞ」
ポター家が誰ともつきあわないことについて、ウィルバー・ダンロックから聞かされたことが、つい脳裡(のうり)によみがえった。アンドルーの父親の話に耳をかたむけながら、ウィルバーから聞かされたことについて考えこんでいると、急にポター家の面面が緊張して、態度が微妙に変化したことがわかった。父親が口をつぐんだとたん、不思議にも家族全員が同じようにふるまったのだ——四人全員が心の声にでも耳をかたむけているかのようで、わたしの抗議など耳にはいっていないようだった。
「アンドルーのように頭のいい子供を、こんなところに縛りつけてはいけませんよ」

「ここはいいとこだ」父親がいった。「それに、アンドルーはわしの息子だぞ。わしらのことにはかまわんことだな、ウィリアムズ先生」
おどすような調子がこもっていたため、わたしはついあとずさった。と同時に、敵意の雰囲気をひしひしと感じとったが、それはポター家の家族ではなく、その家やまわりにあるものから発しているようだった。
「わかりました」わたしはいった。「帰ります」
わたしが背を向けて家から出ると、アンドルーがついてきた。
家をはなれてから、アンドルーが小さな声でいった。「おれたちのことを人に話しちゃいけないよ、ウィリアムズ先生。そんなことをして、それが親父にわかったら、親父が荒れ狂うから。先生はウィルバーと話したんだろう」
わたしは車に乗りこもうとして立ちつくした。そしてふりかえっていった。「ウィルバーから聞いたのか」そうたずねた。
アンドルーは首をふった。「ウィルバーと話したんだね、ウィリアムズ先生」アンドルーがそういって、あとずさった。「親父は思ったことをやりかねないよ」
わたしが口を開くよりもまえに、アンドルーは家のなかに駆けこんでいった。
つかのまわたしは思い迷った。しかしおのずから決心がついた。突然、家が薄闇のなかで脅威をはらみ、まわりの森がわたしに枝をのばそうとしているように思えた。事実、そよとの風

もないのに、風の囁きにも似たざわめきが聞こえ、家から発散する悪意が痛烈に感じられた。わたしは車に乗りこんでポター家をあとにしたが、殺意をもって追ってくる者の熱い息のように、悪意を背中にひしひしと感じた。

ようやくアーカムの自宅にもどったときには、体が震えていた。ふりかえってみると、心騒がされる霊的体験をしたことがわかった。それ以外に説明しようがない。何も知らないまま、予想以上に深い海にとびこんでしまったようなもので、あまりにも思いがけない体験をしたことで、恐怖がいっそう増したのだと、そんなふうに考えざるをえなかった。わたしはろくに食事も喉を通らず、魔女の谷のあの家にはいったい何があるのか、どういうわけで家族があれほどまでに結束して、あの土地にしがみつき、末頼もしいアンドルーが暗い谷をはなれて明るい世界に行くのをさまたげているのかと、不思議に思いつづけた。

その夜はどうにも説明のつかない不安にむしばまれ、横になってもなかなか眠れず、ようやく寝こむと、怖ろしくも心騒がされる夢におびやかされることになった。つきなみな想像を遙かにこえた生物がさまざまにあらわれ、このうえもなく怖ろしい大異変がつぎつぎに起こった。翌朝、目をさましたときには、人間にとってはまったく異質な世界にふれたような気がしたものだ。

その日の朝は早めに小学校に行ったが、ウィルバー・ダンロックがすでに登校していた。悲しげに責めるような目でわたしを見つめた。いったい何があって、いつもは人なつっこいこの

生徒が心をかき乱しているのか、わたしには想像もつかなかった。
「ぼくらが昨日話したことを、アンドルー・ポターにいったでしょう。そんなことしちゃいけないのに」ウィルバーが悲しそうな顔をして、あきらめた感じでいった。
「わたしはいってないよ、ウィルバー」
「ぼくはいってません。だから先生がいったんだ」ウィルバーがいった。そして、「夜のあいだに、うちの牛が六頭も死んだんですよ。牛小屋も崩れたし」
わたしは驚きのあまり、すぐには口もきけなかった。「それは突風が起こって……」わたしがそういいかけると、ウィルバーが口をはさんだ。
「夕べは風なんて吹きませんでした、ウィリアムズ先生。牛は小屋が崩れて死んだんじゃありません。なぐり殺されたんです」
「ポター家の人たちが関係しているとは思えないね、ウィルバー」わたしは声をはりあげていった。
ウィルバーが疲れたような顔をした――事情を心得ている者が、よく知っているべきなのに理解してくれない者に出会ったときに見せるような、そんな顔つきだった。ウィルバーはそれ以上何もいわなかった。
わたしは昨夜の夕暮どきの体験にもまして、大きな衝撃をうけた。ウィルバーは少なくとも、ポター家についてわたしに話したことと、家の牛が六頭死んだことに、何らかの関係があると

確信しているのだ。そしてその確信が強いために、わたしが何をいおうと、ウィルバーを納得させることはできそうになかった。
アンドルー・ポターが教室にあらわれると、昨日別れて以来、何か普通ではないことがあった気配はないものかと、顔色をうかがってみたが、無駄な行為でしかなかった。
わたしはどうにかその日の授業をやりおえた。終業のベルが鳴ると、すぐにアーカムに帰り、『アーカム・ガゼット』紙のオフィスに駆けつけた。編集長がこの地区の教育委員会の一員で、親切にもアーカムでのわたしの住居を見つけてくれたのだ。もう七十に近いという高齢の人物で、わたしがつきとめたがっていることを知っているかもしれなかった。
興奮していることが顔つきや振舞いにあらわれていたにちがいなく、わたしがオフィスに入るや、高齢の編集長が眉をつりあげていった。「どうしてそんなにいらだっているんだね、ウィリアムズ先生」
わたしは具体的な証拠など何もつかんではいないし、冷静に考えてみれば、わたしが話そうとしていることは、偏見のない者にはほとんどヒステリックに聞こえるはずなので、何とかしらばっくれようとした。そしてこういうだけにとどめた。「ポター家について何かご存じのことがあれば、教えていただきたいのですが。小学校の西の魔女の谷に住んでいる家族です」
編集長が妙な目つきをした。「魔法使いのポター爺さんの話を聞いたことがないのかね」そういった。そしてわたしが返事をするまえに、つづけていった。「いや、もちろん聞いたこと

がないだろうな。先生はブラトゥルバラの出身なんだから。ヴァーモントの人がマサチューセッツの辺鄙(へんぴ)な土地のことを知っているわけがない。ポター爺さんが最初にあそこに住みついたんだ。わしがはじめて知ったときから爺さんだったな。いまいるポター一家は爺さんの遠い親戚で、ミシガンの北に住んでいたんだが、爺さんが亡くなったとき、土地財産を相続して、あそこで暮すようになったのさ」

「あのポター一家について何かご存じですか」わたしはしつこくたずねた。

「誰でも知っているようなことしか知らんよ」編集長がいった。「こっちへやってきたときは、人づきあいのいい家族だったな。いまでは誰ともしゃべらんし、外に出ることもめったにない——あのあたりの農場から家畜がいなくなることについて、あれやこれやの噂があるよ。噂はすべてポター一家に結びついている」

こんな話が出たものだから、わたしはくわしくたずねた。

そうしてわたしが耳にしたのは、困惑させられるばかりの謎めいた、中途半端な話や暗示、伝説、昔話で、まったくわたしの理解をこえるものばかりだった。議論の余地のない事実と思えるのは、魔法使いのポターと近くのダニッチに住んでいたウェイトリイという魔法使い——編集長にいわせれば「悪いやつ」——に、遠い血縁関係があったことや、ポター爺さんが隠者のように暮して信じられないほど長生きしたこと、そして魔女の谷にいつしか人が近づかなくなったことだけだった。どう考えても現実のこととは思えない、迷信に根ざす昔話がいくつか

あった。魔法使いのポターが「空から何かを呼びだして、そいつはポター爺さんが死ぬまで、爺さんと一緒にか、爺さんの体のなかで暮していた」とか、街道で瀕死の状態で見つかった旅人が、ぜいぜい喉を鳴らしながら、「触腕のあるばけもの……ねばねばしてゴムみたいなばけものが、吸盤のついた触腕をのばして」森からあらわれ、襲ってきたと告げたとか、そういう話がいくつもあった。

編集長は話しおえると、アーカムのミスカトニック大学付属図書館の司書に宛てて、メモ用紙に何ごとかを書きつけ、それをわたしに手渡した。「その本を見せてもらえばいい。何か得るところがあるだろう」そういって、肩をすくめた。「何の役にもたたないかもしれんがね。最近の若い人は何でも話半分にうけとるから」

アンドルー・ポターにいまよりもよい生活をおくらせてやるつもりなら、どうしても特別な知識が必要だと思い、わたしは食事もとらず、調査をつづけることにした。好奇心を満足させることよりも、アンドルーを救ってやりたい気持ちが、しきりとわたしを駆りたてたのだった。わたしはミスカトニック大学付属図書館に行き、司書を探しだして、編集長の書きつけを渡した。

高齢の司書が鋭い目を向けた。「ここでお待ちください、ウィリアムズ先生」そういって、鍵の束をもって姿を消した。編集長が薦(すす)めた本は、どういうものであるかはわからないが、鍵をかけて厳重に保管されているらしかった。

待つ時間が果てしなく感じられた。空腹をおぼえ、見苦しい性急さを疑問に思いはじめた――しかし自分がどのような災難を避けようとしているのかはわからなかったにせよ、一刻の猶予もないような気がしてならなかった。ようやく司書が古びた大冊をもってあらわれ、自分の目の届くテーブルに置いた。その本の書名はラテン語で『ネクロノミコン』と記され、著者はアブドゥル・アルハザードという名前からも、明らかにアラブ人だが、本文はいささか古風な英語だった。

わたしは好奇心をつのらせて読みだしたが、すぐに途方にくれてしまった。この本であつかわれているのは、太古の異星物、地球の侵略者、旧支配者や旧神と呼ばれる大いなる存在で、クトゥルー、ハスター、シュブ＝ニグラス、アザトース、ダゴン、イタカ、ウェンディゴ、クトゥグアといった法外な名前をもち、すべてが地球を支配しようとする計画にかかわっており、トゥチョ＝トゥチョ人や深きものどもといった従者をしたがえているのだった。この本は不可思議な伝承や呪文にみなぎり、旧神と旧支配者とのあいだでくりひろげられた一大宇宙決戦と、地球や姉妹星の孤立した場所や遠隔地に生きながらえる信仰や従者のことが縷縷詳述されていた。この煩雑で無意味な話が、目下の問題や、内向的で異様なポター家が孤独を好んで誰ともつきあわない暮しをつづけていることと、いったいどんな関係があるものやら、さっぱりわからなかった。

どれほど長く読書をつづけていたのだろう。わたしは他人にしげしげと見つめられているの

いた本に向けていた視線をあげた。そう遠くないところにひとりの男がいて、わたしが読みふけっていた本に向けていた視線をあげた。そしてわたしと目があうと、あつかましくわたしのそばにやってきた。
「ぶしつけなことを申すようですが」男がいった。「小学校の教師をなさっているおかたが、この本のどこに興味をもたれたのでしょう」
「自分でも不思議に思っているんですよ」わたしはいった。
男はマーティン・キーン教授だと名のった。「実は」キーン教授がいった。「わたしはその本をすっかりそらんじているのですよ」
「こんな迷信のごたまぜをですか」
「そうお思いですか」
「もちろんですとも」
「驚異の念を失ってしまったようですね、ウィリアムズ先生。よろしかったら、この本をお読みになったわけを話していただけませんか」
わたしはためらったが、キーン教授は説得力にとみ、信頼できそうな人物だった。
「歩きながら話しましょう」わたしはいった。
教授がうなづいた。
わたしは『ネクロノミコン』を司書に返し、新しい友人と肩をならべて歩いた。言葉につま

りながらも、できるだけはっきりと、アンドルー・ポターや、魔女の谷の家、そしてわたしの不思議な霊的体験について話した――ダンロック家の牛が偶然にも奇妙な死にかたをしたことまで話した。キーン教授はひとことも口をはさまず、異常なまでの熱心さで耳をかたむけた。わたしは最後に、魔女の谷のことを調べているのは、ただひとえに、生徒のために何とかしてやりたいからだと説明した。

「少し調べてみれば」キーン教授がいった。「ダニッチやインスマスといった辺鄙な場所で、不思議な出来事が数多く起こっていることがわかりますよ――アーカムや魔女の谷にしてもです。鎧戸が閉めきられ、扇窓も汚れきった、ここに建ちならぶ古びた家をごらんなさい。どれほど多くの異様な出来事がこうした駒形切妻屋根の下で起こったことか。とうていわかるはずもありません。しかし信じる信じないは別問題です。悪の存在を信じるのに、悪の具現を目にする必要はありませんからね。そうでしょう、ウィリアムズ先生。わたしは先生が頭を痛めていらっしゃる生徒のことで、ささやかなお力ぞえをしたく思うのですが。よろしいでしょうか」

「ぜひお願いします」

「危険なことになるかもしれませんよ――その生徒にも先生にも」

「自分のことは気にもしていません」

「しかしその生徒はいまほど危険な目にあうことはないでしょう。それだけは確かです。いまの状態にくらべれば、死ぬほうがまだましですからね」

「ずいぶん謎めかしておっしゃるんですね、教授」

「そのほうがいいのですよ、ウィリアムズ先生。さあ、ここがわたしの家です。どうぞなかへ」

わたしたちはキーン教授の話に出た古めかしい家の一軒に入った。黴臭い過去に入りこんだようなもので、部屋という部屋に本や雑多な古物があふれていた。教授は居間らしき部屋にわたしを通し、椅子の上にあった本の山をとりのけたあと、二階で用事をすませるあいだ待っていてくれといった。

しかしそれほど長く待たされることはなかった——その部屋の雰囲気になじむひまもなかった。部屋にもどってきた教授の手には、おおよそ五芒星形をした石がいくつもあった。教授はそのうちの五つをわたしに手渡した。

「明日、放課後に——ポター家の子供がいたら——この石の一つでその子供にふれるのです。強く押しつけなければなりませんよ」キーン教授がいった。「大事なことがもう二つあります。少なくとも石の一つをいつも身につけていること、そして石についてはもちろん、これから何をするつもりでいるかを、決して考えないようにすることです。連中はテレパシーの力をもっています——あなたの思考が読みとれるのですよ」

わたしは驚きながらも、わたしがウィルバー・ダンロックとポター家の話をしたといって、アンドルーが非難したことを思いだした。

「この石が何であるのかは、教えていただけないんですか」わたしはたずねた。

「あなたの疑いが晴れるかどうかはわかりませんが」教授がすごみのある笑みをうかべていった。「この石は旧支配者の牢獄を封印した、ルルイエの印をもつ石の一つなのです。旧神の印とも呼ばれていますがね」
「キーン教授、迷信の時代は過去のものですよ」わたしは文句をいった。
「ウィリアムズ先生、生命の驚異とその神秘は決して過去のものではありません」教授がきりかえした。「石に意味がなければ、力はありません。力がなければ、ポター家の子供に何の影響もおよぼせないでしょう。もちろんあなたを守ることもできません」
「何から守ってくれるのですか」
「あなたが魔女の谷の家で感じた悪意の背後にある勢力ですよ」教授がいった。「それも迷信だとおっしゃるのですか」そういって、笑みをうかべた。「何をおっしゃりたいかはわかっています。石を子供に押しつけて何かが起こったら、決して子供を家に帰らせないようにしてください。この家に連れてきてくださらなければなりません。よろしいですか」
「わかりました」わたしはいった。
　翌日、時間のたつのが遅く感じられたのは、危険がさしせまっているだけではなく、アンドルー・ポターの問いかけるような視線をまえにして、何も考えずにいることが、はなはだ困難だったからだ。さらにまた、あの荒地から発散して脈動する悪意の壁、黒ぐろとした丘陵の谷間に潜む実質のある脅威が背後に感じられるという、いままでになかった経験をした。しかし

ゆるやかに感じられるとはいえ、時間は着実にすぎていき、わたしは終業のベルが鳴る直前に、ほかの生徒が帰ってからも教室にのこっているよう、アンドルー・ポターにいった。

するとアンドルーはまたしても、ほとんど高慢ともいえるような態度で応じたので、わたしは心底アンドルーを救ってやりたく思っていながらも、アンドルーは救ってやるだけの価値があるのかと自問せざるをえなかった。

しかしわたしは堪えた。車のなかにある石のことは隠したまま、ほかの生徒がいなくなると、一緒に外に出ようとアンドルーにいった。

そのときわたしは無力感とともに莫迦ばかしさを感じた。大学まで出ているわたしが、アフリカの荒野にこそふさわしい、呪術のたぐいとしか思えないものをなそうとしているのだから。そして顔をこわばらせて校舎から車に向かっているうち、ほんのつかのまのことだが、気力がおとろえ、ただアンドルーを車に乗せて、家までおくってやりたくなった。

しかしそうはしなかった。アンドルーをうしろにしたがえて車に近づくと、腕を車のなかに入れて、まず五芒星形の石を一つポケットにすべりこませ、つぎにもう一つつかみとると、電光石火のはやわざで、アンドルーの額にその石を押しつけた。

そうして起こったことは、予想すらしていなかったことだった。

石がふれたとたん、アンドルーの目にこのうえもない恐怖があらわれ、またたくまにそれが激烈な苦悶になりかわって、恐怖の悲鳴が口からほとばしった。教科書を投げとばして腕を大

きく広げ、わたしが抱きかかえても、腕をふりまわして総身を震わせた。わたしがしっかりつかまえて地面に横たえてやらなかったなら、口から泡を吹きながら倒れこんでいたことだろう。そのとき冷たい突風が起こり、草や花をたわめ、森のはずれの木木を波打たせ、木の葉をもぎとって、速やかに消えさった。

わたしは恐怖にかりたてられるまま、アンドルー・ポターをかかえあげて車に運びこみ、その胸に五芒星形の石を置くと、できるだけ速く車を走らせ、七マイルはなれたアーカムを目指した。キーン教授はわたしを待っていたらしく、わたしがあらわれても顔色一つかえなかった。そしてわたしがアンドルー・ポターを連れてくることも予期していたらしく、すでにベッドが用意されていて、鎮静剤を投与すると、わたしに手をかしてアンドルーをベッドに横たえた。

そうして教授がわたしに向きなおった。「こうなったからには、時間を無駄にはできません。やつらが子供を探しにきますからね——おそらく姉が最初に来るでしょう。すぐに学校にもどらなければ」

しかしいまや、アンドルー・ポターに起こったことの意味と恐怖が、はっきりとわかりはじめ、わたしは震えあがってしまい、教授に押されるようにして部屋を出たあと、ひきずりだされるようにして教授の家から出るしまつだった。あの夜の怖るべき出来事を、こうして書きとめていると、かなりの歳月を経ているというのに、いまですらわなわなと総身が震えてしまう。途方もない未知の世界にはじめて直面して、広大無辺な宇宙にくらべれば、自分がいかに微弱

で無意味であるかを知った者をとらえる、このうえもない不安と恐怖をひしひしと感じてしまうのだ。わたしはあのとき、ミスカトニック大学付属図書館で読んだ禁断の書物が、迷信の寄せ集めなどではなく、おそらく人類よりも遥かに古い存在について、これまで疑われたためしとてない事実を明らかにする鍵であることを知った。魔法使いのポターが空から何を招喚したかは、思いをめぐらす勇気とてなかった。

キーン教授がわたしに話しかけ、感情にかられた反応はふりすてて、事実を冷静に考えるよう促してくれたが、わたしは素直に耳をかたむけられるような心境ではなかった。ともかく目的は果たしたのだ——アンドルー・ポターは救われた。しかしそれを確実なものにするには、きっとアンドルーのあとを追って見つけだそうとする、アンドルーの家族から解放してやらなければならない。そうしてわたしは、ミシガンの田舎に住んでいた四人家族が、魔女の谷のわびしい農場を相続しにやってきたとき、どのような恐怖が待ちかまえていたのかと、つい考えこまずにはいられなかった。

わたしはそれ以上何も考えずに車を運転して小学校にもどった。キーン教授の指示で、灯をつけ、ドアを開けはなったままにした。暖かい夜だった。キーン教授は校舎の裏に身を隠し、アンドルーの家族がやってくるのを待ちかまえた。わたしは気をひきしめ、心を空白にして、監視をはじめた。

夜の闇がたれこめるまえに、アンドルーの姉がやってきた。

そしてアンドルーの姉が弟と同じ体験をして、机のそばに横たわり、胸に五芒星形の石が置かれたあと、父親が戸口にあらわれた。すでにあたりは真っ暗で、父親は銃をもっていた。父親は何があったかとたずねるまでもなく、すべてを知っていた。戸口に立って口をつぐんだまま、まず娘を、つぎに娘の胸にある五芒星形の石を指差し、そして銃をかかげた。意味するところは明白だった――わたしが五芒星形の石をとりのぞかなければ、本気で撃つつもりなのだ。どうやらキーン教授はこうなることを予期していたらしく、背後からポターに近づいて、五芒星形の石を押しつけた。

そのあと、わたしたちは二時間待ったが、アンドルーの母親はついにあらわれなかった。

「来ませんね」やがてキーン教授がいった。「母親が魔物の宿主になっているんですよ――父親のほうだと思っていたんですがね。ともかく選択の余地はありませんから、魔女の谷に行きましょう。この二人はここにのこしておけばいい」

わたしたちは闇をついて車を走らせ、ポター家にこっそり近づこうとはしなかった。谷間の家にいるものは、わたしたちが近づいてくるのを「知って」も、五芒星形の石のために、わたしたちには手をだせないと、教授がいったからだ。わたしたちは木木の鬱蒼と生い茂る森を抜け、奇妙な藪がヘッドライトの光のなかで迫ってくるように思える脇道を通り、そしてポター家の前庭に達した。

家は一部屋にランプがともされている以外、闇につつまれていた。

キーン教授が五芒星形の石を入れた小さな袋をもって車からおり、家を封印する作業にとりかかった――二つあるドアや窓のすべてに五芒星形の石を一つずつ置いていったのだが、窓の一つからは食卓についている女の姿が見えた。無神経で、油断なく、わたしたちがいるのに気づいていて、もはやこの家でわたしが目にした忍び笑いをする女とは似ても似つかず、追いつめられた敏感な大型の野獣を思わせた。
キーン教授は仕事をやりおえると、家の表にまわり、庭にあったブラシで藁を掃き集め、それを玄関に積みあげて、とめようとするわたしの言葉に耳もかさずに火をつけた。
そして窓にもどって女を見まもり、根源的な力を破壊できるものは炎しかないが、それでもアンドルーの母親を助けられることを願っているといった。「たぶんあなたは見ていないほうがいいですよ、ウィリアムズ先生」
わたしはその言葉を無視した。そうしてさえいれば、眠りに押し入る悪夢から救われていたものを。わたしは窓のまえに立ち、キーン教授の肩ごしに、部屋のなかをながめていた――いまや煙のにおいが家じゅうにたちこめていた。アンドルーの母親――というよりもその肥満した体を動かしているもの――が急に立ちあがり、よろめくように勝手口に近づいたが、そこから出られないと知ると窓に行き、またひきかえして部屋の中央にもどり、食卓と薪ストーヴのあいだに立った。冬が近いというのに、ストーヴにはまだ火がなかった。そして床に倒れこみ、身をよじって巨体を波打たせた。

部屋がゆっくりと煙につつまれ、ランプの黄色い光がかすみだし、ぼんやりとしか見えないようになった――が、床で激しく身をくねらせるものに起こっていることを、完全に覆い隠すほどではなかった。アンドルーの母親が苦悶にさいなまれているかのように、激しくのたうちまわったが、やがてゆっくりと、べつのものが形をとりはじめたのが、ぼんやりと見えた――定まった形のない信じられないような塊で、煙のなかにちらっと見えただけだが、触腕があって微光を放っていた。窓ごしでさえ、冷徹な知性と冷たい体を備えているのが感じとれた。いまやそいつは、アンドルーの母親の微動だにしない体の上で、雲のようにそびえ、そしてストーヴの上にくずれこみ、蒸気のようにストーヴのなかに入りこんだ。

「ストーヴだ」キーン教授が叫び、あとずさった。

わたしたちの頭上、煙突から、煙のように黒ぐろとしたものが広がりだし、つかのま凝縮してその場にとどまった。やがて電光のように急上昇して、星たちのなか、ヒヤデス星団のあるほうへと飛びさった。魔法使いのポターに呼び出されたあと、ポター一家がミシガン北部からやってきて、地球上での宿主になるのを待ちかまえていたのだが、ついにもといたところへともどったのだ。

わたしたちはアンドルーの母親を何とか家から運びだした。体がかなり縮んでいたが、それでも生きていた。

その夜のあとのことは、くわしく記すまでもない――教授は家が燃えつきるまで待って五芒

星形の石をひろい集め、ポター家の家族は魔女の谷の呪いから解放され、怖ろしい谷には二度ともどらないことに決めた。アンドルーについては、目ざめさせようとしたとき、眠りながらも、「闘いあい、ひきさきあう強風」とか、「ハリの湖のそばで彼らは永遠に栄光につつまれて生きる」とかつぶやいたことを記しておこう。

魔法使いのポターが星空から何を招喚したのかは、わたしには問いかける勇気とてないが、人間が知らないままでいたほうがいい秘密にかかわっていることはわかっている。第七地区小学校にたまたま赴任して、うけもちの生徒のなかにアンドルー・ポターという不思議な少年がいたばかりに、わたしは人間が知るべきではない秘密を知ってしまったのだ。

セベクの秘密

ロバート・ブロック
岩村光博訳

そもそもヘンライカス・ヴァニングの仮装舞踏会に出席するようなことをしなければよかったのだ。たとえあんな悲劇が起こらなかったにしても、あの夜ヴァニングの誘いをことわっていれば、わたしもまともな生活をおくっていたことだろう。ニューオーリンズをはなれたいまでは、あの事件を以前よりは分別をもってながめることができ、自分がまちがいをおかしたことがわかる。あの最後の不可解な一瞬のことは、思いだすのも怖ろしく、いまですら理性をもって直視することはできない。まえもってああなることに薄うす気づきでもしていれば、こんなふうに夜ごと悪夢に悩まされることもなかったかもしれない。

しかしあのときは、わたしを導いてくれるような予感がひらめくわけもなかった。わたしはルイジアナ州のニューオーリンズで知りあいもなく、ひどく孤独だった。謝肉祭の最終日にあたる懺悔火曜日のにぎわいも、このうえもない孤独感を深めるばかりだった。謝肉祭の最初のふた晩は、タイプライターに向かって長く徹夜をつづけたことで疲れはて、妙にまがりくねった通りをひとりさびしくさまよい歩いたが、通りにひしめく群衆に手荒く押しのけられ、ひとりきりでいるのを嘲笑されているような気がしたものだ。

そのときとりかかっていた仕事は精根つきはてるもので――ある雑誌にエジプトの話を連載していたのだが――精神状態がいささかおかしくなっていた。昼間は静かな部屋にいて、ナイアーラトテップやブバスティスやアヌビスのイメージをふくらませるものだから、頭のなかでは古（いにしえ）の日日の僧侶たちが練り歩いていた。そして夕暮になると、過去の現実ばなれした人物たちよりも現実感にとぼしい、愚かな群衆のただなかを、ひっそりと歩くのだった。

しかし弁解はこれくらいにしておこう。正直にいえば、三日目の夜に、うんざりする昼間の仕事をおえて外に出たとき、わたしは酔いつぶれるまで飲むつもりだった。暮色が濃くなるころに酒場に入り、ピーチ・ブランディを飲みながら、たっぷり食事をとった。その店は暑くて、こみあい、仮装した下劣な連中といえば、誰もが冷やかしの神モーモスの治世を愉しんでいるようだった。

しばらくすると、こんな騒ぎも気にならなくなった。ゴブレットにたっぷりそそいだ極上のブランディを四杯飲むと、血が霊薬のように血管のなかを流れ、あられもない奔放な夢がひきもきらずに脳裡（のうり）にうかんだ。いまやわたしは新たな好奇心をもって、まわりにひしめく誰とも知れない者たちを、さもありなんとながめまわした。この連中も今夜は――腹だたしい単調さと平凡かつ陳腐（ちんぷ）なものから――逃げだそうとしているのだ。近くにいる、道化に身をやつした太った男は、一時間まえには莫迦（ばか）げた姿に見えたが、いまのわたしは同情をおぼえていた。仮装をこらした者たちの仮面の背後に欲求不満が感じとれ、彼らがけなげにも、この懺悔火曜日

に忘却を見いだそうとしているのがわかった。
わたしも忘れるつもりだった。ブランディの壜がからになった。酒場を出ると、また通りをつぎつぎに歩いたが、もはや孤独感をおぼえることもなかった。わたしはカーニヴァルの王さながらにのし歩き、雑踏のなかにいる者たちと愚弄の言葉をかわしあった。
ここからしばらく記憶がぼんやりしたものになる。ナイトクラブでウィスキー・ソーダを飲むと、わたしはまた歩きつづけた。どこに向かっていたのかはわからない。苦もなく流されていくようだったが、頭のなかはさえわたっていた。
浮き世のことは考えなかった。気まぐれのように、また仕事のことを思いだし、古代エジプトについて考えこんだ。すぎさった歳月をさかのぼり、謎につつまれた壮麗な幻想のなかを歩いた。
わたしはほの暗い無人の通りをよろめきながら進んでいった。
神殿の建ちならぶテーベを、スフィンクスに見つめられながら歩いた。
うかれ騒ぐ者たちのいる明るい大通りへと入っていった。
聖なるアピスを崇拝する白衣の見習僧たちと交わった。
飲み騒ぐ群衆が紙製のラッパを吹き、小さな色紙をまきちらした。
リュートの鋭い音色にあわせ、裏切られたオシリスの血のように赤い薔薇を、神殿の乙女たちがわたしにふりそそいだ。

こんなふうに底抜け騒ぎのなかを歩いていくあいだ、酒に酔って陶然とするわたしは、思いを遙か彼方に向けていた。すべてが夢のようだったが、そうしてついに、クリオール人地区の中心にある薄暗い大通りに入りこんだのだった。大通りの両側には無人の家屋が高くそびえ、暗くて陰気な住居に誰もいないのは、住民たちが愉快な場所で浮かれ騒ぐ者たちにくわわっているからだった。建物はいずれも古く、昔のやりかたでもって、狭い通路をはさんで建ちならんでいた。

　どこか忘れさられた墳墓にならぶミイラの柩が、ミイラがなくなったことで、蛆や地虫さえよりつかなくなったようなものだった。

　急勾配の切妻屋根にある小さな暗い窓が、ぽっかり口を開けていた。

　頭蓋骨の虚ろな眼窩のようで、頭蓋骨のように秘密をはらんでいる。

　秘密。

　謎につつまれるエジプト。

　するうち、わたしはひとりの男を目にした。まがりくねった暗い通りを進んでいると、前方の闇のなかに人影があったのだ。無言で立っているありさまは、わたしが近づくのを待っているかのようだった。足早に通りすぎようとしたが、微動もせずに立っている男には、わたしの注意をとらえるものがあった。装いが普通ではなかった。

　突然、驚くべきことに、酔いのもたらす夢がまぎれもない現実に溶けこんだ。

待ちかまえている男は、古代エジプトの神官を思わせる出立ちをしていた。

幻覚だろうか、それとも男はオシリスをあらわす三重冠を本当にかぶっているのか。長い白衣は見まちがえようもなく、肉の薄い手には王権を示すセト神の笏があった。

わたしは困惑するあまり、その場に立ちつくして、まじまじと見つめた。男が見つめかえしたが、やせて日焼けした顔はまったくの無表情だった。そして速やかな動作で、右手をローブのなかに入れた。わたしはぎくっとしたが、ひきだされた男の手にあったものは、煙草だった。

「マッチはおもちですか」エジプトの神官がたずねた。

わたしは今日が懺悔火曜日であることを思いだして笑った。それにしても、ぞくっとさせられたものだ。わたしは急に頭がすっきりして、笑みをうかべながらライターを差しだした。男はライターをつかって煙草に火をつけるとき、興味深そうにわたしの顔を見つめた。

「これはこれは」男がそういって、ふくみ笑いをした。「あなたでしたか。最近の連載を読ませていただいておりますが、ニューオーリンズにいらっしゃるとは存じませんでしたよ」

わたしは口ごもりながら簡単に説明した。男がにこやかな顔をして口をはさんだ。

「これはよかった。わたしはヴァニング――ヘンライカス・ヴァニング――です。オカルトに興味がありましてね、あなたとは共通の話題がたくさんあるんじゃないでしょうか」

しばらくわたしたちは立ち話をした。というよりも、ヴァニングがしゃべりつづけ、わたしは耳をかたむけていた。ヴァニングは資産と暇に恵まれた紳士だった。太古の神話体系を研究

していることについて饒舌（じょうぜつ）に語ったが、エジプトの伝承に対する関心にはなみなみならぬものがあるようだった。そしてわたしが興味をもつかもしれない、形而上学を研究しているグループがあるといった。
　急にひらめくものがあったかのように、ヴァニングがわたしの背中をたたいた。
「これからどうなさるおつもりですか」そうたずねた。
　わたしは目下のありさまを正直にいった。ヴァニングが笑みをうかべた。
「それは何よりです。わたしも食事をおえたばかりでしてね。これから家に帰って客をもてなさなければならないんです。ささやかなグループ――さっき申しあげたグループ――が仮装舞踏会をするんですよ。いらっしゃいませんか。おもしろいですよ」
「しかし仮装していませんし」わたしはことわろうとした。
「そんなことは気になさらずに。あなたのようなおかたなら、きっと気に入りますよ。普通のものじゃありませんからね。さあ、行きましょう」
　ヴァニングがついてくるようにうながし、通りを歩きはじめた。わたしは肩をすくめ、無言であとにつづいた。ともかく好奇心をかきたてられていたし、わたしには失うものなど何もなかった。
　歩いているあいだ、寛大なヴァニングが立て板に水を流すように、興味そそる話をしゃべりつづけた。秘教を研究する友人たちからなるささやかなグループについて、くわしく語ってく

れたのだった。このグループはいささか見えをはって「柩クラブ」と名のり、多くの時間を費やして、美術や文学や音楽の異国的な不気味な面を研究しているようだった。

ヴァニングの話によれば、今晩このグループがユニークなやりかたで、懺悔火曜日を祝うのだという。グループのメンバーや招待客は、ありきたりの仮装をしりぞけ、普通ではない装いをしてやってくる。普通の道化師や海賊や植民地時代の紳士のかわりに、神話や空想にもとづく奇怪な扮装に身をやつすのだ。狼男、吸血鬼、神、女神、神官、黒魔術師を目にすることになる。

正直いって、この知らせはうれしいものではなかった。わたしは似非オカルティストや、知ったかぶりをするオカルト研究家や、いかさまの形而上学者には我慢できないのだ。伝説というものに対して、見せかけだけの興味を示したり、でたらめな知識をひけらかす連中を嫌う。降霊術や占星術や心霊家もどきのペテンに憂き身をやつすようなことは、わたしにとって唾棄すべきものでしかない。

失われた種族の秘法や太古の信仰を、愚か者たちが嘲ってよいものだろうか。中年の神経質な連中や青白い肌をした好事家たちのありふれた集まりなら、退屈な夜をすごすことになるだろう。

しかしヘンライカス・ヴァニングの博識は、うわべだけをなまかじりしたものではないようだった。わたしの小説であつかわれるさまざまな神話にふれて、ヴァニングが教養豊かに語る

話からは、深淵な知識をもって真摯な研究をおこない、人間の想像力の暗いヴェールの彼方を見すえていることがうかがえた。ヴァニングはマニ教や太古の信仰儀式を探究していることを、弁舌さわやかにしゃべった。

わたしはヴァニングの話にひきこまれ、どちらに向かっているのかさえ気にもとめずにいたが、しばらく歩きつづけたことだけはわかっている。ようやく立ちどまると、両側に灌木が植えこまれた長い私道に入り、明るく照らされる堂堂とした大邸宅の玄関へと歩いていった。

単純な事実として認めておかなくてはならないが、わたしはヴァニングの生彩をはなつ話に魅せられて、建物の外見やまわりの様子が具体的にどういうものであったかは、まったく何一つおぼえていない。

わたしは陶然としたまま、ヴァニングのあとにつづいて玄関を抜け、そして悪夢の世界に入りこんだのだった。

大邸宅が耿耿と照らされていたといっても、誇張ではない。ただし燃えるように赤い色で照らされていた。

玄関広間は地獄さながらだった。偃月刀の形をした緋色の光がいくつも、壁にはりめぐらされた鏡から照り返していた。朱色の綴織がつぎの部屋への戸口を隠し、ルビー色のガス・トーチが赤く染まる鉄枠によって吊され、紅色の炎を吹きだしているので、深紅の天井はくすぶっ

ているようだった。ルシファーめいた執事が帽子をうけとり、チェリー・ブランディの入ったゴブレットを渡してくれた。
赤い部屋でふたりきりになると、ヴァニングがグラスを手にして向き直った。
「お気にめしましたか」そうたずねた。「客を雰囲気にひきこむ華やかな舞台装置でしょう。ポオから借用したのですがね」
わたしは絢爛(けんらん)たる『赤死病の仮面』を思いだし、粗野で下卑たこの冒瀆(ぼうとく)行為に辟易(へきえき)した。しかしヴァニングの奇癖を示すこの道具立てには興味をかきたてられた。ヴァニングは何かをしようとしているのだ。わたしはなかば感嘆して、不気味な控室にいるエジプトの偽神官にゴブレットをかかげた。
ブランディを飲むと、喉が焼けるようだった。
「さあ、お客さんたちのいるほうへまいりましょう」ヴァニングが綴織を押しわけ、わたしたちは右手の洞窟のような部屋に入った。
壁にはりめぐらされたビロードは緑と黒で、壁龕(へきがん)にともされた蠟燭は銀色だった。もっとも家具調度は、現代的なありきたりのものだったが、その部屋にいる客たちをはじめて見渡したとき、わたしはつかのま、また夢を見ているのではないかと思った。
ヴァニングは「狼男、神、黒魔術師」に出会えるといっていた。その謎めかした発言は、誇張どころかひかえめなものだったのだ。その部屋にいる者たちは地獄の万魔殿をつくりあげて

いた。
淫らな牧神パンがしなびた魔女と踊り、狂った女神フレイヤがヴードゥの祭司に抱きつき、バッコス神の巫女がけわしい目つきのアイレムの修道僧にしなだれかかっていた。ドゥルイド僧、こびと、水の精ニクセ、地の精コーボルト、ラマ僧、シャーマン、女祭司、ファウヌス、人食い鬼、マギ族、食屍鬼がいた。サバト——古代の罪悪の復活——だった。
そしてこうした者たちのなかに連れていかれて紹介されると、つかのまの幻影は消えさった。牧神パンを見れば、山羊皮の腰帯では隠しようもない太鼓腹をした、目の下がはれた中年の太った紳士にすぎなかった。女神フレイヤは社交界にデヴューするような歳ごろの底抜けに明るい娘で、娼婦を思わせる好色そうな目をしていた。ヴードゥの祭司は焼いたコルクで顔を黒くした青年にすぎず、仮装とはいささかそぐわないイギリスなまりで話した。
おそらく十人ほどの者に会ったが、名前はすぐに忘れはててしまった。わたしはヴァニングが高慢な態度をとることに驚いた。話しかけてくる客の何人かを、ほとんど鼻であしらっていたのだ。
「楽しんでください」ヴァニングが肩ごしにそういって、わたしをひっぱっていった。「莫迦な連中ですよ」低い声でいった。「しかしあなたに会っていただきたい人がいましてね」
部屋の隅に四人の男が坐っていた。四人ともヴァニングと同じように、宗教が支配していた時代の僧服をまとっていた。

「デルヴィン博士です」そう紹介された人物は、聖書の世界から抜けだしてきたような、バビロニアの神官の装いをしていた。
「こちらはエティエンヌ・ド・マリニー」これは髪が黒くて端正な顔立ちをしたアドニスの祭司だった。
「ウィールダン教授」イスラム教スーフィ派のターバンをまとう、顎鬚をたくわえた托鉢修道僧だった。
「リチャード・ロイス」眼鏡をかけた若い学者が修道僧の頭巾をかぶっていた。
　四人が礼儀正しく頭をさげた。しかしわたしの紹介がすむと、すぐによそよそしさがなくなった。四人がうちとけた感じでとりかこむなか、ヴァニングがわたしの耳もとで囁いた。
「これがお話ししたグループの本当のメンバーなんですよ。向こうにいる連中をごらんになっているときのお顔つきから、どう思ってらっしゃるかはわかっておりますし、わたしも同感です。あれは莫迦な連中ですよ。ここにいるわたしたちは秘儀参入者なのです。それではどうしてあんな連中がいるのかと、不思議に思われるでしょうね。お答えしましょう。攻撃は最大の防御なのです」
「攻撃は最大の防御」わたしはとまどって、おうむがえしにいった。
「そうです。たとえば、わたしとここにいる友人たちが、黒魔術の真の学徒だとしたらどうでしょう」

ヴァニングが「たとえば」といった口調には、微妙なニュアンスがあった。

「もしもそうだとしたら、一般社会の人たちは反感をもったり、とりざたしたり、あれこれかぎまわったりするのではありませんか」

「そうでしょうね」わたしはうなづいた。「確かにそうだと思います」

「そうなのですよ。ですから、わたしたちは攻撃方法を編みだしたのです。オカルティズムに常軌を逸した興味をもっていることを公然と認め、こうした莫迦ばかしいパーティを開くことで、邪魔されることなく真剣な研究ができるわけです。賢明なやりかたでしょう」

わたしは笑みをうかべながらうなづいた。ヴァニングは莫迦ではなかった。

「興味がおありかと思いますが、デルヴィン博士はわが国で指折りの民族学者です。ド・マリニーは有名なオカルティストですが、数年まえにランドルフ・カーターの事件に関係したことは、おぼえてらっしゃるでしょう。ロイスはわたしの助手で、ウィールダン教授はあの高名なエジプト学者です」

おもしろいことに、この夜はエジプトずくしだった。

「興味深いものがあると申しあげましたが、これからお目にかけましょう。しかしそのまえに、半時間ほど、あの豚どもの相手をしなければなりません。そのあとで、わたしの部屋に行って、本当の会合を開くことにします。もうしばらくご辛抱ください」

四人の男がまた頭をさげ、わたしはまたヴァニングに連れられて、部屋の中央にもどった。

すでにダンスはおわり、客たちはいくつかのグループにわかれて、漫然としゃべっていた。デーモンどもがミント・ジューレップを飲み、大地母神に生贄（いけにえ）としてささげられる処女たちが口紅をつけなおしていた。海神ネプトゥーヌスが葉巻をくわえて、わたしのそばを通りすぎた。甲高い笑い声がしていた。

わたしは『赤死病の仮面』のことを考えた。そのときあの男を見たのだ。

その男のやってきた様子は、まさしくポオの小説のようだった。部屋の端にある黒と緑の綴（タピ）織（スリー）がわかれ、そして男がすべるような足どりでやってきたさまは、綴織の背後にあるドアというよりは、綴織そのものの隠された奥からあらわれでたかのようだった。

銀色の蠟燭が投げかける光によって、男の姿はシルエットになり、不気味な光輪につつまれてやってきた。蠟燭の炎が奇妙に揺れることで、男の姿がぼんやりしたりくっきりしたりするものだから、わたしは一瞬、プリズムを通して見ているような印象をうけた。

男はエジプトの神だった。

どことなく不穏な輪郭をもつ体を、長い白のローブが隠していた。揺れる袖口から鉤爪（かぎづめ）のある手がだらりとたれて、指には宝石がきらめき、ホールス神の印のはめこまれた黄金の杖を握りしめていた。

ローブには黒のケイプ・カラーが備わって、これが堅く立ちあがっていることで、怖ろしい

頭部の背景をなしていた。
　頭はクロコダイル、体はエジプトの神官のものだった。
その頭部は……実に悍しかった。蜥蜴に似た傾斜する頭蓋骨が、緑一色の鱗におおわれ、毛は一本もなく、ねばねばして光沢をはなち、吐き気をもよおすほどだった。大きく骨がはりだしたところに、くすぶっているような目があって、忌わしくも長い爬虫類の鼻の背後から凝視していた。皺だらけの鼻づらが、大きな顎を半開きにして、だらりとたれるピンク色の舌と、短剣のように鋭い泡立った歯をあらわにした。
　何という仮面か。
　わたしはかなりの感受性があることを誇りに思っている。何ごとも強く感じとれるのだ。この気味悪い仮装の極致をまじまじと見つめると、感覚という感覚にショックをうけた。この仮面をかぶった者が本物のように思えた――グロテスクさで見劣りのする者たちにくらべ、真にせまっていた。風変わりな衣装そのものが、まわりにいる者たちの当座しのぎの扮装と著しい相違を示し、さらに説得力をくわえているようだった。
　男はひとりきりでいるらしく、歩いているあいだ話しかけようとする者もなかった。わたしはまえに出て、ヴァニングの肩をたたいた。この男に紹介してもらいたかった。
　しかしヴァニングは演壇のほうに進み、楽団に顔を向けてしゃべった。わたしはふりかえり、クロコダイルの男に近づこうとしかけた。

男の姿はなかった。
わたしはやっきになってあたりを見まわした。無駄だった。男は消えうせていた。消えたのか。はたして最初からいたのか。わたしが男を見たのは――見たと思ったのは――ほんのつかのまのことだった。わたしはまだ酔いがのこっていた。頭のなかにはエジプトのことばかりが思いうかんでいた。おそらく想像の産物だったのだろう。しかしどうしてこのうえもない現実感があったのか。
こうした疑問には答えるすべもなく、わたしは演壇に注意をひかれた。ヴァニングは客たちを三十分間もてなすといっていた。本当の関心事を隠すための餌にすぎないそうだが、予想していたよりも印象的なものだった。
照明が青いものになった――すさんだ墓場の靄のような青だった。影が藍色になっていくにつれ、参加者が席についた。楽団のいる演壇の下方からオルガンの調べが高まり、音楽が鳴りひびいた。
わたしの大好きな曲――チャイコフスキーの素晴しくも格調高い『白鳥の湖』の陰鬱な第一幕――だった。単調な低い音が嘲るような調子にかわり、甲高いものになって大きく鳴りひびく。囁き、唸り、威嚇し、おびやかす。まわりで群をなす間抜けたちさえ、感動して黙りこくっていた。
このあとには悪魔の舞踏がつづき、魔術師があらわれ、黒ミサの儀式がおこなわれて、まこ

とに怖ろしい生贄の幻影がもたらされた。すべてがきわめて異様かつ病的で、偽りのものだった。やがて灯がついて楽団がまた演奏をはじめたとき、わたしはヴァニングを見つけ、足早に部屋を横切った。四人の仲間が待っていた。

ヴァニングがついてくるようにいって、演壇の近くにあるカーテンを通りぬけた。わたしたちはひっそりと部屋を出て、暗くされた長い廊下を歩いた。ヴァニングがオークの鏡板をはったドアのまえで立ちどまった。鍵がひかり、きしりながらまわった。そうしてわたしたちは書斎に入った。

椅子、葉巻、ブランディ――この館の主人が笑みをうかべながら勧めてくれた。ブランディ――極上のコニャック――を飲むと、わたしはまたしても心がさまよいはじめた。何もかも、ヴァニングも、ヴァニングの友人たちも、この大邸宅も、夜のことすべてが非現実的に思えた。クロコダイルの仮面をかぶっていた者以外の何もかもがだ。わたしはヴァニングにたずねようとして……

そのとき突然、声がわたしを現実にひきもどした。ヴァニングがわたしに話しかけていた。その声はおごそかで、普通のものではなかった。まるでヴァニングの声をはじめて耳にしたかのようだった。これが本当のヴァニングであるかのようだった。来客を歓待する館の愛想のよい主人の姿は、客たちの仮装と同じように実質のない、見せかけだけのものであるかのようだっ

た。
　ヴァニングが話すにつれ、わたしは五人にまじまじと見つめられているのを知った。デルヴィンのケルト系の青い目、マリニーの射ぬくようなフランス人らしい茶色の目、眼鏡をかけたロイスの灰色の目、ウィールダンの暗褐色の目、そしてヴァニングの砲金灰色の鋭い目が、一心にわたしを見つめていた。五人がそれぞれ問いかけているようだった。
「勇気はあるのか」
　しかしヴァニングが口にしたのは、はるかに月並なことだった。
「普通ではない時間をおすごしいただけると、お約束いたしました。そのために、おこしいただいたわけです。しかし正直に認めておかなくてはなりませんが、わたしは楽しんでいただくことだけを願っているのではありません――わたしにはあなたが必要なのですよ。あなたのお書きになったものを拝読させていただいております。真摯な研究者であるあなたから、ぜひとも知識と助言をたまわりたいのです。そういう事情もあって、ほとんど面識のないあなたに、わたしたちの秘密結社にくわわっていただきました。わたしたちはあなたを信頼しています――そうせざるをえませんから」
「安心なさってください」わたしはもの静かな声でいった。そのときはじめて、ヴァニングが熱心なだけではなく、神経を高ぶらせてもいることがわかった。葉巻をもつ手が震え、エジプトの神官の頭巾につつまれる顔には汗が吹きだしていた。学者めいた研究家のロイスは僧服の

ベルトをもてあそんでいた。のこる三人はわたしを見つめたままで、その沈黙は、ヴァニングの声にこもる不自然な熱心さよりも、さらに心騒がされるものだった。

　いったいこれはどういうことなのか。わたしは麻薬をもられて、夢でも見ているのか。青い光、クロコダイルの仮面、芝居がかった秘密。しかしわたしは信じた。

　やがてヴァニングが大きな書斎用のテーブルにあるレヴァーを押すと、テーブルの下の見せかけだけの引出しが開き、そこに開口部があらわれた。ヴァニングがマリニーの助けをかりて、ミイラの柩をひきだした。

　柩の特異さに気づくまえから、わたしは興味をかきたてられていた。ヴァニングが書棚に近づき、本をかかえてもどってきた。そして何もいわずに本をわたしに手渡した。それらの本はヴァニングの信用証明書のようなものだった。ヴァニングがこれまでに話したことのすべてを保証するものだった。

　一流のオカルティストや奥義をきわめた者以外に、これら尋常ならざる書物を所有する者などいるわけもない。ぼろぼろになった表紙は、すべて薄いガラスで保護されていたが、悪名高い『エイボンの書』、そして『屍食教典儀』とほとんど伝説的な『妖蛆の秘密』の初版本があった。

　ヴァニングがわたしの顔色を見て、かすかな笑みをうかべた。

「ここ数年のあいだ、これらの書物を徹底的に研究しているのです」そういった。「どういう

書物であるかはご存じですね」

わたしは知っていた。『妖蛆の秘密』について書いたことがあるし、ルドウィク・プリンの文章を思いだしては、いいようもない嫌悪や漠然とした不安をおぼえることがあるほどなのだ。

ヴァニングが『妖蛆の秘密』をひもといた。「この書物については、よくご存じでいらっしゃる。お書きになったことがありますからね」

ヴァニングが「サラセン人の儀式」として知られている章を指差した。

わたしはうなづいた。「サラセン人の儀式」なら、実によく知っている。十字軍時代のことだというふれこみだが、プリンがエジプトやオリエントに謎めいた滞在をしたときのことが記されているのだ。イスラムの悪魔や鬼神の伝承、暗殺教団の秘密、アラビアの食屍鬼譚(しょくしきたん)、熱狂派修道僧の秘められた悪習が暴露されている。この章は秘密につつまれた古代エジプトの伝説に関する資料の宝庫であり、事実、わたしはぼろぼろになったページから、小説の題材を数多く頂戴していた。

またしてもエジプトだ。わたしはミイラの柩に目を向けた。

ヴァニングたちがわたしを一心に見つめた。そしてヴァニングが肩をすくめた。

「よろしいですか」ヴァニングがいった。「手のうちをすっかりさらけだしましょう。つまり、まえにも申しあげましたように、わたしたちはあなたを信頼しなければなりませんから」

「お話しください」わたしはもどかしい思いでいった。こういう謎めかしたやりかたはいらだ

たしいばかりだった。
「すべてはこの書物からはじまるのですよ」ヘンライカス・ヴァニングがいった。「ここにいるロイスが見つけだしてくれたのです。わたしたちはまずブバスティスの伝説に興味をもちました。しばらくのあいだ、コーンウォールで調査することを考えたほどです――イギリスにあるエジプトの廃墟を調べてみようと思ったのです。しかしそのうち、エジプト学に実り豊かな分野があることを知りました。昨年ここにいるウィールダン教授が発掘調査にでかけるとき、興味深いものを発見したなら、いくら高くついてもいいから手に入れてくれと依頼したのです。教授は先週、これをもちかえってくれました」
ヴァニングがミイラの柩に目を向けた。わたしもそれにならった。
ヴァニングはそれ以上の説明をしなかった。ミイラの柩を入念に調べ、「サラセン人の儀式」から学びとった知識をくわえれば、まちがいのない結論が得られる。
柩にある神聖文字と刻印は、柩のなかにエジプトの神官のミイラがあることを示していた。それもセベク神の神官のミイラがだ。「サラセン人の儀式」はこのことにふれている。
わたしは記憶をよみがえらせた。尊敬すべき人類学者によれば、セベクは秘密につつまれたエジプトの小神であって、ナイル河の豊穣(ほうじょう)の神だったという。名のある権威たちの考えが正しいなら、セベクの神官たちのミイラは四体しか発見されていないが、墳墓でおびただしい小像や人形や絵が見いだされたことで、この神が崇拝されていたことは立証されている。エジプト

学者はセベク神の来歴を十分に跡づけてはいないにせよ、ウォリス＝バッジが異端の説をたてたり、奔放な繋がりをほのめかしたりしているのだった。

しかしルドウィク・プリンは深く探りを入れた。わたしはプリンの文章を思いだして、ぞくっと身を震わせた。

プリンは「サラセン人の儀式」で、アレクサンドリアの予言者たちから学びとったことや、砂漠を旅したこと、そしてナイルの隠された谷間でひそかに墓荒しをしたことを語っている。

エジプトの神官の地位や、神官たちが権力の座にのぼりつめたことについて、プリンが語る話は、歴史的に見て信憑性がある——それによれば、一般に知られていない自然の神神の僕たちは、玉座の背後からファラオを支配して、国土を掌握するようになった。エジプトの神神と宗教は秘められた実在に基づいているからだ。奇怪な複合生物——半人半獣の巨大な生物——が太古の地上に生息していた。大蛇セト、肉食のブバスティス、大いなるオシリスは、人間の想像力のみによって生みだされたのではない。わたしはトート神のことやハルピュイアにまつわる物語、ジャッカルの頭をしたアヌビスのことや狼男の伝説を思いだした。

古代人は四元の力や冥界の獣と関係をもっていた。自分たちの神神、すなわち獣の頭をした人間を招喚することができたのだ。ときにそうすることがあった。そうして権力を握ったのだ。

やがて彼らがエジプトを支配するようになり、彼らの言葉が法になった。国じゅうに絢爛たる神殿が建てられ、国民の七分の一が教団に忠誠を誓った。千もの神殿のまえで香の煙——そ

して血のにおい――が立ちのぼった。神神の獣の口が血を求めたからだ。
神官たちが神神を崇拝したのも当然であって、彼らは神聖な支配者たちと異様かつ奇異な契約をかわしていたのだった。尋常ならざる背教によって、ブバスティス信仰はエジプトから追放され、つまびらかではない醜行があったことで、ナイアーラトテップの象徴と物語は忘れられてしまった。しかしセベクの神官たちはますます力を強め、大胆になり、彼らの求める犠牲や寄進は法外で多大なものになった。
神官たちは永遠に再生をつづけるため、神神におもねって、神神の奇異な欲望をみたしたのだった。神神の呪いでもって自分たちのミイラを守るため、たっぷりと血のある身がわりを生贄としてささげた。
プリンはセベク派について、ことにくわしく述べている。豊穣の神としてのセベクが永生の源を支配すると、神官たちは信じたのだ。再生の周期が完了するまで、セベクが神官たちを守り、墓所に侵入しようとする敵を滅ぼしてくれるという。神官たちは黄金のクロコダイルに処女を八つ裂きにさせてセベクにささげた。セベクはナイルのクロコダイルの神として、男の体とクロコダイルの頭を備え、両者の貪欲な欲望をもっているからだ。
こうした儀式の描写は凄絶このうえもない。神官たちが神を真似てクロコダイルの仮面をつけるのは、これが地上でのセベクのあらわれであるからだ。一年に一度、セベク神そのものがメンフィスの神殿の内陣で、大神官たちのまえに姿を見せるが、そのときクロコダイルの頭を

もつ男としてあらわれると信じられていた。
熱烈な信者たちはセベクが自分たちの墓を守ってくれると信じ、かくして数えきれない処女が、彼らの信仰を支えるために死んでいった。
わたしはセベクの神官のミイラを見つめながら、こういったことをとりいそぎ思いだしたのだった。
それというのも、柩のなかを見ると、ミイラがむきだしの状態になっているのがわかったからだ。ガラスの蓋が備えられているのを、ヴァニングがとりはずした。
「話はご存じですね」ヴァニングがわたしの目の色を読みとっていった。「ミイラをここに置いてから一週間になります。ここにいるウィールダンのおかげで、化学処理をすませました。しかし胸にこんなものが見つかったのですよ」
ヴァニングが澄みきった翡翠の護符を指差した――蜥蜴の形をしていて、びっしりと表意文字が刻みこまれていた。
「何ですか」わたしはたずねた。
「神官たちの暗号文字です。マリニーはナアカル語だと考えています。翻訳ですか。呪いですよ――プリンが記しているように、墓荒しの首に呪いをかけているのです。セベクの復讐があるといっておどして。よくこれだけ卑劣な言葉を書きつらねたものですよ」
ヴァニングの軽口は不自然なものだった。そのことはほかの四人がそわそわしていることで

わかった。デルヴィン博士は神経質そうに咳ばらいをしたし、ロイスは僧服をまさぐり、マリニーは顔をしかめていた。ノームじみたウィールダン教授が近づいてきた。しばらくミイラを見つめ、薄闇のなかで考えこんでいるような、目のない眼窩にこもる秘密を解き明かそうとしているかのようだった。

「わしの考えを話してあげたらどうかね、ヴァニング」教授が小さな声でいった。

「ウィールダンが調査をおこなってくれているのです。どうにか当局の目をかすめてミイラを手に入れましたが、そうするには高くつきましたよ。どこで見つけたかを話してくれましたが、聞いて楽しい話ではありませんでしたね。キャラヴァンの人足が帰路に九人死にましたが、水が悪かったせいなのかもしれません。残念なことに、教授はわたしたちに背を向けるようになりました」

「そうではないぞ」ウィールダンが鋭く口をはさんだ。「ミイラを処分しろといったのは、死にたくないからだ。ここでミイラを儀式につかうつもりだったが、そんなことはできん。わしはセベクの呪いを信じておるからな。

「もちろんきみたちも知っておるように、神官のミイラは四体しか発見されておらん。ほかのミイラは秘密の墓所で眠っておるからな。四体のミイラを見つけた者はすべて死んでしまった。わしは三番目のミイラを見つけたパーティントンを知っておった。パーティントンは帰国したとき、この呪われた神話を徹底的に調べておったよ――しかし報告書を発表するまえに死んで

しまった。最期は奇妙なものだったな。ロンドンの動物園で、橋からクロコダイルの穴に落ちたんだ。ひきあげられたときには、見分けもつかない姿になりはてておった」

ヴァニングがわたしを見つめた。「こまったものですよ」うらめしそうにいった。そして、あらたまった口調でつづけた。「こんなこともあって、あなたにおいでいただいて、秘密をうちあけたわけです。学者として、オカルティストとしてのご意見をお聞かせください。ミイラは処分したほうがいいのでしょうか。この呪いの話を信じますか。わたしは信じませんが、最近は不安でたまらないのです。あまりにも数多く奇妙な偶然が起こることを知っていますし、プリンの記録が正確であると信じていますからね。わたしたちがミイラをどうするつもりだったかは問題ではありません。どんな神さえ怒らせるほどの冒瀆(ぼうとく)行為なのですから。それにわたしは、クロコダイルの頭をもつものに喉を破られたくはありません。お考えをお聞かせください」

不意にわたしは思いだした。仮面をつけていたあの男のことを。あの男は神を装うセベクの神官に似せた扮装をしていた。

わたしは目にしたものをヴァニングに話した。「誰なんですか」そうたずねた。「ここに呼ぶべきですよ。まさにうってつけの人物じゃありませんか」

ヴァニングのおびえた様子は見せかけのものではなかった。わたしはヴァニングが震えあが

るのを見て、口にしたことを後悔した。
「そんな男は見ていません。本当に。すぐに見つけなければ」
「洗練された恐喝かもしれませんね」わたしはいった。「あなたとウィールダンさんのことで何らかの証拠を握っていて、あなたがたをおどして口止め料をせしめるつもりじゃありませんか」
「そうかもしれない」ヴァニングの声に確信はなかった。
「ぐずぐずせずに」ヴァニングがいった。「部屋にもどって、探すんだ。そいつをつかまえて、ここへ連れてきてくれ」
「警察に知らせましょうか」ロイスがはりつめた声でいった。
「莫迦なことはするな。急ぐんだ」
四人が部屋をはなれ、足音が廊下を遠ざかっていった。
つかのま沈黙がたれこめた。ヴァニングが笑みをうかべようとした。わたしは妙に朦朧とした状態におちいった。わたしの夢のエジプトは……もしかして現実のものなのか。謎めいた仮面の男を一瞥しただけなのに、どうしてこうも脳裡に焼きついているのか。セベクの神官たちは復讐の契約を結ぶために血を流した。古代の呪いが成就するようなことがありうるのか。それともヴァニングが狂っているのか。
しめやかな音がした……

わたしはふりかえった。戸口にクロコダイルの仮面をつけた男がいた。
「あいつだ」わたしは叫んだ。「あの……」
テーブルにもたれかかったヴァニングは、顔面が蒼白になっていた。戸口にいる男を見たが、苦悩に満ちた目が怖ろしいことを無言でわたしに告げていた。
クロコダイルの仮面をつけた男は……わたし以外に見た者はいなかったのだ。そしてわたしはエジプトの夢を見ていた。そしてこの部屋にはセベクの神官のミイラがある。
セベクは……クロコダイルの頭をもつ神なのだ。そしてセベクの神官たちは神に似せた装いをして……クロコダイルの仮面をつけた。
わたしはヴァニングに、古代の神官たちの復讐について警告したばかりだった。わたしが目にしたものについて話したとき、ヴァニングも信じて震えあがった。そしていま、戸口に、ものいわぬ男が立っている。辱しめられた仲間の仇をうつために、復活した神官があらわれたと思うのが、筋のとおったことではないのか。
しかしわたしには信じられなかった。男が悪意をもってひっそりと入ってきたときですら、その目的を察しなかった。ヴァニングがミイラの柩にあとずさり、震えあがって呻きをもらしたときですら、わたしには得心がいかなかった。
つぎの瞬間、何もかもが速やかに起こったために、わたしには行動にうつるひまもなかった。異常な侵入者につめよろうとしたとき、運命がふりくだったのだった。爬虫類特有の突進でもっ

て、白いローブにつつまれた体が部屋を波打って進んだ。一瞬のうちに、すくみあがるヴァニングのまえにそびえたった。鉤爪のある手がぐったりした肩に食いこみ、そして仮面の顎が開いて動いた。ヴァニングの震える喉に食いこんで動いたのだ。
わたしはとびかかっていったが、妙におちつきはらっていた。「悪魔のように賢明な殺人だ」そんなことを思った。「比類のない殺人の武器だ。仮面の歯のしかけは実に狡猾につくられている。狂気の沙汰だ」
そして平然とした感じで、ばけものじみた顎がヴァニングの喉にかみつくのを見まもった。鱗におおわれた怖ろしい頭が動くのが、映画のクローズ・アップのように見えた。
一瞬のうちに、わたしは理解した。にわかな決意をもって、白いローブの袖をつかみ、あいているほうの手で殺人者の仮面をひっぱろうとした。
殺人者が向きをかえて頭をさげた。わたしの手はすべり、つかのま、クロコダイルの血まみれの顎にふれた。
瞬時に侵入者は身をひるがえして姿を消したが、わたしはミイラの柩に横たわる亡骸をまえにして、悲鳴をあげていた。
ヴァニングは死んでしまった。殺人者は姿を消した。館のなかには浮かれ騒ぐ者たちがひしめいている。ドアに近づいて、助けを求めればよいだけだった。
わたしはそうはしなかった。つかのま恐怖にかられて部屋の中央に立ちつくし、あたりを見

まわしながら悲鳴をあげたのだった。すべてのものがぐるぐるまわっているように見えた――血にまみれた本、ひからびたミイラ、格闘によってくだかれて赤く染まった胸、床に横たわる微動だにしない真っ赤なもの。目のまえにあるものすべてがぼやけていた。
そのときになってようやく、意志の力がよみがえった。わたしは踵を返して逃げだした。
ここで話をおえられればよいのだが、そうはいかないのだ。最後まで記さなければならない。ふたたび心の安らぎが得られるように、暴露しておかなくてはならない。
正直に記そう。クロコダイルの仮面をつけた男のことを執事にたずね、そのようなおかたはいらっしゃいませんでしたといわれていたら、いい小説になったことだろう。しかしこれは小説ではなく、事実なのだ。
わたしはあの男がいたのを知っているし、ヴァニングが死ぬのを目撃してからは、その場にとどまって誰かと言葉をかわすようなことはしなかった。仮面をつけた殺人者につかみかかったあと、悲鳴をあげながら逃げだしたのだ。急を告げることもせず、浮かれ騒ぐ者たちのなかを駆けぬけて、館からとびだし、通りを走りに走ったのだった。嘲笑う恐怖に駆りたてられるまま、やみくもに走り、ついには意識を失って、明るい小路にもどったのだ。そこにはわたしの知った恐怖とは無縁に暮す、笑いさざめく群衆がいた。
わたしはくわしいことを調べようともせずにニューオーリンズを去った。わざと新聞を買わなかったので、警察がヴァニングの死体を発見したかどうかや、死因を調べているかどうかも

わからない。何も知ろうとはしなかったし、知ろうとする勇気とてないのだ。
まっとうな説明がつけられるのかもしれない――しかしそれでもなお……
はっきりさせないほうがいいのだろう。わたしは酔っていたのだと、やっきになって自分にいい聞かせようとしている。あんなことは起こらなかったか、起こったとしても、一部だけは現実のことではないのだ、と。ヴァニングが死んだことは確かだが、セベクの伝説やミイラの柩については何もいえない。わたしはヴァニングに本当のことを話したし、わたしの信じていることは悍しくも確証されてしまった。
謎の侵入者が奇妙なつくりのされたクロコダイルの顎をあわれなヴァニングの喉に食いこませた、あの最後の瞬間、鋭い歯が食いこんで引き裂いたときに、はっきりとわかったのだ。そのときわたしは手をのばし、ほんのつかのまふれただけでかわされたのだが、わたしはそれだけで、悲鳴をあげながら、狂乱して逃げだしてしまった。
わたしはあの怖ろしい一瞬、身の毛のよだつほどリアルにつくられた血まみれの仮面にふれたと思った。ただ一度、慄然たる感触を得ただけで、男は姿を消してしまった。しかしそれだけで十分だった。
血まみれの爬虫類の鼻づらに手をのばしたとき、わたしの指にふれたものは、仮面などではなく、まさしく生けるものの皮膚だったのだから。

ヒュドラ

ヘンリイ・カットナー
三宅初江訳

われわれのまわりには善の秘蹟とともに悪の秘蹟があり、われわれは未知の世界、すなわち洞窟や影や黄昏(たそがれ)の住民の棲(す)むところで暮しているのである。人間はときとして進化の道を逆行することもあり、悍(おぞま)しい伝承はまだ死にたえるにはいたっていない。

アーサー・マッケン

I

二人の男が死んだ。いや、死んだのは三人かもしれない。それだけのことはわかっている。煽情的なタブロイド版の新聞は、大きな見出しをかかげ、バルティモアの著名な作家にしてオカルティスト、ケネス・スコットが不可解にも首を切り落とされた事件を毒どくしく伝えたあと、スコットとの文通が作家仲間によく知られていたロバート・ルドウィクの失踪を、これも

派手な見出しをかかげて報道した。同じように不可解で、さらに凄惨なポール・エドマンドの死が、大陸の東と西にわかれていながらも、スコットの事件と結びつけられた。エドマンドの手に、あるものが堅く握りしめられていて、これが議論を呼んだことによる——何ごとも信じやすい人びとは、これがエドマンドに死をもたらしたと主張している。そんなことはありそうもないが、しかしポール・エドマンドが頸動脈を切断されて出血多量で死んだのは事実だし、この事件に現代の科学では説明しがたいものがあるのも事実である。

タブロイド版の新聞はエドマンドの日記を大きくあつかったが、ごく普通の日刊紙は、イエロー・ジャーナリズムに走っているとの非難にさらされることなく、この異常な文書をあつかうのは困難だった。『ハリウッド・シティズン＝ニューズ』は、同業他紙のためにこの問題を解決して、日記のさほど異様ではない箇所を引用するとともに、エドマンドが小説家なので、その日記は事実を忠実に記録したものではないとほのめかした。私家版の小冊子、『魂の射出』が日記で重要な役割を演じているが、これは純然たる架空のものだと考えられている。どこの書店もこの小冊子のことは知らず、カリフォルニアの著名な愛書家であるラッセル・ホジキンズ氏にいたっては、非業の死をとげたポール・エドマンドの頭のなかに存在するだけだと言明しているほどだ。

しかしエドマンドの日記をはじめ、エドマンドの机で見つかった書類や手紙によれば、この小冊子がもとで、ルドウィクとエドマンドは怖ろしい実験に着手したのである。ルドウィクは

カリフォルニアにいる文通相手を訪ねようとして、ニューヨークからパナマ運河を経由する船に乗りこんだ。カーナティック号は八月十五日にパナマ運河に入り、ルドウィクはサン・ペドロを数時間にわたって歩きまわった。そしてサン・ペドロの黴臭い「交換所」で、『魂の射出』を買ったのである。ハリウッドのアパートにいるエドマンドを訪ねたとき、ルドウィクはその小冊子を携えていた。

ルドウィクもエドマンドもオカルトになみなみならぬ関心をもっていた。アメリカで指折りの蔵書をもつスコットと交友があることで、妖術や悪魔学にも興味をいだいていた。

スコットは妙な男だった。ほっそりして、目が鋭く、無口で、バルティモアの古い褐色砂岩の家にほとんど閉じこもっていた。秘教についての知識は途方もなく、『黯黒儀式』まで読んでおり、ルドウィクやエドマンドに宛てた手紙では、なかば伝説的なその写本にある漠然とした暗示や警告が、実際にはどのような意味をもつかをほのめかした。スコットの膨大な蔵書には、シニストラリ、ザンケリウス、ググノー・デ・モッソーの著書があったし、書斎の金庫のなかには、『カルナクの書』や、怖るべき六十石碑、そしてこの世に一部しか現存しないといわれる冒瀆的な『古の鍵』といった、凶まがしい文献に基づく大部の抜書があると噂されていた。

したがってルドウィクとエドマンドの二人が、スコットが慎重にほのめかした神秘のヴェールをはぎとって、神秘を目のあたりにしたがったのも無理はない。エドマンドの日記には、悲

劇の直接の原因は好奇心であったと記されている。
しかし小冊子を携えてきたのはルドウィクであり、エドマンドのアパートで、エドマンドとともに熱心に読みふけったのだった。確かにエドマンドは小冊子のことをはっきりと書いているのだが、不思議なことに、愛書家の誰一人としてこれを見つけだせずにいる。日記によれば、四×五インチほどのかなり小さなもので、粗末な茶色の紙が表装につかわれ、本文用紙は黄変してぼろぼろになっていたという。印刷は――ｓが長くのばされる十八世紀の活字がつかわれて――粗雑になされ、刊年も出版社名もなかった。わずか八ページのもので、七ページまではエドマンドが神秘主義の陳腐な議論と呼ぶものに費やされ、現在「アストラル体の投影」として知られる技法の具体的な手順が最後のページにあった。
全般的な手順は二人とも知っていた。それまでに調べたことで、魂――現代のオカルト用語でいう「アストラル体」――が、エーテル体もしくは霊を遠くへ投影できることをつきとめていた。しかし具体的な手順となると――それが見つかったというのはただごとではない。必要な準備について、エドマンドはわざと言葉をにごしているが、日記に書きとめられたことから察して、どうやら二人は数人の化学者をたずね、必要な材料を手に入れたとおぼしい。悲劇の現場で見つかったインド大麻をどこで入手したかは不明だが、これはつきとめることもできるだろう。
八月十五日に、ルドウィクがエドマンドに知らせることなく、スコットに航空便で手紙を送

り、小冊子のことを知らせて助言を求めた。
八月十八日の夜、ケネス・スコットがルドウィクの手紙をうけとってから半時間ほどたったころ、二人の若いオカルティストが怖ろしい実験にとりかかった。

II

その後、エドマンドは自責の念にかられた。日記には、ルドウィクが何らかの危険を感じとっているかのように、不安そうにしていたことが書きとめられている。ルドウィクが実験を数日延期しようといいだしたが、エドマンドは神経質になっているルドウィクを笑った。実験をおこなうことになり、二人は必要な材料を火鉢に入れて燃やした。
実験に必要なものはほかにもあったようだが、エドマンドはきわめて漠然としたことしか記していない。日記には「七つのランプ」や「下位の色」といった不可解な言葉が散見されるが、これらが何を意味するものであるかは謎である。二人は大陸を横断してアストラル体を投影することに決めた。つまりケネス・スコットと意思の疎通をはかろうとしたのだ。この試みには若者二人の虚栄心がうかがえる。
火鉢のなかにあったものが分析されたことにより、インド大麻がふくまれていたことが判明

している。多くの者はこの事実をうけて、これ以後エドマンドの日記に書きこまれていることが、阿片や大麻による白日夢の幻想でしかなく、二人がそのとき一途に思いこんでいたことが誘因になったのだと考えている。エドマンドはバルティモアにあるスコットの家を見たように思った。しかし心にとめておかなければならないが、エドマンドはテーブルに置いたその家の写真を凝視して、そこへ行きたいと念じつづけたのだ。したがって、見たいと思っていたものを夢に見たというのが、筋のとおった考えかただろう。

しかしルドウィクも同じ幻視を体験した。少なくともそういったとされている――エドマンドが日記に嘘を書いているのでなければの話だが。夢の現象の専門家として名高いペリー・L・ルイス教授の意見によれば、エドマンドは大麻による幻視を体験しているあいだ、それと意識しないまま記憶にものこさずに、何を見ているかをしゃべりつづけ、同じような催眠状態にあるルドウィクが、エドマンドの言葉に刺激され、心にうかぶものを見たにすぎないのだという。

エドマンドはその日記に、火鉢のなかで燃えあがるものを見つめつづけたあと、睡眠に似たトランス状態におちいって、まわりのものははっきりと見えていながらも、奇妙に変化していたと記しているが、これは麻薬の作用によるものでしかないだろう。大麻を吸引する者は、狭い玄関寝室が穹窿天井のある巨大な部屋に変化するのを目にするというが、これと同様に、エドマンドは部屋が大きくなっていくように思えたと述べている。しかし奇妙なことに、その広がりかたが異常なもので、部屋の形がしだいに狂いだしたというのだ。エドマンドはこの点を

強調するばかりで、説明しようともしていない。いつその変化が目立ったものになったのかはわからないが、やがてエドマンドは、まだ自分の部屋ではありながらも、部屋がある一点を中心にするまで変化して、自分がその中央にいるのを知った。

日記のこの箇所はほとんど意味をなさないものになっている。エドマンドは幻視で見たものを描写するのが困難だったようだ。部屋の直線や曲線がすべてある一点、麻薬や化学薬品がくすぶっている火鉢を指しているように思え、日記ではこのことが妙に強調されている。

絶えまのない響きがごくかすかに聞こえたが、しだいに小さくなって、ついには消えてしまった。エドマンドはこの音を麻薬の影響だと思った。その後まもなくわかったことだが、スコットが長距離電話で連絡をとろうとしていたのだった。甲高いベルの音はしだいに弱まって消えてしまった。

エドマンドは実験精神の旺盛な男だった。記憶にあるいくつかのもの、壺(つぼ)やランプやテーブルに目を向けようとした。しかし部屋が粘液のような流動性をおびたようで、視線が歪(ゆが)んだ直線や曲線にそってすべってしまい、また火鉢を見つめるようになった。そのとき火鉢のあるところで異常なことが起こっているのを知った。

火鉢はくすぶってはいなかった。不思議な結晶のようなものが火鉢のなかにあらわれつつあった。エドマンドはこれを描写することができず、部屋の歪んだ線の延長のようなものであって、歪んだ線のすべてを中心の彼方に運んでいるようだとだけ述べている。こうした考えが血迷っ

たものであることに気づきもせず、結晶のようなものを見つめると目が痛みだしたが、それでも視線をそらすことができなかったとしている。
　結晶物がエドマンドをひきよせた。エドマンドは不意に、苦悶のみなぎる吸引を感じた。あたりに甲高い唸りがして、突然エドマンドは火鉢のなかにあるもののほうへと、速度を増しながら漂っていった。そして結晶物に吸いこまれた——エドマンドはそんな謎めいたことを記している。一瞬、たまらないほどの冷気を感じたかと思うと、新たな光景が目のまえにあらわれた。

　灰色の霧と不安定さ。エドマンドは自分自身の内部に存在する妙な流動感を、そんなふうに述べて強調している。不思議なことに、あてもなく揺れながら漂う煙にでもなったようだという。しかし見おろすと、服を身につけた実質のある自分自身の体が見えた。
　エドマンドは怖ろしい不安感にむしばまれはじめた。霧が濃密になって渦を巻いた。阿片吸引者にはありふれた、いわれのない恐怖や悪夢にとらわれた。何かこのうえもない脅威を秘めた怖ろしいものが近づいてくるように思った。そしてだしぬけに霧が消えうせた。
　遙か下に見えるものを、最初は海だと思った。エドマンドは支えもなしに宙にうかんでいて、見渡すかぎり、波打つ灰色のものが微光を放ってうごめいていたという。うねる鉛色の表面には、黒い円形のものが数えきれないほど点在していた。エドマンドはそうするつもりもなかっ

たのに、まっすぐひきおろされていくのを感じ、謎めいた灰色のものに近づくにつれ、はっきり見えるようになってきた。
それが何であるかは判別できなかった。原形質状で、これといった特徴のない、灰色の粘着物が渺茫と広がっているにすぎないようだった。しかし黒い円形のものは頭だとわかった。
エドマンドの脳裡に、かつて読んだ本の記憶がよみがえった。十二世紀の修道士アルベリコの著わした、地獄くだりの記録とされる書物だ。アルベリコはダンテのように、亡者の苦しみを見た。神を冒瀆した者たちは（アルベリコはおおげさに学者ぶったラテン語で記している）溶けた金属の湖に首までつかっていたという。エドマンドはアルベリコのそんな描写を思いだした。するうち、おびただしい頭が灰色の粘着物に沈んでいる生物たちの頭部ではなく、灰色の粘着物と同質のものであることがわかった。灰色の粘着物から頭部がはえているのだった。
エドマンドはもはや恐怖すらおぼえなかった。妙に超然とした好奇心でもって、眼下の異様な光景を見渡した。灰色の粘着物の海で何千もの人間の頭部が揺れ動いていたが、人間のものではない頭部がさらに多くあった。一部には類人猿めいたところがあったが、それ以外の頭部はほとんど生物のものとも思えなかった。
頭部はすべて生きていた。目が怖ろしい苦悶をたたえて凝視していた。唇が沈黙の悲痛をあらわして歪んでいた。こけた頰に涙が伝っていた。怖ろしいまでに人間ばなれした頭部――鳥のような頭部や爬虫類の頭部や生ける石や金属や植物の頭部――さえ、身をさいなむ絶えまの

ない拷問の苦しみを示していた。そのような慄然たる群のほうへと、エドマンドはひきよせられていった。
ふたたび闇がエドマンドをつつみこんだ。闇はすぐに消えたが、つかのまの昏睡から目ざめると、妙に変化したような気がしたという。避けようのない闇につつみこまれた一瞬のうちに、何かが起こったようだった。意識が朦朧として、まわりのものが靄のようなものを通してぼんやりと見えた。月に照らされる沈黙の都市の遙か上空にいて、速やかにひきおろされているようだった。
満月の光のもとで、古い褐色砂岩の家に近づきつつあることがわかった。写真で馴染深いものになっているケネス・スコットの家だった。勝利の戦慄がそこはかとなく感じられた。実験は成功したのだ。
家がぐんぐん大きくなってきた。エドマンドは開け放たれた暗い窓のまえにうかんでいた。なかをのぞきこむと、ほっそりしたケネス・スコットが机についているのが見えた。オカルティストの唇は真一文字にひきむすばれ、心痛がその顔を翳らせていた。スコットは黄変した羊皮紙の大冊を開いて、注意深く読んでいた。ときおりそばの机にある電話機を不安そうに見やった。エドマンドがスコットに呼びかけようとすると、スコットが顔をあげ、窓に目を向けた。
たちまちスコットの顔つきが一変した。恐怖のあまり発狂したかのようだった。椅子を倒して机からはなれた。エドマンドは前方にひきよせられていくのを感じた。

そのあとに起こったことは、混乱していて定かではない。エドマンドの日記はこの点について断片的で、どうやらエドマンドが部屋に入りこみ、不可解かつ異様なやりかたで、狂乱したスコットを追いかけたとしか考えられない。そしてスコットはつかまって、呑みこまれた。エドマンドの文章は、そのときの記憶に堪えかねたかのように、ここで不意にとぎれている。

エドマンドは慈悲深い闇につつみこまれたが、夢が薄れて消えるまえに、一瞬あるものを見た。ふたたびスコットの家の外にいて、夜空にひきあげられているようだったが、黄色く照らされる窓のなかに、スコットの机の一部と、その向こうのカーペットに倒れこんでいる人影が見えた。エドマンドはスコットが倒れているのだと思った。首を信じられない角度でまげているか、それとも首がなくなっているようだった。

そうして夢はおわった。エドマンドが目をさますと、部屋は闇につつまれ、ルドウィクがそばで眠そうに身じろぎしていた。二人ともとりみだして、疲れきっていた。二人はしばらくのあいだ、なかばヒステリックになりながら、興奮して話しあい、ルドウィクもエドマンドと同一の幻視を体験したことがわかった。残念なことに、二人とも状況を分析して筋のとおった解釈をする手間をとらなかったが、もちろんこの二人は神秘主義者であって、何ごとも軽がるしく信じてしまう傾向があった。

電話のベルが鳴った。交換手がいらだたしく、バルティモアからの電話をおうけになります

かと、エドマンドにたずねた。しばらくまえからエドマンドを呼び出そうとしながら、まったく応答がなかったという。エドマンドはそんな交換手の話に口をはさみ、すぐにつないでくれといった。しかし電話はつながらなかった。バルティモアの電話局の交換手から、依頼人を呼び出せないと知らされた。無益な質問のやりとりをしたあと、エドマンドは電話をきった。そのときルドウィクがスコットに手紙を出したことをうちあけ、実験の目的——アストラル体をどこに投影するか——を、バルティモアのオカルティストに知らせずにはいられなかったといって、沈黙をまもれなかったことを悔やんだ。

火鉢のなかにあるものが何であるかがわかっても、二人の恐怖は静まらなかった。少なくとも幻視の一部が現実に基づいていたのは明らかで、未知の化学薬品が結晶化したものは、あらゆる角度や面をふくんでいるものらしい。つやけしガラスのような壊れやすい物質からできあがり、形はおおよそピラミッドに似て、頂点から底面まではおおよそ六インチあった。ルドウィクはすぐに壊したがったが、エドマンドがやめさせた。

二人が口論していると、スコットからの電報が届いた。こう記してあった。

当該ノ冊子ニアル実験ヲ試ミルナカレ」ハナハダ危険ナコトデアリワタシノ死ヲ意味スルヤモシレヌ」詳細ハ本日航空便ニテ知ラセル」冊子ハ焼却スベシ」

ケネス・スコット

Ⅲ

さらに二つのことがあって、ポール・エドマンドはしばらくハリウッド病院に入院することになった。最初のものは、八月二十日付け『ロス・アンジェルス・タイムズ』の朝刊に掲載された記事である。メアリーランド州バルティモアに住む有名な作家にしてオカルティスト、ケネス・スコットが謎の死をとげたことが、簡単に報じられていた。犯人の素性を示す手がかり一つなく、死体が発見されたのは十九日になってからのことだった。被害者の首が切り落とされ、不可解にもなくなっていることで、最初は被害者の身元に疑いがもたれたが、かかりつけの医者によってスコットにちがいないことが確証された。灰色がかった粘着物がカーペットにこびりついていることが、この事件のもう一つの謎だった。検視官の言明するところによれば、スコットの首は鋭利な刃物ですっぱりと断ち切られたという。警察は犯人逮捕が時間の問題だと述べた。

いうまでもなく、犯人はまだ逮捕されていない。猟奇事件を好むタブロイド新聞各紙は、この興味津津たる異様な珍味にとびつき、さんざん食いものにしたが、行動力にとむ記者によって、スコットが死亡推定時刻の直前に、バルティモア中央郵便局から航空便で手紙を発送した

事実がつきとめられた。この事実の報道が直接の原因となって、エドマンドは虚脱状態におちいり、入院することになったのだ。
手紙はエドマンドのアパートで発見されたが、事件に光明を投げかけるものではなかった。スコットは夢想家であり、その手紙の内容はスコットの小説に似て、信憑性にとぼしい。

きみたち二人が知っているように（長文にわたる手紙のなかに、こんな一節がある）、古い伝説や民話の背後に多くの事実が見いだされることが多い。キュクロープスがもはや神話ではないことは、畸形児が生まれることを知っている医者なら、誰でも説明してくれる。生命の霊液に関するわたしの考えが、重水の発見によって確証されたことも、きみたちは知っているだろう。ヒュドラの神話はそうした事実に基づいている。
複数の頭を備える怪物については数えきれない話があるが、そうした話のすべてが、歴史を通じてごくわずかな者だけに知られている、実在の生物に発している のだ。この生物は地球上ではなく、外世界の深淵で誕生した。吸血鬼を思わせる存在のようだが、犠牲者の血ではなく、頭――脳髄――を滋養分にしている。奇妙に思えるだろうが、肉体や欲求がわれわれと異なる生物が外世界にいることは、きみたちも知っているはずだ。この生物は遙かな太古から、われわれの世界の彼方の深淵で餌をあさり、獲物を求める声をあげている。この世界や別の星の知的生物の頭や脳を吸収することで、力や生命力を増大させ、

さまざまな世界にあらわれるのだ。
　きみたちも知っているように、いつの世にも大いなるものを崇拝する者たちがいる――民話によってデーモンとして伝わる邪悪な異世界の生物さえ、さまざまに崇拝されているのだ。暗黒のファロルから人間以上の力をもつ異世界の生物にいたるまで、すべての神や実体にはその崇拝者がいる。そしてこうした崇拝が、はなはだ奇妙なやりかたで交錯しているので、忘れさられた信仰が遙か後世になって急にあらわれることもある。たとえばローマ人がイタリアの暗い森で大地母神を崇拝していたころ、どうして儀式の祈りに、「ゴルゴーよ、モルモーよ、千の貌もてる月霊よ」という、謎めいた崇拝の祈りが入りこんだのか。これが意味するものは明白だ。
　かなり細かなところにまで立ち入ってしまったが、ロバートがサン・ペドロで見つけた小冊子の起源を説明するには、それなりの準備をしなければならない。わたしはこの小冊子が一七八三年にセイレムで出版されたことまで知っているが、もはや現存しないと思っていた。きみたちに警告するが、小冊子は罠だ。犠牲者をヒュドラの腹におびきよせるため、ヒュドラの崇拝者たちがつくりだした罠なんだ。
　アストラル体にかかわる無害な実験にすぎないように思えるが、それは見かけだけであって、小冊子の真の目的は、外世界の戸口を開けて、ヒュドラにささげる生贄を準備することにある。小冊子が秘密の地下組織によってはじめて出版されたとき、ニューイングラン

ドで多くの死者が出た。何十人もの男女が首なし死体となりはて、犯人の手がかり一つなかった。しかし本当の犯人は小冊子の指示どおりに実験をおこない、何も知らぬままに、ヒュドラがその生命力でもって地球に出現するのを助けた者たちだ。

露骨にいえば、こういうことになる。指示どおりに麻薬の煙を吸いこめば、この世界と外世界をさえぎる帳が破られる。アストラル体を特定の人物に投影したいと思い、その人物のことを強く念じれば、その人物は破滅する。この実験をおこなう者は外世界にひきよせられ、他の時空間に入りこんで、ある種の霊的・化学的プロセスにより、一時的にヒュドラと一体化してしまうからだ。こうしてヒュドラは、実験をおこなう者のアストラル体を宿主にして、地球上にあらわれ、獲物をとらえる――実験をおこなう者が念じていた人物が獲物になるわけだ。実験をおこなう者には、ひどい精神的ショックがあるだろうが、それ以外には何の危険もない。しかし他の者――犠牲者は、ヒュドラに襲われる。犠牲者には永遠の苦しみがふりくだる。地球上のある者と霊的な繋がりがある特殊な場合はべつだが、それについては贅言を要しないだろう。

わたしは不安でたまらない。エドマンドに長距離電話をかけようとしているので、この手紙が着くよりも早く、今晩のうちに連絡がとれるだろう。そのまえにきみたちが性急に実験をはじめてしまえば、わたしは由由しい危険にさらされることになる。きみたちがアストラル体をバルティモアにいるわたしに投影するかもしれないからだ。わたしはこの手

紙を投函したあと、電話がつながるのを待ちながら、身を守る呪文を見つけることに全力をつくすが、そんな呪文が存在するとは思えない。

ケネス・スコット

この手紙によって、エドマンドは入院することになり、数日かけて精神的ショックからたちなおった。ルドウィクは神経がずぶとかったらしく、エドマンドの願いに応じてアパートにとどまり、何らかの実験にふけった。

つづく数日間にエドマンドのアパートで何があったのか、くわしいところはわからない。ルドウィクは入院しているエドマンドを昼に見舞い、実験のことを話した。エドマンドがその話でおぼえていることを紙に書きつけ、日記にはさんでいる。そうしたエドマンドの記録によれば、ルドウィクの経験したことは、最初の大麻の幻想がつづいているようなものなので、火鉢のなかの異様な麻薬の混合物が、二人の心に影響をおよぼしつづけたと思いたくなる。

予想されるとおり、ルドウィクは小冊子を焼きすてた。そしてエドマンドが入院した日の夜に、スコットの語りかける声が聞こえたと主張した。

エドマンドは何でも鵜呑(うの)みにする傾向があったので、あざけるようなことはしなかった。オカルティストがまだ別の次元で生きていると言明するルドウィクの話に、熱心に耳をかたむけた。ヒュドラがスコットを捕えたが、スコットはなおもルドウィクに意思を伝える力をもって

いるというのだ。この二人の若者のいずれも、エドマンドが神経を高ぶらせてからは、決して正常と呼べる状態ではなかった事実を、心にとめておかなければならない。
したがって毎日ルドウィクは話に細目をくわえ、エドマンドは一心に耳をかたむけたのだ。二人は声を潜めてこっそり話しあい、エドマンドは話を書きとめた紙が疑い深い者の手に入らないよう、細心の注意をはらいつづけた。ルドウィクにいわせれば、この件の鍵を握るものは、火鉢のなかにできあがった不思議な結晶物だった。この結晶物が外世界に通じる道を開いたままにしているのだという。人間の頭ほど大きくないにもかかわらず、「空間の歪み」をつくりだしているので、その気になれば、結晶物を通過することもできるらしい。エドマンドは「空間の歪み」という言葉を何度か記しているが、何ら説明をくわえようともしなかった。ヒュドラは最初の状態が再現されないかぎり、地球上にあらわれることができないという。
ルドウィクがいうには、狂った角度と面をはらむ結晶物から、かぼそく囁きかけるスコットの声が聞こえ、スコットが怖ろしい苦悶にさいなまれて、ルドウィクに助けを求めているのだった。スコットの指示どおりにすれば、スコットを救いだすのは困難なことではない。いくつか危険はあるが、勇気をもって指示にしたがい、自分たちがおよぼした害を回復しなければならない。そうすることによってのみ、スコットは果てしない苦悶から解放されて、地球上にもどってこられるのだ。
ルドウィクはエドマンドに、スコットが必要だといった品物をもって、あの結晶物を通過す

るつもりだといった――またしても曖昧かつ異様な言葉だ。そうした品物のなかには、骨の柄のついた、剃刀のように鋭利な肉切りナイフがあった。容易には入手できない品物もいくつかあったようだが、ルドウィクは具体的には述べなかった。あるいは単にエドマンドが記録していないだけなのかもしれない。

ルドウィクの話によれば、結晶物を通過して、スコットを見つけだしたらしい。しかしすぐにそうできたわけではない。スコットの執拗な囁きに導かれ、悪夢の怖ろしくも異様な世界をおそるおそる進む夜がつづいた。通過しなければならない門や、渡らなければならない異様な次元がいくつもあった。こうしてルドウィクは脈動する怖ろしい闇の悍しい深淵を進み、ゴブリンの邪悪な笑い声を背後に聞きながら、奇妙な菫色につつまれる場所を通り、真っ黒な巨石で築かれた無人の都市に入りこみ、これが伝説のディスだと知って震えあがった。そうしてついにスコットを見つけだしたのだ。

ルドウィクは必要なことをした。翌日、ルドウィクが病院にあらわれたとき、エドマンドは友人の顔が蒼白になって、目に狂気の色があらわれているので、はなはだしいショックをうけた。ルドウィクが目を大きく見開き、囁き声できれぎれに話すものだから、エドマンドには何のことかよくわからなかった。したがってほとんど記録されていない。はっきりしているのは、ルドウィクがスコットをヒュドラの手から解放したことと、肉切りナイフの刃を汚した灰色の

粘着物について、ルドウィクが何度も繰返してあれこれつぶやきつづけたことだけだ。ルドウィクは仕事がまだおわっていないと告げた。
人間にとって有害なものではないにせよ、自然の法則や過程にしたがうわけではない世界に、スコット、というよりも少なくともスコットの生きている部分をのこしてきたと告げたとき、ロバート・ルドウィクの精神は麻薬におかされていたにちがいない。スコットは地球上にもどりたがっていた。ルドウィクがエドマンドに語ったところによると、スコットはもどることができるものの、スコットにまだのこされている生命を維持する不思議な活力も、地球上ではすぐに消えてしまうという。スコットが存在できるのは、特定の世界や次元だけであって、スコットを生かしつづける異質な力がしだいに減じているので、もはやヒュドラから滋養分をひきだすこともできない。ルドウィクは速やかな行動が必要だといった。
スコットが望みを達成できる場所が外世界にある。その場所では（ルドウィクによれば）、さまざまな色が揺らめく帳の彼方から不断にもれる、狂ったように甲高い笛の音のために、思考がぼんやりとエネルギーや物質と結びつく。混沌の中心のすぐ近くであって、混沌のなかには万物の王アザトースが棲んでいる。存在するものはすべて、アザトースの思考によって創造されたのであり、窮極の混沌の中心においてのみ、スコットは人間の姿でふたたび地球上で暮すための手段を見つけられるのだ。エドマンドの日記ではこの箇所が消され、「現実化した思考の……」としか読めない。

ルドウィクは頬がこけ、青ざめた顔をして、仕事をやりおえなければならないといった。スコットを混沌の中心に連れていかなければならないが、怖ろしくて二の足を踏んでしまうと正直にうちあけた。途中にはいくつもの危険や、簡単に陥りかねない落とし穴があるらしい。最悪なのは、アザトースを覆う帳が薄いことで、万物の王を一目見ただけで、目にした者は完全に破滅してしまうのだ。ルドウィクがいうには、スコットがそのことを告げ、強固に抵抗しないかぎり、致命的なところへと目をひきよせようとする怖ろしい力があることも語った。

ロバート・ルドウィクは唇をかみしめて病院を立ち去ったが、エドマンドのアパートにもどる途上で、何者かの手によって殺害されたと思われる。エドマンドがふたたびルドウィクに会うことはなかったからだ。

Ⅳ

警察はなおも失われたケネス・スコットの首を探していた。エドマンドは新聞でそのことを知った。翌日はルドウィクを待ちあぐんだが、数時間たってもあらわれず、アパートに電話をしても返事はなかった。心痛のあまり吐き気さえこみあげ、担当の医師を相手に十分間、そして院長を相手にさらに十分間も荒れ狂った。ついに目的を果たし、病院側の反対をはねつけて、

タクシーでアパートに帰ったのだった。
ルドウィクはいなかった。跡形もなく消えうせていた。エドマンドは警察を呼ぼうと思ったが、すぐにこの考えはふりすてた。おちつきなく部屋のなかを歩きまわったが、まだ火鉢のなかにある結晶物からほとんど目をはなさなかった。
その夜に何があったかについては、日記からはうかがえない。推測できるのは、また麻薬を服用する準備をしたか、あるいは数日まえに吸引した煙の有毒な効果がついに脳の崩壊をひきおこし、もはや現実と空想の区別がつけられなくなったということだ。翌朝のものである日記の書きこみは、いきなりこんなふうにはじまっている。

聞こえた。ボブがいったように、スコットが結晶物を介して話しかけてきた。スコットは絶望にかられ、ボブが失敗したといった。スコットを中心まで連れていかなかったのだ。そうしてさえいれば、スコットが地球上にもどれて、ボブを救えたというのに。ボブは何かに捕えられてしまった——それが何であるかはわからない。神よ、ボブを救いたまえ。われわれ三人を助けたまえ……わたしがボブの中断したところからはじめ、仕事をやりおえなければならないと、スコットがいった。

日記の最後の数ページには感情がさらけだされていて、気楽に読めるものではない。この世

のものならぬ恐怖のなかでもっとも怖ろしいものとして、日記に描写されている恐怖にしても、ハリウッドにそびえるアパートで、エドマンドが自分自身の恐怖と闘い、みずからの弱さを知ったときに起こった最後の葛藤ほど、怖ろしいものであるとは思えない。小冊子は焼きすてられてよかったのだろう。小冊子に記されている脳を破壊するあのような麻薬は、エドマンドが描写しているもののように怖ろしい、地獄じみたところで生み出されたものにちがいないからだ。日記の最後の数ページには、魂が破滅していくありさまが示されている。

入りこんだ。ボブが入りこみやすくしてくれていた。スコットがいったように、ボブが中断したところからはじめることができる。凍てつく炎と大渦巻きを抜け、スコットのいるところまで行った。いや、スコットがいたところというべきだろう。もどってくるまえに、スコットをひろいあげ、いくつかの世界を抜けて運んだからだ。吸引に抵抗しなければならないことを、ボブは教えてくれなかった。しかしかなり近づくまで、さほど強くはならなかった。

つぎの書きこみは翌日の日付けになっている。ほとんど判読しがたい。

堪えられない。外に出なければ。何時間もグリフィス公園を歩きまわった。そしてアパー

トにもどると、すぐにスコットが話しかけてきた。こわい。スコットはわたしがこわがっているのを感じとっているようだ。スコットも不安にかられ、腹をたてている。

　スコットは時間を無駄にはできないといった。スコットの生命力がほとんどつきかけているので、すぐに混沌の中心に達して、地球上にもどらなければならないのだ。ボブを見た。つかのま目にしただけだが、スコットがいってくれなければ、とてもボブだとはわからなかっただろう。ボブは歪んでしまって怖ろしい姿になりはてていた。スコットがいうには、ボブはとらえられたときに、体の原子が別の次元に順応してしまったのだ。細心の注意をはらわなければならない。混沌の中心までもう少しだ。

最後の書きこみはこうだ。

　もう一度やってみよう。怖ろしい。たまらなく怖ろしい。笛の音が聞こえたのだ。その音色で脳が凍りついた。スコットが叫びたてて促した。音色をかき消そうとしてのことだが、もちろんそんなことができるはずもない。遠くにきわめてかすかな菫色の輝きと、色のついた揺らめく光が見えた。スコットがいうには、その向こうにアザトースがいるのだ。

　わたしにはできない。勇気がない。あの笛の音が聞こえ、遙か下にはあんなものが蠢いているのだから。帳に達して、あの方向に目を向ければ、それはすなわち……しかしスコッ

トが狂ったように腹をたてている。すべてがわたしのせいだというのだ。吸引する力に身をまかせ、戸口——結晶物——をたたきこわしたいという、ほとんどおさえがたい衝動にかられている。戸口から目をそらしていられなければ、そうしてしまうことだろう。つぎに入りこんだとき、帳から目をそらしてくれるなら、今度は仕事をやりおえると、スコットにいった。ひと息つくためにもう一度もどらせてくれるなら、今度は仕事をやりおえると、スコットにいった。スコットは応じたが、早くするようにと命じた。十分以内に戸口を抜けないなら、あとを追ってくるといった。しかしそんなことができるわけもない。スコットを異世界で生かしめている生命は、地球上ではほんの一、二秒しかもたないのだから。

十分がすぎた。スコットが戸口から呼んでいる。行くものか。直面できるわけがない——帳の背後であんなものが蠢き、悍しい笛の音がひびくなかで、異世界の最後の恐怖に直面できるわけもない。

絶対に行くものか。スコット、わたしには無理だ。きみはあいつのようには出られない。きみは死ぬんだ。絶対に行かないぞ。きみにはどうすることもできはしない。まず結晶物をたたきこわしてやる……何だ……まさか……そんなことが……スコット……やめろ……やめてくれ……そんなことが……

これが日記の最後の書きこみで、警官がやってきたとき、机の上で開けたままになっていた。

すさまじい悲鳴があがったあと、アパートのドアの下から赤い液体がゆっくりと流れだしたことで、巡回中の警官二人が駆けつけたのだ。
ポール・エドマンドの死体がドアの近くで見つかったが、頭と肩は鮮血に染まっていた。すぐ近くには真鍮(しんちゅう)製の火鉢がころがっていて、粒状の白い物質がカーペットを覆っていた。エドマンドの硬直した手には、あるものがきつくつかまれていて、あれ以来さまざまにとりざたされている。
これはその性質からして、信じられない保存状態にあった。灰色がかった粘着物が部分的にこびりつき、顎がきつく閉じられて、歯が怖ろしくもエドマンドの喉を破り、頸動脈を切断していた。
もはやケネス・スコットの首を探す必要はなかった。

闇に囁くもの

ハワード・フィリップス・ラヴクラフト
大瀧啓裕訳

I

結局のところ、身の毛のよだつようなものを、実際には何一つ目にすることがなかったということを、よく記憶にとどめておいていただきたい。それはともかくとして、愕然とさせられることがあったために、あれこれ思いめぐらすようになり、そうして導きだした結論に圧倒されたあげく、エイクリイのわびしい農家からとびだして車を奪いとり、ヴァーモント州のこんもりした丘陵のつらなる、荒寥たる地域を夜に駆けぬけることになったのだと、そんなふうにいってしまったのでは、わたしが最後に体験した歴然たる事実をないがしろにすることになる。わたしはヘンリー・エイクリイの知識と考察をかなりな程度まで知らされていたし、さまざまなものをこの目と耳でとらえ、その印象は疑いもなく生なましいものであったのだが、それにもかかわらず、慄然たる推測がはたして正しいものかどうかは、いまですら確かめようがない。つまるところ、エイクリイの失踪によって立証されるものが何もないからだ。家の内外に弾痕があったにせよ、屋内には何らの異常も認められなかった。さながらエイクリイがぶらっと丘

陵に足をのばし、そのままもどってこずにいるだけであるかのように。客がいたことや、不気味な円筒と機械装置が書斎に備えられていたことを示す形跡すらなかった。自分の生まれ育った鬱蒼（うっそう）と木木の生い茂る丘陵や、たえまなくさらさらと流れる小川を、エイクリイがひどくこわがっていたことにも、さしたる意味はなく、そうした病的な恐怖をいだいている者は数多くいる。さらに奇癖という観点に立てば、エイクリイが最後まで風変わりな行動をとり、不安をつのらせていたことも、簡単に説明がついてしまう。

そもそもこの事件は、わたしに関するかぎり、歴史的な空前の洪水が一九二七年十一月三日にヴァーモント州で起こったことにはじまる。当時のわたしは、現在と同様に、マサチューセッツ州アーカムのミスカトニック大学で文学を講じるかたわら、素人ながらも熱心にニューイングランド地方の民間伝承を研究していた。洪水のあとまもなく、新聞紙面を埋めつくした、困苦や罹災（りさい）や組織だった救援活動を伝えるさまざまな記事のなかに、増水した河に浮かんでいるのが見つかったものについて、ある種の奇妙な話がいくつもあらわれたことで、友人たちの多くが好奇心たっぷりに議論しはじめるようになり、この問題についてどんな解釈ができるものかと、わたしの意見を求めたのだった。わたしは民話の研究が真剣にうけとめられたことをうれしく思い、明らかに田舎の古い迷信から派生したとおぼしき、漠然としてとらえどころのない法外な風説をあげつらい、批判の目を向けることに全力をつくした。教養のある人びとのなかにも、こうした噂の土台には世に知られていない歪（ゆが）められた事実があるのだと力説する者が

いるのを知って、おもしろく思ったものだ。

このようにしてわたしの注意をひくようになった話というのは、もっぱら新聞の切り抜きによるものだったが、口伝えに広まったものが一つあって、わたしの友人がヴァーモント州ハードウィックの母親からうけとった手紙に書きとめられていた。伝えられるものの類型といえば、本質的にはすべて同一のものであれ、はっきり三つに分かれる事例がかかわっているように思われた——一つはマントピーリア近くのウィヌースキ河に関係し、いま一つはニューフェインを越えたウィンダム郡のウェスト河に結びつき、のこる一つはリンドンヴィル北のカレドニア郡のパサムシック河を中心にしている。もちろん散見される記事のなかには他の事実にふれるものも数多くあったが、くわしく調べてみると、ことごとく三つの事例のいずれかにあてはまるようだった。いずれの場合も、人跡まれな丘陵地帯に発する増水した河に、一つあるいは複数のきわめて異様かつ不気味なものが浮かんでいるのが目撃され、おおかたのなりゆきとして、地元の老人たちがまたぞろ声をひそめて蒸し返す、なかば忘れさられた素朴な一連の伝説と結びつけられたのだった。

人びとが見たと思ったものは、彼らがいまだかつて目にしたことのない生物の姿だった。当然ながらあの悲惨な時期には、数多くの人間の死体が河を流されていったが、異様な姿を見たと告げる者たちは、大きさやおおよその輪郭が似ているにせよ、決して人間ではないと思いこんでいた。目撃した者たちにいわせれば、ヴァーモントで知られるいかなる生物でもありえな

いらしい。ピンク色がかって、長さはおよそ五フィート、皮殻でおおわれた胴体には、数対の大きな背鰭もしくは膜状の翼めいたものや、関節のある脚が何本も備わり、普通なら頭部があるべきところに渦巻き状をなす楕円形のものがあって、多数のきわめて短い触角におおわれているのだという。さまざま異なった土地からの報告がよく一致するのは、いかにも驚かされることではあっても、かつて丘陵地帯に広まっていた古譚によって、目撃者すべての想像力に影響をおよぼしかねない、ぞっとするほど真にせまった姿が伝えられている事実を思えば、その驚きも減じられてしまう。わたしの結論を述べれば、こうした目撃者たち——いずれの場合も辺鄙な未開拓地に住む純朴な人びと——は、逆巻く流れに人間や家畜の傷つき脹れあがった死体を瞥見して、うろおぼえの民話に動かされ、哀れな死体に尋常ならざる性質をあたえてしまったのだ。

　古くから伝わるこの民話は、漠然としてとらえどころがなく、現代ではおおむね忘れさられてはいるが、きわめて特異な性質のものであって、もっと古くからあるインディアンの伝説の影響をうけているのは歴然としていた。わたしがこうした事情をよく心得ていたのは、ヴァーモント州にまで足をのばしたことはなかったにせよ、一八三九年以前にこの州の古老たちから直接聞きとった資料をふくむ、はなはだ入手困難なエリ・ダヴェンポートの論文を読んでいたからだ。さらにこの資料は、ニューハンプシャーの山岳地帯に住む老人たちから、わたし自身が聞き集めた話ともぴたりと一致した。簡単に要約すれば、人里遠くはなれた山中のどこか

――他を圧してそびえる山の深い森や、水源とて定かでない川の流れる暗い谷間――に、ばけものじみた未知の生物が潜んでいるらしいというのだ。この生物はめったに人の目にふれることはないが、こうした生物の存在する証拠は、狼さえ避ける絶壁にはさまれた深い峡谷や特定の山の斜面に、あえて普通以上にわけいった者たちによって報告されていた。
奇妙な足跡というか鉤爪の跡が、谷川の縁の泥地や、不毛の空地、そして面妖にも石が環状に列をなすところに認められ、これら環状列石は、その配置といい形といい、とても自然にできあがったものとも思えず、まわりの草が踏みつぶされているのだった。丘陵の斜面には深さの知れない洞窟がいくつもあって、その入口はおよそ偶然のこととは思えないやりかたで丸石によってふさがれ、そこに行き来する奇妙な足跡の数は――こうした足跡の向きが正しく判断できるものとして――さまざまな箇所の平均よりも多いという。そして何よりも厄介なことに、奥まった谷や通常の山登りの限界をこえた急斜面にある深い森で、冒険心の旺盛な者たちがごくまれに見かけるものがあった。
こういったものにかかわる種種とりどりの話が、たとえこれほどよく符合するようなことがなくとも、不快さが減じることはないだろう。しかし実際のところは、ほぼすべての噂話にいくつもの共通点があり、その生物は目のさめるような赤い巨大な蟹(かに)めいたもので、多くの脚と、背の中央に蝙蝠(こうもり)のような大きな翼を二枚備えていると主張されていた。すべての脚をつかって歩くこともあれば、最後尾の一対の脚だけで歩き、他の脚で何とも知れない大きなものを運ん

でいることもあるという。あるときにはかなりの数が見かけられたが、群からはなれた生物が森林地帯の浅い流れにそって、三匹が横一列にならび、明らかに規律正しいやりかたで歩いていたこともある。一度などは一匹が飛ぶのが目撃された——うらわびしい禿げ山の頂から夜空に飛びたち、つかのま満月を背景に、はためく大きな翼の影を描いて姿を消したという。

　これら生物は概して人間にはかまわずにおくことで満足しているようだが、冒険心にとむ人びと——ことに特定の谷間に近すぎるところや特定の山のあまりにも高いところに家を建てた者たち——が、ときおり行方不明にでもなると、生物のしわざだといわれることもあった。多くの土地が住みつくには賢明ではないところとして知られるようになり、この感情はそのいわれとなるものが忘れさられてからも長くのこった。人びとはどれほど多くの定住者が行方不明になり、いかに多くの農家が焼けて灰燼に帰したかを思いださずとも、緑の歩哨じみた陰鬱な山山の低い斜面に立って、近くの山の絶壁のそこかしこを見あげては、わなわなと震えあがるのだった。

　しかし最古の伝説によれば、これら生物は彼らの世界に立ち入る者にだけ害をおよぼすらしく、彼らが人間に関心をもっているとか、人間の世界に秘密の居留地をもうけようとしているとかいった話が口にされるのは、時代がくだってからのことになる。朝に農家の窓のあたりで奇妙な鉤爪の跡が見つかったとか、彼らが出没しそうもない地域で人がときおり行方不明になったといわれている。さらにまた、人が話しあってでもいるようなざわめく声がして、深い森の

小道や荷車用の道をひとりで進む者が驚いたという話もあれば、原生林が前庭にまで迫るところで、生物の姿や声を見聞きして、子供がおびえきったという話もあった。歳月とともに重なりゆく伝説の一番新しい層――いまだ迷信がすたれもせず、怖れられる土地とのかかわりがつづいていた時代の伝説――には、世捨て人や人里はなれて住む農夫にまつわる驚くべき話があって、彼らは人生のある時期に性格が鼻もちならないほどに変化してしまい、奇怪な生物に身を売ったと陰口をたたかれて、村人たちから疎(うと)んじられたという。北東のとある土地では、一八〇〇年ごろ、偏狭で評判のよくない隠遁者をあげつらい、忌むべき生物の仲間だとか使者だといって非難する傾向があったようだ。

この生物については――当然ながら、さまざまに異なった解釈がなされている。ごく普通には「あいつら」とか「例のもの」と呼ばれるが、地方や時代によって他の呼び名が用いられることもあった。おそらく清教徒の開拓者の一団はあからさまに悪魔の使い魔とみなし、畏怖すべき神学の考察の土台としたのだろう。ケルトの伝説をうけつぐ人びと――もっぱらニューハンプシャーのスコットランド系アイルランド人と、その同族でウェントワス総督の許可を得てヴァーモントに植民した人びと――は、この生物を漠然と意地の悪い妖精、あるいは泥沼や土砦の「矮人(わいじん)」に結びつけ、何世代にもわたって伝えられてきた呪文で身を守った。しかしインディアンがもっとも奇想天外な考えをもっている。部族によって伝説は異なりながら、特定の重要な細目では驚くべき意見の一致があって、何らの異論もなく口をそろえ、問題の生物がこ

の地球で生まれたものではないとしているのだった。
もっとも首尾一貫して生彩をはなつペナクック族の神話は、翼あるものたちが空の大熊座からやってきて、地球の丘陵に採掘場をつくり、他の世界では得られない種類の石を手に入れたことを告げている。神話によれば、彼らは地球に住みつくことはせず、居留地をもうけるにとどめ、膨大な量の石を北の星にもちかえるのだという。彼らが危害をくわえるのは、人間が近づきすぎたり、探りを入れたりするときだけにかぎられる。動物たちは本能的な嫌悪によって彼らを避けるのであって、彼らに狩られるからではない。彼らは地球のものは動物をはじめとして食べることができず、星から自分たちの食料を携えてくる。彼らに近づくのはよいことではなく、ときおり若い狩人が彼らの丘陵に入りこんだきり姿を消してしまう。彼らは夜に森のなかで、人間の声を真似た蜂の唸りのような声でささめくが、これに耳をかたむけるのもよいことではない。彼らはあらゆる人間――ペナクック族やヒューロン族やイロクォイ族の人びと――の言葉を知っているが、自分たちの言葉はもっていないか、言葉を使用する必要がないらしい。頭でもって話をおこない、さまざまなものを意味して頭の色が変化するのだという。
もちろんすべての伝説は、白人のものもインディアンのものも、ときおり先祖返りのようにつかのま人気を博する以外、十九世紀になるといつしか口にされなくなってしまった。ヴァーモントの住民の暮しむきも落ちつき、特定のやりかたにそって通い路が定まり、住居が建てられるようになると、どんな怖ろしいものや避けるべきものが原因で、そのやりかたがとられた

かはもちろん、そもそも怖ろしいものや避けるべきものがあったことさえ、しだいに忘れさられるようになった。たいていの者はただ、特定の丘陵地帯がはなはだ有害で、何の利益ももたらさず、概して住むには適さないこと、そしてそうした地域から遠ざかったほうがよいことを知っているだけだった。やがて是認された土地に慣習や経済的利益の轍が深く刻まれると、もはやそうした土地の外に出る理由もなくなり、例の生物の出没する丘陵は、故意にというよりは偶然に、足を向ける者もないままになった。ごくまれに一部の土地で騒ぎがもちあがる以外、丘陵地帯に住む生物についいて囁くのは、奇談を好む老婆や昔話を語らずにはいられない高齢の老人だけで、そのように声を潜めて口にされる話さえ、くだんの生物は家屋や村落の存在になれるようになっているし、人間も彼らの選んだ地域にまったくかまわずにいるので、いまではたいして怖れることはないとしているのだった。

わたしはこういったことのすべてを、ニューハンプシャーで採集した民話や読書から知っていたので、洪水どきの噂が広まるようになるや、そうした噂にどのような背後事情があるのかは容易に察しがついた。このことをかなり苦心して説明してやっても、議論好きな友人たちのいくたりかが、新聞記事に真実がふくまれていないとはいいきれないだろうと主張しつづけるものだから、それ相応におもしろがりもした。友人たちが指摘しようとしたのは、古い伝説が内容も一貫して後世に伝わっているのは意味深いことだし、ヴァーモントの丘陵地帯は文字通り未踏の地なので、そこに何が住んでいるともしれないのだから、伝説の生物がいないと決め

つけるのは賢明ではないということだった。わたしがこれに対し、生物にまつわる伝説のすべては、人類の大半に共通する周知の様式のもので、常に同種の幻想を生み出す初期段階の空想体験によって定まるのだと、自信たっぷりにいいきかせても、彼らを黙らせることはできなかった。

こうした論敵を相手に具体的な例をあげ、ヴァーモントの伝説が自然を擬人化した普遍的な伝説と本質的にさして異なっておらず、こうした伝説が古代世界をファウヌスやドリュアスやサテュロスで満たし、近代ギリシアのカリカンツァロイをもちだし、荒涼たるウェールズやアイルランドに、穴居人や穴居動物といった、矮小で異様な怖ろしい秘密の種族がいることを凶まがしくもほのめかしているのだといっても、まったく無駄なことだった。さらに驚くべき類似として、ヒマラヤ山脈の雪と岩の山頂に悍しくも潜む、怖るべきミ＝ゴ、すなわち「忌わしき雪男」の存在を、ネパールの山岳民が信じていることを指摘しても、やはり無駄でしかなかった。わたしがこんな証拠をもちだすと、論敵たちはそれを逆手にとって、そうした証拠は昔話にいくばくかの史実性があることを意味しているにちがいないし、何らかの太古の地球の種族が本当に存在しながら、人類の出現と優越性によって身を潜めるようになり、おそらく比較的最近まで——いや現在にいたるまで——数は減少しながらも生きのびているのだろうと、そんなふうに主張するのだった。

わたしがそんな考えを笑えば笑うほど、頑固な友人たちは主張をまげるどころか、ますます

声を高め、たとえ語りつがれてきた伝説がなくとも、最近の記事は明晰かつ詳細で筋も通っており、その語り口も分別に富んで穏当なものなので、無視するような真似はできないとつけくわえる始末だった。極端な考えをもつ二、三の熱狂的な友人にいたっては、古いインディアンの伝説にしても、不可解な生物がこの地球上で生まれたわけではないことを意味しているのではないかと、そんなことをほのめかしたあげく、チャールズ・フォートの法外な著書を引用しては、他の世界や太陽系外の旅行者が頻繁に地球に訪れていると主張したものだ。しかしながらわたしの論敵の多くは単なるロマンティストで、アーサー・マッケンの格調高い恐怖小説で広まった、潜み棲む「矮人」の奇想天外な伝承を現実世界にもちこもうとしているのだった。

II

こうしたありさまではしごく当然なことだが、この小気味よい論争はついに『アーカム・アドヴァタイザー』紙への投書という形で活字になり、その一部が洪水にまつわる話を生み出したヴァーモント一帯の新聞各紙に転載された。『ラトランド・ヘラルド』は両陣営の手紙から の抜粋で半ページをさく一方、『ブラトゥルバラ・リフォーマー』は歴史と神話に関するわたしの長文にわたる手紙の一通を全文再録したうえに、わたしの懐疑的な結論を支持称賛する

『ペン・ドリフターズ』誌の思慮深いコラムの解説文をもあわせて掲載してくれた。一九二八年の春には、わたしはいまだ訪れたこともないにもかかわらず、ヴァーモントでよく知られるようになっていた。そんなころ、ヘンリー・エイクリイから挑撥的な手紙が届き、わたしは深い感銘をうけるとともに、あとにも先にもただ一度だけ、絶壁に緑の木木が鬱蒼と生い茂り、森にさらさらとせせらぎが流れる、あの魅惑的な土地へ足を向けることになったのだった。

わたしがヘンリー・ウェントワス・エイクリイについて知っていることの多くは、エイクリイのわびしい農家ですごしたあと、エイクリイの隣人たちに聞いたり、カリフォルニアに住むエイクリイのひとり息子と手紙をかわしたりしてまとめあげたものだ。ヘンリー・エイクリイは、わたしの知ったところでは、裁判官、行政官、地主といった、地元では名の知られた旧家の最後の相続人だった。しかしながらエイクリイにあって、家族の精神傾向は実務的なことがらから純粋な学者気質に転じてしまい、エイクリイはヴァーモント大学に在学中には、数学、天文学、生物学、考古学、民俗学の傑出した学徒だった。わたしはそれまでエイクリイの名前を耳にしたことがなく、エイクリイも手紙で自分の経歴をくわしく知らせることはしなかったが、世慣れたところがほとんどない隠者であるにせよ、人格、教養、知性を兼ね備えた人物であることは最初からわかった。

エイクリイの主張が信じがたい性質のものであるにもかかわらず、わたしは自説に論争をいどむ誰よりも、ただちにエイクリイを真剣にうけとめざるをえなかった。というのも、一つに

は、エイクリイがまさしく実際の現象の――自分の目で見て手でふれられるほど――間近にいたことで、この現象について異様な推測をめぐらしていたからであり、また一つには、エイクリイが驚くべきことに、真の科学者のように自分の結論を仮説のままにすることをいとわなかったからだ。エイクリイは名を高めようとすることは好まなかったし、かならず確固とした証拠と思えるものを指針としていた。もちろんわたしも最初はエイクリイがまちがっていると考えたが、それは解釈の面でまちがっていると思ったのであって、エイクリイの知人の何人かのように、エイクリイの考えや緑したたるわびしい丘陵を怖れる気持ちを狂気のせいにするようなことはしなかった。この男がふんだんな情報をもっているのが察しられたし、知らせてくれたことがらにしても、エイクリイのあげる現実ばなれした原因とは何の関係もないにせよ、調べてみるだけの価値のある異様な状況から発しているにちがいないことはわかった。その後わたしはエイクリイからいくつかの物的証拠をうけとり、それまでとはいささか異なった、心騒がされるほどに異様な観点からながめるようになったのだった。

エイクリイが自己紹介をする長文の手紙をうけとっているので、わたしの精神史においてきわめて重要な位置を占めるこの手紙を、できるだけくわしく書きとめておくのが一番だろう。もはやわたしの手もとにはないが、その手紙の驚くべき内容はほぼすべて記憶しているし、それを記した人物が正気であったことはあらためて断言できる。真摯(しんし)な学究生活のあいだ世間と没交渉であったとおぼしき人物が、古風な書体の小さな字でびっしり書きこんだ手紙は、つぎ

のようなものだった。

地方無料郵便配達二号
ヴァーモント州ウィンダム郡タウンゼンド
一九二八年五月五日

マサチューセッツ州アーカム
ソルトンストール通り一一八
アルバート・N・ウィルマース殿

謹啓
昨年秋に氾濫した当地の河に、面妖な死体が浮かんでいるのが目撃されたことにまつわる昨今の風説、ならびにそうした風説によく合致する奇妙な民話に関して、貴殿の御手翰(しゅかん)が『ブラトゥルバラ・リフォーマー』紙（一八年四月二十三日）に再録されたのを拝読いたしました。よその土地の方が貴殿のような立場をとる理由はもとより、『ペン・ドリフターズ』誌が貴殿と考えをひとしくする理由さえ、たやすく首肯できます。ヴァーモントの内

外を問わず、それこそ教養ある人びとが一般にとる態度であり、小生もまた若かりしころ（いまや五十八になっております）、全般的なことがらやダヴェンポートの著書を研究して、平生（へいぜい）は訪れることのないこのあたりの丘陵を調べるようになるまでは、同じ態度をとっていたものです。

この研究をおこなうようになったのは、まったく無学な年配の農夫たちから妙な古譚をよく聞かされたからですが、いまにして思えば、こうしたことのすべてにかまわずにいたほうがよかったと思います。人類学や民俗学の分野は小生にとって馴染のないものではないと、それなりの謙遜の気持ちをこめて申しあげさせていただきましょう。小生はこの分野の授業を大学で多く履修して、タイラー、ラボック、フレイザー、カトルファージュ、マリイ、オズボーン、キース、ブール、G・エリオット・スミスといった、定評ある権威の大半に精通しております。世に隠れた種族にまつわる話が人類と同じくらい古くからあるという考えは、小生にとって目新しいものではありません。『ラトランド・ヘラルド』紙に転載された貴殿の御手翰、ならびに貴殿のお考えに同意する読者の投稿を拝見して、目下のところ貴殿の議論のよって立つところがわかっているつもりです。

小生がいま申しあげたいのは、はなはだ遺憾ながら、理屈では貴殿の御説がもっともらしく思えましょうとも、貴殿の論敵のほうが真相にせまっているということです。彼らは自分たちが思っている以上に真相にせまっております――と申しますのも、もちろん彼ら

は推測をめぐらすことだけによっているのであって、小生が存じていることを知る由もないからです。小生も彼らと同様にこの件についてよく知らなかったなら、彼らのように信じてもよいとは思わなかったでしょう。その場合、小生は全面的に貴殿に与していたと思います。

お察しのとおり、小生は核心にふれるのに苦心しておりますが、それはおそらくそうするのを本当に案じているからでしょう。しかし要点を申しあげれば、ばけものじみた生物が誰も訪れない高い山の森に実際に生息している証拠があるのです。新聞で報道されましたような、河に浮かんでいるものは見たことがないにせよ、二度と起こってほしくない状況のもとで、小生はやつらに似た生物を目撃しました。足跡を目にしましたし、最近ではいまこうして申しあげる以上に拙宅（小生はタウンゼンド村の南にあたるダーク山の山腹にある、古くからのエイクリイ家の土地に暮しております）に近い場所で目にしておりま す。それに、手紙に書きとめる気にもなれない特定の林のなかで、声を耳にしたこともあるのです。

ある場所では、あまりにもよく声が聞こえるため、蓄音器――口述録音用の付属装置と新しい蠟管を備えた蓄音器――をそこへもっていきましたので、録音したものを聞いていただく手配をとろうかと思います。録音を当地の老人の何人かに聞かせましたところ、声の一つがある種の声、老人たちの祖母たちが話し聞かせ、また口真似していた声（ダヴェ

ンポートが述べている森のなかでの唸るような声）に似ていることで、ほとんど腰もぬかさんばかりに震えあがってしまいました。「妙な声を聞いた」ことについてしゃべったりすれば、たいていの人にどう思われるかはわかっております――が、どうか判断をくだすまえに、この録音に耳をかたむけ、森林地帯に住む年配の者たちにどう思うかと、お聞きになってみてください。そのうえで普通に説明がつくとおっしゃるのなら、それはそれでかまいませんが、この背後には何かがあるはずです。無から何も生まれないと申しますので。

こうして貴殿宛ての書状を書いておりますのは、議論をはじめようというのではなく、貴殿のような好みをおもちのお方なら、きっと深く興味をいだかれるであろう情報を提供するためにほかなりません。これは公開をはばかる私信です。小生はおおやけには貴殿のご意見を支持します。と申しますのも、ある種のことがらによって、世間一般の人びとがこういった件を知りすぎるのはよくないことがわかっているからです。小生の調査研究はいまや完全に小生個人のものであって、人の注意をひきつける発言をして、小生が調べた場所に人を招くようなことをするつもりはありません。まさしく――怖ろしくも厳然たる事実として――人間にあらざる生物が四六時中われわれに目をひからせ、われわれのなかにスパイをもぐりこませ、情報を集めさせているのです。小生は卑劣な男からこの件の手がかりの多くを得ましたが、この男は正気であるとして（狂ってはいなかったと思います

が）、そうしたスパイのひとりだったのです。男は後に自殺しましたが、ほかにもスパイがいると考えてよい理由があります。

問題の生物はほかの惑星からやってきたのであって、星間宇宙で生きることができ、不恰好ながらもエーテルに抵抗できる力強い翼で飛行できますが、この翼は地球上でたいして役に立つものではありません。貴殿が即座に小生を狂人としてはねつけるようなことをなさらなければ、いずれこの点についてお知らせいたしましょう。やつらは山の地中深くにある採掘場で金属を得るためにやってきており、どこからやってくるのかは小生にも察しがついております。われわれがかまわずにおけば、やつらが危害をくわえることはありませんが、好奇心をもちすぎると何が起こるかはわかったものではありません。もちろん大勢の者がでかけていけば、やつらの鉱山居留地を一掃できるでしょう。それこそやつらの怖れていることなのです。しかしそのようなことになれば、やつらがさらに数を増して外世界からやってくるはずです――いくらでもやってこられるのですから。やつらはたやすく地球を征服することができますが、これまでそうしようとしなかったのは、その必要がなかったからにほかなりません。やつらは面倒なことをひかえるためにも、むしろ何もかまわずにいるのです。

小生があるものを見つけだしたために、やつらは小生を処分するつもりなのでしょう。小生は自宅の東に位置するラウンド・ヒルの森のなかで、なかば磨耗（まもう）した未知の文字が刻

まれた黒い大きな石を発見しましたが、これを自宅へもち帰って以来、すべての様相が一変してしまいました。やつらは小生が感づきすぎていると思えば、小生を殺すか、地球をはなれて、自分たちのやってきたところへと連れさることでしょう。やつらは人間世界の事情に通じるため、教養ある者をときおり連れさることを好むのです。

このことで貴殿にお手紙をさしあげるもう一つの目的を申しあげることができます——すなわち、目下の論争をこれ以上新聞や雑誌でおこなうのではなく、むしろ沈静化するようにしていただきたいのです。世間の人を当地の丘陵地帯から遠ざけておかなくてはなりませんし、そうするには人の好奇心をいま以上にかきたてるべきではありません。興業主や不動産業者が大勢の避暑客とともにヴァーモントに訪れ、丘陵に安っぽいバンガローを建て、未開の地に群がっているのですから、ともかく既に危険は十分にあるのです。

貴殿とは文通をつづけたく思いますので、お望みならあの録音と黒い石（磨耗がひどくて写真ではよくご覧いただけないのです）を、速達便でお送りすべく努力いたします。こんなふうに申しますのも、問題の生物がこのあたりであれこれ画策しているふしがあるからです。村の近くの農場にブラウンという、うさんくさい陰気な男がおりますが、やつらのスパイだと思われます。やつらは小生がやつらの世界についてよく知っているために、少しずつ小生をこの世界から切りはなそうとしているのです。

やつらは驚嘆すべきやりかたで小生のやっていることをつきとめております。貴殿がこ

の手紙を受領なさることはないかもしれません。事態がこれ以上に悪化すれば、小生はこの土地をはなれてカリフォルニアのサン・ディエゴにいる息子と暮さなければならなくなるでしょうが、自分が生まれ育ち、六世代にわたって家族の者が住んできた家を手放すのは、およそ容易なことではありません。それに、あの生物どもがこの家に目をひからせているいま、とても売却するわけにはいきますまい。やつらは黒い石をとりもどし、録音された蠟管を破壊しようとするでしょうが、小生の力のおよぶかぎり、そんなことをさせるつもりはありません。やつらもまだ数は少ないし、動きが鈍いので、小生の飼っている警察犬がやつらを押しとどめております。先に申しましたように、やつらの翼は地球上での短距離の飛行にはたいして役に立たないのです。小生はもう少しで——きわめて拙劣なやりかたながらも——あの石の文字を解読できそうなところにさしかかっておりますので、貴殿の民俗学の知識でもって小生に欠けているものを埋めていただければ、解読の助けになるやもしれません。『ネクロノミコン』でほのめかされている、人類が地球上にあらわれる以前の怖るべき神話——ヨグ＝ソトースやクトゥルーにまつわる神話——については、貴殿もよくご存じのことでしょう。小生はかつて目を通したことがありますし、貴殿の大学にも鍵つきの保管庫に一部所蔵されていると聞いております。

ウィルマースさん、結論を申しあげますと、わたしどもそれぞれの調査研究を提供しあえば、おたがいに益するところが大きいと思います。貴殿をいかなる危険にも巻きこみた

くありませんので、石と録音ずみの蠟管をもつことは安全ではないと、ご注意申しあげておくべきでしょうが、知識のためには危険をおかすだけの価値があることは、貴殿ならおわかりいただけるものと思います。ニューフェインやブラトゥルバラには当地よりも信頼のおける速達小包取扱所がありますので、貴殿からご要望のあるものはどちらかの取扱所に行ってお送りすることにいたしましょう。雇人を確保することができず、小生はまったくひとりきりで暮しております。やつらが夜に拙宅に近づこうとしたり、やつらのせいで犬がたえず吠えつづけたりするもので、働き手もいついてくれないのです。家内が生きていたなら、きっと気がふれていたでしょうから、家内の存命中にこの件に深入りしなかったことをうれしく思っております。

いらぬご迷惑をおかけしたのでなければよろしいのですが、狂人のたわごととして本状をくずかごに投げこむようなことをなさらず、小生に連絡をとるご決断をくだされることを願ってやみません。

敬具

ヘンリー・W・エイクリイ

追伸

小生の撮影した写真を焼き増ししておりますが、これらの写真は小生の記しましたことのいくつかを証明するうえで役立つと思います。村の老人たちにいわせれば、ぞっとするほど真にせまっているものです。興味がおありなら、ただちにお送りいたします。

H・W・A

この風変わりな手紙をはじめて読んだときの気持ちは、どうにもうまくあらわしがたい。ごくあたりまえの基準に照らせば、こうした突拍子もない考えの書きつらねられた手紙に接し、わたしを騒ぎにひきこむことになった、これよりもはるかに穏当な意見にもまして、声を高くして笑うべきだったろうが、しかし手紙の語調には、不思議と真剣にうけとめざるをえないようにさせるものがあった。そうだからといって、手紙を寄こした人物が記しているような、他の星からやってきた未知の種族の存在を、一瞬たりとて信じたわけではないが、エイクリイの気の確かさと誠実さ、そして想像たくましいやりかたでしか説明されていないにせよ、エイクリイが特異かつ異常ながらも本物の現象に直面していることについて、わたしは妙に確信をおぼえるようになった。エイクリイが考えているようなものではないにしても、別の見かたをすれば、調査する価値がなくもないと思われた。この人物は何かにひどく興奮して驚きあわてているようだが、そうなるだけの理由がまったくないとは考えにくかった。エイクリイはいくつ

かの点ではきわめて明晰かつ整然と書き記している——ともかく、エイクリイの話は、古い神話や奔放きわまりないインディアンの神話にさえも、困惑させられるほどによく符合するのだから。

エイクリイが実際に丘陵で不穏な声を耳にし、手紙でふれている黒い石を本当に見つけだしたことは、それらについて血迷った推測がなされているにせよ、ありえないことではなかった——エイクリイのめぐらした推測は、外世界から到来した生物のスパイだと称して、後に自殺するにいたった男がほのめかしたものなのだろう。この男は完全に狂っていたにちがいないが、おそらく口にする話には、聞く者を誤らせるような、うわべは筋の通ったところがあって、そのため純朴なエイクリイは——民話の研究によってそういうものをうけいれる下地があり——信じこむことになったのだと容易に察しがつく。最近の事態の進展については、エイクリイの家に雇人がいつかないことで、近辺に住む農民たちもエイクリイと同様、不気味な生物が夜にエイクリイの家に押し寄せると思いこんでいるらしい。犬も実際に吠えたのだろう。

そして録音ずみの蠟管については、わたしとて、エイクリイが手紙で記しているとおりのやりかたで、実際に録音をしたと信じないわけにはいかなかった。何らかの意味があるにちがいなく、人間の話し声のように聞こえる動物の声か、あるいは下等な動物とさほどかわらないほど退化した、人目をしのんで夜の闇をさまよう人間の話し声なのかもしれない。わたしはこのことから、謎の文字の刻まれた黒い石について考え、いったい何を意味するのだろうかと思っ

た。そしてまた、エイクリイが送ってくれようとしている写真、村の老人たちがぞっとするほど真にせまっているといった写真とは、どんなものだろうかと考えこんだ。

小さな文字がびっしり書きこまれて読みづらい手紙を再読しているうち、噂話を真にうける論敵たちの主張がわたしの譲歩していた以上に説得力をもちはしないかと、これまでになかった思いをいだくようになってしまった。ともかく誰も近寄らずにいるあの丘陵地帯には、民話が告げているような、他の星に生まれた怪物といった種族はいないにしても、どこか普通ではなく、おそらく遺伝によって畸形を帯びた浮浪者でもいるのかもしれない。そしてもしもそうであるなら、氾濫した河に妙な死体が浮かんでいたことも、まったく信じられないことではなくなる。昔からの伝説も最近の噂話も、こういった事実をかなりふくんでいると考えるのは、はたして僭越にすぎることだろうか。しかしこうした疑念をいだいたときですら、ヘンリー・エイクリイの奔放な手紙のような、あられもない異様なもののせいで疑いをもったことが恥ずかしく思えた。

結局わたしはエイクリイに宛てて、興味を示す親しげな調子で、もっとくわしいことを知らせてほしいとの手紙を出した。返事はほとんど折り返しのように届き、約束にたがわず、エイクリイが知らせなければならないと思っている景色や物について、そのコダック写真が何枚も同封されていた。封筒からとりだした写真を一瞥したとたん、禁断のものに身を寄せたような不思議な感じと不安をおぼえたが、それというのも、鮮明なものは少なかったとはいえ、この

うえもない暗示力があり、まさしく写真であるという事実――写真に写っているものをまざまざと目でとらえられること、そしてこの伝達方法には人間のおかしがちな偏見や不正確さや虚偽がないこと――によって、その暗示力が強められていたからだ。

　写真を見れば見るほど、エイクリイとその話を慎重に判断したことも、あながち不当なものではなかったという思いが強まった。まさしくこれらの写真は、少なくともわれわれのありふれた知識や信仰の領域から大きくへだたったものが、ヴァーモントの丘陵地帯にいることについて、その決定的証拠を示していたのだ。最悪なのが足跡だった――どこか荒涼とした高台で日のあたる泥濘を撮影したものだった。安っぽい偽造写真でないことは一目でわかる。小石や草の葉が鮮明に写っているので、これらを基準にほかのものの大きさがはっきりとわかり、巧妙な二重露出の可能性はなかった。先に「足跡」と記したが、正確には「鉤爪の跡」というべきだろう。いまですらわたしは、それが悍しくも蟹の足跡に似ていて、どちらに向かっているのかがよくわからなかったという以外に、描写するすべを知らない。泥濘に深くのこるくっきりとした跡ではなかったが、おおよそ人間の足跡ほどの大きさをしているようだった。中央の肉趾から鋸の歯のような鋏が両側に突出していた――これが歩行のためだけのものだとして、どのような働きをするものであるかは、まったく想像もつかなかった。

　もう一枚の写真――深い陰になったところでタイム露出によって撮影されたとおぼしき写真――は、木木の鬱蒼としたところにある、大きな丸い岩で入口をふさがれた洞窟を写したもの

だった。そのまえのむきだしの地面には、奇妙な足跡のようなものがびっしりと網の目のようについており、拡大鏡をつかってよく調べてみると、足跡が最初の写真のものと似ていることがわかって、どうにも不安な思いがした。三枚目の写真には、荒涼とした丘の頂にあるドゥルイド風の環状列石が写っていた。謎めいた列石のまわりでは、草がひどく踏みつけられてまばらになっていたが、拡大鏡をつかっても足跡は認められなかった。きわめて辺鄙なところであるらしく、背景には人家とてない山が霧のかかった地平線にまで連なっていた。

しかし写真のなかでもっとも不穏な思いにさせられるのが足跡のものだとすれば、どれよりも妙に暗示に富んでいるのは、ラウンド・ヒルの森で見つかったという、大きな黒い石の写真だった。写真の黒い石は書斎の机とおぼしきところに置かれており、後方にはずらりとならんだ書物やミルトンの胸像がうかがえた。当然のことながら、黒い石は一×二フィートの不規則な彎曲面を垂直にしてカメラに向けられていたが、その表面のありさまや全体の形状について、はっきり述べようとしても、言葉ではまったくもってあらわしがたい。どのような法外な幾何学原理に基づいて切断されているのかは——人為的に切断したものであるのは確かだが——想像することすらおぼつかず、これほどまでに面妖な、明らかに人間世界とは異質なものは、わたしも見たことがなかった。表面にある象形文字のうち、判読できたものはごくわずかだが、目にとまった一、二の文字にはいささか愕然とさせられた。狂えるアラブ人アブドゥル・アルハザードの怖ろしくも忌むべき『ネクロノミコン』を読んだ者は、わたしひとりにかぎられる

わけではないので、もちろんこれらの象形文字も捏造されたものかもしれないが、それでもなお特定の表意文字は、これまで研究してきたことで、地球をはじめとする太陽系の諸惑星が生まれるよりもまえに、なかば狂った半存在のような状態であったものについて囁かれる、血も凍りつくような冒瀆的な話と繫がりがあるのがわかっているだけに、背すじがぞくっとしたものだ。

のこる五枚の写真のうち、三枚は沼沢地や丘陵で撮影されており、身を潜める不健全な生物の足跡が写っているようだった。もう一枚はエイクリイ家にきわめて近い地面にのこる奇妙な足跡の写真で、いつにもまして犬たちが激しく吠えた夜が明けてから撮影されたものだという。はなはだぼんやりしていて、はっきりしたことは何もわからないのだが、荒涼とした高台で撮影された足跡というか鉤爪の跡に、ぞっとするほど似ているように思われた。最後の写真はエイクリイの住居を写したもので、屋根裏部屋のある二階建てのこざっぱりとした家は、百二十年ほどまえに建てられたのだろうが、手入れのゆきとどいた芝生があって、石に縁どられる小道が風雅な彫刻のほどこされたジョージア朝様式の玄関までのびていた。大型の警察犬が何匹か、芝生でうずくまっているそばに、灰色の顎鬚を短く切りそろえ、にこやかな顔をした男が立っており、エイクリイ本人だとわかった——右手に細い管のついたバルブをもっていることからも、自分で撮影したのは明白だった。

わたしは写真をひとまず置いて、びっしり書きこまれた分厚い手紙に目を向けたが、つづく

三時間というもの、いいようもない恐怖の深淵にどっぷり沈みこんでいた。エイクリイは以前にざっとふれるにとどめていたものを、今度は詳細にわたって丹念に記しており、夜に森のなかで立ち聞きした言葉を長ながと書きとめ、黄昏(たそがれ)どきに丘陵の薮(やぶ)のなかでこっそりうかがったという、ピンク色の怖ろしい生物の姿をこと細かく描写したうえ、自殺した自称スパイの狂人が生前にしゃべりたてたことをさまざま深遠な学識に照らしあわせて、宇宙的規模にわたる怖ろしい話を述べているのだった。いつしかわたしの目のまえに、悍しさきわまるものと関係して耳にしたことのある、ユゴス、大いなるクトゥルー、ツァトゥグア、ヨグ＝ソトース、ルルイエ、ナイアーラトテップ、アザトース、ハスター、イアン、レン、ハリ湖、ベトゥムーラ、黄の印、ルムル＝カトゥロス、ブラン、大いなる無名者といった名称や言葉があらわれて、いいようもない悠久の歳月と想像を絶する次元を越え、『ネクロノミコン』の狂った著者ですらきわめて漠然とほのめかすにとどめている、太古の外宇宙の実体の世界へとひきこまれてしまった。原初の生命の窖(あな)や、そこから流れ落ちてできあがったいくつもの河、そして地球の運命とかかわりあうようになった河の小さな支流の一つについて、エイクリイは語っていたのだから。

わたしは目がくらみそうだった。以前はきちんと説明してけりをつけようとしていたのに、いまやこのうえもなく異常かつ信じがたい怪奇なものを信じはじめているしまつだった。これら生なましい証拠の数かずは、忌わしいまでに甚大かつ圧倒的なもので、エイクリイの冷静な科学者さながらの態度――狂気、狂信、ヒステリー、さらには法外な思弁から考えられるかぎ

り遠ざかった態度——が、わたしの考えや判断に途方もない影響をおよぼしていた。その慄然たる手紙を読みおえたころには、エイクリイの身をさいなむ恐怖がまざまざと理解でき、謎の生物の出没するあの未開の丘陵地帯に人を近寄らせないためなら、できることは何でもする心がまえがついていた。あれからかなりの時間がたって、印象も薄らぎ、自分自身の体験や怖ろしい疑惑をなかば疑問視するようになっているいまですら、引用することはおろか、書きとめる気にもなれないものが、エイクリイの手紙にはいくつもあった。その手紙と録音ずみの蠟管と写真がなくなってしまったことがうれしく思えるほどだ——そしてまた、理由はすぐにも明らかにするが、海王星の彼方に新しい惑星が発見されるようなことなどなければよかったのにと思う。

エイクリイの手紙を読んだことで、ヴァーモントの恐怖にまつわる公開討論は、わたしのほうでふっつりと沙汰やみにしてしまった。論敵から議論を挑まれても、そのままにしておいたり、反論する約束を遅らせたりするうちに、公開討論の熱気もおとろえて、ついには忘れさられてしまった。五月下旬から六月にかけて、わたしはエイクリイとしきりに手紙のやりとりをしたが、出した手紙が届かないことがあって、そんなときには手紙の内容を思いだし、かなりの苦労をして書きなおさなければならなかった。わたしたちがなそうとしていたのは、おおよそのところ、漠然とした神話に関するたがいの知識を照らしあわせ、ヴァーモントの怖ろしい噂話と原始世界の伝説総体との相関関係をつきとめることだった。

まず第一に、わたしたちがきっぱりと断定したのは、ヴァーモントでとりざたされる生物と地獄めいたヒマラヤのミ＝ゴが同一の悪夢の具現であることだった。動物学に関する興味深い憶測もいくつかあって、大学の同僚であるデクスター教授にたずねてみたかったが、エイクリイからこの件についてはいっさい他言してはならないと命じられていたので、そうするわけにもいかなかった。いまその命令にそむいているように見えるとすれば、それはもうただひとえに、ヴァーモントの奥まった丘陵地帯について――そして怖れを知らぬ探検家たちがますます登頂の決意をかためているヒマラヤ山脈について――この段階で警告を発することが、沈黙をつづけるよりも公共の安全にかなっていると思うからだ。わたしたちが目指そうとしていたものの一つに、あの忌わしい黒い石の象形文字を解読することがあった――これを解読しさえすれば、いまだかつて人間には知られていない、深遠かつ目眩くような秘密がわがものにできると思われたからだ。

Ⅲ

六月のおわりごろ、録音された蠟管が届いた――ブラトゥルバラから発送されたのは、エイクリイがそこより北の支線の輸送状態をあやぶんでいたためだった。わたしたちの手紙の何通

かがなくなったことで、エイクリイはひそかに監視されているという感じをますますつのらせるようになり、謎の生物の手先や道具と考えられる一部の男たちの陰険な行為について、あれやこれやをしきりに書いてよこした。こうした男たちのなかでもっとも怪しいのが、ウォルター・ブラウンという無愛想な農夫で、深い森に近い山腹の家でひとり住まいをしており、これという理由もなさそうなのに不可解にも、ブラトゥルバラをはじめ、ベロウズ・フォールズ、ニューフェイン、サウス・ロンドンデリイの片隅を、よくぶらついているのが見かけられるらしかった。エイクリイはきわめて怖ろしい話を立ち聞きしたことがあって、そのときの声の一つがブラウンのものだと確信していたし、ブラウンの住居の近くで、はなはだ凶まがしい意味をもつ鉤爪の跡を見つけたこともあった。鉤爪の跡はブラウンの足跡の近くにあって、足跡のならびからして、ブラウンが生物に対面しているようだったという。

こういうわけで、録音ずみの蠟管はブラトゥルバラから発送されたのだが、エイクリイはそうするために、古いフォードでわびしいヴァーモントの裏街道を通っていったのだった。小包にそえられていたメモには、こうした裏街道に不安をおぼえるようになってきて、いまや白昼でないかぎり、必要なものをタウンゼンドに買いにいく気にもなれないと記されていた。ひっそりと静まりかえる問題の丘陵地帯から遠ざからないかぎり、知りすぎるというのは割りにあわないことだと、何度も繰返していうのだった。すぐにもカリフォルニアに行って息子と暮すつもりだそうだが、自分の思い出や祖先の思いのすべてが集まっている場所をはなれるのは、

およそしのびがたいことだろう。
　わたしは大学の事務局から借りてきた業務用の蓄音器で蠟管の録音を聞くまえに、エイクリイのさまざまな手紙に記されたこの件の説明を丹念に読み返してみた。エイクリイの話によると、一九一五年五月一日の午前一時ごろ、リーの沼地からそびえるダーク山の西斜面の森にある、入口をふさがれた洞窟の近くで録音されたものだった。そこは異常なまでに妙な声がよく聞こえるところで、このためにエイクリイは成果があがることを期待して、蓄音器と口述用録音装置と蠟管を携えてでかけたのだ。以前の経験から、五月祭の前夜——ヨーロッパの闇の伝説の告げる怖るべきサバトの夜——が、ほかのどんな日よりも実りがあると考えたのだが、その読みは見事に的中した。しかし注目すべきことに、その後はそこで声が聞こえることはなくなった。
　森のなかで耳にした声の多くとは異なり、録音された声は何か儀式でもおこなっているかのようで、おそらく人間の声と思われるものが一つあったが、誰のものとも知れなかった。ブラウンの声ではなく、かなりの教養がある人物の声だと思われた。しかし二番目の声はまったくの謎だった——人間の声とは似ても似つかぬ、あの呪わしい唸るような声であるにもかかわらず、文法も発音も正確にしゃべっているのだ。
　録音をする蓄音器と口述用録音装置がうまく同調していたわけではなかったし、もちろん立ち聞きした儀式が遠くて声がくぐもっているという、はなはだ不利な状況にあることで、実際

に録音されている会話はきわめて断片的なものだった。こう話しているのだろうと思うものを、エイクリイが書きとめて送ってくれていたので、蓄音器を作動させる準備をしながら、これにもう一度目をとおしてみた。あからさまに怖ろしいというより、どことなく謎めいたものだったが、それがどこでどのようにして採取されたかがわかっているだけに、片言隻句にいたるまでが連想の作用で、まざまざと恐怖を感じさせるのだった。記憶しているとおりの全文を記しておこう――正確に記憶していることに自信があるのは、エイクリイが書きとめたものを読んでいるうえに、録音を何度も繰返して耳にしたからだ。簡単に忘れられるようなものではない。

（何ともしれない音）

（教養ある人間の男の声）

……にとってさえ……は森の支配者にして、レンの民人の贈物なりせば……夜の泉より宇宙の深遠まで、宇宙の深遠より夜の泉まで、大いなるクトゥルー、ツァトゥグア、名づけられざるものを誉めたたえよや。彼らを誉めたたえ、森の黒山羊にはおびただしい供えを。いあ、シュブ＝ニグラス、千匹の仔を孕（はら）みし森の山羊よ。

（人間の声を真似た唸るような声）

いあ、シュブ＝ニグラス。千匹の仔を孕みし森の黒山羊よ。

（人間の声）

かくのごとくあいなりぬ。森の支配者は……七と九、縞瑪瑙（しまめのう）の階（きざはし）をくだり……汝がわれらに教えたる驚（異）をはらみしもの、深淵のものなるアザトースに捧げものをなし……夜の翼に乗りて宇宙を越え、……を越え、もっとも幼き子なるユゴスが周縁の黒きエーテル内で孤独に旋回するところへと……

（唸るような声）

……人間のなかに立ちまざり、深淵のものの知るやもしれぬ、人間のやりかたを見いだすべし。強壮なる使者ナイアーラトテップにすべてを語らねばならぬ。さすれば彼のものは身を隠す蠟の仮面とローブにて人間を装い、七つなる太陽の世界より到来して、嘲り……

（人間の声）

……（ナイアー）ラトテップ、大いなる使者、虚空をよぎりてユゴスに奇異なる喜びをもたらすもの、百万の恵まれたるものどもの父にして……を忍び歩くもの……

（録音がおわって言葉がとぎれる）

録音を再生すれば、このような言葉を耳にすることになるのだった。純然たる恐怖をかすかにおぼえ、いささか気の進まない思いがしながらも、レヴァーを押すと、まずサファイア針が蠟管をこする音が聞こえ、そうして耳にした最初のかすかなきれぎれの言葉が人間の声だったので、わたしはほっとした——耳に快い教養ある人物の声で、どことなくボストンのなまりがあるように思え、ヴァーモントの住民の声でないことだけは確かだった。やりきれないほど小さな声に耳をかたむけているうちに、その声のしゃべっていることが、エイクリイの入念に書きとめたものと同一であることがわかったようだ。蓄音器からは耳に快いボストンなまりの声が詠唱しているのが聞こえた。「いあ、シュブ＝ニグラス、千匹の仔を孕みし森の山羊よ」

そしてそのあと、別の声が聞こえたのだった。エイクリイの手紙から心がまえをつけていたというのに、その声を聞いてどれほど愕然としたかを思い返すと、いまですらあのときのように、わなわなと総身が震えてしまう。あれ以来、録音のことを話した人たちには、安っぽいかさまや狂気以外の何ものでもないと主張されたが、その人たちにしても、呪わしい録音を耳にするか、エイクリイからの大量の手紙（とりわけ怖ろしくもあらゆることにわたって博識豊かに記された二通目の手紙）を読むことができさえすれば、ちがったふうに考えるはずだ。ともかくエイクリイに指示されるまま、録音を他人に聞かせなかったことが残念でならない——

手紙がすべてなくなってしまったことも惜しまれる。わたしにとっては、録音を直接耳にした印象があるうえに、背景や周辺のありさまを知っているだけに、声はいいようもなく怖ろしいものだった。儀式の応答として、人間の声がしたあとすぐに発せられたのだが、わたしの脳裡では、想像を絶する外宇宙の地獄から思いもよらない深淵をよぎって飛来する、空怖ろしい谺(こだま)のように聞こえた。冒瀆的な蠟管の録音を最後に再生してから二年以上になるというのに、いまはもちろん、いつでもそうなのだが、凶まがしくも唸るようなかすかな声が、はじめて聞いたときのようになおも耳にひびくのだ。

いあ、シュブ＝ニグラス、千匹の仔を孕みし森の黒山羊よ。

しかしその声がいつも耳にひびいているにせよ、それをよく分析してはっきりと描写することは、まだできずにいる。何か忌わしい巨大な昆虫の低い唸りにも似たものが、異質な種族の明瞭な言葉を発する声に重おもしくもかえられたかのようで、その声を発する器官が人間はもちろん、いかなる哺乳類の発声器官とも異なることには、完全な確信がある。声の質、音域、ひびきが特異であって、人間や地球上の生物の世界の埒外にあるものだった。そんな声をいきなりはじめて耳にしたものだから、わたしは呆然とするあまり、そのあとは一種の放心状態のままに録音を聞いていた。唸るような声が長くつづくところになると、そのまえの短いところ

で思いあたった、このうえもない冒瀆的な感じが一層強まった。そしてようやく、ボストンなまりの人間の声が異常なままでにはっきりしゃべっているあいだに、録音は不意にとぎれたが、わたしは蓄音器がひとりでにとまってからも、しばらくは呆けたように蓄音器を凝視しつづけていたのだった。

いうまでもないことながら、わたしは慄然たる録音を何度も再生して、エイクリイと意見を交換しながら、徹底した分析と解釈を試みようとした。わたしたちがくだした結論をすべてここに繰返すのは、無益かつわずらわしいことなので、いまはただ、人類の太古の謎めいた信仰におけるもっとも忌むべき原始の習慣のいくつかの起源について、その手がかりをつかんだと思うことで、二人の意見が一致したとだけいっておこう。身を潜める外世界の生物と一部の人間のあいだに、太古から手のこんだ協力関係があることは、わたしたちには明白なように思われた。こうした関係がどれほどの規模のものなのか、また現在の状態が過去とくらべてどうなのかは、まったく推測するすべもなく、おびえながら果てしもなく考えをめぐらすのがせいぜいだった。人間と名状しがたい存在のあいだには、いくつかの明確な段階に分かれる、悍しい太古からの繋がりがあるようだった。地球上にあらわれた冒瀆的な生物は、どうやら太陽系の周縁に位置する暗黒星ユゴスから到来したようだが、この惑星そのものは怖るべき星間種族が多数いる居留地にすぎず、彼らの窮極の発祥の地は、アインシュタインの時空連続体、すなわちもっとも広大な既知の宇宙の遙か外に位置しているにちがいない。

一方でわたしたちは、例の黒い石と、それをアーカムまで運ぶ最善の方法について議論をつづけた――悪夢めいた研究の現場へとわたしを招くことを、エイクリイは賢明ではないと考えていた。あれやこれやの理由で、エイクリイは黒い石を誰もが思いつく通常の輸送経路で送ることをあやぶんだ。そして最後にもちだした考えは、州を横切ってベロウズ・フォールズまで運び、そこからキーン、ウィンチャンダン、フィッチュバーグを経由するボストン行きの鉄道で送るというものだったが、このやりかたをとると、エイクリイがブラトゥルバラにいたる幹線道路ではなく、森を多く抜けるさびしい街道を利用せざるをえなくなる。エイクリイはブラトゥルバラから蠟管を発送したとき、運送代理店の近くで、振舞いや顔つきが何とも不審な男がいるのに気づいたという。この男は代理店の受付係にしきりと話しかけ、蠟管を運ぶ列車に乗りこんだらしい。わたしから無事に届いた知らせがあるまで、エイクリイは蠟管がなくなりはしないかと、気が気ではなかったとわたしに打ち明けた。ちょうどこのころ――七月の第二週に――わたしの手紙が行方不明になったことが、不安そうに問いあわせてきたエイクリイからの手紙でわかった。そのことがあってから、手紙はタウンゼンドの自宅宛てではなく、ブラトゥルバラの郵便局の留置きで送ってくれと頼まれた。エイクリイは自分の車や、時間のかかる鉄道支線に最近とってかわったバス路線を利用して、ブラトゥルバラへはよくでかけるからだった。エイクリイが不安をつのらせているのは明白で、月のない夜に犬がますますひどく吠えたてることや、朝になると裏庭の泥濘（ぬかるみ）や道にときおり鉤爪の跡が見つかることが、手紙にく

わしく記されていた。数多くの鉤爪の跡が、犬の足跡と向かいあう形でくっきりのこっていたことについて知らせ、それを証明する忌わしくも心騒がされるコダック写真を送ってきたこともある。その写真が撮影されたのは、犬たちがいつにもまして吠えたけった夜が明けてからのことだった。

七月十八日の水曜日の朝、ベロウズ・フォールズから電報が届いたが、これはエイクリイが、標準時で午後十二時十五分ベロウズ・フォールズ発、午後四時十二分ボストン北駅着のボストン＝メイン鉄道五五〇八号列車で、黒い石を送ったことを知らせてきたものだった。わたしは少なくとも翌日の正午までにはアーカムに届くはずだと計算して、木曜の午前中は受領するために家にとどまっていた。しかし昼になり、小包が届かないまま昼がすぎて、速達運送会社に電話をかけると、わたし宛ての荷物は届いていないと告げられた。つぎにわたしは、不安をつのらせながら、ボストンの北駅にある代理店に長距離電話をかけたが、わたし宛ての小包が到着していないと告げられても、さほど驚きはしなかった。五五〇八号列車は昨日わずか三十五分の遅れで到着したが、わたし宛ての小包は積みこまれていなかった。しかし代理店の者が調査すると約束してくれたので、わたしは簡単に事情を説明する夜間割引電報をエイクリイに打った。

翌日の午後には称賛に値する迅速さで運送会社のボストン支店から連絡があった。代理店が事実関係をつきとめるやすぐに電話をしてくれたのだった。わたし宛ての小包の紛失に大いに

関係がありそうな出来事を、五五〇八号列車の係員が思いだしたらしく、標準時で午後一時すぎにニューハンプシャーのキーンで停車していたとき、きわめて奇妙な声で話す、やせぎすで、砂色の髪をした、粗野な顔つきの男と口論したのだという。
　係員がいうには、その男は自分宛ての重い荷が届くはずなのに、列車に積みこまれてもいなければ運送会社の台帳にも記帳されていないといって、ひどく興奮していたらしい。男はスタンリイ・アダムズと名のり、妙に唸るようなだみ声で話し、係員はその声を聞いているうちに、異常なまでのめまいをおぼえ、眠気をもよおしたという。係員は男とのやりとりがどんなふうにおわったのかを、まったく思いだせずにいるが、列車が動きはじめたときに、はっきり目をさましたことはおぼえていた。ボストンの担当者がつけくわえていうには、この係員は何一つ問題のない正直で信頼できる青年であり、身元も確かで長く運送会社に勤めているとのことだった。
　代理店から係員の名前と住所を教えてもらい、わたしはその日の夕方、係員にじかに会って話を聞くため、ボストンまで足をのばした。係員は人好きのするざっくばらんな青年だったが、最初の報告につけくわえるようなことは何もなさそうだった。奇妙なことに、あの異様な男にもう一度会っても、あの男だとわかるかどうかは自信がないといった。係員からは何も聞き出せないことがわかり、わたしはアーカムにひきあげ、エイクリイをはじめ、運送会社、警察、キーンの代理店に宛てた手紙を書いて夜を明かした。係員に妙な影響をおよぼした異様な声で

話す男が、この不穏な事件で重要な位置を占めているにちがいないと思い、キーンの駅員や電報局の記録から、この男のことや、この男がいつどこでどんなふうに問い合わせをしたかが、何とかつきとめられることを期待したのだった。

しかしながら、わたしの調査はすべてむなしかった。奇妙な声の男は確かに七月十八日の昼すぎにキーン駅の近辺で見かけられており、このあたりをうろつく者のなかには、男が重そうな箱をもっていたのを思いだした者もいたようだが、男のことを知っている者は誰もおらず、それ以前もそれからも見かけられたことはなかった。これまでに判明したかぎりでは、問題の男が電報局を訪れたり電報をうけとったりしたことはなく、黒い石が五五〇八号列車にあることを伝える電報が、電報局を通して誰かに打電されたこともなかった。当然ながら、エイクリイもわたしに協力してこうした調査をおこなってくれ、わざわざキーンにでかけて、駅の近辺にいる者たちにたずねてくれたが、この件に対するエイクリイの態度は、わたし以上に諦観のただようものだった。どうやらエイクリイは荷物がなくなったことを、避けがたいことが不吉にも脅かすような形で起こったのだと思っているらしく、黒い石がとりもどせることを期待してはいなかった。丘陵の生物やその手先が紛れもないテレパシーや催眠の力をもっていると語り、ある手紙では、石がもはや地球上にはないと思っていることをほのめかしたほどだった。わたしについていえば、このことに忿懣（ふんまん）やるかたないものがあったのは、ぼんやりした古い象形文字から、少なくとも深遠かつ驚くべきことをつかめる可能性があると思っていたからだっ

た。しかしこの件はわたしの胸にひどい苛立ちをのこすにはいたらず、ひきつづくエイクリイの一連の手紙によって、怖ろしい丘陵の問題全体が新たな局面を迎えたことがわかり、たちまちそれ以外のことは何も考えられなくなってしまった。

Ⅳ

エイクリイが気の毒なほど震えるようになった文字を書きつらね、未知の生物がまったく新たな決意をもって迫ってくるようになったと知らせてきた。おぼろ月夜や闇夜には、犬たちの吠え声がすさまじいものになったし、日中に必要があってさびしい道を歩いていると、エイクリイを悩まそうとする試みが何度もあったという。八月二日に車で村に向かっているときには、道路が深い森に入りこもうとするあたりで倒木が行く手をさえぎり、車に乗りこませていた二匹の大型犬が激しく吠えたてたことから、例の生物が間近に潜んでいることがはっきりとわかった。犬を連れていなかったらどうなっていたかは、考える気にもなれなかったそうだ——が、いまや外出するときには、忠実なたくましい犬を少なくとも二匹、いつも連れていくようになった。道路では八月五日と六日にも別種のことがあって、一度は弾丸が車をかすめ、もう一度は犬が吠えたてたことで、不浄なものが森にいるのがわかった。

八月十五日に狂乱した手紙が届き、わたしはひどくとりみだして、エイクリイが堅く口をふさぐようなことをやめ、警察に助けを求めればよいのにと思った。十二日から翌日にかけての夜に怖ろしいことが起こり、家の外に銃弾がとびかい、朝になってみれば、十二匹の大型犬のうち三匹が射殺されていたという。道には鉤爪の跡がおびただしくのこり、そのなかにはウォルター・ブラウンの足跡もあった。エイクリイは犬を買おうとしてブラトゥルバラに電話をかけたが、たいしてしゃべらないうちに電話が不通になった。そのあと車でブラトゥルバラにでかけ、ニューフェインの北の人里はなれた丘陵地帯で電話の主線が断ち切られているのを、保線工夫が見つけたことを知った。しかしエイクリイは新しく優秀な犬を四匹と、大型獣も倒せる連発ライフル用の銃弾を数箱買って、これから家に帰るとのことだった。手紙はブラトゥルバラの郵便局で書かれ、遅れることなくわたしの手もとに届いたのだ。

こうした事態に対するわたし自身の態度は、このころには、科学的なものから心をくだく個人的なものへと、速やかになりかわっていた。辺鄙（へんぴ）な寂しい農家に住むエイクリイのことを心配し、いまや異様な丘陵の問題に確固とした関係をもっていることで、なかば自分の身も案じていた。あの生物は手をのばしてきているのだ。わたしまで巻きこみ、呑みこんでしまうのだろうか。わたしはエイクリイの手紙に返事を出して、助けを求めるようにうながし、そうしないのならわたしがしかるべき手を打つかもしれないとほのめかした。エイクリイの願いにさからってでもヴァーモントを訪れて、事情をしかるべき筋に説明するのを手伝うつもりだと記し

た。しかしながらその返答としては、ベロウズ・フォールズから打電された、つぎのような電報をうけとっただけだった。

オキヅカイヲカンシャス」サレドイカントモシガタシ」キデンノコウドウハムヨウナリ」ソウホウニガイヲモタラスノミ」イサイフミ」

ヘンリー・エイクリイ

しかし事態は着実に深刻なものになっていった。電報の返事を送ると、震える文字で記されたエイクリイの手紙が届き、驚くべきことに、電報を打ったこともなければ、電報に先立つわたしの手紙をうけとってもいないと知らされた。エイクリイはとりいそぎベロウズ・フォールズ局でたずね、電報を依頼したのが妙に唸るようなだみ声でしゃべる、見なれない砂色の髪の男であることを知ったが、それ以上のことは何もわからなかった。受付係が鉛筆で走り書きされた依頼書を見せてくれたものの、まったく見なれない筆跡だった。エイクリイの署名の綴りで二番目のEが抜けているのが注意をひいた。ある種の憶測をめぐらすのは避けがたいことだが、エイクリイは紛れもない危険にさらされているために、深く考えこまずにはいられなかった。

さらに犬が殺されて新しく犬を買ったことや、闇夜には決まって銃撃戦が起こるようになっ

たことが、手紙には記されていた。道や裏庭にのこる鉤爪の跡のなかに、ブラウンの足跡にくわえ、少なくとも一人か二人の靴をはいた人間の足跡が認められるようになったという。ひどいありさまであることをエイクリイも認めており、地所が売れようと売れまいと、おそらく近いうちにカリフォルニアにいる息子のところへ行って暮さなければならないと考えていた。そうはいっても、我が家と考えられる唯一の場所をはなれるのは簡単なことではない。もうしばらくはもちこたえなければならず、侵入しようとする者たちをおどせば追いはらうこともできるだろう――やつらの秘密にはもはや立ち入らないという態度をはっきりと示すなら。

わたしはすぐにエイクリイに手紙を書き、あらためて援助を申しでて、そちらへ行って由由しい危険が迫っていることを当局に説明するのを手伝うつもりだと記した。これに対する返事では、以前の態度から予想していたほど、エイクリイもわたしの計画に反対ではないようだったが、もうしばらく――身辺を整理して、ほとんど病的なまでに愛着のある生地をはなれるという考えが甘受できるまでは――踏みとどまっていたいと記されていた。村人たちに研究や考察をうさんくさく思われているので、この地方を騒ぎに巻きこみ、自分の正気を広く世間に疑われるような事態を招かずに、ひっそりと立ち去るほうがよいのだという。既に十分な騒ぎになっているにせよ、できれば威厳をもって立ち去りたいというのが、エイクリイの希望だった。

この手紙は八月二十八日にわたしのもとに届き、わたしはできるだけエイクリイを元気づける返事を書いて投函した。どうやらこの励ましが功を奏したらしく、わたしの返事をうけとっ

たことを知らせる手紙には、ぞっとするようなことはほとんど記されていなかった。もっともエイクリイはさほど楽天的ではなく、例の生物が近づいてこないのは満月のときだけのようだと述べていた。そして月が雲に隠される夜があまりなければよいのにといって、月が欠けているときはブラトゥルバラに下宿するようなことをほのめかしていた。わたしはさらにエイクリイを元気づける手紙を書いたが、それと行きちがいになったとおぼしき新たな手紙が九月五日に届き、これにはとても事態を楽観視する返事は書けなかった。この手紙は重要なものなので、その全文を——震える文字で記された内容について思いだせるかぎり——ここに記しておくのがよいだろう。おおよそつぎのようなものだった。

月曜日

ウィルマース殿

これは先の手紙の意気阻喪(そそう)する追伸のようなものです。昨夜は空がどんよりして——雨はふりませんでしたが——月の光は一条も射しませんでした。事態はかなりひどくなり、あれこれ期待をかけようとも、最後が近づいていると思います。真夜中をすぎて、何かが家の屋根にあがり、犬たちがそいつを見ようとして駆け寄ってきました。犬がかみついたり引き裂いたりする音が聞こえたあと、一匹が家の横手の低い延長部から屋根にとびあがりました。すさまじい闘いが屋根で起こり、そのとき聞こえた怖ろしい唸りは忘れられよう

もありません。そして愕然とするような臭いがかぎとれたのです。ほぼ同時に、窓から銃弾が撃ちこまれ、あやうく小生の体をかすめました。屋根の件で犬が分散された隙に乗じて、丘陵の生物たちの主力部隊が家の間近に迫ってきたのです。屋根に何がいたのかはいまもってわかりませんが、残念なことに、例の生物は宇宙を飛ぶための翼をうまく操れるようになったのでしょう。小生は灯を消して、窓を銃眼がわりにつかい、犬にあたらない高さを狙って、家のまわりじゅうにライフルの銃弾をあびせました。それでけりがついたようでしたが、朝になってみると、中庭に血のたまりがいくつもあって、そのそばにはこれまでかいだこともないような、ひどい悪臭を放つ緑色のねばねばしたものがたまっていたのです。屋根にのぼると、そこにもねばねばしたものがありました。五匹の犬が死んでおりました——背中を撃たれておりますので、残念ながら小生が低く発砲した弾があたったにちがいありません。いまは割れた窓ガラスの修理をしているところで、このあとブラトゥルバラに行ってまた犬を買いこむつもりです。犬屋の者たちは小生が狂っていると思うことでしょう。また手紙を書きます。おそらく一、二週間のうちに移転の準備をしますが、そのことを考えると胸がはりさけそうです。

とり急ぎ連絡まで

エイクリイ

しかしわたしの返事と行きちがいになったエイクリイの手紙はこれだけではなかった。明くる日の朝――九月六日――に、もう一通の手紙が届き、今度はあわてふためいた感じで走り書きされたものだったので、わたしはうろたえてしまい、どういえばいいのか、何をすればいいのかもわからなかった。今度も思いだせるかぎり原文に忠実に引用するしかないだろう。

火曜日

雲が切れず、また月が見えません――ともかく既に月は欠ける一方です。修理するはしから電線が切断されてしまうことを知らなかったら、家に電線をひいて探照灯を備えつけていたことでしょう。

気が狂いそうです。これまでにお知らせしたことのすべてが夢か悪夢だったのかもしれません。以前もひどかったのですが、今度ばかりはひどすぎます。昨夜、彼らが話しかけてきたのです――あの呪わしい唸るような声で、貴殿にお知らせする気にもなれないことを語りました。犬の吠え声をついてはっきりと聞こえ、一度その声がかき消されたときには、人間の声が加勢したのです。この件には立ち入らないでください、ウィルマースさん――貴殿や小生が思っていたよりもひどいことなのですから。彼らはいまや小生をカリフォルニアに行かせるつもりがありません――小生を生きたまま、というよりも、理論上精神を生かしたままで、ユゴスのみならずさらにその彼方の、おそらくは銀河の外の宇宙最後

の彎曲した縁の彼方へと連れさりたがっているのです。小生はそんなところへ行くのはもちろん、彼らが目論んでいる怖ろしいやりかたもまっぴらだといってやりましたが、小生がそんなふうにいっても何の役にも立たないでしょう。拙宅は村から遠くはなれておりますので、もうすぐ彼らは夜と同じく昼間もやってくるかもしれません。さらに六匹の犬が殺され、今日ブラトゥルバラに車で行ったときには、森の道路のそこかしこで彼らの存在が感じとれました。

例の録音された蠟管や黒い石を貴殿に送付したのはまちがいでした。手遅れにならないうちに、蠟管はこわしてしまったほうがよいでしょう。明日もここにいれば、また手紙を書きます。本や荷物をブラトゥルバラまで運んで、そこで下宿できればよいのですが。心のなかにある何かが小生をひきとめるようなことがなければ、何ももたずに逃げだしているることでしょう。ブラトゥルバラへは彼らに見つからずに行けますし、あそこなら安全なはずですが、家にいるのと同様、囚人になっているような気がします。すべてを投げだしてどれほど努力しようと、さほど遠くまでは行けないでしょう。怖ろしいことです――この事件には巻きこまれないようになさってください。

草草

エイクリイ

わたしはこの怖ろしい手紙をうけとってから、エイクリイがどの程度の正気を保っているかがまったくわからず、まんじりともせずにその夜を明かした。手紙はまったくもって狂った内容のものであれ、その表現のしかたには――これまでのことをすべて考えあわせれば――凶まがしいまでに相応の説得力があった。わたしは返事を出そうとはせず、エイクリイがわたしの一番新しい手紙の返事をくれるまで待ったほうがいいと考えた。確かにその返事は翌日になって届き、そこに新しく記されていることは、返事の体裁をとって書かれているどんなことよりも重要だった。とり乱してあわただしく走り書きされたことで、文字は読みづらくてインクもにじんでいたが、記憶にある内容はつぎのようなものだった。

水曜日

前略、貴殿の手紙が届きましたが、これ以上何を議論しようと無駄なことです。小生はすっかりあきらめてしまいました。彼らと闘って追いはらえるだけの意志の力がまだのこっているのが不思議なほどです。何もかもを投げだして逃げだそうとしても、逃れようがありません。必ずつかまってしまいます。

昨日彼らから手紙が届きました――小生がブラトゥルバラに行っているあいだに、地方無料配達の郵便夫が届けたのです。タイプ打ちされており、消印はベロウズ・フォールズになっております。小生をどうしたがっているかが記されておりました――とてもお知ら

せするわけにはまいりません。貴殿も気をつけてください。あの蠟管はたたきこわしてしまうのです。雲の多い夜がつづき、月は欠けていく一方です。思いきって誰かに助けてもらえばいいのでしょうが——そうすることで意志の力がふるいおこせるでしょうが——何か証拠になるようなことが起こらないかぎり、あえてここへやってきてくれる人がいても、小生は狂人だと呼ばれるはずです。何の理由もないのに人に来てもらうわけにはまいりません——小生は久しく誰ともつきあっていないのですから。

しかしまだ最悪のことをお知らせしてはおりません。ウィルマースさん、動転なさるでしょうから、どうぞ気をひきしめて読んでください。小生は嘘は申しません。こういうことなのです——小生は彼らの一匹、というよりもその一部を、この目で見たし、さわりもしたのです。何と悍しいことだったか。もちろん死んでおりました。犬の一匹が殺したものを、今朝になって犬小屋の近くで見つけたのです。何もかもを村人たちに納得してもらうため、薪小屋におさめようとしましたが、数時間のうちに蒸発してしまいました。何ものこってはおりません。貴殿もご存じのように、彼らが河で目撃されたのは、洪水の明くる日の朝だけのことでした。これこそが最悪のことなのです。貴殿にお見せしようと思って写真に撮りましたが、フィルムを現像してみると、薪小屋以外には何も写っていないのです。あの生物はいったい何からできているのでしょう。小生はこの目で見たし、手でさわりもしましたし、足跡がのこっているのです。物質からできあがっているにちがいあり

ません——が、どんな物質なのでしょうか。姿はとてもいいあらわせません。巨大な蟹のようで、多数の先のとがった肉の環というか、触角におおわれる太い筋ばったものの瘤のようなものが、人間なら頭があるべきところに備わっているのです。あの緑色のねばねばしたものは血か体液でしょう。彼らはいつでも大挙して地球にやってこられるのです。

ウォルター・ブラウンを目にすることがなくなりました——このあたりの村でブラウンがいつもうろついていた場所で、さっぱり姿を見かけなくなったのです。小生のあびせた銃弾があたったにちがいありませんが、例の生物どもは死んだものや傷ついたものをいつも連れていくようです。

今日の午後、さしたる問題もなく村に行けましたが、彼らは小生を必ず捕えられると思っているので、いまは行動をさしひかえようとしているのでしょう。この手紙はブラトゥルバラの郵便局で書いております。これが最後かもしれません——そのようなことになれば、カリフォルニア州サン・ディエゴのプレズント・ストリート一七六番に住む、息子のジョージ・グディナフ・エイクリイに知らせいただきたく思いますが、ここへは決しておいでにならないでください。小生から一週間連絡がなければ、息子にその旨知らせ、新聞のニュースに注意してください。

これから最後の切り札二枚をつかうつもりです——小生に意志の力がのこっていればの話ですが。まず、彼らに毒ガスをつかい（しかるべき薬品は手に入れて、小生用と犬用の

防毒マスクも用意してあります）、そしてこれがうまくいかなければ、保安官に話すつもりです。保安官たちはその気になれば、小生を精神病院に収容することもできます――例の生物たちが目論んでいることにくらべれば、そのほうがましでしょう。おそらく家のまわりにのこる足跡に保安官たちの注意を向けさせることができます――かすかなものとはいえ、毎朝見つけることができるのですから。しかし警察は小生がでっちあげたものだというかもしれません。小生はみんなから妙な男だと思われているのですから。

州警察の警官にこの家でひと晩すごして、自分の目で確かめてもらうようにしなければならないでしょう――が、例の生物どもがかぎつけて、その夜は近寄らないようにするはずです。彼らは小生が夜に電話をかけようとすると、決まって電話線を切断してしまいます。保線工夫は妙なことだと考えておりますので、小生のしわざだと思わないかぎり、小生のために証言してくれるでしょう。一週間以上も修理を依頼しておりません。

恐怖が現実のものであることについて、無学な人たちのいくたりかに証言してもらうこともできますが、そうした証言を誰もが笑うでしょうし、ともかくずいぶんまえから拙宅には人が近寄らなくなっておりますので、最近の出来事については誰も知らないのです。疲れきった農夫たちの一人として、何があろうと拙宅に来てもらうことはできません。郵便配達夫が小生にまつわる農夫たちの噂を耳にして、小生をからかうほどなのです――郵便配達夫にそれが事実であることを思いきって話してやれさえすればよいのですが。郵便

配達夫の注意を足跡に向けさせようと思いますが、やってくるのは午後ですし、そのころにはいつも足跡が消えてしまいます。箱か皿でもかぶせて足跡が消えないようにしたところで、つくりものだとかジョークだと思われるだけでしょう。

以前とはちがって、誰も寄りついてはくれないような隠者にならなければよかったのです。無学な人たち以外には、黒い石やコダック写真を見せたり、録音を聞かせたりはしておりません。ほかの人たちはすべてを小生がでっちあげたといって、笑うのがせいぜいでしょう。しかし写真を見せようかと思います。たとえ例の生物が写真に撮れないにしても、写真には鉤爪の跡がはっきり写っているのですから。消えてしまわないうちに、今朝あの生物を小生以外の誰も目にしなかったことが、かえすがえすも残念でなりません。

しかしあれこれ気をもむような必要はないのでしょう。あれだけのことを体験しているのですから、精神病院もまんざらすてたものではありません。この家から逃げだす決心をつけるのに、医者が力をかしてくれるでしょうし、小生が助かるにはそれしかないのです。

近いうちに連絡がなければ、息子のジョージに知らせてください。さようなら。あの蠟管はこわし、くれぐれもこんなことに巻きこまれないでください。

草草

エイクリイ

正直にいえば、わたしはこの手紙によって暗澹たる恐怖のどん底に投げこまれた。どう返事をすればよいのかもわからなかったが、助言と激励の言葉をとりとめもなく書きつらね、書留で送ったのだった。すぐにブラトゥルバラに移って当局の保護をうけるよう、エイクリイをうながし、録音された蠟管をもってそちらへ行って、エイクリイの正気を裁判所で納得してもらうのに力をかそうと、つけくわえたことをおぼえている。この生物が村人たちのただなかにいることを一般に警告する時期だとも書いたと思う。おわかりいただけることと思うが、この緊急時に、わたしはエイクリイがこれまでに知らせたり主張したりしたことのすべてを完全に信じきっていたとはいえ、死んだ生物を写真に撮れなかったことは、自然の怪現象などではなく、興奮したあまりのエイクリイの手落ちだと思っていた。

V

そして明らかにわたしのとりとめもない手紙と行きちがいになって、九月八日の土曜日の午後に、妙なほどさまがわりして平静な手紙が届き、新しい機械でこぎれいにタイプされていたが、自信にあふれたその不思議な招待状こそ、さびしげな丘陵の悪夢さながらのドラマ全体に、途轍もない転換を示すものだったにちがいない。またしても記憶を基に引用しておこう——と

りわけできるかぎり文章の雰囲気を保つようにしてだ。消印はベロウズ・フォールズになっていて、署名も本文と同様に――タイプライターの初心者がよくやるように――タイプ打ちされていた。しかしその手紙の内容は、初心者にしては驚くほど正確なので、わたしはエイクリイが以前にタイプライターを――おそらく大学にいたころ――つかったことがあるにちがいないと確信した。手紙を読んでわたしがほっとしたといったのでは、うわべだけの気持ちを伝えているにすぎず、わたしの安堵には不安が潜んでいたのだった。恐怖にかられていたエイクリイが正気だったのなら、こんな手紙を書いてよこしたエイクリイは正気なのか。そして手紙に記されている「改善された関係」とは……いったい何のことなのか。手紙の内容全体がほのめかしているものは、エイクリイが以前の態度をまったく逆転させてしまったことだった。しかしいささかわたしが誇りとする確かな記憶から、その全文を入念に書きとめておこう。

ヴァーモント州タウンゼンド
一九二八年九月六日木曜日

親愛なるウィルマース殿
これまでにお知らせした莫迦ばかしいことのすべてにつき、貴殿に安心していただけるようになって、実にうれしく思います。「莫迦ばかしい」と申しましたが、これはおびえきっ

ありません。そうした現象は現実に存在する重要なものですので、それらに妙な態度をとった小生の態度を意味するものであって、特定の現実に関して小生がお知らせしたことではたことで、小生はまちがいをおかしていたのです。

不思議な訪問者たちが小生と気持ちを通いあわせようとして、そうした試みをはじめていることをお話ししたと思います。昨夜、このやりとりが実際におこなわれました。特定の合図に応え、地球外の生物の使者を拙宅に招きいれたのです——あわててつけくわえますが、使者はれっきとした人間でした。使者は貴殿や小生が推測すらしていなかったことを多く語り、地球外の生物がこの星に秘密の植民地をつくっていることについて、わたしたちがいかに判断をあやまり誤解していたかを示してくれたのです。

彼らが人間に誘いかけていること、そして地球に関して願っていることにまつわる邪悪な伝説は、すべてが喩え話を無知なあまりに誤解したことによるものなのです——もちろんこの喩え話は、わたしたちが夢想するどんなものよりも大きくかけはなれた、彼らの文化背景や思考習慣によってつくられております。腹蔵なく認めておきますが、小生自身の推測も、無学な農夫や野蛮なインディアンが思いめぐらしたものと同様に、まったく的はずれのものでした。小生が悍しくも下劣であさましいと思っていたものが、実際には意識を拡大してくれる畏怖すべきものであり、輝しいものでもあったのです——以前の小生の判断は、まったく異質なものを憎み、怖れ、避けるという、永遠にかわることのない人間

の傾向の一面にほかなりませんでした。

いまや小生は、これら異質な信じがたい生物に、夜のこぜりあいで害をおよぼしたことを残念に思っております。最初から友好裡に理性をもって彼らと話しあうことに応じてさえいればよかったのですが。しかし彼らは小生に恨みをいだいてはおらず、彼らの感情はわたしたちとは非常に異なったできぐあいになっているのです。彼らにとって不幸なのは、ヴァーモントにおける人間のスパイとして、はなはだ劣悪な者たち――たとえば死亡したウォルター・ブラウン――をつかったことでしょう。ブラウンのせいで、小生は彼らに対する悪い先入観をもってしまったのですから。事実、彼らは故意に人間に危害をくわえることはなく、わたしたち人間によって残忍な仕打ちをうけたり、こっそり調べられたりしているのです。邪悪な人間たちの秘密につつまれた教団があって（彼らがハスターや黄の印に結びついているといえば、貴殿のように秘教に精通している方には理解していただけるでしょう）、その教団はもっぱら別の次元の怖るべき存在のために、外世界からやってくる生物を見つけだしては傷つけることに邁進しております。外世界の生物たちが徹底した予防策を講じているのは、これら侵略者たちに対してであって、わたしたち普通の人間に対してではありません。小生は偶然にも、なくなってしまったわたしたちの手紙の多くが、外世界の生物ではなく、悪意をもつ教団のスパイによって盗まれたことを知りました。

外世界の生物が人間に望んでいるのは、平和と不干渉と理知的な関係を高めることなの

です。最後のものがいましも肝要なものになっているのは、わたしたち人間がさまざまな発明や工夫によって知識や行動を広げつつあることで、外世界の生物にとって必要な居留地を、この星で秘密裡に存在させることがますます困難になっているからにほかなりません。異質な生物たちは人類のことを十分に知るとともに、人類の哲学と科学の少数の指導者に、自分たちのことを知ってもらいたがっております。そうした知識の交換をおこなえば、すべての危険はなくなり、申しぶんのない暫定協定が結ばれるのです。人類を奴隷にしようとするとか、堕落させようとするとかいった考えは、莫迦ばかしいかぎりです。

この改善された関係の手はじめに、外世界の生物は地球上での彼らの首席通訳として、当然のように小生を選びました——彼らについての知識が既にかなりなものになっているからです。昨夜は多くのこと——目から鱗が落ちるような驚嘆すべき事実——を教えられ、これからもひきつづき口頭あるいは文書で伝えられることになっております。いまのところ、地球の外へ旅をするように求められることはありませんが、おそらくいずれは自分からそう願うことでしょう——特別な手段を用いることにより、わたしたちがこれまで人間の経験と考えているものすべてを超越することになるのです。拙宅はもはや包囲されることはありません。何もかもが正常に復し、犬たちも仕事がなくなることでしょう。恐怖にかわって、ほかの人間があずかったこともないような、知識と知的冒険という豊かな恵みがもたらされたのです。

外世界の生物はあらゆる時空の内外を通じて、おそらくもっとも驚くべき有機体でしょう。宇宙規模にわたる種族の一員であって、他の生命体はすべて退化した変種にすぎません。彼らの体を構成する物質に人間の言葉をあてはめられるとすれば、彼らは動物というよりも植物であって、いささか菌類に似た構造をもっておりますが、葉緑素に似た物質やきわめて特異な栄養摂取系統があるために、真の茎葉植物の菌類とは完全に異なっているのです。事実、わたしたちのいる宇宙とはまったく異質な物質形態――振動率が完全に異なる電子を備えた物質形態――からなりたっております。だからこそ、わたしたちの目には見えても、わたしたちの知る宇宙の通常のカメラのフィルムや感光板に、彼らの姿が写ることはないのです。しかしながら相応の知識があれば、すぐれた化学者なら誰でも、彼らの姿を記録する感光乳剤をつくりだせます。

この種族がまことに独特なのは、生身の体のまま熱も空気もない星間の虚空を渡れる能力があることで、変種の一部は機械的手段や手のこんだ外科手術なしにはできません。ごくわずかな種だけがヴァーモントの変種の特色である、エーテルに抵抗できる翼をもっているのです。旧世界の隔絶した山頂に住みついているものたちは、他の方法でもって連れてこられました。彼らの外見が動物や、わたしたちが物質と理解する類の構造に似ているのは、彼らとわたしたちに密接な関係があるからではなく、並行した進化をとげたからなのです。彼らの脳の容積は現存する他のいかなる生物をもしのいでおりますが、当地の丘

陵地帯にいる有翼生物にしても、もっとも高度な種というわけではありません。テレパシーが彼らの通常の会話手段ですが、彼らにも発声器官の痕跡があって、わずかな外科処置をほどこせば（外科手術は信じられないほど巧みにおこなわれ、日常茶飯事になっております）、まだ声を発して会話をおこなう生物の会話を、おおよそ真似ることができるのです。
彼らがいま主として住みついているところは、この太陽系の一番はずれにある、まだ発見されていないほとんど光のない惑星――海王星の彼方に位置する太陽から九番目の惑星――です。わたしたちが推測していたように、この惑星こそ、太古に著わされたある種の禁断の書物で、「ユゴス」と謎めかしてほのめかされているものにほかならず、近い将来、精神交流を促進すべく、わたしたちの世界にいままでになかった思考を集中させる場となることでしょう。外世界の生物がそう願うとき、天文学者がこれら思考の流れを感じとってユゴスを発見しても、小生は驚いたりはしません。しかしユゴスはもちろん飛び石にすぎないのです。生物の本隊は人間の想像を絶する奇妙にも組織化された深淵に住んでおります。わたしたちが宇宙にあるものすべての全体と考えている球状の時空連続体は、彼らのものである無限における原子にしかすぎません。そしてこの無限について人間の脳で把握できるものの多くが、ついに小生に開示されることになっておりますが、人類が誕生して以来これを明かされた者はわずか五十人ほどにすぎないのです。
貴殿はおそらく最初はこれをたわごとだとおっしゃるでしょうが、しかしウィルマース

さん、やがては貴殿にも小生が偶然に得た素晴しい好機の真価がおわかりいただけるでしょう。できるだけ多くを貴殿とわかちあいたく思いますので、そのためには手紙には書けないたくさんのことをお話ししなければなりません。以前には小生に会いにこないように申しあげました。いまや何の心配もありませんので、ここに喜んで先の警告を撤回し、貴殿をご招待いたします。

大学の新学期がはじまるまえに、当地までご足労願えませんでしょうか。当地までおこしいただければ、これにまさる喜びはありません。その際には検討用の資料として、録音された蠟管と小生の手紙をすべてご持参ください——この途方もない話をまとめあげるうえで必要なものなのです。ここしばらくは興奮するばかりで、ネガもプリントもどこかへ置き忘れてしまったようですので、コダック写真もよろしくお願いします。しかしこれまでの暗中模索の仮説のすべてに、小生はおびただしい事実をつけくわえることができるのです——そしてその話を補う途方もない手段もあります。

どうかためらわないでください——いまや小生は誰にも監視されてはおりませんし、貴殿も異常なものや不穏なものに出会うことはありません。おこしいただければ、ブラトゥルバラ駅まで車でお迎えにまいります——できるだけ長く逗留するご準備をしていただければ、人間には推測もままならないものについて、幾夜も議論することができるでしょう。もちろんこのことは他言なさらないでください——誰彼なしに知らせてよいものではない

のですから。
ブラトゥルバラへの列車の便は悪くはありません——ボストンで時刻表が手に入ります。B&M鉄道でグリーンフィールドに行き、そこで乗りかえればあとわずかです。便利がいいのは——標準時で——午後四時十分にボストンを発車する列車でしょう。これですと、七時三十五分にグリーンフィールドに着き、九時十九分にそこを出て、十時一分にブラトゥルバラに到着します。これは平日のものです。こちらにおいでになる日をお知らせくだされば、車で駅へお迎えにあがります。
この手紙をタイプで打って申しわけありませんが、ご存じのように最近は字を書くにも手が震えるようになっておりますし、体の具合が悪くて長く書きつづけられないのです。この新しいコロナのタイプライターは昨日ブラトゥルバラで購入しました——なかなか具合がいいようです。
ご返事をお待ちするとともに、録音された蠟管と小生の手紙すべて——ならびにコダック写真——を携えた貴殿にお目にかかるのを楽しみにしております。

敬具

ヘンリー・W・エイクリイ

マサチューセッツ州アーカム
ミスカトニック大学気付

アルバート・N・ウィルマース殿

この尋常ならざる思いがけない手紙を一度読み、あらためて読み返し、そして考えこんだときの複雑な気持ちといえば、とうていしかるべき言葉であらわしようもない。先に安堵と不安を同時におぼえたと記したが、これは安堵と不安をふくむ、もっぱら意識の深層に生じるさまざまな感情を、おおざっぱに述べたものにしかすぎないのだ。まずもって、手紙に記されていることは、これに先立つ一連の恐怖とまったく正反対だった——純然たる恐怖から平然とした満足感、そして歓喜にまでいたる気持ちの変化は、まことにだしぬけの急激な徹底したものだった。水曜日にあの最後の狂乱した手紙を書いた者が、わずか一日でこうも心理を変化させるとは、たとえその一日に安堵をもたらす事実がどれほどわかろうと、およそ信じられることではない。わたしは矛盾した非現実感をおぼえ、遠くから知らされるこの途方もない生物にまつわるドラマ全体が、もっぱらわたしの頭のなかでつくりだされた、なかば幻じみた夢のようなものではないかと思いもした。そして録音された蠟管のことを考え、ますます困惑するはめになった。

手紙は予想されるものとは似ても似つかないものだった。手紙からうけた印象を分析しているうち、はっきり異なる二つの面からなりたっていることがわかった。第一に、エイクリイが以前も現在も正気であるなら、状況そのものの顕著な変化は、速やかすぎて異常にすぎる。第

二に、エイクリイ本人の様子や態度や言葉の変化が、普通の変化や予想される変化とかけはなれすぎている。一人の男の全人格が潜在性の突然変異をうけたように思えるほどだった――その変異はあまりにも根深く、エイクリイに二つの面があるにせよ、そのいずれもが正気をあらわしているとは考えられなかった。言葉の選びかた、つづりかたまでもが、微妙に変化していたのだ。それにわたしは専門の学者として文章表現には敏感なので、エイクリイのごくありふれた反応やリズム感に、大きな変化を認めることができた。しかし別の点では、手紙はいかにもエイクリイらしいものだった。無限なるものに対する以前とかわらぬ熱烈な思い――以前とかわらぬ学者さながらの知識欲――があった。わたしは一瞬たりとも――ほんの少しも――この手紙を書いたのが偽者であるとか悪意ある替玉であるとか思いもしなかった。わたしを招いていること――手紙の内容が嘘ではないことをわたしに直接確かめさせようとしていること――が、偽りのないことを示しているのではないか。

土曜の夜は床につかず、手紙の背後にある翳り(かげ)や驚異について考えつづけた。この四ヵ月というもの、矢つぎばやに次つぎと悍しい概念をつきつけられ、これを考えこまざるをえなかったことで、わたしは頭が痛み、疑ったり受けいれたりの堂堂巡りをして、これまで驚異に直面したときに経験した段階の多くを繰返しつつ、この驚くべき新たな問題に思案をめぐらしたのだが、まだ夜明けまでかなりあるころに、燃えるような興味と好奇心とが、最初に気持ちを動揺させた困惑や不安になりかわっていた。狂っていようと正気であろうと、さまがわりしてい

ようと安堵しているにすぎないにせよ、エイクリイは危険な調査をおこなうことで、見通しを激変させるものと実際に遭遇して、何らかの変化が──現実のものであれ想像上のものであれ──危険を減少させるとともに、人知を越える宇宙の知識という目眩く新たな展望をもたらしたのだろう。未知のものに対するわたし自身の熱意も、エイクリイの熱意とはりあうほどに燃えあがり、慄然たる境界線を破るということに影響されて、気がふれたのではないかと思うほどだった。時空や自然法則の腹だたしくも倦み疲れる限界をふりはらい──広大な外宇宙と結ばれて──無限のものや窮極のものの闇につつまれた底知れぬ秘密に近づくことは、確かに生命や魂や正気を賭するだけの価値がある。そしてエイクリイはもはやいかなる危険もないといってきた──以前のように遠ざかっているよう警告するかわりに、わたしを招いているのだ。わたしはエイクリイが何を話してくれるかを思って、期待に胸を高鳴らせた──最近まで包囲されていたわびしい農家で、外世界から来た本当の使者と話した男に対面するということに、ほとんど目もくらみそうなほど魅了されてしまった。エイクリイが以前の結論を要約している手紙の束や怖ろしい録音のされた蠟管をかたわらに、腰をおろすことになるのだから。

そこで土曜の昼まえにエイクリイに電報を打ち、そちらの都合がよければ来週の水曜──九月十二日──に、ブラトゥルバラでお会いしましょうと伝えた。ただ一つ、どの列車を選択するかについては、エイクリイの提案にしたがわなかった。正直いって、異様な生物の出没するヴァーモントに夜遅く到着する気にはなれなかったので、エイクリイの選んだ列車に乗るかわ

り、駅に電話をかけて別の列車に乗る手配をした。朝早く起きて（標準時で）八時七分発のボストン行きに乗れば、九時二十五分発のグリーンフィールド行きにまにあい、グリーンフィールドに昼の十二時二十二分に着く。これでうまい具合に、一時八分にブラトゥルバラに着く列車に乗りかえられるのだ――エイクリイと会って、木木が鬱蒼と生い茂って秘密をはらむ丘陵地帯を車で進むには、夜の十時一分に着くよりもはるかに気分が楽になる。

このことを電報で知らせると、夕方近くに返電が届き、ありがたいことに、わたしを迎えてくれる人物に了承してもらえたことがわかった。エイクリイの電報はつぎのようなものだった。

「モウシブンナキテハイナリ」スイヨウノイチジハップンノレッシャヲマツ」ロウカントテガミトシャシンヲオワスレナキヨウ」ユクサキハナイミツニネガイマス」イダイナルジジツヲゴキタイサレタシ」

エイクリイ

エイクリイに打った電報に対する直接の返電をうけとったことで、わたしの電報がタウンゼンド駅からエイクリイの家へ、配達夫によって届けられるか、復旧された電話によって伝えられたことがわかり、あの当惑せざるをえない手紙の書き手について、まだ潜在意識に疑いがのこっていたとしても、すっかりぬぐいさられてしまった。わたしの安堵はこのうえもなかった

——事実、そのときには説明のつけられないほどのものだったが、それは疑惑のすべてが潜在意識の奥深くにあったからだ。しかしその夜はぐっすりと長いあいだ眠り、つづく二日間は旅の準備に精を出した。

VI

水曜日にはとりきめたとおり、簡単な必需品をはじめ、悍しい蠟管やコダック写真やエイクリイの手紙のすべてをふくむ、科学的な資料を旅行鞄に入れて出発した。エイクリイに頼まれたとおり、どこへ行くのかを誰にも告げなかったのは、事態がこれ以上望めないほど好転していることを考えに入れてもなお、この問題を極秘にしておかなければならないことがわかっていたからだ。まったく異質な外世界の実体と実際に精神的なふれあいをすることを考えると、それなりの経験を積んで心がまえをつけているわたしでさえ呆然とするほどなのだから、事情を知らない大多数の人びとにどれほどの影響をおよぼすかはわかったものではない。わたしはボストンで列車を乗りかえたが、馴染深い土地からほとんど知らない土地へと向かう西への長旅をはじめたとき、心にまずうかんだのが恐怖と大胆な期待のどちらだったのかは、いまとなってはわからない。列車はさまざまな駅を通過していった。ウォルタム——コンコード——エア

——フィッチュバーグ——ガードナー——アトル——

わたしの乗った列車は七分遅れでグリーンフィールドに到着したが、北に向かう急行が待ってくれていた。あわただしく乗りかえ、妙な息切れを感じていると、午後早くの日差しがふりそそぐなか、わたしがいつも読んでいながらも訪れたためしのなかった土地へと、列車が走りはじめた。いま入りこんでいるのは、わたしが生まれてこのかた暮している、機械化され都会化した海岸沿いの南の地方よりも、はるかに古風で素朴なニューイングランドであり、何ものにも損なわれていない先祖伝来のこのニューイングランドには、当世風に染まった地区に見うけられる外国人や工場の煤煙、広告板やコンクリート道路などはないのだった。連綿とつづく素朴な生活が妙に生きながらえて深く根をおろし、そうした生活を風景から自然に生じた真正のものにしている——連綿とつづく素朴な生活が不思議な古代の記憶を生かしつづけ、漠然とした信仰や奇異な信仰、そしてめったに口にはされない信仰の温床を豊かにしているのだ。

ときおり青いコネティカット河が日差しをあびてきらめくのが見えていたが、ノースフィールドをすぎるとその河を渡った。前方には緑したたる神秘的な丘陵がおびやかすようにあらわれ、車掌がやってきて、ついにヴァーモントに入ったことを知らされた。北の丘陵地帯は新しい夏時間を採用していないので、時計を一時間遅らせるようにいわれた。わたしはそうしたとき、暦を一世紀も逆にもどしているような気がした。

列車は河のそばを走りつづけ、ニューハンプシャーに入ると、特異な古譚の舞台となってい

るワンタスティケット山のきりたった斜面が、しだいに近づいてくるのが見えた。するうち左手に通りがあらわれ、右手の河には緑の島が見えた。乗客が立ちあがってドアのほうに向かいはじめたので、わたしもそのあとにつづいた。列車が停まり、わたしはブラトゥルバラ駅の長い屋根の下に足をおろした。

人を待つ車の列をながめまわし、どれがエイクリイのフォードだろうかと、つかのま迷ったが、わたしより先に相手のほうが見つけてくれた。しかし片手をのばしながらわたしのまえに進みでて、にこやかな表情をうかべ、もしかしてアーカムのアルバート・N・ウィルマース先生ですかとたずねたのは、明らかにエイクリイ本人ではなかった。この人物は、スナップ写真で見た顎鬚をはやす白髪まじりのエイクリイとは似ても似つかず、はるかに若くて洗練されており、流行の服に身をつつみ、小さな黒い口髭だけをたくわえていた。教養のあることをうかがわせる声は、妙なことにかすかな不安を感じさせ、どことなく聞きおぼえがあるような気がしたが、いくら記憶をまさぐっても思いだせなかった。

わたしがしげしげとながめていると、男はエイクリイの友人だといって、エイクリイのかわりにタウンゼンドからやってきたのだと説明した。男がいうには、エイクリイは何か喘息（ぜんそく）性の発作に襲われ、外気にあたるようなことができないとのことだった。しかしさほどひどいものではないので、わたしの訪問については予定をかえるにはおよばないという。わたしはこのノイズ氏――そう名のった――が、エイクリイの調査と発見について、どの程度まで知っている

のかがわからなかったものの、くつろいだ振舞いをしていることからも、あまり事情には通じていない人物だろうと思った。わたしの記憶にあるエイクリイは孤独な生活をする隠者だったから、このような友人をすぐに呼べることにはいささか驚かされたが、そのことで困惑させられはしても、ノイズにうながされて車に乗りこむのを思いとどまるまでにはいたらなかった。その車はエイクリイの手紙から予想していたような古ぼけた小さなものではなく、最新式の汚れ一つない大型車だった——ノイズのものにちがいなく、マサチューセッツのナンバー・プレートには、その年に流行った「神聖な鱈」の図案があった。どうやらこの案内人はタウンゼンド地方にやってきた夏の避暑客であるようだった。

ノイズが車に乗りこみ、わたしの隣の運転席につき、すぐに車を走らせた。ありがたいことに、ノイズがしきりに話しかけてくるようなことはなく、わたしのほうも、どことなく緊迫した特異な雰囲気があって、話をする気にはなれなかった。坂をのぼって右にまがり、本通りに入っていくと、午後の日差しをあびる町が魅力にあふれているように思えた。町がまどろんでいるありさまは、子供のころの記憶にある古いニューイングランドのたたずまいにも似て、屋根や尖塔や煙突や煉瓦壁の配置がつくりあげる輪郭には、心の奥深くにヴィオルのようにせつない調べをかもしだし、祖先から伝わる感情を揺り動かすものがあった。連綿とつづく時間の堆積物がいくつも積み重なったことにより、なかば魔法にかけられたような土地の戸口にいることが、わたしにもはっきりとわかった。古くからの異様な生物が、これまで悩まされること

もなかったため、生長して生きながらえる機会に恵まれた土地なのだ。
　ブラトゥルバラをあとにすると、圧迫感と不吉な予感が強まったが、これはそびえたっておびやかすような、緑の木木が鬱蒼とした斜面や花崗岩の斜面が連なる丘陵地帯に、人間に敵意をもっているかどうかが定かではない、秘密につつまれた太古からの生物が生きのこっていることを、ぼんやりとほのめかすものがあったからだ。しばらくのあいだ、車は広くて浅い河に沿って走りつづけ、この河は北にある未知の丘陵から流れているようだが、ノイズからウェスト河だと教えられ、わたしはぞくっとしてしまった。新聞記事によれば、洪水のあとで気味悪い蟹のような生物が浮かんでいるのが目撃されたのは、この河だったのだ。
　しだいにまわりの景色が荒れて、さびれたものになっていった。古めかしい屋根つきの橋が、怖ろしくも過去からぬけだしてきたかのようにのこっており、なかば放棄された鉄道の線路が河と並行にのびている様子は、荒廃の雰囲気を目に見える形でぼんやりと吐きだしているようだった。巨大な崖がそびえるところには、畏怖の念を感じさせる目のさめるような谷が広がり、山頂まで斜面を這いのぼる青草のあいだから、ニューイングランドの美しい花崗岩がいかめしい灰色の岩肌をのぞかせていた。峡谷では荒あらしい流れがしぶきをあげ、人跡未踏の無数の山頂がはらむ想像もつかない秘密の数かずを、下流へと運んでいく。なかば木木に隠された細い脇道がときおりあらわれ、堅固な壁のような鬱蒼とした森のなかへとつづいており、森の原生林には四大の霊がすべて潜んでいそうだった。わたしはこんな景色をながめながら、エイク

リイがこの道路でどんなふうに見えざる力に悩まされたのだろうかと考え、そういうことがあっても不思議ではないと思った。

一時間たらずで到着したのは、古風な趣(おもむき)のある美しいニューフェインの村で、征服と完全な占有によって、人間が自分のものだと呼べる世界との最後のきずなだった。その村をすぎると、直接ふれることができ、時間の作用をうけるものに対する忠誠をきれいさっぱり投げすてて、静まりかえった非現実の風変わりな世界へと入りこんだが、そこでは細いリボンのような道が、ほとんど意識と目的を備えているかのような気まぐれさで、住む者とてない山頂やなかば無人の谷のただなかを、のぼったりくだったり、まがりくねったりしていた。エンジンの音、そしてごくまれに通りすぎるわずかばかりのさびしい農場のかすかなざわめき以外、耳に届くものといえば、陰濃い森のなかに隠れた無数の泉から聞こえてくる、油断ならない異様な水音だけだった。

小さく見えていたドーム状の丘陵が、まさしく息もつけないほど、いまや間近にせまるようになった。斜面がいきなり切りたっているありさまは、噂から想像していたものをうわまわり、わたしたちの知る平凡な自然界と共通するものが何もないことをほのめかしていた。そうした近寄りがたい斜面に密生する、人が訪れたことのない森は、異質な信じがたい生物をかくまっているようで、丘陵の輪郭そのものが、太古に忘れさられた奇怪な意味をもっているように思われ、ごく稀れに見る深い夢にのみその栄光をのこす、伝説にうたわれる巨人族の象形文字で

あるかのようだった。過去の伝説のすべて、そしてヘンリー・エイクリイの手紙や写真や蠟管がほのめかす途轍もないもののすべてが、記憶のなかにあふれでて、緊張とつのりゆく脅威の雰囲気を高めた。この訪問の目的と、その背景にある怖ろしくも異常なものについて考えると、背すじがぞくぞくして、尋常ならざるものを探究したいという熱意もくじけそうになった。

案内人のノイズはわたしが動揺しているのに気づいたにちがいなく、道がますます荒れはて、でこぼこになり、車の速度も落ちてよく揺れるようになっていくにつれ、それまではときおり愛想よく話しかけるだけだったのが、とぎれなくしゃべるようになった。この地方の美しさや異様さについて話し、民間伝承に関するエイクリイの研究にいささか心得があることをもらした。丁重にたずねられたことから判断して、わたしが科学上の研究のためにやってきたことや、かなり重要な資料を携えていることを知っているようだったが、エイクリイがついにつかみとった知識の奥深さや悍しさまでは、どうやら理解しているふうではなかった。

ノイズの物腰は陽気で異常なところのない洗練されたものだったから、そんなノイズが口にする話を聞いて、わたしは気持ちをおちつかせて安心するのが当然なのだが、車ががたがた揺れて、丘陵と森林からなる未知の荒涼とした土地に入りこんでいくにつれ、妙なことに、ますます心がかき乱されるばかりだった。ときおりノイズがあれこれ問いかけるのが、このあたりの怖ろしい秘密について、わたしがどの程度知っているかをつきとめようとしているかに思えることもあったし、ノイズの声にはどうにも悩まされる不可解な馴染深さがあって、話しかけ

られるたびにその感じが強まっていくようだった。声は教養をうかがわせる、まったくもって健全なものなのに、ごく普通の馴染深さでもなければ、自然な馴染深さでもなかった。どういうものか、わたしはその声を、忘れはてていまは思いだせない悪夢に結びつけ、誰の声であるかがわかれば発狂するのではないかと思った。何かもっともらしい口実があれば、訪問をとりやめてひきかえしていただろう。実際のところは、そうするわけにもいかなかった――エイクリイの家に着いて、冷静に科学の話をすれば、しっかり気をとりなおせそうな気がした。

それに車が信じられないほどのぼりおりする、眠気を誘うような景色には、妙に気持ちをおちつかせる広大無辺な美という要素があった。時間は背後の迷宮のなかに失われてしまい、わたしたちのまわりに広がっているのは、妖精の国の波打つ花たちと、消えさった諸世紀を思いださせる美しさだけだった――古さびた木立ち、はなやかな秋の花に縁どられる汚れ一つない牧草地、そしてかなりな間隔を置いて、かぐわしい野薔薇や牧草のはえる断崖の下に、小さな茶色の農家が何軒か、巨木のただなかによりそって建っているのが見えた。太陽の光さえ天上の魅力をたたえ、何か特別な大気か発散物があたり一帯をつつみこんでいるかのようだった。ときにイタリアの地方画家の絵の背景となっている魅惑的な景観は別として、このような風景を見るのははじめてだった。ソドマやレオナルドがこのような広がりを思いついているものの、遠景としてや、ルネサンスの拱廊（きょうろう）の穹窿（きゅうりゅう）天井ごしに描いているにすぎない。わたしたちはいま絵のような景色のなかを突き進んでおり、わたしは風景の不思議な魅力のなかに、生まれつき

知っているか受けついでいないながらも、いつもむなしく探し求めていたものを見いだしたように思った。

突然、急勾配の坂をのぼりきって鈍角に曲がったあと、車が停まった。左手を見ると、よく手入れのゆきとどいた芝生が道まで広がり、芝生をかこむ水漆喰を塗った石が目にあざやかで、その向こうに屋根裏部屋のある二階建ての白い家がそびえ、このあたりにしてはことのほか大きくて美しく、この家に隣接して、裏や右手に納屋や物置きや水車が屋根つきの通路で結ばれていた。わたしはうけとったスナップ写真から、一目でこれが何であるかがわかり、道端のトタン板の郵便受けにヘンリー・エイクリイの名前があるのを見ても驚きはしなかった。家の裏の少しはなれたところには、木木の散在する平坦な湿地帯が広がり、その奥には樹木の生い茂るけわしい斜面がそびえ、緑したたる山頂は鋸歯状になっていた。これがダーク山で、わたしたちはその中腹をのぼってやってきたのだった。

ノイズが車からおりて、わたしの旅行鞄をもち、わたしが来たことをエイクリイに知らせてくるから待っていてくれといった。ノイズはほかに大事な用があるので、一緒にはいられないそうだった。ノイズがきびきびした足どりで家に通じる小道を歩いていくと、わたしは車からおりて、エイクリイと膝をまじえて話をするまえに、体をのばしておこうと思った。いまやエイクリイの手紙に忘れがたくも記されていた怖ろしい包囲の現場にいることで、神経の高ぶりと緊張が最大限にまで高まり、これからの話しあいで自分が異質かつ禁断の世界と結びつくの

だと思うと、正直いって不安でならなかった。

異様きわまりないものと密接な関係をもつことは、奮起させられるよりも怖気(おぞけ)だつことのほうが多いものだし、この砂ぼこりのたつ道が、恐怖と死の闇夜が明けてから、悍しい足跡や悪臭ふんぷんたる緑色の体液が見つかったところだと考えると、およそ元気づけられるわけもなかった。わたしはエイクリイの飼い犬が一匹もいないらしいことにぼんやりと気づいた。外世界の生物と和解してすぐに売りはらいでもしたのだろうか。妙にいままでとはちがったエイクリイの最後の手紙に明らかな、和解の誠実さを心底から信頼することが、どうしてもわたしにはできなかった。ともかくエイクリイはかなり純真な人間で、世故(せこ)にたけてはいないのだ。もしかして、新しい関係の表面下には、油断ならない深い暗流があるのではないだろうか。

そんなふうに考えているうち、わたしはつい視線を落とし、慄然たる証拠がのこっていたという土ぼこりのたつ道を見た。この二、三日は雨もふらず、轍(わだち)ののこるでこぼこの道には、あまり通行がないにもかかわらず、ありとあらゆるたぐいの跡がのこっていた。わたしは漫然とした好奇心をおぼえ、雑多な跡のいくつかの輪郭をたどりはじめるとともに、この場所とこの場所についての記憶から思いつく空怖ろしい考えが、あまり飛躍したものにならないように努めた。墓場のような静けさや、遠くの小川のかすかなせせらぎ、そして狭い地平線をふさいでひしめく緑の山頂と黒い木木に覆われる絶壁には、おびやかすような不快なものがあった。

と、そのとき、漠然とした脅威や奔放な考えすら、とるにたらない無意味なものに思わせて

しまうような、あるものが目にとまった。わたしは漫然とした好奇心をおぼえて道にのこる雑多な跡を調べていたと記した——が、たちまちそんな好奇心は、突如として愕然とするような現実の恐怖に襲われて、怖ろしくもかき消されてしまった。というのも、土ぼこりのたつ道にのこる跡は、入り乱れたり重なったりしているので、何げなく見ていたのでは目をひくものなど見つかりそうもないが、おちつきなく目をさまよわせているうち、家に通じる小道が道とまじわる箇所の近くで、ある足跡の細部までが見てとれ、その足跡の怖ろしい意味が疑惑や希望を超越してはっきりとわかったのだった。エイクリイが送ってくれた外世界の生物の鉤爪の跡のコダック写真を、何時間もつぶさにながめたことは、決して無駄にはならなかった。わたしは忌わしい鋏の跡はもちろん、その鋏の向きが判然とせず、この星のいかなる生物ともかけはなれた恐怖を刻印していることを知っていた。幸運なまちがいをおかしている可能性はまったくなかった。まさしくわたしの眼前に客観的な形として、そう何時間もまえについたものではありえない鉤爪の跡が少なくとも三つ、エイクリイの家を出入りする驚くほど数多くのぼんやりした足跡のなかに、歴然と神を汚すようにたちあらわれているのだった。ユゴス星からやってきた、生ける菌類の地獄めいた足跡にほかならない。

わたしは自制心をとりもどし、悲鳴をあげそうになるのをこらえた。ともかくエイクリイの手紙を本当に信じていたとすれば、これは予想しておくべきことではないのか。エイクリイは生物と和解したことを記していたのだから。それなら生物の何匹かがエイクリイの家を訪ねて

きても不思議ではないだろう。しかし安心するよりも恐怖のほうが強かった。宇宙の深淵からやってきた生物ののこした鉤爪の跡をはじめて目にして、平然としていられる者がいるだろうか。ちょうどそのとき、ノイズが玄関から出て、きびきびした足どりで近づいてきた。この愛想のいい男が、禁断のものに対するエイクリイの深遠かつ目眩くような調査について何も知らないようなので、わたしは自制心のかぎりをつくさなければならないと思った。

ノイズが口早に知らせるには、エイクリイはよろこんでわたしと会うが、喘息の急な発作が起こったことで、一両日はさしたるもてなしもできそうにないとのことだった。こうした発作の症状はひどく、いつも熱が出て体が衰弱するらしい。発作がつづいているあいだ体の具合は悪くなる――話すにしてもかぼそい声で囁かなければならず、動作もぎごちなくて弱よわしいものになる。足や足首がはれあがるので、肉を食べすぎて痛風にかかった者のように包帯を巻かなければならない。今日はかなりひどい状態なので、ろくにもてなしもできないが、それでもわたしと話をしたがっているという。エイクリイは玄関ホールの左手の書斎――鎧戸の閉ざされた部屋――にいる。病気のときは目が過敏になるので、日光をさえぎらなければならないのだ。

ノイズがそういって別れを告げ、車に乗りこんで北に走りさると、わたしは家に向かってゆっくりと歩きはじめた。ドアはわたしのために開いたままにされていたが、わたしはそこに近づいて入るまえに、あたり一帯を探るようにながめ、どことなく奇妙に思えるわけをつきとめよ

うとした。納屋や物置きはこざっぱりとしたありふれたもののようだし、エイクリイのくたびれたフォードが屋根だけの広い車庫に停めてあった。するうち、どうして奇妙に思えるのかがわかった。あたりはまったくの静寂につつまれている。農場というものはたいてい、さまざまな種類の家畜がいるために、少なくとも適度のざわめきがあるものだが、ここには生命の気配すら感じられないのだ。雌鶏や豚はどうしたのだろう。エイクリイが手紙で数頭飼っているといっていた牛は、牧草地に行っているのかもしれないし、犬はおそらく売りはらわれたのだろうが、家畜の鳴き声がまったく聞こえないのはいかさま奇妙なことだった。

わたしは玄関ポーチに長く立ちどまってはいずに、決然とした思いで開いた戸口から入り、ドアをうしろ手に閉めた。そうするには紛れもない精神の努力が必要だったが、そうして家のなかに閉じこもると、ほんのつかのま、一目散に逃げだしたい衝動にかられた。家のなかに少しでも不気味さを感じさせるものが見えたわけではなく、それどころか、優雅な後期植民地様式の玄関広間を趣のある穏健なものだと思い、このような造作を備えつけた人物の育ちのよさに感心したほどだった。逃げだしたい衝動にかられたのは、はなはだ弱まって、はっきりとはつかみがたいもののせいだった。おそらく一種妙な臭いがかぎとれるような気がしたためだろう。もっとも、古めかしい農家というものは、よく手入れされていてもなお、かびくさい臭いのすることは、わたしもよく知ってはいたのだが。

VII

こうした模糊とした不安に圧倒されないようにしながら、わたしはノイズの指示を思いだし、左のほうに進むと、六枚の鏡板を入れて真鍮製の掛け金のある白いドアを押し開けた。教えられたように部屋のなかは暗く、なかに入ると、奇妙な臭いが強くかぎとれることに気づいた。なかば気のせいのようにも思える、かすかなリズムというか振動のようなものもあった。鎧戸が閉ざされていることで、しばらくはほとんど何も見えなかったが、やがてわびるような咳ばらいとも囁きともつかない声がしたので、部屋の一番暗い奥の片隅にある大きな安楽椅子に目を向けた。暗がりの奥に、男の顔と手が白くぼんやりと見え、わたしはすぐに進みでて、話しかけようとしていた人物に挨拶をした。光はほとんどささなかったが、まえにいるのがまさしくエイクリイであることがわかった。コダック写真を何度も見ていたので、白髪まじりの顎鬚を短く刈りこんだ、日焼けしてひきしまった顔を見まちがえることはなかった。

しかしもう一度見なおしたとき、エイクリイであることがわかるとともに、悲しみと心痛が胸にこみあげてきた。まさしく重病人の顔だったからだ。緊張のあまりこわばってぴくりとも動かない表情や、まばたき一つしないどんよりした目の背後には、喘息以上のものがあるにちがいなく、これまでの怖ろしい経験による心労がよほど身にこたえているのだろうと察しられ

た。こんな心労がつづけば、どんな人間であろうと――禁断のものに探りを入れるこの大胆な男より若い者でさえも――気力をくじかれてしまうのではないか。もしかしたら、急に不思議な和解があって安堵したのも、心労から神経衰弱におちいるのをふせぐには、遅すぎたのかもしれない。手が力なく膝に置かれている生気のない様子には、哀れみを誘うものがあった。エイクリイはゆったりしたガウンをまとい、頭と首がすっかり隠れるほど、鮮かな黄色のスカーフか頭巾のようなもので覆っていた。

やがてエイクリイが挨拶したときと同じ、せきこむような囁き声で話しかけているのがわかった。灰色の口髭が唇の動きをすっかり隠しているうえ、声の震えにひどく不安な思いにさせられるものがあるので、最初は聞きとりにくかったが、注意して聞いていると、いわんとするところがすぐに驚くほどはっきりわかるようになった。地方のなまりはまるでなく、言葉づかいも手紙から予想していたより、さらに洗練されたものだった。

「ウィルマースさんですね。立ちあがりもせずに申しわけありません。ノイズ君からお聞きになっているように、体の具合が悪いのですが、あなたにはぜひともおいでいただきたかったのです。このまえの手紙に記しましたことはご存じでしょうが――明日になって気分がよくなれば、お話ししたいことがたくさんあるのですよ。たくさんの手紙をやりとりしたあとで、こうして直接にお目にかかれたうれしさは、とても言葉ではあらわせません。もちろん手紙はおもちいただけましたでしょうね。コダック写真と蠟管も。あなたの鞄はノイズが廊下に置いてお

ります――ご覧になりましたね。今晩のところは、申しわけありませんが、何もかもご自分でおやりになってください。お部屋は二階――ちょうどこの部屋の上――で、浴室は階段をのぼりきったところにあって、ドアを開けてあります。お食事は食堂――この部屋から出て右手の部屋――に用意してありますから、いつでもご自由にめしあがってください。明日はおもてなしもできるでしょう――いまのところは具合が悪くて、どうすることもできないのです。
「どうぞおくつろぎになってください――鞄をおもちになって二階へあがられるまえに、手紙と写真と蠟管は、ここのテーブルにのこしていっていただけませんか。この部屋でお話しいたしましょう――蓄音器もそこの隅の台の上にあります。
「いえいえ、お気づかいはご無用です。昔からこの発作には慣れておりますので。夜になるまえに、またここへいらっしゃって少しお話をしてから、そのあとはお好きなときにお休みになってください。わたしはここで体を休めるつもりです――よくするように、ここで眠ることになるでしょう。朝になれば、具合もよくなって、お話ししなければならないことを語りあえると思います。わたしたちの目のまえにある問題が驚くべき性質のものであることは、もちろんよくおわかりでしょう。この地球上でほんの一握りの人たちのように、人間の科学や哲学で考えられるいかなるものをも超越した知識、そして時間と空間の深淵が、わたしたちにも明らかになるのです。
「アインシュタインがまちがっていて、ある種の物体や生物が光よりも速く移動できることを

ご存じですか。適切な手段を用いれば、時間のなかを自在に往き来して、遙かな過去や未来の時代の地球を、実際に見たり感じたりすることができるのです。あなたには想像もつかないほど、あの生物たちは科学を発達させております。彼らが精神と肉体でもってできないことは何もありません。わたしはほかの惑星や星や銀河さえをも訪れることを楽しみにしています。最初の行く先はユゴス、あの生物がたくさん住んでいる一番近い星になるでしょう。太陽系の一番はずれにある不思議な暗黒星ですよ――いまのところ、地球の天文学者には知られておりません。しかしこのことは手紙でお知らせしたはずです。彼らはしかるべきときに、思考の流れをわたしたちに向けることで、ユゴス星が発見されるようにするでしょう――あるいは人間の味方の一人をつかって、科学者にそれとなくにおわせるかもしれません。

「ユゴスには巨大な都市がいくつもあります――階段状の塔がそびえているのですが、そうした塔はあなたにお送りしようとしたような黒い石から造られております。あの黒い石はユゴスからもたらされたものなのですよ。ユゴスでは太陽も星ほどの光しか放ちませんが、あの生物には光は必要ではありません。彼らは別の鋭敏な感覚がいくつかあって、巨大な家屋や神殿にも窓を設けることはないのです。時空の外にある彼らの発祥の地では、暗い宇宙にまったく光が存在しませんので、彼らは光に傷つけられたり、動きをさまたげられたり、混乱させられたりさえします。ユゴスを訪れるのは、虚弱な者なら発狂するようなことです――が、わたしは行くつもりです。瀝青(れきせい)の流れる真っ黒な河には、謎めいた巨石造りの橋がかかっていますが

──あの生物たちが窮極の虚空からユゴスへ到来するまえに、既に死滅して忘れられてしまった太古の種族がつくったものですが──そうした光景をながめて、そのことを話すあいだだけでも正気でいられるなら、誰でもダンテやポオになれることでしょう。
「しかし心にとめておいていただきたいのですが──菌類の庭園や無窓の都市からなる暗黒世界は、実際には怖ろしいものではないのです。わたしたちにとってのみ、そう思えるだけのことにすぎません。おそらくこの世界も、あの生物たちが原初にはじめて探検したときには、怖ろしく思えたことでしょう。ご存じのように、彼らは伝説的なクトゥルーの時代がおわるよりも遙かまえに地球にやってきて、まだ水没していなかったころのルルイエのことをすべておぼえているのです。彼らは地球内部にも行ったことがあります──人間の知らない開口部があるのですが──そのいくつかはこのヴァーモントの丘陵地帯にあって、未知の生命の広大な世界として、青く輝くクン＝ヤン、赤く輝くヨス、暗い無明のンカイがあります。このンカイから怖るべきツァトゥグアがやってきたのですよ──あなたもご存じでしょうが、ナコト写本をはじめ、『ネクロノミコン』、そしてアトランティスの大祭司クラーカシュ＝トンが記録したコモリオムの神話で言及される、定まった形のない、蟇(ひきがえる)を思わせる、神のごとき生物のことです。
「しかしこういったことはすべて、あとでお話しいたしましょう。いまは四時か五時ごろにちがいありませんね。鞄から荷物をおだしになって、軽い食事をとられてから、またここへいらっしゃってお話しするのがよろしいでしょう」

わたしはきわめてゆっくりと向きをかえ、この家の主人にいわれたように、旅行鞄をとってくると、求められた品物をとりだしてテーブルに置き、最後に階段をのぼってわたしのために用意された部屋に向かった。道にのこる鉤爪の跡が生なましく記憶に焼きついているので、エイクリイの囁いた話に妙な影響をうけ、エイクリイが菌類生物の未知の世界――禁断のユゴス――についてよく知っているらしいことで、たまらないほどの寒けがした。エイクリイの病状を気の毒に思いはしたが、正直にいえば、あのかすれた囁き声は、哀れむべきものであるとともに厭わしいものでもあった。ユゴスとその暗澹たる秘密について、あれほど満悦してしゃべらなくてもよかったろうに。

わたし用の部屋はとても気持ちがよく、家具調度も十分にそろっており、かびくさい臭いや心騒がされる振動も感じられないものだった。わたしは旅行鞄を部屋に置くと、また階段をおりて、エイクリイに声をかけてから、用意されている食事をとろうと思った。食堂は書斎のすぐ奥にあり、同じ方向のさらに向こうに、母屋から突出した形で台所があった。食卓にはサンドイッチやケーキやチーズがたっぷりならべられ、受け皿に置かれたカップのそばには魔法瓶があって、熱いコーヒーも忘れずに準備されているのがわかった。わたしはよく味わいながら食事をしたあと、コーヒーをたっぷりとカップにそそいだが、この家の調理基準もこの一点だけには抜かりがあった。最初にほんの一口飲んでみると、かすかに不快な苦みがあったので、それ以上は口にせずにおいた。食事のあいだ、暗くされた隣の部屋で、大きな安楽椅子に無言

で坐っているエイクリイのことを考えた。一度、食事をご一緒しませんかと誘いにいったが、まだ何も食べられないのだと囁き声でいわれた。あとで、眠るまえに、麦芽乳でも飲むつもりだ、と——その日はそれだけでいいそうだった。

わたしは食事をおえると、エイクリイがかまわないというのも聞かず、食器をかたづけて、台所の流しで洗うことにした——そのついでに、とても飲めなかったコーヒーをすてた。そして暗くされた書斎にもどり、エイクリイのいる片隅に椅子をひきよせ、エイクリイがかわしたいと思っているかもしれない会話に備えた。手紙と写真と蠟管は部屋の中央にある大きなテーブルにまだあったが、それらを利用する必要はさしあたってなかった。するうち、異様な臭いや奇妙な振動のようなものさえ忘れはててしまった。

エイクリイの手紙のいくつか——ことに二番目のもっとも分厚い手紙——には、引用することはおろか、書きとめる気にもなれないものがあったと、先に記したことがある。このためいは、異様な生物の出没するさびしい丘陵のただなかにある暗い部屋で、その夜囁かれるのを耳にした話に、さらに一層強く感じられるのだ。あのしゃがれた声で明らかにされた宇宙の怖ろしさが、どの程度のものであったかは、ほのめかすことすらできはしない。エイクリイは以前から慄然たることをよく知っていたが、外世界の生物と和解してから学びとったことは、およそ正気の者には堪えがたいことばかりだった。わたしはいまでさえ、窮極の無限がどのように構成され、さまざまな次元がいかに並列し、そしてわたしたちの知る時空間が宇宙＝原子の

結びつく果てしない連鎖のなかに怖ろしくも位置して、こうした宇宙＝原子の連鎖が、超宇宙の物質および半物質の電子による有機的組織や曲線や角度を、どのようにつくりあげているかといったことは、断固として信じるつもりはない。

正気を保った人間で、これほど危険なまでに根本的実在の秘密に迫った者はいないはずだ——形態や力や調和を超越する混沌におけるまったくの無に、これほど近づいた頭脳もないだろう。クトゥルーがそもそもどこからやってきたのか、歴史上つかのま記録されている大きな星の半分がどうして燃えあがってしまったのかを、わたしはエイクリイから知らされた。そうしてわたしは——エイクリイさえもがおずおずとためらいがちにほのめかしたものから——マゼラン雲や球状星雲の背後に潜む秘密や、道教の太古の寓話に隠された暗澹たる真実を察した。ドール族の性質がはっきりと明かされ、ティンダロスの猟犬の（起源ではなく）本質を告げられた。蛇の父なるイグの伝説はもはや象徴的なものではなくなり、『ネクロノミコン』がアザトースという名前でもって慈悲深くも隠しこんだ、角度ある空間の彼方に存在するすさまじい核の混沌について聞かされたときには、胸が悪くなるほど愕然とした。秘められた神話の醜悪きわまりない悪夢の数かずを、古代や中世の神秘家たちのもっとも大胆なほのめかしをうわまわる、怖ろしくも忌むべき具体的な言葉で明らかにされるのは、いいようもなく衝撃的なことだった。わたしには逃れるすべもなく、こうした呪われた話を最初に囁いた人間が、エイクリイの接触した外世界の生物たちと語りあい、エイクリイの目論んでいるように外宇宙を訪れた

はずだと思わざるをえなかった。
わたしは黒い石とそれが意味するものについて教えられ、黒い石が届かなかったことをうれしく思った。黒い石に刻まれた象形文字についてわたしの推測していたことは、すべて完璧すぎるほどに正確なものだったのだ。しかしエイクリイはいまや、偶然に見つけだした魔性の生物全体と和解して、さらに怖ろしい深淵に探りを入れたがっているようだった。最後の手紙を書いてからエイクリイはどんな生物たちと話しあったのだろうか、そしてまた、彼らの多くはエイクリイのいっていた最初の使者のように人間じみているのだろうかと、わたしは思った。頭のなかの緊張が堪えがたいものになるにつれ、暗い部屋で感じとれる、妙にいつまでも消えない臭いと、かすかな振動めいたものについて、わたしはありとあらゆる奔放な考えをめぐらした。
いまや夜のとばりがくだりはじめ、わたしはエイクリイが手紙で夜について記していたことを記憶によみがえらせ、今夜は月が出ないことを思ってぞくっとした。この農家がダーク山の未踏の山頂に通じる樹木の鬱蒼とした大斜面の陰に位置していることも気に入らなかった。エイクリイの許しを得て、小さなオイル・ランプに火をつけ、炎を小さくしてから、遠くはなれた書棚の幽霊じみたミルトンの胸像のそばに置いたが、エイクリイの緊張してこわばった顔と生気のない手が、ぞっとするほど異常なまでに死体のように見えたので、ランプに火をともしたことを後悔した。エイクリイはほとんど動くこともままならないようだったが、ときおりは

こわばった感じでうなづくのが見えた。
　こんな話を聞かされたあとでは、エイクリイが明日のためにとっている、さらに深淵な秘密など、ほとんど想像することもできなかったが、囁き声で語られる話から察するに、エイクリイがユゴスやその彼方への旅をすること――わたしもその旅に同行できること――が、翌日の話題になるらしかった。宇宙旅行をするのはどうだといわれ、わたしが震えあがっているのを、エイクリイはおもしろがったにちがいなく、わたしが恐怖をおもてにだしたとき、エイクリイの頭がぐらぐら揺れた。エイクリイはさらにつづけて、一見不可能に思える星間の虚空をよぎる飛行を人間がなしとげる方法――そして何度となくなしとげていること――について、きわめて穏やかに話してくれた。完全な人間の体では旅はできないが、外宇宙の生物のけたはずれの外科的、生物学的、化学的、機械的技術によって、人間の頭脳をそれにともなう肉体なしに運ぶ方法が見いだされたようだった。
　脳を摘出する無害な方法や、脳のなくなった肉体を生かしておく方法があるという。むきだしのかさばらない脳は、ユゴスで採掘される金属でつくられた、エーテルの影響をうけない円筒内の液体のなかに浸けられ、この液体はときおり補充されるのだが、さらにある種の電極が備わっていて、見る、聞く、話すの三大能力を果たしうる、精巧な装置に自在に接続される。翼をもつ菌類生物にとって、脳を収めた円筒を携え、これをそこなわずに宇宙を飛ぶのはたやすいことなのだ。そして彼らの文明がおよぶ星ならどこでも、円筒に入れられた脳と接続でき

る調整可能な能力＝装置が十分にあるので、時空連続体をよぎってさらにその彼方に向かう旅の各段階において、この能力＝装置を少し調整してもらえば、旅をする脳は——肉体がなく機械的なものではありながら——十分に感覚と発声能力のある生活をおくることができる。録音された蠟管をもち歩き、対応するメーカーの蓄音器があるところなら、どこでも再生できるのと同じようにたやすいことなのだ。それがうまくいくことに問題はない。エイクリイは不安をいだいてはいなかった。何度もうまくなしとげられているのだからといった。

そのときはじめて、それまで動くことのなかった、やせおとろえた手の一方があがり、部屋の一番奥にある高い棚をぎごちなく指差した。そこには、いままで見たこともない金属でつくられた円筒が十以上、きれいに列をつくってならんでいた——円筒は高さが一フィート、直径は一フィート弱で、三つの奇妙なソケットが二等辺三角形を構成して、それぞれの円筒のふくらんだ正面に備えられていた。円筒の一つは、二つのソケットが、背後にある特異な形の一対の装置に接続されていた。その目的については説明してもらうまでもなく、わたしはぞくっと身を震わせた。つぎにエイクリイの手が指した近くの隅を見ると、そこにはコードやプラグのとりつけられた複雑な装置がかたまっていて、そのいくつかは棚の円筒の背後にある二つの装置によく似ていた。

「ここには四種類の装置があるのですよ、ウィルマースさん」声が囁いた。「四種類あって、それぞれ三つの能力を果たしますから、全部で十二になります。四つの異なった生物があそこ

にある円筒のなかにいるのです。人間が三人、肉体を備えていては宇宙を旅することのできない菌類生物が六人、海王星の生物が二人（この生物が海王星にいるときの姿をご覧になれればいいのですがね）、そして銀河の彼方のとりわけ興味深い暗黒星の中心にある洞窟の生物です。ラウンド・ヒルの内部にある第一居留地には、ときおりもっと多くの円筒や装置が見かけられますが、そうした円筒には、われわれの知るものとは異なった感覚をもつ宇宙外生物の脳――最果ての外宇宙からやってきた同盟者や探検者の脳――が収められていて、特別な装置を使用することで、彼らは印象をうけたり発言することができ、これは彼らとともに、異なった種類の聞き手にふさわしいやりかたでもって調整されます。さまざまな宇宙に存在する生物の主要な居留地の多くと同様、ラウンド・ヒルは実に宇宙的な場所なのですよ。もちろん、わたしが実験用に貸してもらったのは、もっとありふれたタイプの生物の脳ですがね。

「さて――わたしの指示する三つの装置をとってきて、テーブルの上に置いてくださいませんか。まず、正面にガラス製のレンズが二つある背の高い装置――つぎに真空管と共鳴板のついた箱――そして一番上に金属製の円盤のある装置です。今度はB六七というラベルの貼られた円筒を探してください。そのウィンザー・チェアーの上に立てば、棚に手が届くでしょう。重いですか。そんなことは気になさらずに。番号を確かめてください――まちがいなくB六七ですか。二つのテスト装置に接続されている、きらきらした新しい円筒――わたしの名前がある円筒――は気になさらないように。B六七をテーブルの装置のそばに置いてください――三つ

の装置のダイアルがすべて左にまわしきられているかどうかを確かめていただけますか。

「さあ、レンズのついた装置のコードを、円筒の上のソケットに接続してください——そこです。真空管のある装置は左下のソケットに、円盤のついた装置は最後のソケットにつなぐのです。装置のダイアルをすべて右にまわしきってください——まずレンズのついた装置、つぎに円盤のついた装置、最後に真空管のある装置の順です。それで結構ですよ。これが人間であると申しあげてもよろしいでしょうね——わたしたちとかわらない人間なのですよ。明日はまた別のものをお見せしましょう」

いまでもよくわからないのだが、どうしてわたしは囁かれるままに唯唯諾諾(いいだくだく)としてしたがったのだろう、そしてまたエイクリイを正気と狂気のいずれと思っていたのだろう。これまでのことを考えて、何があってもたじろがずにいる心がまえをつけておくべきだったが、機械をつかったこの無言劇は、狂った発明家や科学者の典型的な奇行のように思えてならず、たとえそれまでに聞かされた話にかきたてられることがなかったにしても、おのずから疑惑が脳裡にひらめいた。囁き声で語られる話が意味しているのは、まったく信じられようもないことだった——しかしほかのことにしても、手にふれることのできる具体的な証拠がないだけに、さらに信じがたく不合理なものではなかったか。

この混沌としたありさまのなかで、目がくらみそうになっていると、さっき円筒に接続した三つの装置すべてから、きしる音と回転する音のいりまざった音がしはじめた——この音はす

ぐに静まって、何も聞こえなくなった。何が起ころうとしているのか。声を聞くことになるのか。たとえそうだとしても、巧妙につくりあげられた無線装置をつかい、姿を隠しながら仔細に観察している話し手が話しかけているのではないことを、はっきり示すどんな証拠があるというのか。いますらわたしは、自分が耳にしたことや、目のまえでどんな現象が実際に起こったかについて、はっきり証言することにためらいをおぼえる。しかし確かに何かが起ころうとしていた。

簡明にいえば、真空管と共鳴箱のある装置がしゃべりだし、論旨と知性がはっきりしているだけに、話し手が実際にいて観察していることに疑問の余地はなかった。声は大きく、金属的で生気がなく、あらゆる点において、紛れもなく機械的なものだった。抑揚や感情をあらわすことはできなかったにせよ、このうえもなく正確にゆっくりと、きしるような声でしゃべりつづけた。

「ウィルマースさん」声が告げた。「あなたを驚かせたのでなければよいのですが。わたしはあなたとかわらぬ人間ですが、体はここから一マイル半東にある、ラウンド・ヒルの内部にあって、適切な生命維持処置をうけております。わたし自身はあなたの目のまえにいるのですよ——脳がこの円筒のなかにあって、これらの電気振動装置によって、見たり、聞いたり、話したりします。一週間のうちに、これまで数多くしたように、虚空をよぎる旅にでかけますが、その際にはエイクリイさんにご同行いただけるのを楽しみにしています。こうしてあなたにお

目にかかり、あなたの評判を存じあげておりますし、われわれの友人とかわされた文通を丹念に記録させていただいておりますので、あなたにもご同行いただきたいものですね。もちろんわたしはこの星を訪れる外世界の生物を支持するようになった者の一人です。わたしはヒマラヤ山脈ではじめて彼らに出会い、さまざまなやりかたで彼らを助けました。彼らはそのお返しに、ほとんどの人間が味わったことのない体験をさせてくれるのです。

「わたしが三十七の異なった天体——惑星や暗黒星やはっきりあらわしがたい星——を訪れ、そのなかにはわれわれの銀河系の外にある八つの星と、彎曲した大宇宙の外にある二つの星もふくまれていると申しあげれば、それが何を意味するかをおわかりいただけるでしょうか。こうした天体はすべて、わたしを傷つけるようなことはありませんでした。わたしの脳は頭蓋骨を切開してとりだされましたが、その処置はあまりにも巧みなものですので、外科手術と呼ばれるような粗雑なものではありません。地球に訪れている生物たちは、こうした脳の抽出をごくありふれた簡単なものにしてしまう方法を身につけております——そして肉体は脳をとりだされると、歳をとることがありません。つけくわえれば、機械による能力を備え、ときおり保存液をとりかえることで補給されるわずかな滋養分があれば、脳は文字通りに不滅なのですよ。

「要するに、わたしが心から願っているのは、あなたがエイクリイさんやわたしに同行すると決心してくださることなのです。この星を訪れている生物たちは、あなたのような知識人と懇意になって、われわれの大部分が無知なあまり、とりとめもなく夢想せざるをえない、大いな

る深淵を見せたがっています。彼らに出会えば、最初は奇異に感じられるかもしれませんが、あなたはそういうことを気になさるお方ではないでしょう。ノイズさんも同行するはずです──あなたを車でここまでお連れした人物ですよ。ノイズさんは何年もまえからわれわれの一員になっております──エイクリイさんがお送りした蠟管に録音されている声の一つが、ノイズさんのものであることは、既にお気づきになっていると思いますが」

わたしがひどく驚いたことで、話し手はひと呼吸置いてから話をしめくくった。

「ですから、ウィルマースさん、奇異なものや民話を愛するあなたのようなお人なら、このような機会を決して逃すべきではないと申しそえて、すべてはあなたのご判断におまかせします。心配なさるようなことは何もありません。移動は痛み一つないものですし、感覚を完全に機械に頼ることで楽しめるものも数多くあるのです。電極がはずされると、単に眠りこんで、きわめて生なましい奔放な夢を見るだけのことですから。

「さて、よろしければ、話しあいはあらためて明日におこなうことにしましょう。おやすみなさい──ダイアルはすべて左にまわしきってください。どういう順序でまわしてもかまいませんが、レンズのついた装置のダイアルは最後にまわしていただいたほうがよろしいでしょうね。おやすみなさい、エイクリイさん──お客さまのおもてなしを頼みますよ。さあ、ダイアルをまわしてください」

それだけだった。わたしはいわれるままに三つのダイアルをまわしたが、この出来事すべて

を疑って呆然としていた。まだ動揺からたちなおれないでいるうちに、エイクリイが囁き声で、円筒や装置はテーブルの上にそのまま置いておけばいいと告げるのが聞こえた。エイクリイは何一つ自分の考えを述べようとしなかったが、たとえ何らかの意見を聞かされたところで、負担に堪えかねているわたしにはほとんど意味をなさなかっただろう。エイクリイがランプをもっていって部屋でつかえばいいというのが聞こえ、わたしはエイクリイが闇のなかでひとりきりで休みたがっているのだろうと察した。エイクリイは午後から夕暮にかけて、屈強な者さえ疲れはてるほどに話しつづけたのだから、確かにそろそろ休むべきころあいだった。わたしは呆然としたまま、エイクリイにおやすみをいうと、強力な小型懐中電灯をもってきてはいたが、ランプを手にして階段をのぼった。

奇妙な臭いと振動めいたものが感じられる階下の書斎をはなれてほっとしたが、いまいる場所とこれから出会うことになる生物のことを考えると、怖ろしい不安や脅威や宇宙の異常さを感じないわけにはいかなかった。荒涼としたさびしい土地、不思議なほど木木が鬱蒼と生い茂り、家の背後に迫ってそびえる黒ぐろとした斜面、道にのこる足跡、空怖ろしい円筒や装置、さらには異様な手術やさらに異様な旅への誘い——こういった目新しいことが突如として、勢いを増しながらひきもきらずに押し寄せてきたので、わたしは意志がくじけ、体力も失いかけていた。

わたしをこの家に連れてきたノイズが、蠟管に録音されていた、凶まがしい過去のサバトを

思わせる儀式にくわわっていた人間であることがわかると、以前からノイズの声にどことなく不快な聞きおぼえがあるように思っていたとはいえ、ひどいショックをうけずにはいられなかった。さらにまた、エイクリイに対する自分の態度を分析するたびに、ほかならぬ自分の態度にショックをうけた。わたしはこれまで文通で明らかになったエイクリイのひとがらを好ましく思っていたのだが、いまやはっきりとした嫌悪をおぼえることがわかったからだ。エイクリイが病気だということで、哀れみを感じて当然なのに、そうはならず、ぞくぞくした寒けのようなものを感じてしまうのだった。エイクリイはこわばって生気がなく死体のようだった――そしてたえまなく囁きかける声は、忌わしいばかりに人間ばなれしたものだった。

そういえば、この囁き声は、わたしがこれまでに耳にしたどんなものともちがっていたし、口髭に覆われた唇は妙に動きがなかったというのに、ぜいぜい息を吸う喘息患者にしては驚かされるほど、声には力があってよく通った。書斎でかなりはなれていても囁き声は理解できたし、一、二度は、かすかとはいえよく通る声が、体が衰弱しているというよりはむしろ、わざと抑制しているように思えたほどだった――どうしてなのかは推測もままならなかった。わたしは最初から声のひびきに心騒がされるものがあるのを感じとっていた。いまそのことをよく考えてみようとすると、この印象をつきつめれば、ノイズの声をどことなく不気味なものにさせていたもののような、一種の潜在意識の馴染深さがあるように思われた。しかしいつどこでこの印象がほのめかすようなものに出会ったのかは、まったくもってわからなかった。

一つだけ確かなことがあった——明日もこの家で夜をすごすつもりはないということだ。科学に対するわたしの熱意も、恐怖と嫌悪にさらされて消えうせてしまい、病的なものや尋常ならざる啓示からなるこの罠から逃げだしたいばかりだった。わたしは既によくわかっていた。異様な宇宙の連鎖が存在するのは確かに事実にちがいない——が、そのようなものは、普通の人間がかかわるべきものではないのだ。

冒瀆的な力がわたしをつつみこみ、わたしの感覚という感覚を息づまるほどに圧迫しているように思えた。眠ることなどできるわけもなく、ランプを消しただけで、服を着たままベッドに横たわった。莫迦げたことではあれ、まさかの突発事態に備え、右手には用意していたリヴォルヴァーを握り、左手には小型の懐中電灯をつかんでいた。階下からは物音一つ聞こえず、エイクリイが闇のなかで、死体のように体をこわばらせて坐っている様子を想像することができた。

どこかから時計が時を刻む音が聞こえ、ごくあたりまえなその音をぼんやりとうれしく思った。しかしそのことで、このあたりで不安な思いにさせられたもう一つのこと——動物の気配がまったくないこと——を思いだした。この農場に家畜はいなかったし、いまでは野生の動物が夜にあげる、聞き慣れた鳴き声がないこともわかっていた。どこか遠くで目に見えない水がしたたり落ちる不気味な音をのぞいて、その静寂は異常としかいいようがなく——あたかも星間宇宙の静けさのようで——どのような星で生まれた不可解な暗い影がこのあたりにたれこめ

ているのだろうかと思った。古譚から犬をはじめとする動物が常に外宇宙の生物を嫌うことを思いだし、道にのこる足跡が何を意味するのだろうかと考えた。

Ⅷ

わたしはつい眠りこんでしまったのだが、どれほど眠っていたかとか、そのあとにつづいたことのどこまでが純然たる夢だったのかとかは、どうかたずねないでいただきたい。わたしがこの時間に目をさまし、こういうものを見たり聞いたりしたといっても、読者のみなさんはこんなふうにおっしゃるだけだろう。つまり、わたしはそのとき目をさましておらず、家からびだすまではすべてが夢で、そのあとよろめきながら古いフォードがあるのを見かけた車庫に行き、くたびれた車を奪って、あてもなく狂ったように異様な生物の出没する丘陵地帯を走りつづけ——車をがたがた揺らせながら鬱蒼とした森の迷宮を何時間も右や左にハンドルをきりつづけ——ついにたどりついたのがタウンゼンドの村だったのだ、と。

もちろん読者のみなさんは、わたしの報告にあるほかのものもすべて割引いてうけとめ、写真や録音の声や円筒＝装置の声や同類の証拠は何もかも、行方不明になったヘンリー・エイクリイがわたしに仕組んだ純然たる詐欺行為だと断言なさることだろう。エイクリイがほかの変

人たちと共謀して、手のこんだ莫迦ばかしい悪ふざけをしたとまで、遠まわしにおっしゃるかもしれない——エイクリイがキーンで速達荷物を盗みだし、ノイズに怖ろしい声をふきこませたのだ、と。しかし奇妙なことに、ノイズの身もとはいまだ確認できず、エイクリイの家に近い村によくあらわれていたはずなのに、どの村でもまったく知られていないのだ。ノイズの車のナンバーをおぼえておけばよかった——いや、おぼえていないほうがいいのかもしれない。みんなからどんなことをいわれようと、そしてまた、ときどき自分に何をいい聞かせようと、完全には知られていない丘陵地帯に、忌わしい外世界の生物が潜んでいるにちがいないこと——そしてその生物が人間の世界にスパイや使者を放っていること——が、わたしにはわかっているからだ。そうした生物や使者からできるだけ遠ざかっていることだけを、わたしはこれからの人生で願ってやまない。

わたしの狂乱した話を聞いて、保安官の一隊がエイクリイの家にでむいたときには、エイクリイの姿は跡形もなかった。ゆったりしたガウン、黄色のスカーフ、足に巻かれていた包帯が、書斎の片隅にある安楽椅子に近い床に落ちており、どんな服を身につけて出ていったのかはつきとめられなかった。犬や家畜は確かに見あたらず、家の外壁と内部の壁のそこかしこに奇妙な弾痕があったが、それ以外に異常なものは何も見つからなかった。円筒も装置もなければ、わたしが旅行鞄に入れてもってきた証拠品もなく、妙な臭いや振動も、道にのこっていた足跡も、わたしが最後に目にした問題をはらむ品物もなかった。

わたしはエイクリイの家から逃げだしてから一週間というもの、ブラトゥルバラにとどまって、エイクリイを知るすべての人をたずねてまわり、その結果、この一件が夢や幻想ではないことを確信した。エイクリイが犬や弾薬や薬品といった妙な買いものをしていたこと、そして電話線が切断されたことは、確かに記録にのこっており、エイクリイを知る人はすべて――カリフォルニアにいる子息もふくめ――異様な研究についてエイクリイがときおり口にする話が、多少は筋のとおったものであったことを認めている。信頼できる市民はエイクリイが狂っていたと思い、証拠とされているものはすべて、常軌を逸した悪知恵でもってつくりだされた単なる悪ふざけにすぎず、おそらく変人仲間にそそのかされてのことだと断言してはばからないが、下層階級の者たちは、エイクリイの話を細かな点まで支持しているのだ。エイクリイはそうした農夫の何人かに写真や黒い石を見せたり、怖ろしい録音を聞かせたりしており、彼らは一様に、足跡と唸るような声とが、先祖伝来の伝説で描写されるものに似ているといった。

エイクリイが黒い石を見つけてから、エイクリイの家のまわりで不審なものや音が気づかれることが多くなり、郵便配達夫と実際的な考えかたをする無頓着な者以外は、あえて近づこうともしなかった。ダーク山とラウンド・ヒルは怪物の出没するところとして悪名高く、どちらかをくわしく調べた者を見つけることはできなかった。このあたりの歴史を通じて、地元の者がときおり行方不明になっていることは十分な証拠があり、いまではこうした記録に、エイクリイの手紙で言及されていたウォルター・ブラウンがふくまれている。わたしが出会ったある

農夫にいたっては、洪水時に増水したウェスト河で奇妙な死体を一つ見かけていたが、話があまりにも混乱しているので、実際には何の価値もなかった。

わたしはブラトゥルバラをあとにするとき、二度とヴァーモントには足を向けないことに決めたが、その決心をまもりつづけられることには確信がある。あの未開の丘陵地帯は確かに怖ろしい宇宙の種族の居留地なのだ——エイクリイの家で告げられたように、海王星の彼方に新しい九番目の惑星が見えたという記事を読んで以来、疑わしく思う気持ちはますます減じている。天文学者たちは空怖ろしいほど的確に、この惑星を「冥王星」と名づけた。わたしは疑いもなく、この星が冥いユゴスにほかならないと思う——そしてあのばけものじみた生物が、どうしてこういう特別なときに、こんなやりかたで冥王星の存在を知らせたがったのか、その真の理由をつきとめようとすると、背すじがぞくぞくしてしまう。魔的な生物が地球やその住民にとって有害な、新しい方針をたてようとしているわけではないと、むなしく自分にいい聞かせようとしている始末だ。

しかしわたしはエイクリイの農家ですごした怖るべき夜の顛末をまだ語っていない。既に記したように、わたしはいつしか心騒がされる眠りに落ちてしまい、その眠りで慄然たる景色を瞥見するという、さまざま断片的な夢を見たのだった。どうして目がさめたのかはわからないが、先に記したように、目をさましたことには確信がある。わたしはまず、誰か足音をしのばせて歩く者がいるかのように、部屋の外の廊下の床板がきしみ、そっと掛け金のまさぐられる

音が聞こえるような、混乱した印象をうけた。しかしこれはほとんどすぐにやんだので、最初の生なましい印象は、階下の書斎から聞こえてくる声だった。何人もが話しているらしく、議論しあっているようだった。

数秒耳をすませたころには、声の性質からとても眠ってなどいられないと思い、はっきりと目をさましていた。声の調子は奇妙なほど変化に富み、あの呪わしい蠟管の録音を聞いた者にとって、少なくとも二つの声は歴然たる性質のものだった。空怖ろしい考えではあれ、底知れぬ宇宙からやってきた名もないものたちと、同じ屋根の下にいることがわかった。というのも、その二つの声は聞きまちがえようもなく、外宇宙の生物が人間と話すときに用いる、冒瀆的な唸るような声だったからだ。二つの声は明瞭に区別できた――声の高さやアクセントや早さが異なっていた――が、どちらも同じ忌わしい性質のものであることにかわりはなかった。

三番目の声は紛れもなく、肉体から切除されて円筒に入れられた脳が、接続された発声装置によって発言しているものだった。これは唸るような声と同様にほとんど疑問の余地はなく、昨夜耳にした生気のない大きな金属的な声は、抑揚も感情もないままに、きしるような感じで、とても人間の声とは思えないほど正確かつゆっくりとしゃべったので、忘れられようもないものだった。つかのまわたしは、このきしるような声を出す脳が、わたしに話しかけた脳と同一であるかどうかについて、疑いをはさむこともしなかったが、そのあとすぐに、同じ発声装置に接続されているのなら、どんな脳も同じ性質の声を出すはずであり、言葉づかい、リズム、

早さ、発音以外にちがいはないだろうと思った。空怖ろしい会談には、さらに二人の人間の声もくわわっていた——粗野な言葉づかいをする声はわたしの知らない田舎者とおぼしき人物のものであり、もう一つのボストンなまりのある快い声は、わたしをこの家まで連れてきたノイズのものだった。

床が頑丈につくられていることで、どうにも聞きとりにくかったが、何とか言葉をとらえようとしていると、階下の部屋でしきりに歩きまわったり、こすったり、足をひきずったりする音がしていることもわかったので、部屋に生物がたくさんいるという印象をぬぐいされなかった——わたしが聞きわけた音は二、三にとどまらなかった。歩きまわる音が実際にどういうものであったかは、適切な比較の土台になるものがほとんどないために、はなはだ説明しがたい。何らかの物体が意識ある実体のように、ときおり部屋を移動しているらしく、ぐらぐらする堅い表面のもの——固定されていない角や硬質ゴムといったもの——が音をたてているような感じだった。具体的ではあれ正確さに欠けるたとえを用いれば、ぶかぶかの粗い木靴をはいた者が、磨きぬかれた床板の上をよたよた歩きまわっているかのようだった。そんな音をたてているものの性質や外見については、推測する気にもなれなかった。

やがてまもなく、脈絡のある話を聞きとろうとしても、不可能であることがわかった。きれぎれの言葉——エイクリイやわたしの名前をふくむ断片的な言葉——が、もっぱら発声装置による発言があったときに聞こえるだけだったが、それが実際に何を意味しているのかは、前後

の言葉がわからないだけに、まったくつかみようがなかった。いまのわたしはそうして耳にしたきれぎれの言葉から、一定の推理をめぐらす気にはなれないし、そうした言葉がわたしにおよぼした怖ろしい効果といえば、啓示というよりも黙示的なものだった。怖ろしくも異常な秘密会議が階下でおこなわれていることを確信したが、どのような慄然たる討議をおこなうためのものであるかはわからなかった。エイクリイが外世界の生物は友好的だとうけあってくれていたというのに、悪意と冒瀆が疑いもなくひしひしと感じとれたのは、いかさま奇妙なことではあった。

たゆまず耳をかたむけているうち、何が話されているかの大半はつかめなかったにせよ、声をはっきりと聞きわけることができるようになった。話し手の何人かについては、その特徴となる感情めいたものがつかめるように思われた。たとえば唸るような声の一つは、聞きまちがえようもなく権威のこもった調子のものである一方、装置による声は、機械によって大きく均一なものになっていながらも、従属して懇願する立場にあるようだった。ノイズの口調はなだめ役のような雰囲気を発散させていた。それ以外の声については解釈しようがなかった。聞きなれたエイクリイの声は聞こえなかったが、ああいう声が部屋の堅い床板を通して聞こえるわけもなかった。

わたしが耳にした断片的な言葉や音のいくつかを、どうにかその話し手を特定して書きとめておこう。わたしがはじめて意味のある言葉を耳にしたのは、発声装置による発言だった。

（発声装置）

……わたしが招いたのです……手紙と蠟管をもってきてもらいました……そのために……泊めて……見せたり聞かせたり……それなのに……ともかく不測の事態が……新しい円筒……やりきれません……

（唸る声）

……やめるべきときだ……とるにたらぬ人間……エイクリイ……脳……いっている……

（別の唸る声）

……ナイアーラトテップ……ウィルマース……蠟管と手紙……安っぽいペテン……

（ノイズ）

……（発音しがたい言葉か名前、おそらく、ンガア＝クトゥン）……害はありません……和解……二週間……劇的な……まえにもいったように……

（最初の唸る声）

……理由はない……最初の計画……効果……ノイズが監視できる……ラウンド・ヒル……

新しい円筒……ノイズの車……

（ノイズ）

……まあ……すべてはあなたがたの……ここで……休んで……場所……

（いくつもの声が同時に起こって聞きとれない）

（たくさんの足音、ぐらぐらしたものがたてるような異様な音もふくむ）

（奇妙なはためく音）

（自動車が発車して遠ざかっていく音）

（沈黙）

魔的な丘陵のただなかにある、怪物の出没する農家の異様な二階のベッドで、体をこわばらせて横たわり――服を着たまま右手にはリヴォルヴァー、左手には小型懐中電灯を握りしめて横たわり――わたしが耳にしたのは、このようなものだった。先にも述べたように、わたしははっきり目をさましていたが、それでもなお不可解な麻痺のようなものにとらえられ、物音の最後のひびきが消えてからもしばらくは、体が動かせそうになかった。古びたコネティカット

の木製の時計がゆっくりと時をきざむ音が、階下のどこかから聞こえ、そして不規則ないびきを耳にした。不思議な集会がおわってエイクリイが眠りこんだにちがいなく、無理もないことだと思えた。

どう考えればよいのか、何をなすべきなのかは、わたしの判断にあまることだった。ともかく耳にしたのは、これまでの情報から予想してしかるべきことではないのか。名もない外世界の生物が、いまやこの家に自由に出入りできることを、まるで知らなかったとでもいうのか。エイクリイは彼らがいきなりやってきたので驚いたことだろう。しかし断片的に耳にした会話にこもる何ものかのせいで、わたしはいいようもなく震えあがり、きわめてグロテスクかつ怖ろしい疑惑をつのらせて、ただひたすらに、目がさめてすべてが夢だとわかればよいのにと思った。どうやらわたしの無意識は、まだ意識にのぼっていないものをつかみとっていたにちがいない。しかしエイクリイはどうなのか。エイクリイはわたしの友人ではないのか、わたしに何らかの害がおよぶようなことがあれば、抗議しないわけがないだろう。階下から聞こえる安らかないびきは、急に強まったわたしの恐怖を莫迦げたものに思わせた。

もしかして、エイクリイはだまされて、手紙と写真と蠟管をもったわたしをおびきよせるため、囮（おとり）としてつかわれているのではないか。あの生物たちはエイクリイとわたしが知りすぎるようになったことで、二人とも破滅させるつもりではないのか。わたしはふたたび、エイクリイの最後の手紙とそのまえの手紙のあいだに起こった状況の変化が、あまりに突然で不自然す

ぎることについて考えた。どこか常軌を逸したところがあると、わたしの本能が告げていた。すべては見かけとは異なるのだ。あの苦いコーヒーは、身を隠す未知の実体が一服もろうとした試みではなかったのか。すぐにエイクリイに話して、心の平衡感覚をとりもどさせなければならない。宇宙の秘密を明かしてもらえるという約束に、エイクリイは魅せられているが、いまやエイクリイも理性に耳をかたむける必要がある。わたしたちは手遅れにならないうちに、この家から逃げださなければならないのだ。自由を求めて脱出する力がエイクリイにないなら、わたしが助けてやる。あるいは、逃げるように説得することができなくとも、少なくともわたし一人は逃げだせる。きっとエイクリイは、わたしがあのフォードをつかって、ブラトゥルバラの修理工場にでも乗りすてるのを許してくれるだろう。車は車庫にあったし――危険が過去のものになったと思われて、ドアはロックもされないままになっているので――いつでも運転できる状態にあるはずだった。夕方に話をしていたときや、そのあとで感じた、エイクリイに対する一時の嫌悪は、すっかりなくなっていた。エイクリイもわたしと同じような立場にあるのだから、わたしたちは力をあわせなければならない。エイクリイの具合が悪いのがわかっているので、こういうときに起こすのは気がひけたが、そうしなければならないのだった。このありさまでは、とても朝までこの家にとどまってなどいられなかった。

　ようやく体が動かせるようになると、元気よく伸びをうって、筋肉のしこりをほぐした。慎重さよりは衝動にかられ、用心深く身を起こすと、帽子を見つけてかぶり、旅行鞄をもって、

懐中電灯をつかいながら階下にくだりはじめた。神経を高ぶらせるあまり、右手にはリヴォルヴァーを握りしめ、左手で旅行鞄と懐中電灯をあつかえるようにした。わたしはそのとき、この家にもう一人だけいる者を起こしにいくところだったから、どうしてそんな用心をしたのかは、まるでわからない。

なかば爪先立って、きしる階段を一階までおりると、いびきがはっきりと聞こえるようになり、眠りこんでいる者が左側の部屋——まだ入ったことのない居間——にいるにちがいないことがわかった。右手には、さまざまな声がしていた書斎に通じる、暗い戸口があった。掛け金のかかっていない居間のドアを押し開けると、いびきのするほうへと懐中電灯の光を向け、眠りこんでいる者の顔を照らした。しかしつぎの瞬間、わたしはあわてて光をそらし、猫のようにじりじりと廊下のほうにひきさがったが、今度の用心は、本能と同様に理性から生じたものだった。というのも、寝椅子で眠っている者はエイクリイではなく、わたしをこの家に連れてきたノイズだったからだ。

いったいどういうことなのかは、推測もままならなかったが、誰も起こさないようにして、できるだけ多くのことをつきとめるのが、常識としてもっとも安全なやりかただとわかった。わたしは廊下にもどると、居間のドアをそっと閉めて掛け金をおろし、ノイズを起こす危険を少なくした。そして眠っているにせよ起きているにせよ、エイクリイが気に入りのものらしい片隅の大きな安楽椅子に腰をおろしているにちがいない、暗い書斎に用心深く入った。進むに

つれて、手にした懐中電灯の光が部屋の中央にあるテーブルを照らし、そこに円筒が一つあって、視覚装置と聴覚装置が接続され、いつでも接続できるように発声装置がそばに置かれているのがわかった。これが怖ろしい会議のあいだしゃべっていた脳にちがいないと思い、一瞬のことではあれ、発声装置を接続して何をしゃべりだすかを聞いてみたいという、倒錯した衝動にかられた。

懐中電灯の光、そしてわたしの歩みにつれて床がかすかにきしむ音を、視覚装置と聴覚装置がとらえそこなうわけもなく、円筒のなかにいる脳は、わたしがいることを知っていたにちがいない。しかし結局、わたしはあえて円筒には手をださなかった。何げなく見ると、その円筒は夕方に棚にあるのに気づき、かまわずにおくようにいわれた、エイクリイの名前のある新しいものだった。そのときのことをふりかえってみると、自分の小心さが悔やまれてならず、思いきって発声装置を接続してしゃべらせればよかったのだと思う。その円筒が途方もない謎や、怖るべき疑惑や、素性についての疑問を明かしてくれたかもしれないのだから。しかしあらためて考えれば、かまわずにおいたのは、神の慈悲であるのかもしれない。

懐中電灯の光を、テーブルからエイクリイがいると思うほうに向けたが、大きな安楽椅子にエイクリイの姿はなく、わたしは途方にくれてしまった。椅子から床にかさばってたれているのは、見なれた古いガウンで、その近くの床には、奇妙に思えてならなかった足用の幅広い包帯と、黄色のスカーフが落ちていた。エイクリイはいったいどこへ行ったのか、病人にとって

必要なものをどうして急に投げすてたのか。そんなことを考えながら、その場に立ちつくしているうち、妙な臭いと振動のようなものがなくなっていることに気づいた。あの臭いと振動は何によるものだったのか。するうち、奇妙にもエイクリイのそばにいるときにだけ感じられたことに思いあたった。エイクリイの坐っているところが一番強く、エイクリイのいる部屋をのぞいては、すぐ外の廊下でさえ感じられなかったのだ。わたしは立ちどまったまま、懐中電灯の光を暗い書斎のそこかしこに向けながら、事態が一変したわけを知ろうと頭をふりしぼった。

誰もいない安楽椅子にふたたび光を向けるまえに、そっとその家から抜けだしていればよかったものを。たまたまそうなってしまったのだが、わたしは静かに立ち去ったのではなく、口をついて出そうになる悲鳴をかみころしながら逃げだしたのだが、そのくぐもった悲鳴は、廊下の向こうで眠っているノイズを目覚めさせるにはいたらなかったままでも、ノイズの眠りをかき乱したにちがいない。くぐもった悲鳴、そしてノイズのとぎれることのないいびきが、怪物の出没する樹木の鬱蒼とした黒い山頂の下にある、恐怖の充満した農家で、わたしが最後に耳にしたものだった——あの農家こそ、さびしい緑の丘陵と虚ろな原野の呪いをつぶやく小川のただなかで、超宇宙的な恐怖の焦点となっていた場所なのだ。

狂乱してよろめくように逃げだすあいだに、懐中電灯も旅行鞄もリヴォルヴァーも落とさなかったことには、驚かざるをえないが、どういうわけか何一つ失わずにすんだ。わたしは実際にその部屋と家から、それ以上の音をたてることなく抜けだして、車庫にあった古いフォード

に無事に乗りこむと、月の出ない暗い闇夜をついて、くたびれた車をどこか安全な場所に向けて走らせた。そのあとのドライヴといえば、ポオやランボーやドレの作品から抜けだしたような狂乱したものだったが、どうにかタウンゼンドの村にたどりついた。それだけだ。わたしの正気がまだそこなわれていないなら、幸運以外の何ものでもない。わたしはときとして、新しい惑星である冥王星が奇妙にも発見されたことにより、これからどうなるのかと不安にかられることがある。

先にほのめかしたように、わたしは書斎にひととおり懐中電灯の光を向けてから、誰もいない安楽椅子をふたたび照らしたが、そのときはじめて、すぐそばでガウンがゆったりうねっていることで見のがしていた品物に気づいたのだった。それは三つの品物で、保安官たちがあとでやってきたときにはなくなっていた。最初に述べたように、その三つの品物に身の毛もよだつようなものを見たわけではない。問題なのはそれが意味するものだった。いまですらわたしは、なかば疑わしく思うことがある――そんなときは、わたしの体験のすべてを夢や神経や幻覚のせいにする人たちの懐疑を、なかばうけいれてしまうのだ。

三つの品物は、その種のものとしては忌わしいほど巧妙につくられたもので、およそ推測する気にもなれない組織の突起部にとりつけられるよう、精巧な金属製の締め金が備えられていた。わたしの深奥の恐怖が何を告げようと、その品物がすぐれた芸術家の蠟細工の作品であることを、わたしは願う――ひたすらそう願ってやまない。しかし、闇のなかで囁いたものは、

怖ろしい臭いと振動めいたものを発散していたのだ。妖術師、使者、取替子、外宇宙の生物……あの怖ろしくもおしころされた唸るような声、そしてそんなあいだもずっと、棚にあるあの新しい円筒には……かわいそうに……「けたはずれの外科的、生物学的、化学的、機械的技術」によって……

安楽椅子にあったのは、まことに完璧な、細部にいたるまでそっくりな、ヘンリー・ウェントワス・エイクリイの顔と手だったのだ。

クトゥルー神話画廊Ⅲ

大瀧啓裕

ラヴクラフトの『闇に囁くもの』は〈ウィアード・テイルズ〉の一九三一年八月号に掲載され、カーティス・C・センフが挿絵を担当しました。センフは後に商業画家として広告の分野で名を高めましたが、一九二七年から三一年にかけて、〈ウィアード・テイルズ〉初期の表紙絵と挿絵を担当していたころには、「暗殺王」として〈ウィアード・テイルズ〉の作家たちに怖れられていたといいます。

その典型が『闇に囁くもの』の挿絵であって、小説の最後になって明かされることを、センフはあっさり挿絵に描いてしまったのです。周到な構成をと

"I let my flashlight return to the vacant easy-chair, then noticed for the first time the presence of certain objects in the seat."

り、徐徐に緊迫感を高めながら、とどめの一文で読者をあっといわせようとする苦心の力作も、これでは最初から種明かしをしているようなもので、ラヴクラフトがしょげかえったことはいうまでもありません。

どうしてこんなことが起こったかといいますと、センフは怪奇小説や幻想小説が好きではなく、表紙絵や挿絵を依頼されても、その小説をろくに読みもせず、でたらめに校正刷りをめくって、たまたま目についた文章をもとに描いたからなのです。全体の流れがわかっていないだけに、部分だけをとらえただけでは、的確な把握ができるわけもなく、こうして小説とはそぐわない挿絵や、小説の雰囲気をそこなう挿絵が生み出され、〈ウィアード・テイルズ〉の作家たちを嘆かせました。

もちろんセンフにも秀作がいくつかありますが、多作をもってなる挿絵画家だけに、たまたま偶然の

"Moving, the squamous horror of the head looked like a close-up."

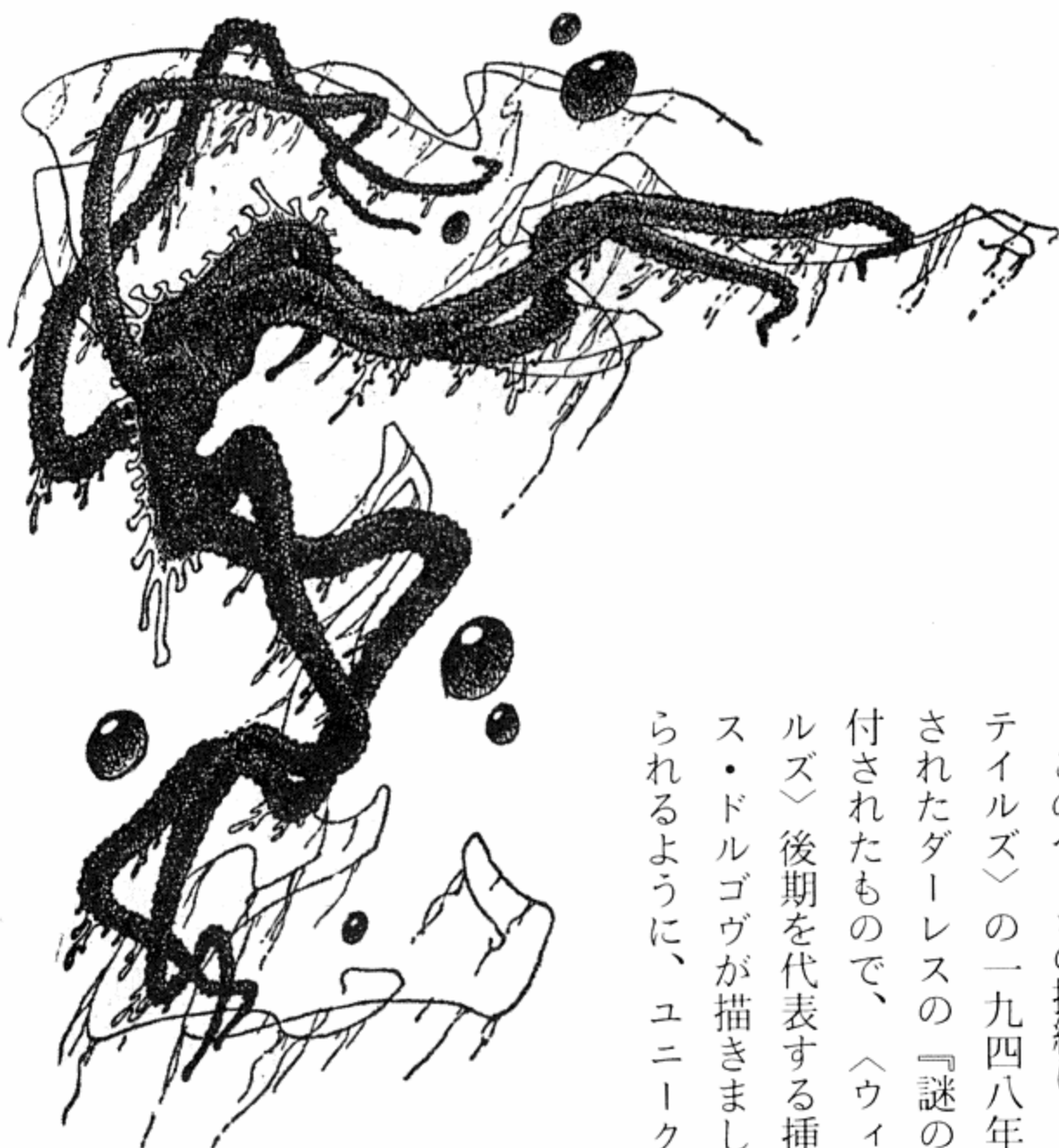
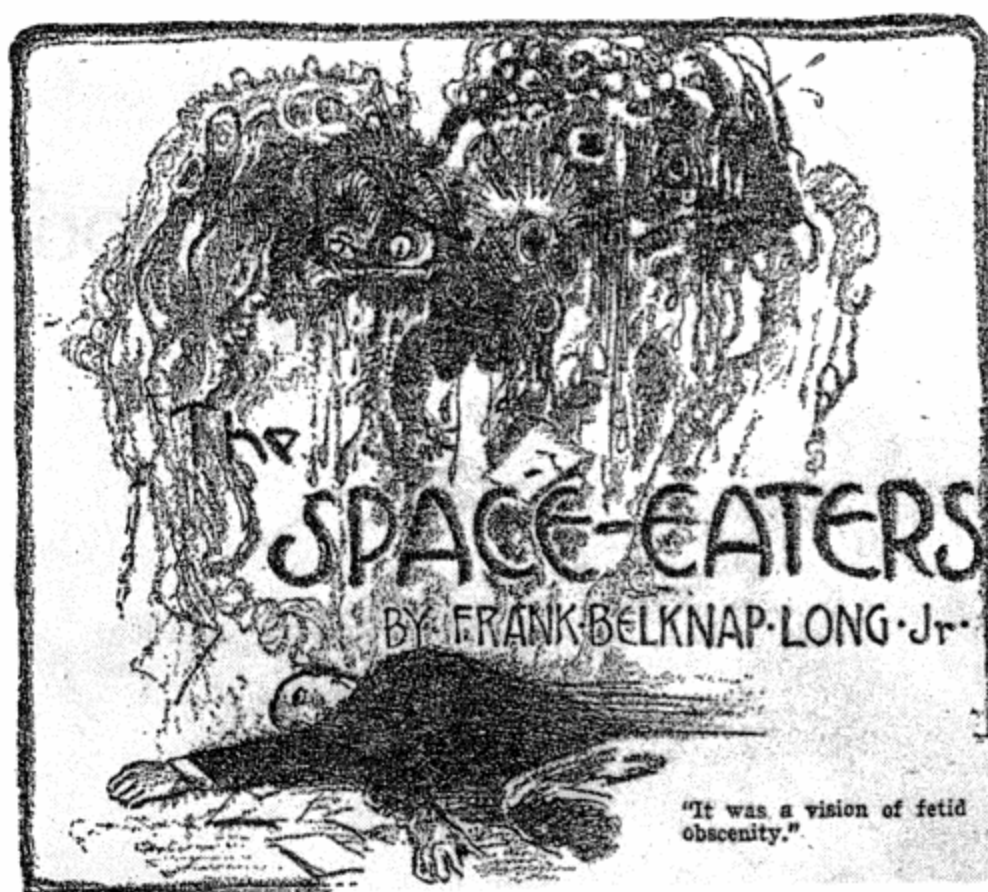
女神がほほえむこともあったということなのでしょう。つけくわえれば、パルプ・マガジンの挿絵画家のなかにあって、センフのやりかたは例外的なものではなく、だからこそ、ヴァージル・フィンレイが登場するや、小説をじっくり読みこんだうえで克明に劇的な場面を描ききる画風が、〈ウィアード・テイルズ〉の読者に熱烈に歓迎されたのです。

そのフィンレイの佳作の一つが、一九三七年十一月号の〈ウィアード・テイルズ〉に掲載された、ロバート・ブロックの『セベクの秘密』を飾る挿絵といえるでしょう。いずれ何らかの形で紹介するため、〈ウィアード・テイルズ〉に発表されたフィンレイの全作

品をコピーしてありますが、総計二百四十一点におよぶ挿絵と表紙絵を発表順にながめますと、デヴュー二年目にあたるこの年には、ういういしさがまだのこっているとはいえ、若いフィンレイの情熱ほとばしる佳品が数多く、このころ手間をいとわず精緻な絵を描きつづけたからこそ、あの円熟の境地に達することができたのだと思われます。

話はかわりますが、最新のコピー機を導入して、鮮明なコピーがとれるようになりましたので、目下〈ウィアード・テイルズ〉に掲載された挿絵の名作を全点まとめる作業をおこなっています。これもまた何らかの形でお目にかけるつもりでいることを、お知らせしておきましょう。以前はスキャナーで読みとったものを、レーザー・プリンターで印刷していましたが、ハーフ・トーンに弱いという欠点がありました。新しいコピー機は解像度にすぐれていて、写真も鮮明にコピーできますので、今回からは〈ウィアード・テイルズ〉の表紙絵も、以前のように写真撮影はせず、コピーを使用しています。もっとも、解像度にすぐれていることで、黄変した黄ばみまで読みとってしまい、挿絵だけを鮮明にとるには、読みとりの濃度の調整が厄介で、何ごとにも一長一短があるものですね。ちなみに使用しているのは、リコーのイマジオMF五三〇で、黄ばみの強いパルプ・マガジンから挿絵をコピーするときは、濃度を薄くして一度コピーをとり、それでも読みとってしまう縁の黄ばみをマーカー消去して、次に濃度を濃くしてコピーをとりなおしています。最初のコピーで五秒、マーカー処理に十秒、最後のコピーで五秒ですから、スキャナーで一枚コピーをとるのに要する三分とは雲泥の差です。

Something in Wood

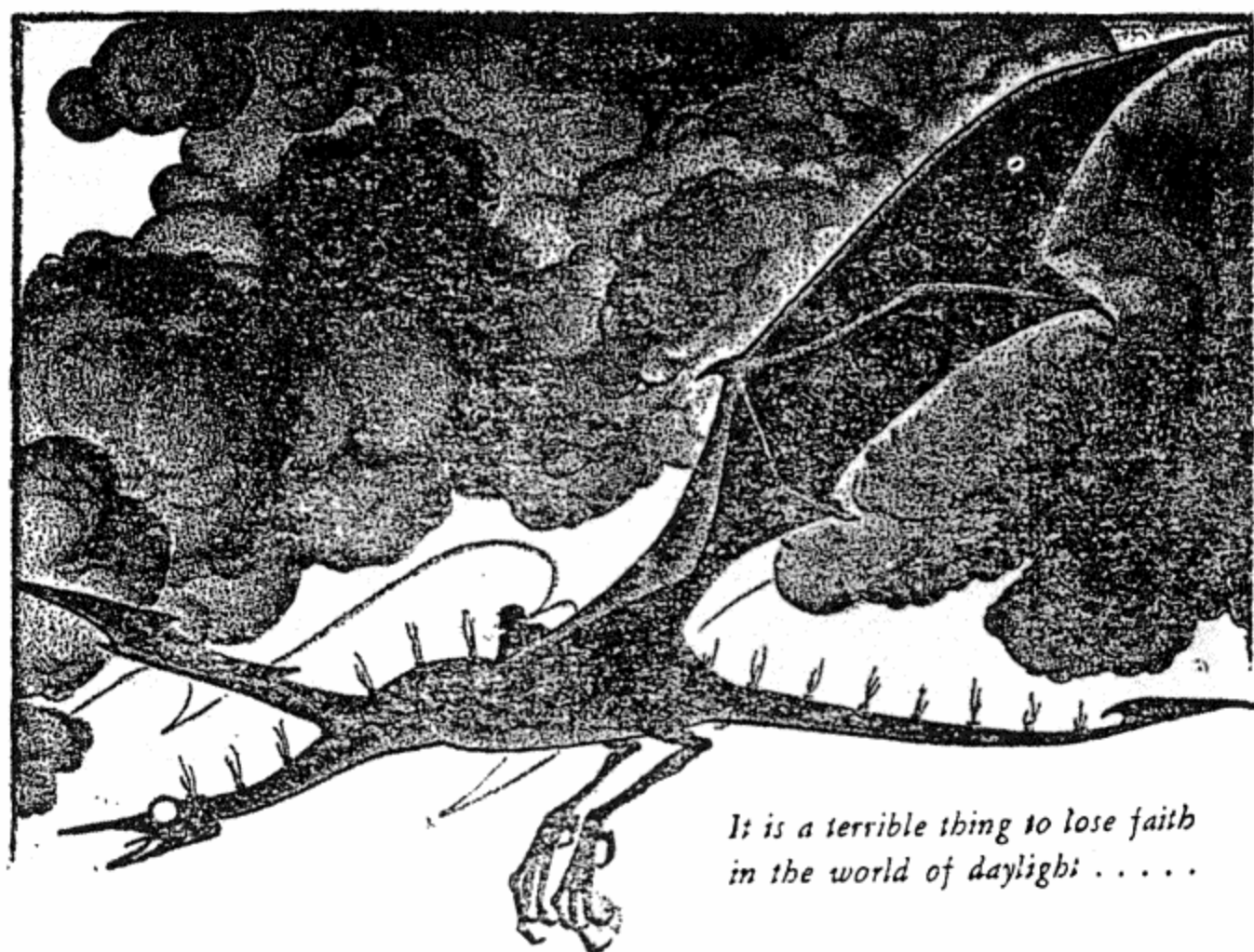
BY AUGUST DERLETH

このページの挿絵は、〈ウィアード・テイルズ〉の一九四八年三月号に発表されたダーレスの『謎の浅浮彫り』に付されたもので、〈ウィアード・テイルズ〉後期を代表する挿絵画家、ボリス・ドルゴヴが描きました。これに見られるように、ユニークな画風を特色

としており、かつてのパワーを失った〈ウィアード・テイルズ〉において、読者を楽しませることのできた、数少ない挿絵画家の一人です。ちなみにドルゴヴはハネス・ボクの友人であって、ニューヨークを中心に活動していましたが、ボクと合作して挿絵を描いたこともあり、そのときには「ドルボクゴヴ」という署名をしたそうです。

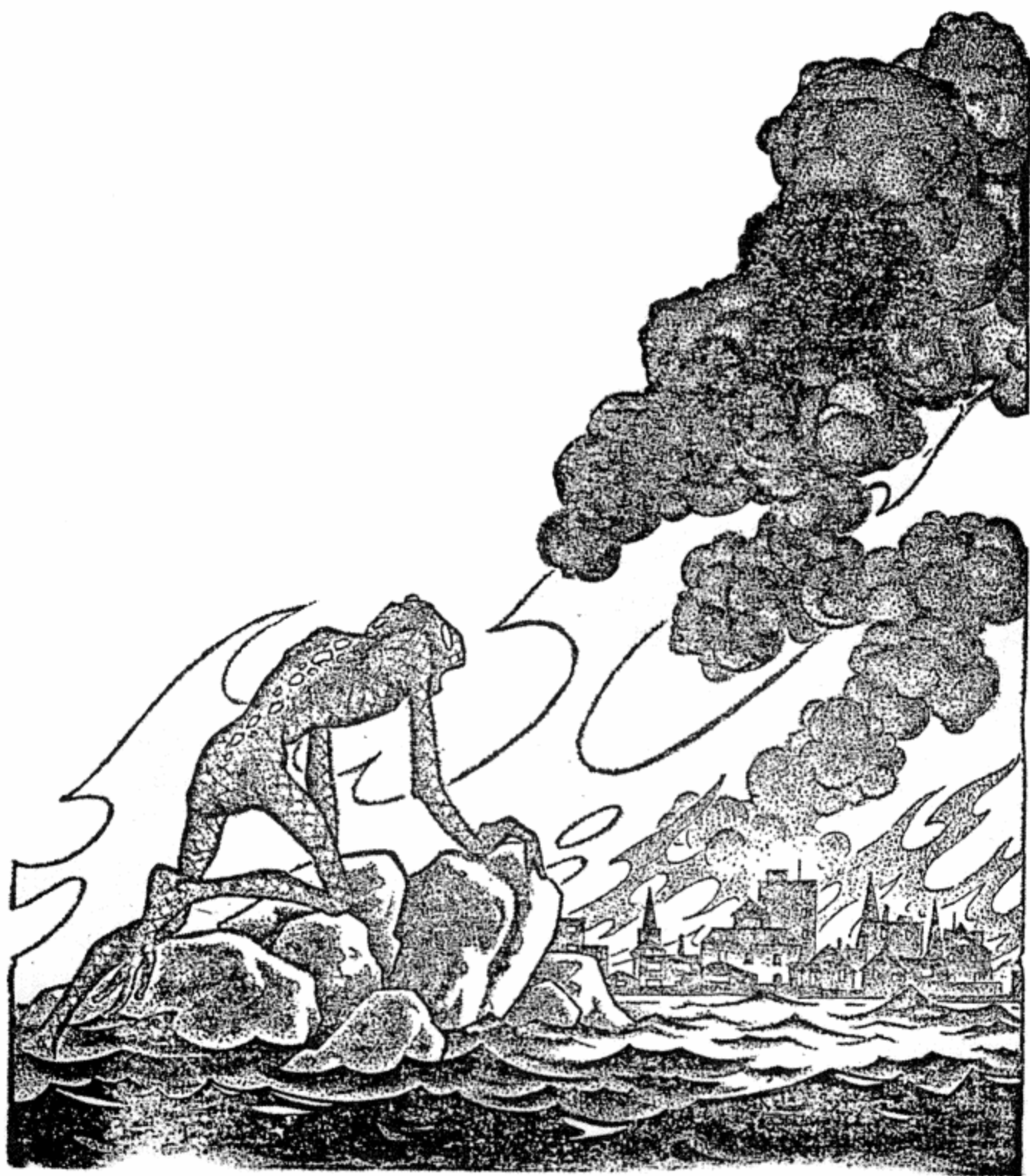
このページにあるのは、〈ウィアード・テイルズ〉一九二八年七月号に掲載された、ロングの『喰らうものども』の挿絵で、最初にとりあげたセンフの手になるものです。センフはこういうタッチの挿絵が多く、写実的な絵を得意としていますので、何とか小説の雰囲気を出そうとして、こういうタッチを選んだのでしょう。それなりの効果をあげている挿絵だといえます。

次のページにあるものは、〈ウィアード・テイルズ〉一九三九年四月号に収録された、カットナー

の『ヒュドラ』の挿絵です。署名はファーマンとなっていますが、経歴などはいっさいわかりません。可もなく不可もない挿絵ですが、フィンレイの画風を真似る画家がいたことを示す絶好の例として、ここにとりあげてみました。参考までにいっておけば、このころはフィンレイの画風がすさんでいた注目すべき時期で、ほとんど乱作に近い惨状を呈しています。いずれまたライルさんに、このころの父上のことをうかがってみなければならないでしょう。

今回は紙幅にゆとりがありますので、クトゥルー・シリーズの他の巻に収録された作品の挿絵と、そうした作品の掲載された〈ウィアード・テイルズ〉の表紙絵を、以下のページに収録しておきます。そうそう、うっかり忘れてしまうところでしたが、〈ウィアード・テイルズ〉の表紙絵のうち、ブランデイジが描いたものがカード化され、この文章が読者の皆さんの目にふれるころには、アメリカで発売されているはずです。ワインバーグからもらった見本はなかなかのもので、まさしくコレクターズ・アイテムといえるでしょう。

"Down toward the ghastly horde Edmond was drawn."

ダーレス「エイベル・キーンの書置」
ドルゴヴ画
1945年7月号

The Watcher from the Sky

By August Derleth

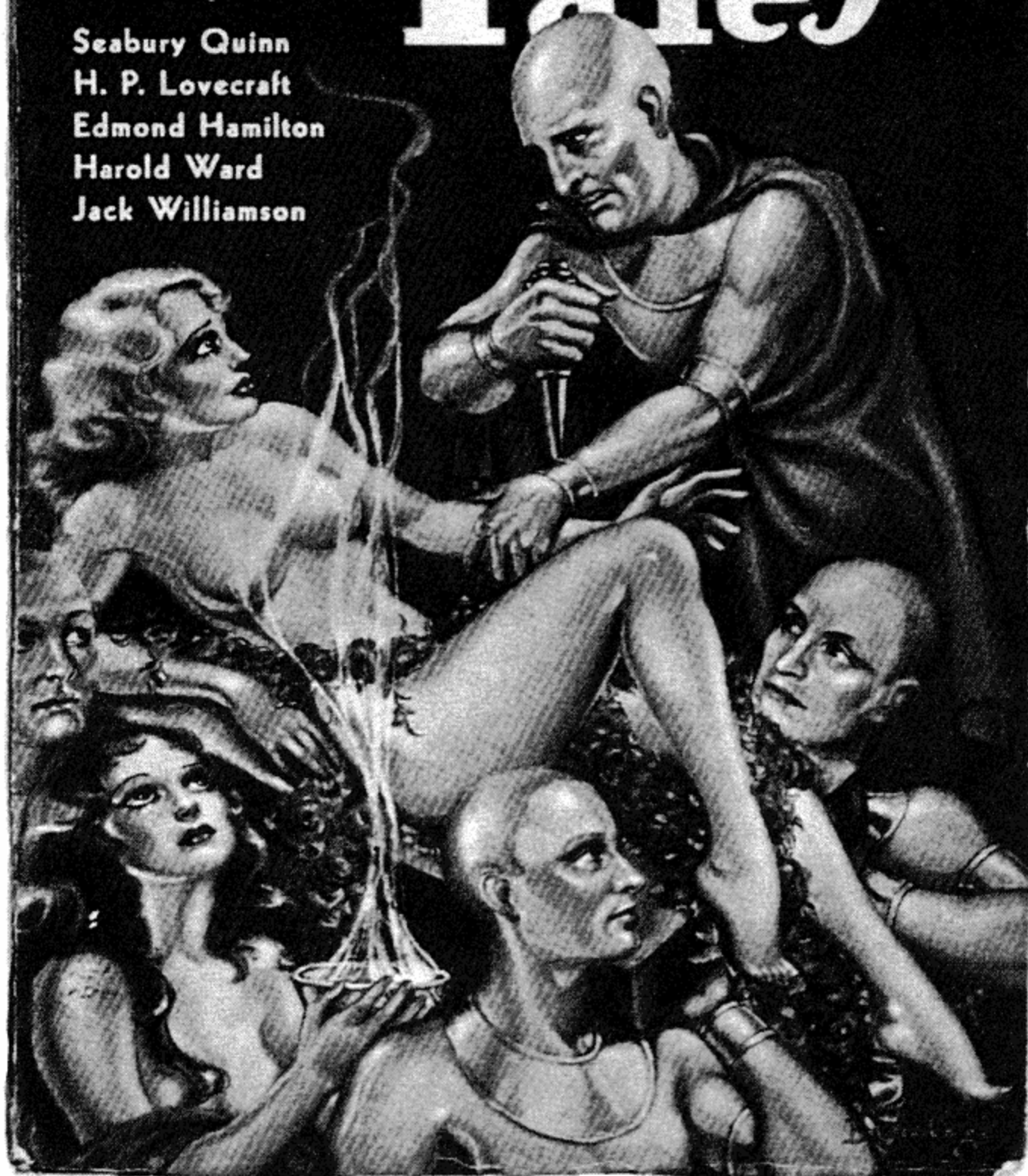
. . . seeking the place of concealment where Cthulhu lies waiting to spread his spawn over the earth and perhaps its sister planets

ダーレス「ネイランド・コラムの記録」
ヒューミストン画
1951年5月号

The Keeper of the Key

Weird Tales

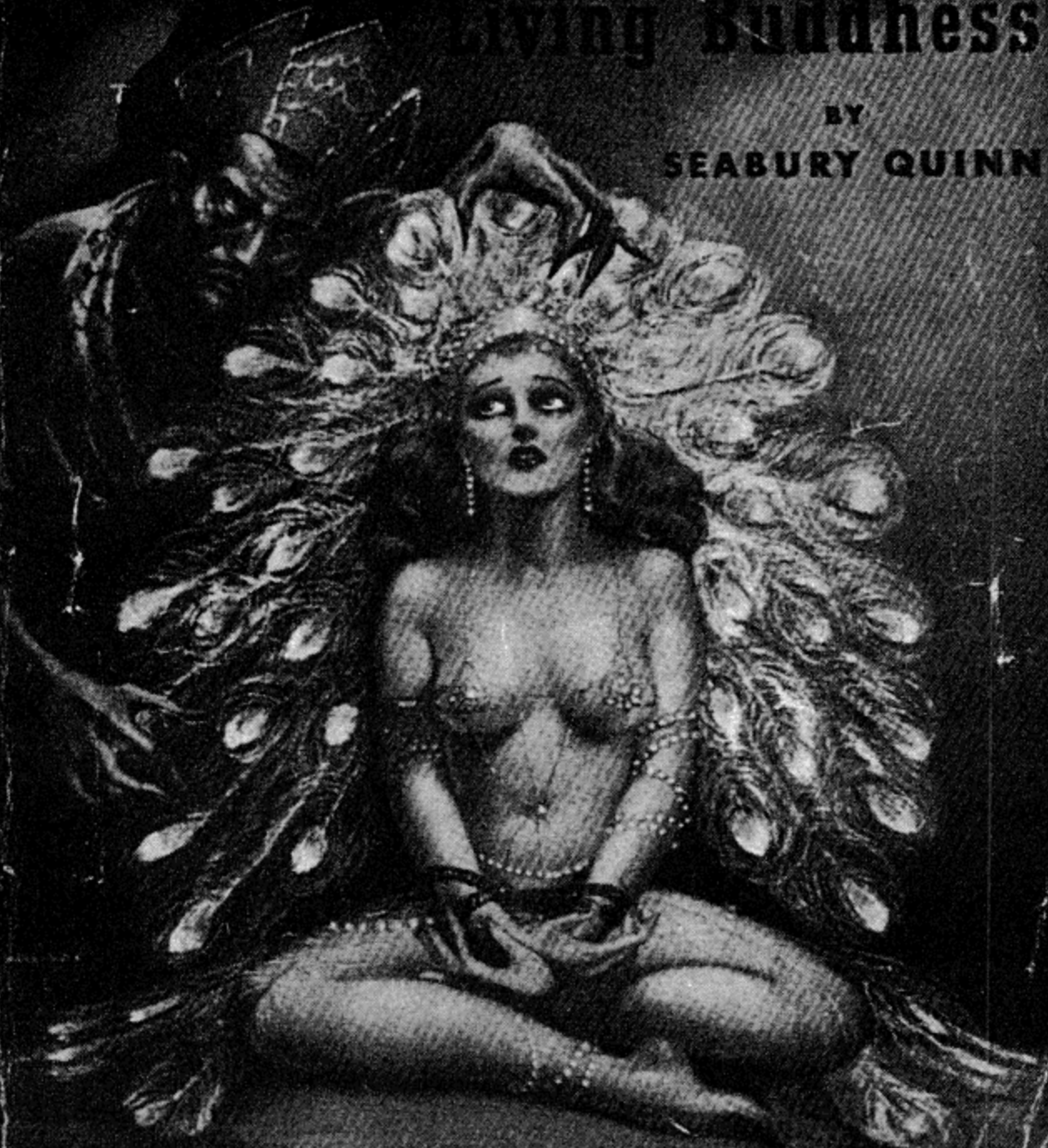
JULY—25c

Seabury Quinn
H. P. Lovecraft
Edmond Hamilton
Harold Ward
Jack Williamson

1933年７月号

NOVEMBER

Weird Tales

Living Buddhess

BY
SEABURY QUINN

A strange and curious thrill-tale of a living female Buddha

1933年11月号

Eery, mysterious, intriguing

Weird Tales

APRIL

25¢

160 PAGES THIS ISSUE

SUSETTE
graveyard tale of French Revolution
By SEABURY QUINN

ARMIES FROM THE PAST
two million years in the future
By EDMOND HAMILTON

THE RED SWIMMER
piracy and the Spanish Main
By ROBERT BLOCH

HYDRA
a horror from another dimension
By HENRY KUTTNER

HELLSGARDE
Jirel of Joiry in a weird adventure
By C. L. MOORE

and other tales

1939年4月号

JANUARY
Weird Tales
A.N.C.
25¢
"THE BLACK ISLAND"
by
August
Derleth
1959年1月号

"A Sorcerer Runs for Sheriff" by ROBERT BLOCH
SEPTEMBER
Weird Tales
15¢
SEABURY QUINN
NELSON S. BOND
AUGUST
DERLETH'S
Novelette—
"BEYOND THE THRESHOLD"

1941年 9 月号

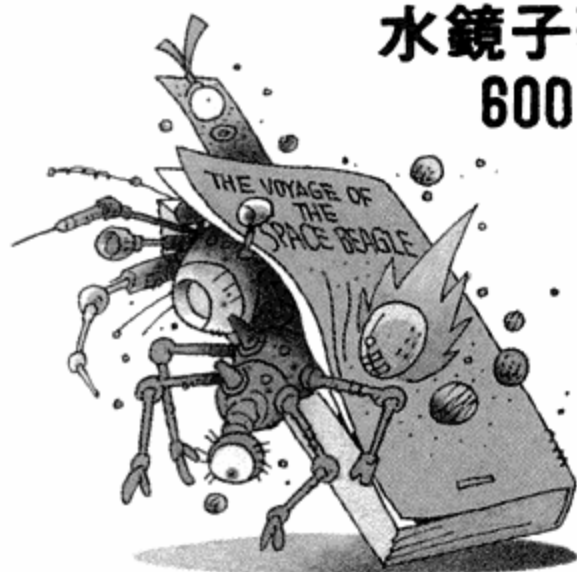
JULY
Weird Tales
25¢
Strange footprints, other than human, had appeared on the floor of the cave!
"The House in the Valley"
By
AUGUST DERLETH
1953年７月号

SFシリーズ

-パストマスター-
トマス・モアの大冒険
R・A・ラファティ著 680円
井上 央訳

カバーイラスト 横山えいじ

過去からきた男、トマス・モアは人類の未来を救うことが出来るのか!? ラファティの最高傑作とも言われる作品。

乱れ殺法SF控
水鏡子著
600円

カバーイラスト 横山えいじ

SF評論家の水鏡子が送る、辛口スーパーSF評論エッセイ‼ 巻末にはファンへの「お勧めSF」を収録。

赤い霧のローレライ
リイ・ブラケット著 650円
鎌田三平編

名作「赤い霧のローレライ」を含むリイ・ブラケット初の短編集。

怪奇幻想シリーズ

ウィアード
H・P・ラヴクラフト他著
大瀧啓裕編
カバーイラスト 吉井宏

伝説のホラー雑誌「ウィアード・テイルズ」誌上に掲載された恐怖と幻想の名作、傑作、異色作をあつめた傑作集‼ ラヴクラフト、メリット、ハワード、ウェルマン、ブロック、カットナーなどの作品を収録。

好評既刊4冊
ウィアードシリーズ 各巻600円

暗黒神話大系シリーズ
クトゥルー 9
大瀧啓裕 編
青心社
640

9784878920493

1910197006404

ヴァーモント州の片田舎に住むヘンリイ・エイクリイからの手紙。それは宇宙の深淵からの来訪者の恐怖を告げるものだった——ラヴクラフトが外宇宙からの恐怖を描く「闇に囁くもの」。二人の若きオカルティストが企てた心霊実験の招いた怖るべき結果は——ヘンリー・カットナーの「ヒュドラ」。古代エジプトの邪神、異次元からの侵入者、クトゥルー、アザトースなど究極の魔道書《ネクロノミコン》に記された恐怖を描いたクトゥルー神話7編を収録。

定価640円（本体621円）

ISBN4-87892-049-1 C0197 P640E